宮城県文化財調査報告書 145 集

野田山遺跡

平成４年３月

宮 城 県 教 育 委 員 会
宮 城 県 保 健 環 境 部

序　文

宮城県内には現在およそ6000ヶ所の埋蔵文化財の存在が知られています。それらには数十万年前の旧石器時代から百数十年前の近世までの長い人間の活動の歴史が刻みこまれており、県民はもとより国民共有の貴重な文化遺産であることはいうまでもありません。

しかし、埋蔵文化財はまさしく土地と関わりをもっていることからその種々の開発行為と大きな競合関係にあることも否めない事実であります。殊に昭和在40年代からのいわゆる“高度経済成長期”においては多数の埋蔵文化財がその影響下に晒されました。

一方、昨今、経済優先への反省から、人々の志向する価値観が物質的豊かさから精神的豊かさへと大きく転換し始めています。それに伴い、現代文化の基層・背景をなす人類の思考・行動の軌跡を明らかにし、それをもとにして現在・将来のあるべき生活像を模索しようという機運が高まりつつあります。このような状況の中で、当時の人々の生活痕跡が具体的な形で残されている、いうなれば、直接歴史を体験できる内容を包含している場であるとさえいえる埋蔵文化財に対しても強い関心が寄せられるようになってきています。

埋蔵文化財の保護に携わる者として、あらためてその責務の重大性を認識するとともに、なお一層の研鑽を重ねる所存であります。

本書は平成2年度に発掘調査を実施した名取市野田山遺跡の調査成果を収録したものであります。その内容が名取地域史の解明に資するところがあれば幸いとするところです。

最後に、調査にあたりご協力いただいた関係各位に深く感謝申し上げるとともに、今後とも文化財の保護についてご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げる次第であります。

平成4年3月

宮城県教育委員会　教育長　大立目　謙直

序

人口の高齢化が急速に進む中で、疾病構造の変化、医学・医療技術の進歩に伴う医療需要の変化など、わが国の医療は変貌しつつあり、本県においても新たな局面を迎えようとしております。

本県では、瀬峰病院、名取病院及び成人病センターの3病院を、高度・特殊・専門病院として経営しております。これら3病院は、いずれも県民の方々が安心して、健康で暮らせるよう、地域の医療機関との連携を図り、県民の医療の確保と医療水準の向上に努めているところであります。中でも、成人病センターは解説以来、がんを主とした成人病の診療を担ってきておりましたが、今後より先進的ながん診療技術を取り入れ、「がん」制圧に取り組むため全面改築し、本県のがんに関する医療及び研究の中枢機関(がんセンター)として整備を行っております。

この建設予定地は、名取市の丘陵地帯に位置し、その地は野田山遺跡として知られております。平成2年度の敷地整備に先立ち、県教育委員金、名取市教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施ました。

その結果、古墳時代から平安時代にかけての住居跡、多数の土器など大変重要な資料を得る事ができました。これらは、古墳時代から平安時代にかけての人々の生活様式や、その移り変わりを知る上で非常に貴重な文化遺産と考えられ、この調査により高い成果をおさめたことは誠に意義深いものであります。本書に収録された資料が、学術破究、教育の場で広く活用されるとともに、文化財保護思想の高揚に寄与するものと願っております。

最後に、この調査にあたり、がんセンター建設工事に対し深いご理解を賜り、長期間ご協力頂いた県教育委員会及び関係者の方々、さらには、地域民の方々に厚く感謝申し上げる次第であります。

平成4年3月

宮城県保健環境部長　伊　田　八洲雄

例　　言

1.本書は宮城県立ガンセンターの建設に伴う宮城県名取市野田山遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。

2.発掘調査および資料の整理に際し、次の方々から多大の御指導、御協力を賜った。記して感謝申し上げたい。(敬称略)

加藤道男、山田晃弘(東北歴史資料館)、丹羽茂、村田晃一(多賀城跡調査研究所)、太田昭夫、工藤哲司、荒井格(仙台市教育委員会)、千葉孝弥(多賀城市教育委員会)、村田章人(埼玉県埋蔵文化財調査事業団)、藤沢敦（東北大学助手）、次山淳(京都大学大学院)、斎藤彰裕（角田市教育委員会）、菊地芳朗(東北大学大学院)、日下和寿（東北学院大学）

3.本書における土色の記述には『新版標準土色帳』(小山・竹原:1973)を利用した。

4.本書の第1図は国土土地地理院発行の1/25,000「仙台西南部」「仙台東南部」「岩沼」「仙台空港」を複製して使用した。

5.野田山遺跡に関する実測図、写真、諸記録および出土遺物は宮城県教育序文化財保護課が保管しており、求めに応じて公開している。

6.整理・報告書の作成は調査員の検討を得て行った。整理・執筆者は次の通りである。

（整理）小井川和夫・真山悟・菊池逸失・古川一明・須田良平・近藤和夫・岩見和泰・木皿直幸・吾妻俊典

（執筆）第1章　小井川、第2・3・6・7章・第5章第2・3・4・5節　須田、第4章　須田、第4章　須田・吾妻、第5章第1節Ⅰ　古川、第5章第1節Ⅱ・Ⅲ　吾妻

7.報告書における遺構・遺物の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構→1／60、遺構模式図・遺構内遺物出土分布図→1／120

土器・土製品・礫石器→1／3、剥片石器・石製品・鉄製品→2／3

8.住居跡平面図の床面の表記および住居跡床面の模式図（右図）について(上が北)

ピット番号は北東側(ａ区)の主柱穴をＰ1とし、主柱穴、壁際ピット、貯蔵穴状ピット、その他のピットの順番で数字をつけた。

ピット内でスクリーン・トーンを貼った部分は柱痕跡を示す。

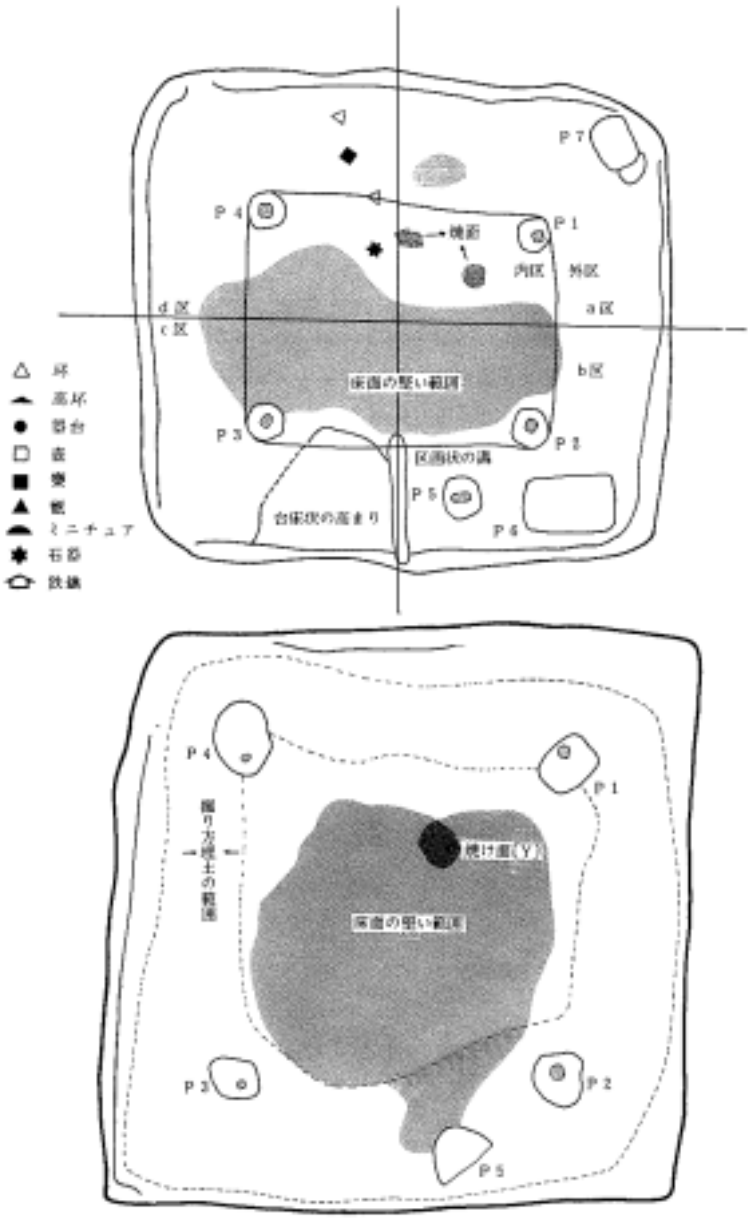
床面で濃いスクリーン・トーンを貼った部分は焼けた範囲(炉)を示し、薄いスクリーン・トーンを貼った部分は堅く締まった範囲を示す。

床面より下位の人為的堆積を本文中で掘り方埋土と表記したが、図上はスペースの都合床面を表現に用いる。

床面で細い線で囲った部分は掘り方埋土の範囲を示す。

9.出土遺物の表記について

土器の黒色処理、石器の磨面は、スクリーントーンを貼り示した。


P 7
P 4
P 1
焼面
内区
外区
d区
c区
a区
b区
床面の堅い範囲
P 3
P 2
区画状の溝
P 5
台状状の高まり
P 6
△ 坏
高坏
器台
壺
甕
鉢
ミニチュア
石器
鉄鏃
P 4
P 1
掘り方埋土の範囲
焼け面(Y)
床面の堅い範囲
P 3
P 2
P 5

住居跡床面記述模式図

目　　次

第１章　調査に至る経過 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
　第1節　位置と地形 …… 2
　第2節　周辺の遺跡 …… 2
第3章　調査の方法と経過 …… 4
　第1節　調査の方法 …… 4
　第2節　調査の経過 …… 4
第4章　発見された遺構と遺物 …… 9
　第1節　竪穴住居跡とその出土遺物 …… 9
　第2節　竪穴遺構・土壙・溝とその出土遺物 …… 73
　第3節　その他の出土遺物 …… 82
第5章　考察 …… 88
　第１節　土器 …… 88
　第２節　石器 …… 104
　第３節　土製品 …… 105
　第４節　鉄製品 …… 106
　第５節　遺構の考察 …… 106
第６章　遺跡の変遷 …… 117
第７章　まとめ …… 120

調　査　要　項

遺　跡　名：野田山遺跡（のだやまいせき）（宮城県遺跡地名表登載番号12020）
遺 跡 記 号：NM
遺跡所在地：名取市愛島塩手字野田山
発 掘 面 積：2900m^2
調 査 期 間：1990年5月28日～7月3日、8月1日～9月6日、10月15日～10月25日
調 査 主 体：宮城県教育委員会文化財保護課
調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課
調　査　員：小井川和夫、真山悟、阿部恵、菊地逸夫、古川一明、須田良平、鈴木真一郎、近藤和夫、岩見和泰、小村田達也、木皿直幸、我妻俊典、村上利雅、堀江伸

第１章　調査に至る経過

野田山遺跡は名取市西部の標高35m前後の丘陵上に立地する弥生時代から古墳時代にかけての遺跡である。また、丘陵上には縄文時代の野田山貝塚、数基の円墳からなる野田山古墳群も所在していた。

だが、昭和30年代後半から40年代にかけて名取工業高等専門学校、宮城県成人病センター・名取高等看護学校が相次いでこの丘陵上に建設されたことによりその形状は大きく変容し、現在はかつての景観をうかがうことは難しい状況となっている。

昭和63年6月、宮城県保健環境部医務課から、成人病センターおよび高等看護学校の改築計画策定に伴い、埋蔵文化財についての現地調査の依頼があった。具体的計画は、現在丘陵頂部に建つ看護学校を丘陵北側の平地部分に移転し、その跡地に新たに宮城県がんセンターを建設しようとするものであった。

依頼を受けて、同月、一帯の分布調査を実施した結果、丘陵頂部の大部分は削平を受けているが主として丘陵斜面部に造成前の地形を留めている部分があり、また一部で遺物が採集される地点も確認された。このことから、事業の実施にあたっては事前に発掘調査を実施するなどの対応が必要であることが明らかになった。

こうしたことをふまえ、平成2年8月、まず看護学校移転予定地を対象に調査を実施した。対象地区は丘陵に接する沖積地であり数本のトレンチを設定して堆積土の状況を確認したところ、深い湿地となっており遺構・遺物は発見されなかった。

次いで平成3年5月から看護学校敷地内の調査を開始した。この時点ではまだ校舎など学校施設は撤去されていなかったため、始めに構造物が配置されていない中庭部分と北部にある駐車場部分から遺構確認を行った。その結果、中庭部分では遺構・遺物は発見されなかった。これは、この部分が丘陵頂部にあたり以前の造成の際、大きく削平されていたことによる。これに対し、北部の駐車場部分は丘陵縁辺の緩斜面に盛り土して造成されたものであり、盛り土下から古墳時代の竪穴住居跡などが検出された。このことから縁辺部にはなお多数の遺構が残存していることが明らかとなり、以後その地区に建設されている体育館、事務棟などの解体・撤去に並行しながら断続的に調査を実施した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　位置と地形

野田山遺跡は名取市愛島塩手字野田山に所在する。東北本線の名取駅から西南西約2kmの丘陵に位置する。

仙台平野の東南には、奥羽山脈に連なる標高200m前後の丘陵(高館丘陵)が南北に続いており、この高館丘陵の東側には、標高30～50mの箕輪、野田山、飯野坂、小豆島等の小丘陵群が海に向かって突き出している。

野田山遺跡はこの小丘陵群の中の野田山丘陵の先端部近く、北東斜面こ立地している。遺跡の標高はおよそ34mで、丘陵の尾根上平坦部に立地していたと思われるが、北、東、南の三方をそれぞれ宮城県立名取高等専門学校、国立宮城工業高等専門学校、成人病センター建設に際して破壊されており、詳細は不明である。現況から推定すると、遺跡の北側および北西側には急峻な斜面が、東側には緩やかな斜面が続いていたものと思われ、南側にはさらに遺跡が延びていたと考えられる。南西側は遺跡よりも小高くなり、高低差を持ちつつ高館丘陵に続いていく。

当遺跡には、発掘区の東側に縄文時代の貝層も存在したが、道路やグラウンド建設の際に破壊されている。またこの丘陵の先端部やや南よりには、古墳時代後期といわれる二基の円墳があったという。しかし現在は破壊されてその姿は認められない。

第２節　周辺の遺跡

当遺跡周辺の丘陵群およびそれに接する低地は、宮城県でも遺跡の分布密度が濃く、さらに重要な遺跡の多い地域である。西野田遺跡では表土からではあるが、後期旧石器時代のナイフ形石器と石刃が発見されている。縄文時代の遺跡としては、早期から前期の宇賀崎貝塚、前期の集落跡が検出されている今熊野遺跡、後期の標式遺跡である金剛寺貝塚、弥生時代の遺跡としては後期の標式遺跡である十三塚遺跡、古墳時代の遺跡としては当遺跡のすぐ西に西野田遺跡、また高塚古墳としては東北地方で最大規模をほこる雷神山古墳がよく知られている。

今熊野遺跡では縄文時代の遺構、遺物のほかに、弥生時代から平安時代にかけての住居跡が100軒以上確認されている。さらには古墳時代の方形周溝墓も検出されており、縄文時代から平安時代にかけての大集落跡である。十三塚遺跡も縄文時代から古墳時代までの集落跡である。西野田遺跡は当遺跡と同じ丘陵上の西約800mに位置し、古墳目寺代の前期(塩釜式)の住居跡11軒と円形周溝2基、平安時代の住居跡3軒が確認されている。

番号	遺跡名	種類	時代	番号	遺跡名	種類	時代
1	野田山遺跡	貝塚・集落跡	縄文～古代	26	町裏遺跡	包蔵地	古代
2	野田山古墳	古墳	古墳（後）	27	上谷刈遺跡	集落跡	古代
3	西野遺跡	集落跡	弥生後～古代	28	沖田遺跡	包蔵地	弥生～古代
4	南野田西遺跡	包蔵地	弥生	29	下堤西遺跡	包蔵地	古代
5	南野田東遺跡	包蔵地	弥生（後）・古代	30	八幡遺跡	集落跡	古墳（後）・古代
6	鶴遺跡	包蔵地	縄文～古代	31	沼遺跡	包蔵地	縄文～古代
7	大部山遺跡	前方後円墳	古墳（中）	32	野々遺跡	集落跡	弥生・古代
8	鶴ノ巣古墳群	前方後円墳・円墳	古墳（中）	33	堀ヶ遺跡	集落跡	弥生～平安
9	北台遺跡	包蔵地	縄文・古代	34	堀ヶ台城	古城	古墳
10	西浦沢遺跡	包蔵地	縄文	35	新道遺跡	包蔵地	弥生～古代
11	台ヶ遺跡	包蔵地	古代	36	愛宕遺跡	包蔵地	古墳（後）・古代
12	東浦沢遺跡	包蔵地	縄文・古代	37	宮脇遺跡	包蔵地	古代
13	宮島窯跡	窯跡	奈良・平安	38	北宮原台遺跡	包蔵地	古代
14	十三塚遺跡	包蔵地・集落跡	縄文～古代	39	高屋敷遺跡	城館	中世
15	大部谷遺跡	包蔵地・古墳	古墳・平安	40	新野東遺跡	包蔵地	縄文～古代
16	北東沢遺跡	包蔵地	縄文・古代	41	上町遺跡	包蔵地	縄文（中）・古代
17	宮ヶ遺跡	集落跡	縄文・弥生・古代	42	高屋敷山古墳	前方後円墳	古墳（中）
18	子育観音遺跡	社寺	縄文（中～後）	43	鶴脇遺跡	包蔵地	縄文（中～後）・弥生～古代
19	子育観音遺跡	古墳・円墳	古墳（中～後）	44	上谷遺跡	包蔵地	縄文（後）・弥生・古代
20	松崎遺跡	集落跡	弥生～古代	45	東北遺跡	包蔵地	縄文（後）・古代
21	山田谷横穴古墳群	横穴古墳群	古墳（後）・奈良	46	新野前智特区	特別区	中世・近世
22	小豆島横穴古墳群	横穴古墳群	古墳（後）・奈良	47	大熊山館跡	城館	中世
23	諸塚古墳群	円墳	古墳（中）	48	角熊館跡	城館	中世
24	新野原北遺跡	包蔵地・古墳	古墳	49	金剛寺社址	社寺	縄文（中）・後・鎌倉
25	鶴崎館跡	城館	中世	50	今泉町遺跡	集落跡・社寺	縄文（中・後）・弥生～平安
26	新野原南遺跡	包蔵地	縄文～古代	51	八反田遺跡	包蔵地	弥生
27	山下遺跡	包蔵地	奈良・古代	52	宮脇入横穴古墳群	古墳	古墳（中）
28	新野東遺跡	包蔵地	弥生～古墳	53	北野遺跡	集落跡	弥生
29	新野原西遺跡	包蔵地	弥生～古代	54	梅台遺跡	集落跡	古代
30	東小屋古墳	古墳？	古墳（中）	55	宮脇谷横穴古墳群	古墳	古墳（後）
31	小屋三号墳	古墳	古墳（中）	56	梅台西遺跡	包蔵地	古代
32	宮脇谷古墳	前方後円墳	古墳	57	北野東横穴古墳群	横穴古墳	古代
33	鶴塚遺跡	集落跡	弥生・古墳	58	小屋松古墳	古墳	古墳（中）
34	鶴塚横穴古墳群	横穴古墳	古墳（後）	59	天王塚古墳	円墳	古墳
35	天王戸遺跡	遺跡	縄文（中）				

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

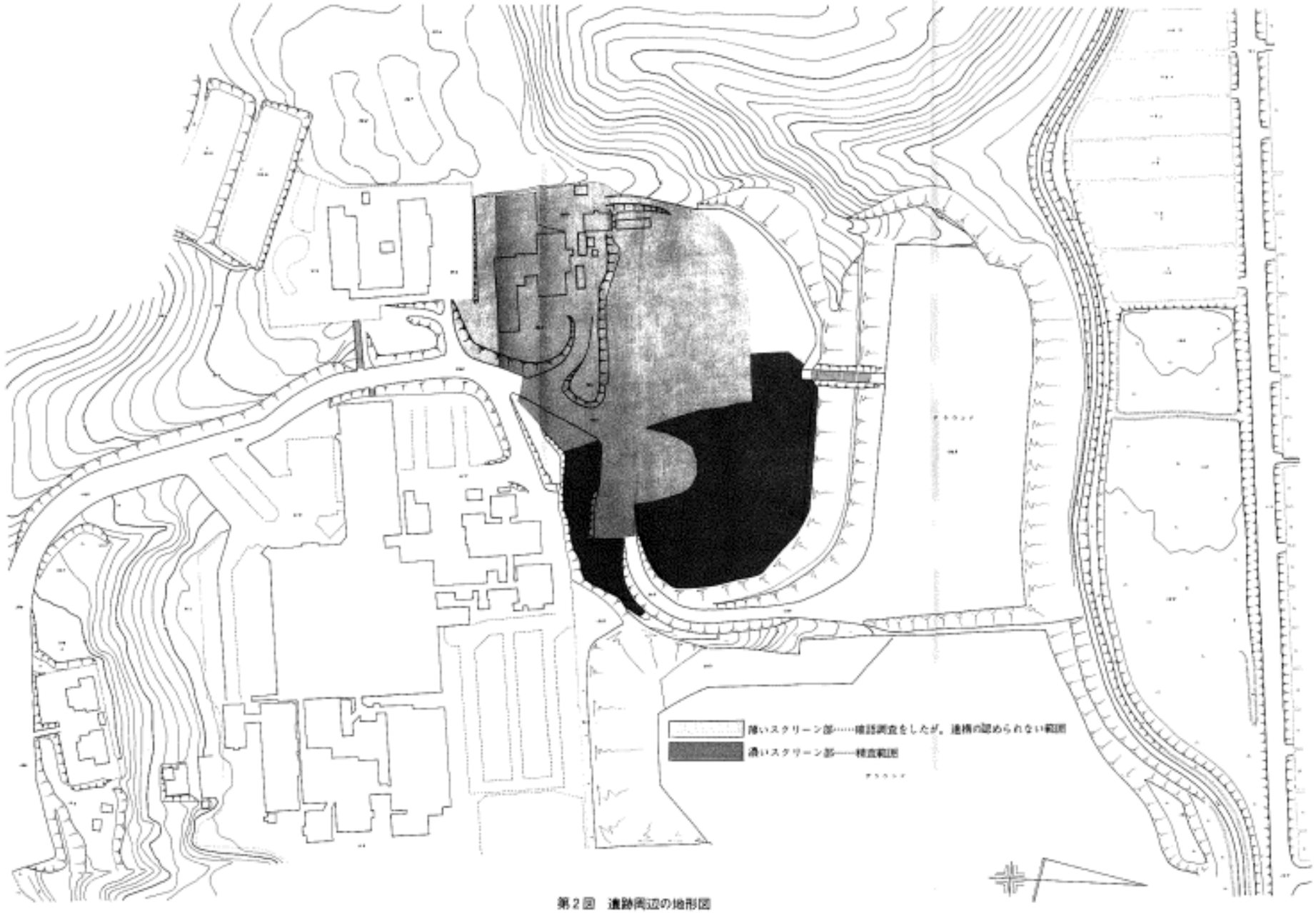
第３章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

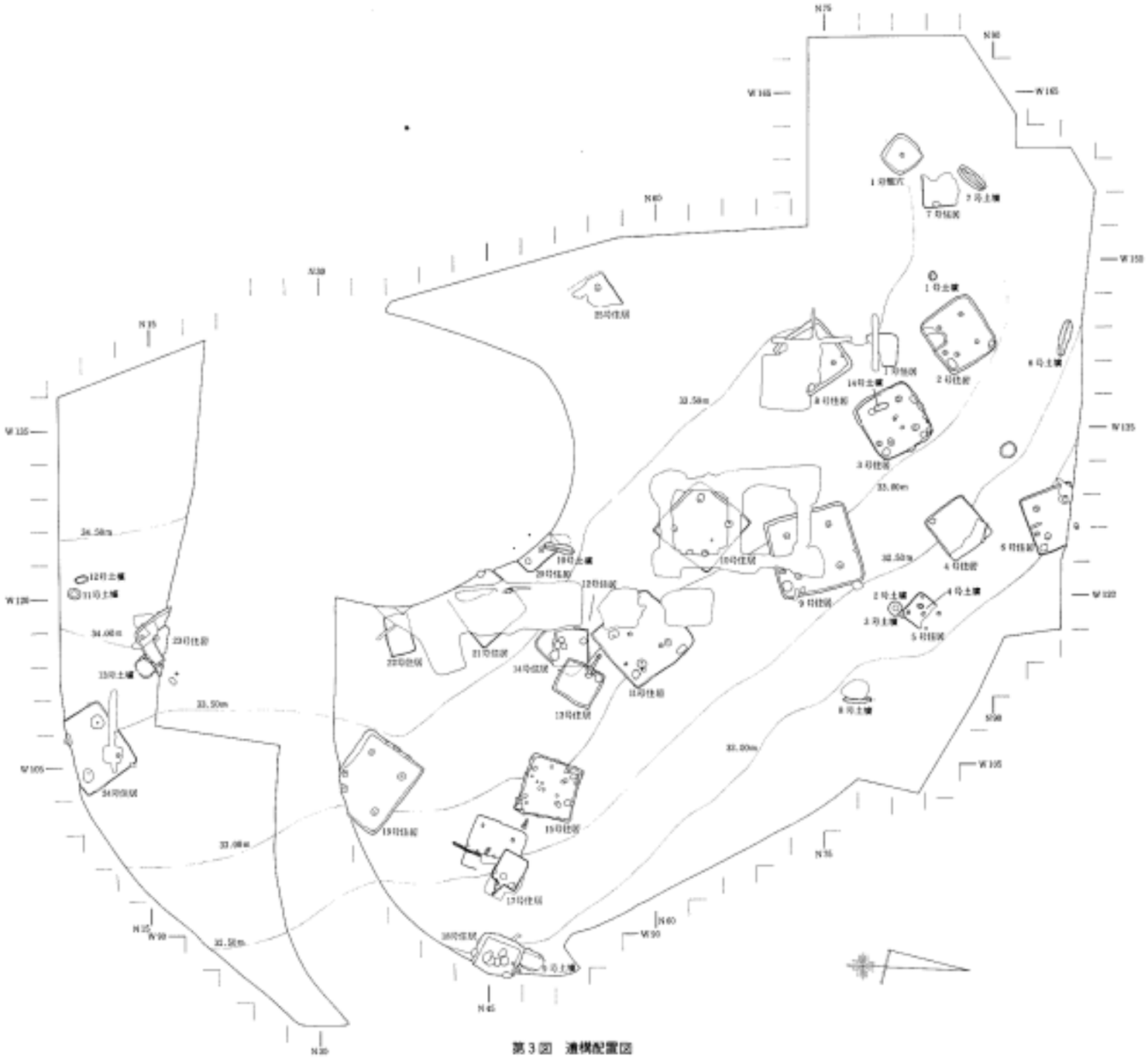
調査に際しては、当遺跡に建設される県立ガンセンターの設計基準線に座標軸を設け、3m単位の簡易遣り方方式で遺構の実測などをおこなった。遺構については縮尺1／20の実測図を作成し、また適宜同縮尺で断面図も作成した。さらに写真撮影による記録もおこなった。

第２節　調査の経過

調査開始時には、遺跡に高等看護専門学校の校舎が建っている状態であった。そのため、調査は校舎およびその付属施設の取り壊しと並行しておこなわれた。第一次調査は1990年5月28日から7月3日まで、校舎の裏庭部分についておこなわれ、第二次調査は8月1日から9月6日まで体育館部分について、第三次調査は10月15日から10月25日まで校舎部分と前庭のロータリー部分についてそれぞれおこなわれた。これらの遺構の確認された地点は丘陵の縁辺部に近く、校舎建築に際して土盛りされている部分であった。丘陵の中央部は削平や校舎などの建物の下部施設により破壊がひどく、中央部に近いほど遺構の残存状況は不良である。丘陵の縁辺以外の部分についても遺構の確認作業をおこなったが、上述の理由により遺構は検出できなかった。なお一般の人に調査成果を公表するため9月1日に現地説明会をおこなった。



第２図　遺跡周辺の地形図



第３図　遺構配置図

第４章　発見された遺構と遺物

野田山遺跡からは、住居跡25軒、竪穴遺構1基、土壙14基、溝状遺構1条が検出された。以下上述の順番に事実記載をおこなうが、遺物については明確に遺構に伴うもの、あるいは伴う可能性の強いものについて中心に図示し、記載をおこなった。当遺跡のほとんどの遺構からは、実際は、床面からも明らかに時期の異なると思われる遺物も多数出土している。これらの遺物については後に一括して図示し、記載を行う。特に石器類については、剥片石器類は遺構に伴う可能性も否定できないが、その判断は不可能であったため、明確に伴う可能性があるものだけの記述に止めた。

第１節　竪穴住居跡とその出土遺物

☆1号住居跡

〔位置・確認面〕調査区北側中央やや西よりの地山面で確認された。

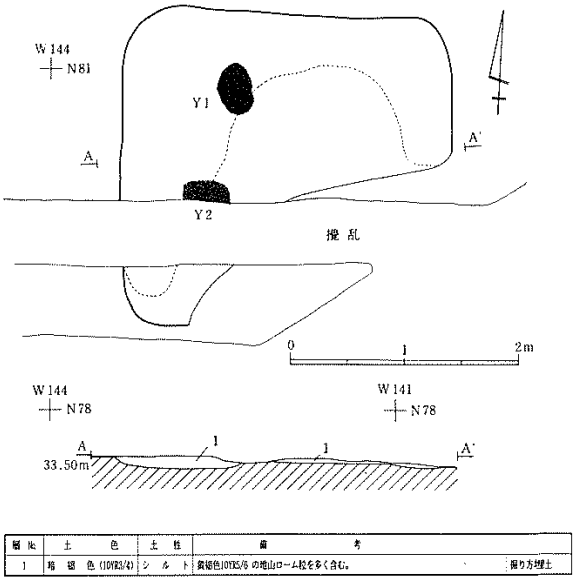
〔平面形・規模〕削平によりほとんどが失われているが、残存する掘り方埋土の範囲から、一辺およそ2.9mの隅丸正方形を呈していたと思われる。

〔堆積土・壁〕検出されなかった。

〔床面〕掘り方埋土のみ確認した。壁寄りの部分は特に深く（点線で囲った範囲）幅40～80㎝で壁際をめぐる。

〔柱穴〕検出されなかった。

〔炉〕床面北西隅(Ｙ1)と南西隅(Ｙ2)の2か所で焼け面が認められた。Ｙ1は48×32㎝の楕円形を呈する。Ｙ2は撹乱により南側が破壊されており平面形は不明である。いずれも表面は赤変し堅く締まり、断面では3㎝程下まで焼けが及んでいる。



第４図　１号住居跡

〔出土遺物〕掘り方埋土から、弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。

☆2号住居跡

〔位置・確認面〕調査区北側中央やや西よりの地山面で確認された。

〔平面形・規模〕一辺およそ5.4～5.6mの隅丸長方形を呈する。

〔堆積土〕おおむね暗褐色のシルト層で、混入物の違いから4枚の層に分かれる。いずれも自然堆積層である。

〔壁〕地山を壁としており、やや急激に立ち上がる。壁高は最も残りの良いところで約30㎝である。

〔床面〕住居南西から南東の壁際にかけては住居掘り方埋土を、それ以外の部分は地山を床としており、床面中央部は堅く締まっている。床面は南東壁際に認められる台床状の高まりを除きほぼ平坦である。台床状の高まりは調査の過程で一部壊されているが、台形状の平面形を呈し、高さは床面から約5㎝である。

〔柱穴〕合計5個のピットが確認された。これらの中でも住居の平面形の対角線上に位置する4個（P1～4）は、いずれも掘り方が40㎝程の不整の円形を呈し、平面形が隅丸方形で先端の尖る柱痕跡が認められる。したがってこれらが主柱穴と考えられる。また後述する貯蔵穴状ピットと考えられるピットを取り囲むように、主柱穴(P2)のすぐ脇、壁際のやや中央よりに、掘り方が主柱穴よりも浅いピットが認められた(P5)。

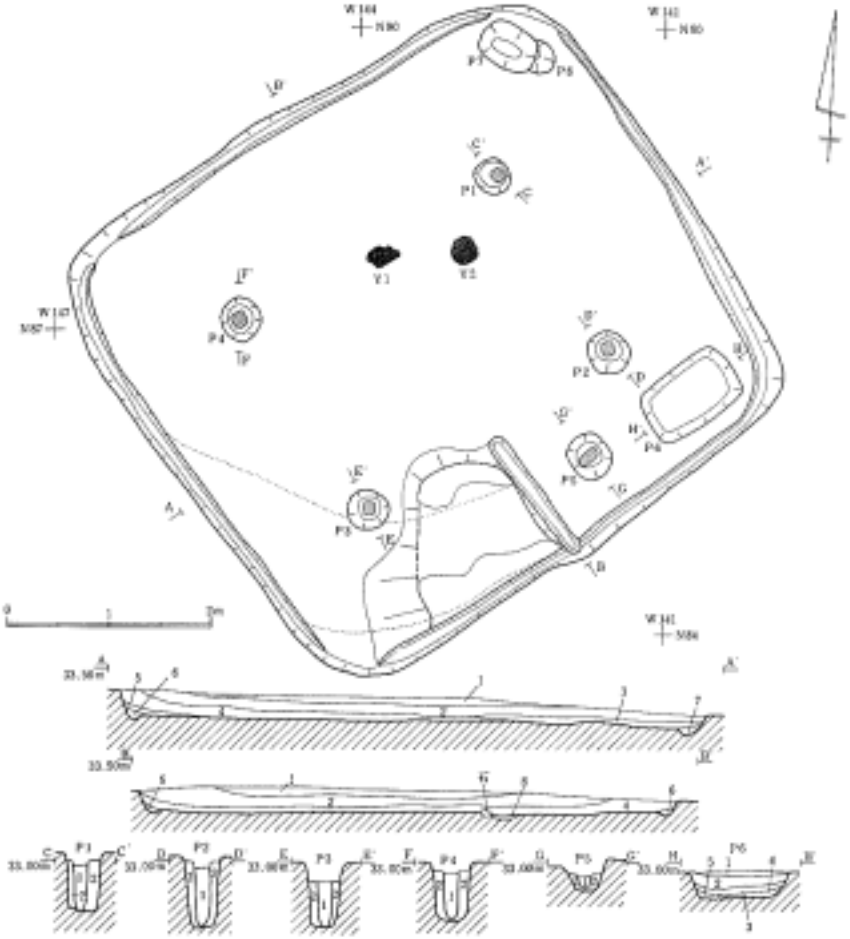
〔溝〕北、西、南の3コーナーで途切れるものの、壁沿いのほ全周を巡る周溝が認められた。上幅6～15㎝、深さ1～4㎝、断面は「U」字状を呈する。

また、南東壁の中央から直角に、床面中央に向かって1.4m程延びる溝が確認された。上幅13～20㎝深さ約10㎝、断面は「U」字状を呈する。周溝および南側の台床状の高まりと重複しており、周溝より古く台床状の高まりよりも新しい。その性格として、区画施設の可能性が考えられる。

〔炉〕主柱穴P1の南側中央よりの床面で、2か所の焼け面が認められた(Y1・Y2)。Y1は34×22㎝の不整形を呈し、Y2は30×26㎝の楕円形を呈する。いずれも表面は赤変し堅く締まり、断面では5㎝程下まで焼けが及んでいる。Y1では焼け面を取り囲むように二個の石が確認され、その内の一つは石皿状の砥石であった。ただし石の据え方は確認されず、石囲炉か否かは不明である。

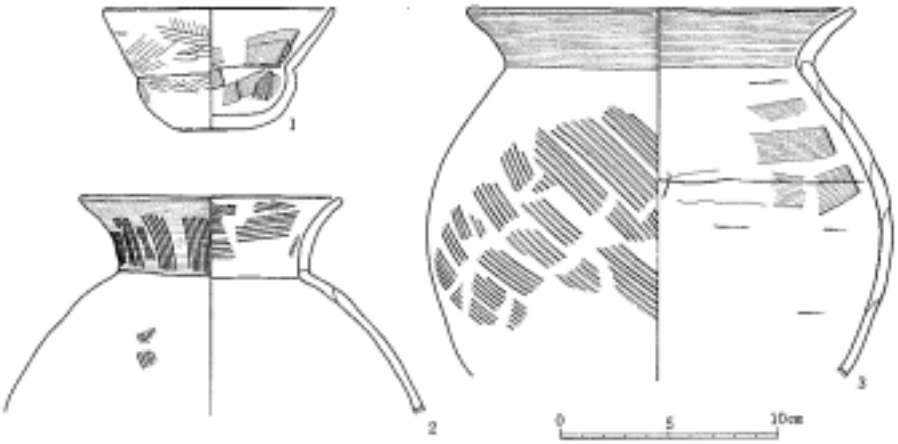
〔貯蔵穴状ピット〕床面の東側、P2、P5に囲まれてP6が認められる。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1m、短軸0.6m、深さは25㎝程であった。

〔出土遺物〕床面から土師器坏(第6図)・甕(第6図2)が、堆積土3層から土師器甕(第6図3)が出土している。第8図1はY1の横から出土した石皿状の砥石である。完形品であり、下端と左図左側辺は意図的なものか否かは不明であるが、割れ面である。その



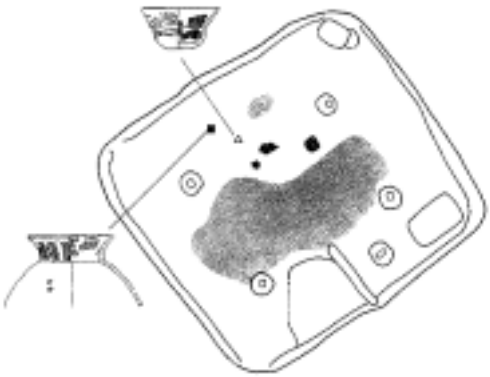
層 No		土	色	土	性	備	考
	1	暗	褐 色	シ	ル	ト	地山ローム(10YR5/6 黄褐色)をわずかにブロック状に含む。
	2	にぶい黄褐色		シ	ル	ト	地山ローム小ブロック状に含む。
	3	褐	色	シ	ル	ト	径50mm以内の地山ローム小ブロック状に含む。焼土・炭も若干含む。
	4	暗	褐 色	シ	ル	ト	焼土・炭を若干含む。
	5	暗	褐 色	シ	ル	ト	地山ローム小ブロック状に含む。
	6	にぶい黄褐色		シ	ル	ト	5層ローム小ブロック状に含む。
	7	暗	褐 色	シ	ル	ト	地山ローム小ブロック状に含む。
	8	赤	褐 色	シ	ル	ト	地山面 (TB)
P1	1	黒	褐 色	シ	ル	ト	
	2	褐	色	シ	ル	ト	褐色(10YR4/6)のシルトが若干まじる。
P2	1	黒	褐 色	シ	ル	ト	
	2	黒	褐 色	シ	ル	ト	褐色(10YR4/6)のシルトが若干まじる。
P3・4	1	黒	褐 色	シ	ル	ト	
	2	褐	色	シ	ル	ト	褐色(10YR4/6)のシルトが若干まじる。
P5	1	黒	褐 色	シ	ル	ト	
	2	にぶい黄褐色		シ	ル	ト	にぶい黄褐色(10YR5/4)の土が若干まじる。
P6	1	黒	褐 色	シ	ル	ト	地山ローム(10YR5/6 黄褐色)を小ブロック状に含む。焼土・炭も若干含む。
	2	暗	褐 色	シ	ル	ト	地山ローム(10YR5/6 黄褐色)を小ブロック状に含む。炭も若干含む。
	3	黒	褐 色	シ	ル	ト	地山ローム(10YR5/6 黄褐色)を小ブロック状に含む。炭も若干含む。
	4	黒	褐 色	シ	ル	ト	地山ローム(10YR5/6 明黄褐色)を小ブロック状に含む。炭も若干含む。
	5	褐	色	シ	ル	ト	地山ローム(10YR5/6 明黄褐色)を小ブロック状に含む。

第5図　2号住居跡



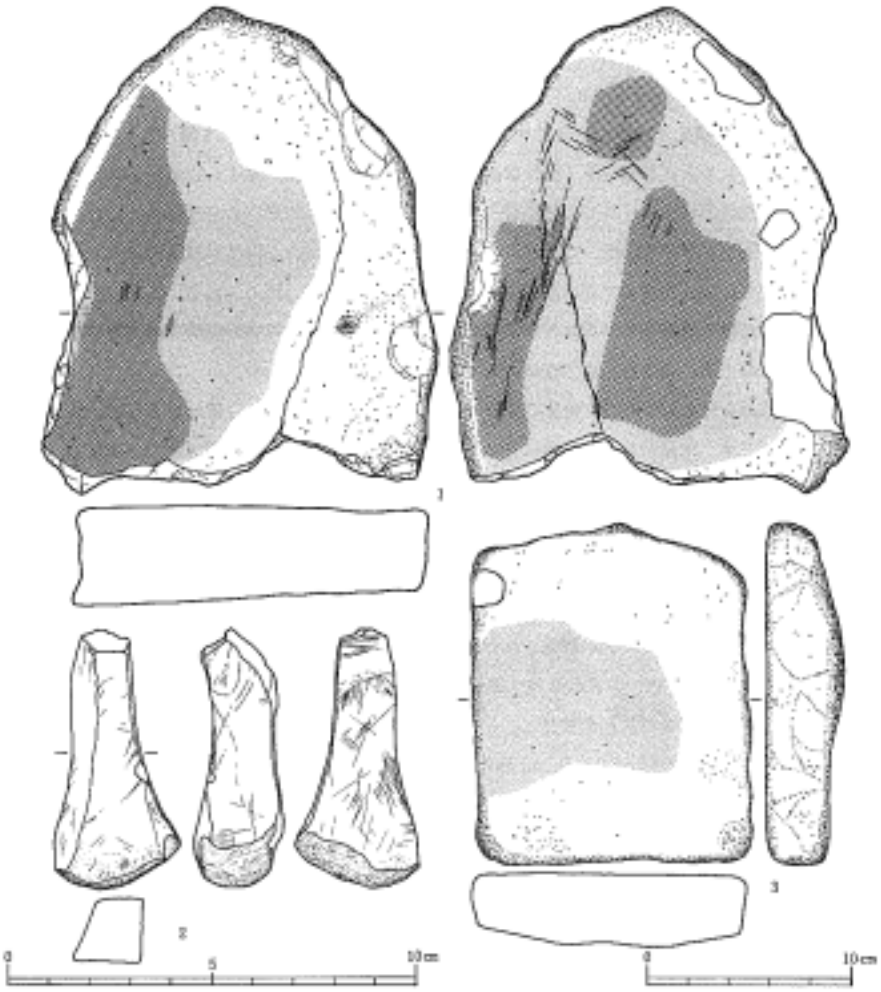
番号	層位	種別	分類	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版	登録
1	床	土師器甕	4-1	ヘラナデ	ヘラナデ	明褐	明褐	5.5	12.6	5.6		9-1	2-1
2	床	土師器鉢		(口) 横ミガキ→横ナデ、(胴) 斜ミガキ	(口) 横ミガキ、(胴) 横ナデ	明褐	明褐		23.1			9-2	2-2
3	1層	土師器鉢		(口) 横ナデ、(胴) 斜ミガキ	(口) 横ナデ、(胴) ヘラナデ	明褐褐	明褐褐		(21.0)			9-3	2-3

第６図　２号住居跡出土土器



第７図　２号住居跡炉跡・床面の堅い範囲と遺物出土状況

他には加工痕は認められず、両面は使用により、滑らかな部分とより滑らかな部分が認められる。左図右側辺は火熱を受けて赤化しており、左側辺および右図表面は黒色に変化している。もう一つのＹ1の横から出土した礫は、火熱を受けているが加工痕は認められず、26×10㎝程の自然礫である。第8図2は床面から出土した砥石である。下端に自然面を残している。3は堆積土から出土した石皿状の砥石である。偏平な自然礫を用いている。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。



番号	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考	写真図版
1	[illegible]	敲石	23.9	19.4	4.9		石英安山岩		27-9
2	[illegible]	敲石	16.0	3.1	2.2	58	粘板岩		28-13
3	3層	敲石	16.7	13.7	3.8	1,320	石英安山岩		27-1

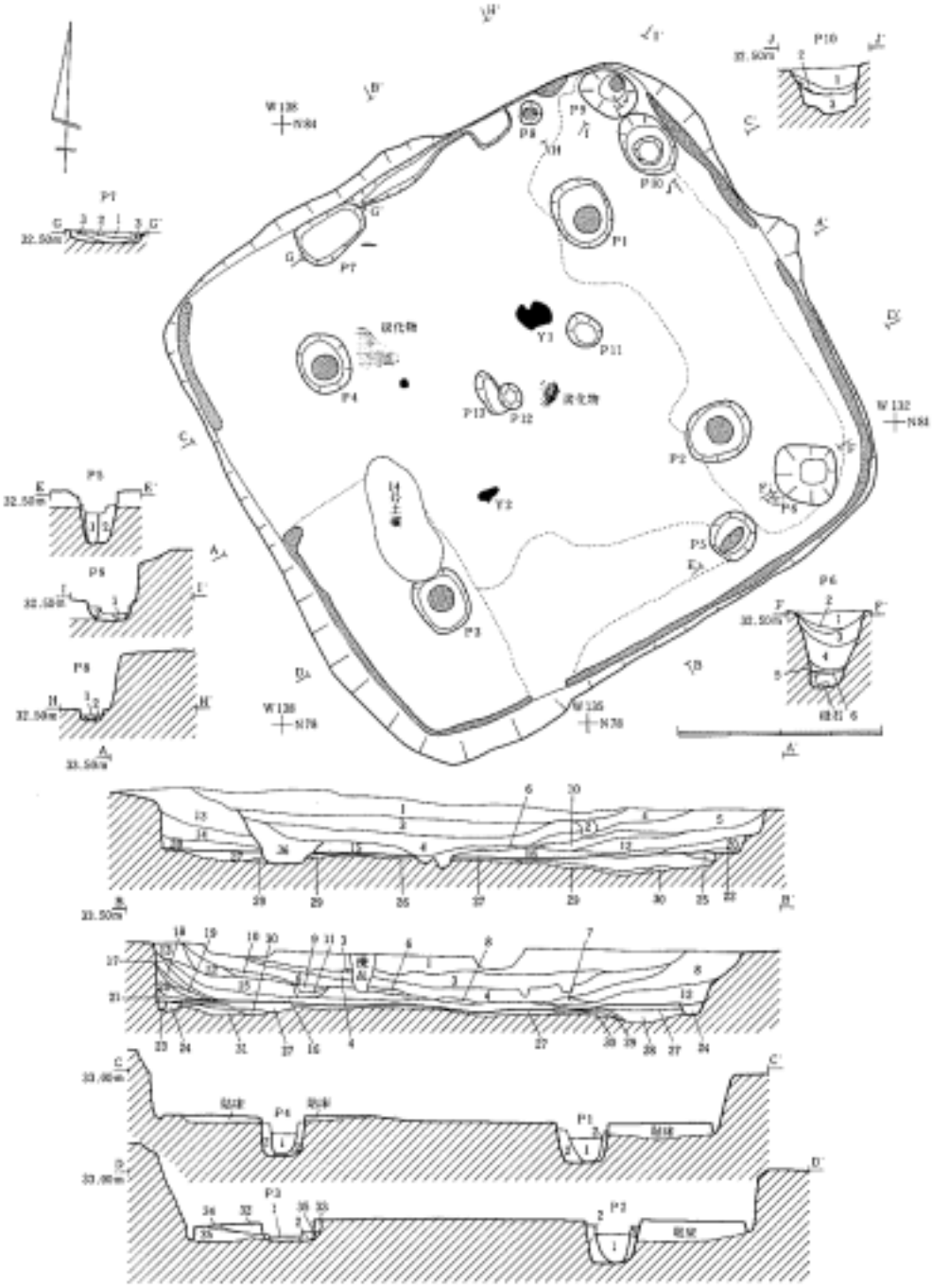
第8図　2号住居跡出土石器

☆3号住居跡

〔位置・確認面〕調査区北側ほぼ中央の地山面で確認された。

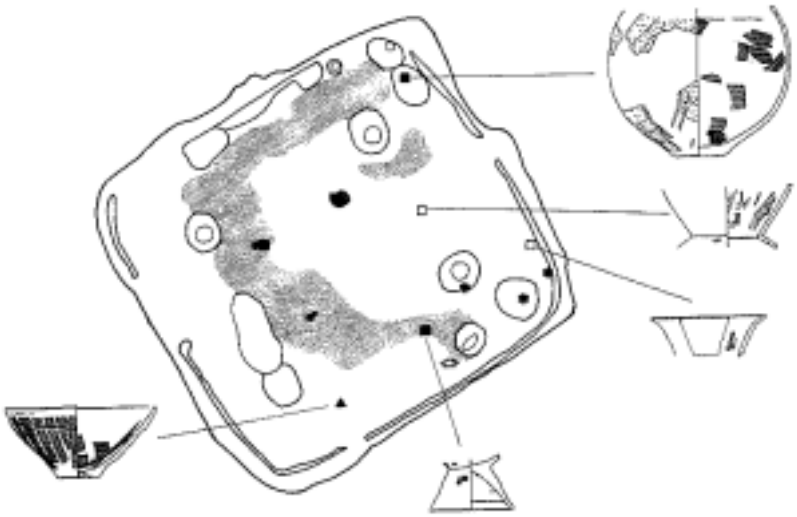
〔重複〕住居内において、堆積土第1層及び15層から掘り込まれた土壙（第14土壙）が認

められた。
〔平面形・規模〕平面形は、壁の上部が崩壊して乱れているものの、隅丸方形を呈する。規模は一辺およそ5.5〜6.0mである。
〔堆積土〕堆積上は22層に細分でき、大別すると四層に分けられる。Ⅰ層（第1層）は黒褐色粘土質シルト、Ⅱ層(第3層)は黒色粘土質シルト、Ⅲ層(第4〜14層)が暗褐色もしくは黒褐色の粘土質シルトで地山質を含み、Ⅳ層（第15〜22層）も暗褐色もしくは黒褐色の粘土質シルトで地山粒、地山ブロックを多く含む。いずれも自然堆積層である。堆積土の特徴として、北側で大別Ⅲ層が堆積するが大別Ⅳ層は認められないこと、南側で大別Ⅳ層が厚く堆積していることがあげられる。また、住居東側の壁際の第20層上面において、焼土塊、焼土粒、炭化粒が面的に広がる部分が認められた。
〔壁〕地山を壁としており、東側の中央に一部外側に掘り窪められた部分があるが、北西壁を除いては、床面からほぼ平坦に立ち上がる。壁高は42〜75㎝と非常に残りが良い。
〔床面〕掘り方埋土を床面とし、ほぼ平坦に整えられている。非常に堅くしまった部分と比較的柔らかい部分が認められ、柔らかい住居内の北東側と中央部分をP5を起点として「コ」の字に囲むように堅い部分が確認できた。なお住居平面図中、点線で囲った範囲は掘り方のより深い範囲である。
〔柱穴〕合計5個のピットが確認された。これらの中で住居の平面形の対角線上に位置する4個(P1〜4)は、いずれも掘り方が60〜70㎝程の楕円形を呈し、柱痕跡が直径24〜28㎝と大きく、先端が丸みを帯びる。したがってこれらが主柱穴と考えられる。ただしP3の掘り方の深さは11㎝であり、40㎝前後の深さの他のピットとは異なる。また後述する貯蔵穴状ピットと考えられるピットを取り囲むように、主柱穴(P2)のすぐ脇、壁際やや中央寄りに、掘り方が主柱穴よりもやや深いピットが認められる(P5)。このピットの柱痕跡は細長い楕円形を呈する。この他に北コーナーで柱痕跡の認められるピットが二つ確認された(P8、P9)。
〔周溝〕周溝は全周せず、各辺で一箇所ないしは数箇所とぎれている。上幅4〜13㎝、深さ4〜13㎝、断面は「U」字状を呈する。これらは壁材痕跡と考えられ(スクリーン部)、床面では掘り方は確認できなかった。しかし断面で詳細に確認したところ掘り方の立ち上がりが認められ、床面の掘り方埋土と周溝の掘り方埋土が非常に類似するため床面で確認できなかったものと理解した。北東壁下では周溝掘り方は認められたが壁材痕跡は認められなかった。
〔炉〕三本の主柱穴(P1、P3、P4)の内側、床面中央よりに三か所の焼け面が認められた(Y1、Y2、Y3)。焼けた範囲は様々でY1が最も広く35㎝、Y2が最も小さく10



第9図　3号住居跡

層	No.	土 色	土 性	備 考	
1	大別Ⅰ	暗褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	しまりあり。焼土粒・焼土塊をわずかに含む。	
2				撹乱。	
3	大別Ⅱ	黒 色(10YR2/1)	粘土質シルト	しまりあり。焼土粒をわずかに含む。	
4	大別Ⅲ	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	しまりあり。焼土粒・地山粒を少量含む。	
5	〃	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	しまりあり。焼土粒・地山粒を含む。	
6	〃	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	しまりあり。焼土粒・地山粒を少量含む。4層よりやや黒味が強い。	
7	〃	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	しまりあり。焼土粒・地山粒を少量含む。	
8	〃	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	しまりなし。粘性あり。焼土粒を少量含む。	
9	〃	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	ややしまりあり。焼土粒・炭化粒・地山粒を少量含む。	
10	〃	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	しまりあり。焼土粒・地山粒を少量含む。粘性ややあり。8層より黒味が強い。	
11	〃	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	しまりなし。小ブロック状の地山土をわずかに含む。	
12	〃	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	しまりあり。焼土粒・炭化粒を含む。地山粒を多く含む。	
13	〃	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	しまりあり。焼土粒・炭化粒を少量含む。4層より明るい。	
14	〃	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	しまりあり。13層より黒味が強く、地山粒が多い。焼土粒・炭化粒をわずかに含む。	
15	大別Ⅳ	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	ややしまりあり。焼土粒・地山粒を含む。	
16	〃	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	ややしまりあり。焼土粒・炭化粒・地山粒を含む。	
17	〃	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	しまりなし。地山粒を多く含む。	
18	〃	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	ややしまりあり。地山粒をわずかに含む。	
19	〃	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	ややしまりあり。地山粒を含む。	
20	〃	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	ややしまりあり。小ブロック状の地山の土を含む。上層には焼土塊・炭化粒が目立する。	
21	〃	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	ややしまりあり。焼土塊・炭化粒を多く含む。地山の小ブロックもあり。	
22	〃	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	ややしまりあり。	
23		暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	ややしまりあり。23層と似た土。焼土粒・炭化粒を含まない。	壁材崩落
24					
25		暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	しまりあり。焼土粒・地山粒を含む。	隣接埋土
26		黄褐色(10YR5/6)	粘土質シルト	地山の土を多量に含み、非常に硬くしまっている。焼土粒・炭化粒をわずかに含む。	
27		褐 色(10YR4/6)	粘土質シルト	しまりあり。地山ブロック・焼土粒を含む。	
28		暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	しまりあり。地山ブロックを多く含む。	
29		黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	しまりあり。地山粒・焼土粒を含む。	
30		褐 色(10YR4/6)	粘土質シルト	しまりあり。地山ブロックを多く含む。	住居掘り方埋土
31		黄褐色(10YR5/8)	粘土質シルト	しまりあり。地山ブロックと暗褐色土からなる。地山ブロック多し。	
32		暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	しまりあり。地山粒・焼土・炭化物を含む。	
33		褐 色(10YR4/5)	粘土質シルト	しまりあり。焼土粒をわずかに含む。	
34		褐 色(7.5YR4/4)	粘土質シルト	しまりあり。地山粒を多く含む。	
35		暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	ややしまりなし。地山粒・焼土粒・炭化物を含む。	
36		黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	しまりあり。焼土粒・地山粒を少量含む。33層の土をブロック状に含む。	14号土坑埋土
P1	1	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	しまりなし。焼土塊・炭化物を含む。地山粒も少量含む。	柱痕跡
	2	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	しまりあり。地山ブロック・焼土粒・炭化粒を含む。	柱掘り方埋土
P2	1	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	しまりなし。焼土塊・炭化物を含む。	柱痕跡
	2	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	しまりあり。地山ブロック・焼土粒・炭化粒を含む。	柱掘り方埋土
P3	1	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	ややしまりなし。焼土粒・地山粒を含む。	柱痕跡
	2	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	しまりあり。地山粒・焼土粒・炭化粒を含む。	柱掘り方埋土
P4	1	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	しまりなし。地山粒・焼土・炭化物を含む。	柱痕跡
	2	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	しまりあり。地山ブロックを多く含む。炭化粒も含む。	柱掘り方埋土
P5	1	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	しまりなし。焼土塊・炭化物を含む。	柱痕跡
	2	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	しまりあり。地山ブロック・炭化粒を含む。	柱掘り方埋土
P6	1	暗褐色(7.5YR3/4)	粘土質シルト	焼土粒・炭化粒・地山粒を含む。やわらかい。	
	2	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	焼土粒・炭化粒・地山粒を少量含む。やわらかい。	
	3	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	焼土粒・炭化粒・地山粒を含む。やわらかい。	
	4	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	地山ブロックおよび1・3層と同質・同色の土を含む。しまりなし。	貯蔵穴
	5	黒褐色(10YR5/6)	粘土質シルト	しまりなし。地山ブロックを中心とした土。	
	6	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	しまりあり。炭化粒・地山粒を少量含む。土器破片出土。	
	7	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	しまりあり。焼土粒・地山粒を含む。土器出土。	
P7	1	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	ややしまりなし。炭化粒・地山粒を含む。	
	2	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	ややしまりあり。地山粒・焼土塊を含む。土器片出土。	
	3	褐 色(10YR4/4)	粘土質シルト	ややしまりなし。	
P8	1	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	しまりなし。地山粒を少量含む。	柱痕跡
	2	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	しまりあり。地山ブロックを含む。	柱掘り方埋土
P9	1	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	ややしまりあり。地山粒・焼土粒を含む。	柱痕跡
	3	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	しまりあり。地山ブロック・焼土粒・炭化粒を含む。	柱掘り方埋土
P10	1	褐 色(7.5YR4/4)	粘土質シルト	しまりなし。炭化物・地山粒を含む。	
	2	褐 色(7.5YR4/3)	粘土質シルト	ややしまりあり。地山粒を含む。	
	3	褐 色(10YR4/6)	粘土質シルト	しまりあり。地山ブロックを多く含む。上部から土器出土。	

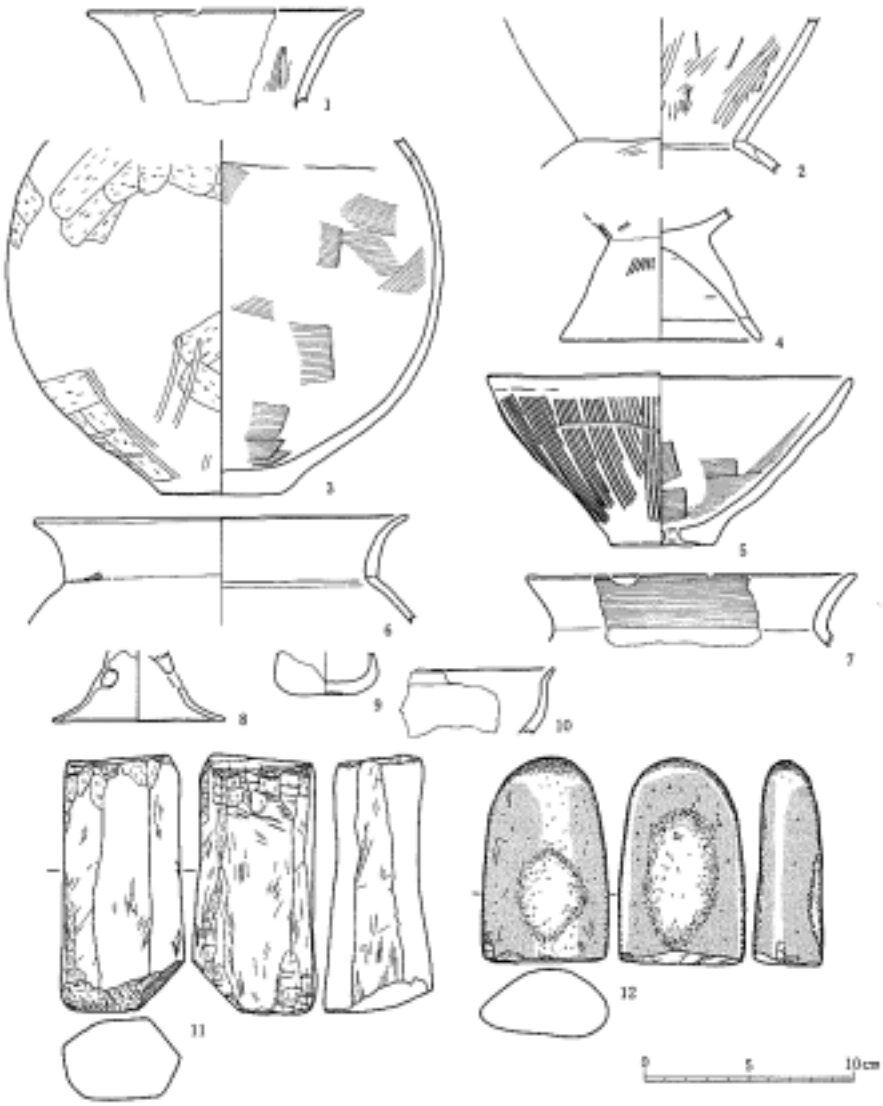


第10図　3号住居跡床面の堅い範囲と遺物出土状況

cm程である。いずれも表面は赤変し堅く締まり、断面では2～6cm程下まで焼けが及んでいる。またY1、Y3の近くでは炭化物や焼土塊の集中が認められ、炉跡に付随するものと考えられる。

〔貯蔵穴状ピット〕床面の北隅と東側の二つを確認した。P2、P5に囲まれたP6は平面形が隅丸方形を呈し、長軸62cm、短軸59cm、深さは77cm程である。底から砥石が出土した。P9に隣接するP10は平面形が楕円形を呈し、長軸69cm、短軸49cm、深さは49cm程である。堆積土の3層上面から甕一個体が出土した。

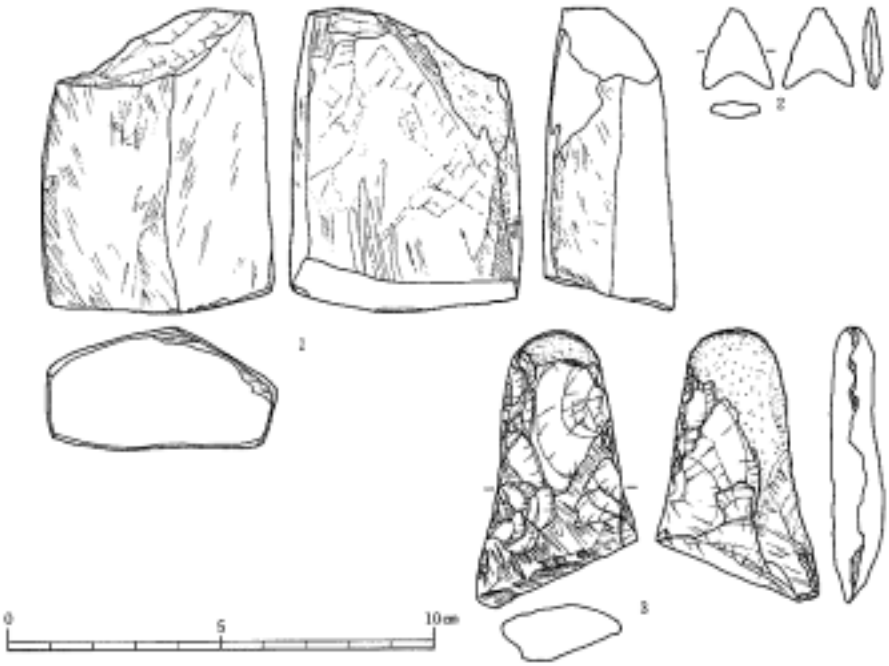
〔出土遺物〕床面から土師器壺(第11図1・2)が、床面直上から土師器甕(第11図4)・甑(第11図5)が、P10堆積土3層から土師器甕(第11図3)が出土している。堆積土8層からは土師器甕(第11図6)、9層からは土師器甕(第11図7)が、掘り方埋土からは土師器ミニチュア（第11図8･9)が出土している。第11図11は貯蔵穴状ピット(P6)の底面から出土した砥石である。両端に金属器で加工されたような痕跡が認められる。第11図12は床面直上から出土した自然礫を用いた砥石十敲石である。第12図1は床面直上から出土した砥石である。下端にも一部磨面および擦痕が認められる。3はP8の堆積土から出土した砥石である。やや偏平で小型の自然礫に加工を施し、その後使用されている。2は床面から出土した鉄鏃である。小型で薄く、基部は内彎し、凹基の石鏃と全く同様の形態を呈する。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。



番号	種別	種類	小類	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版	実測
1	土	土師器	壺	磨滅	ヘラミガキ	黒褐	黒褐		(11.0)				3-9
2	土	土師器	壺	(口)磨滅 (頸)ヘラミガキ	(口)ヘラナデ→ヘラミガキ (頸)磨滅	褐黒色	褐黒色					9-5	3-4
3	P10	土師器	甕(口)	(頸)ハケ→ヘラ (頸下端)ハケ →ヘラ	(頸)ヘラナデ	明褐	明褐			5.0	内面に炭化物	9-6	3-5
4	表採	土師器		(頸下端)磨滅 (頸)磨滅	不明	赤褐	赤褐			(5.0)		9-4	3-2
5	表採	土師器	鉢	(頸)磨滅	(頸)ヘラナデ	明黒褐	明褐	6.3	17.5	4.8	口縁部黒色	10-1	3-1
6	土	土師器		(口)磨滅 (頸)磨滅	磨滅	橙	橙		(18.0)				3-8
7	土	土師器		(口)ヨコナデ	磨滅	橙	橙		(25.0)				3-10
8	縄文	土師器	口縁	磨滅	磨滅	明黒褐	明褐			(4.0)			3-7
9	縄文	土師器	口縁	磨滅	磨滅	明黒褐	橙			3.4			3-3
10	表採	土師器	底	磨滅	磨滅	橙	橙						3-6

番号	出土地点	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	写真図版
11	貯蔵穴	砥石	12.3	5.9	5.3	475	凝灰岩		20-10
12	土間	磨石・敲石	5.8	5.6	3.3	279	石英斑岩(白雲母含む)		24-20

第11図　3号住居跡出土遺物



番号	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考	写真図版
1	20層	敲石	(5.2)	5.4	2.9	149	緑泥岩		20-11
2	床	鉄鏃	1.9	1.7	0.4	1			20-1
3	P9 2層	剥製石器	(6.5)	(3.8)	(1.3)	33	珪化凝灰岩		20-15

第12図　3号住居跡出土遺物

☆4号住居跡

〔位置・確認面〕調査区北側やや東よりの地山面で確認された。

〔平面形・規模〕北東側が一部削平されているが、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸がおよそ4.7m、短軸が4.2mである。

〔堆積土〕堆積土は自然堆積の暗褐色シルト層が確認されたのみである。

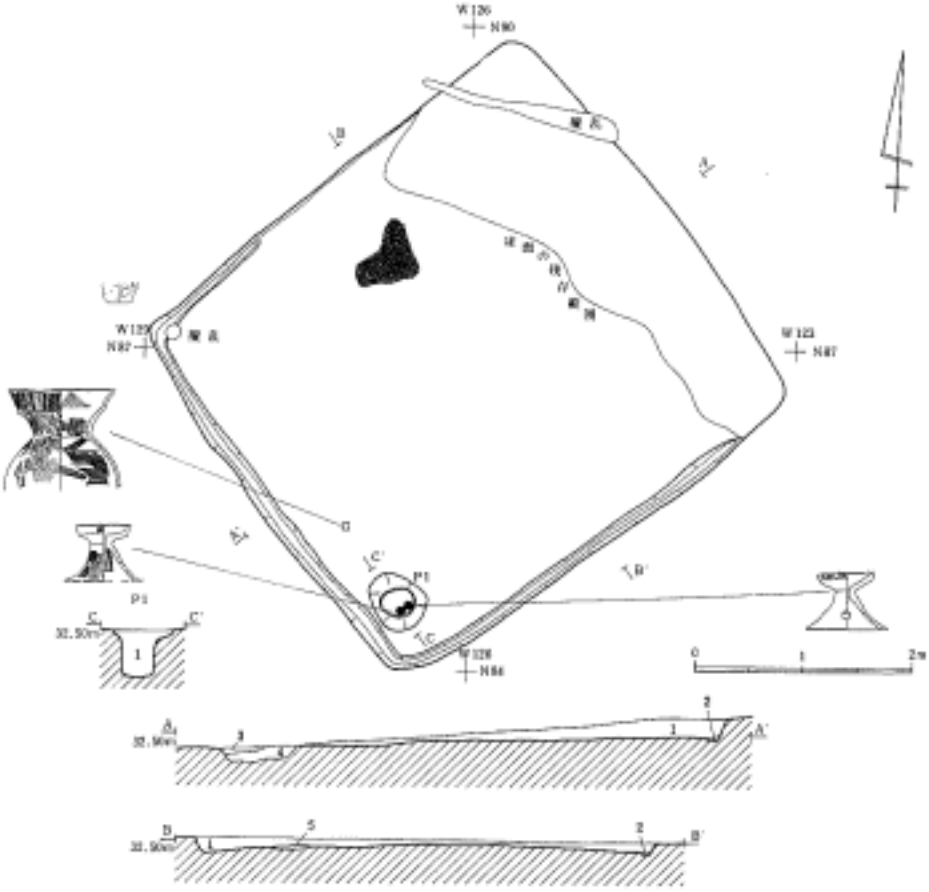
〔壁〕住居の北東側が削平されており壁は残存していないが、残存する部分では地山を壁としており、立ち上がりは緩やかである。壁高は最も残りの良いところで約20cmである。

〔床面〕北東壁沿いは掘り方埋土を、そのほかは地山を床面とし、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕確認されなかった。

〔周溝〕周溝は全周せず、壁の残存する部分では北西壁の北側を除く部分の垂直下で認された。上幅は8～15cm、深さは3cmで断面は「U」字状を呈する。

〔炉〕床面北西壁の近くに不整形の焼け面が一部確認された。範囲はおよそ60cm×60cm、

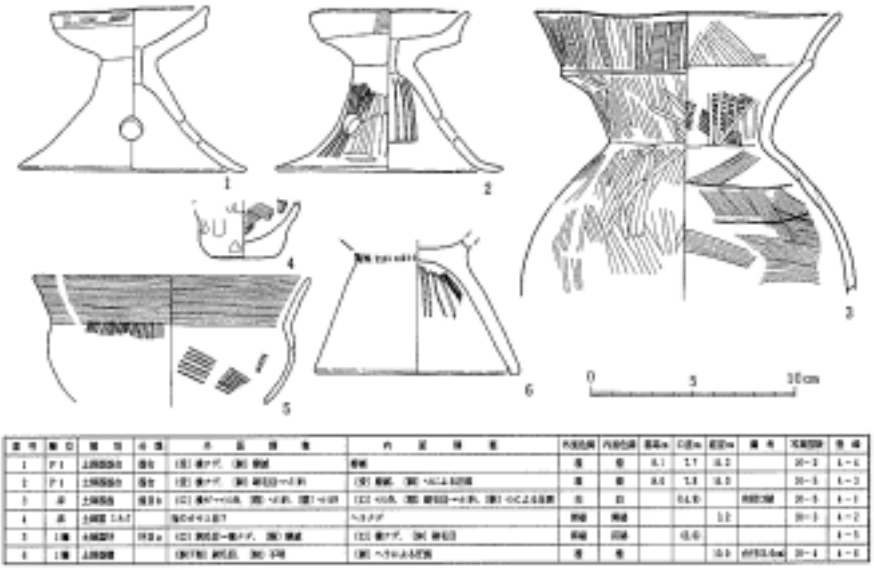


第13図　4号住居跡

断面では4cm下まで焼けが及んでいる。

〔貯蔵穴状ピット〕床面の南隅で不整楕円形のピットが一個確認された。規模は長軸55cm、短軸45cm、深さ40cmである。堆積土中から完形の器台が、横倒しになり流れ込んだ形で二点出土した。

〔出土遺物〕床面から土師器壺(第14図3)・ミニチュア（第14図4）が、P1から土師器



第14図　4号住居跡出土土器

器台（第14図1・2）が出土している。堆積土1層からは土師器坏(第14図5)・甕(第14図6)が出土している。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。

☆5号住居跡

〔位置・確認面〕調査区北東側の地山面で確認された。

〔重複〕住居跡南隅で3号土壙と重複し、当住居跡はこれよりも新しい。また住居跡中央やや西寄りで4号土壙と重複しこれよりも古い。

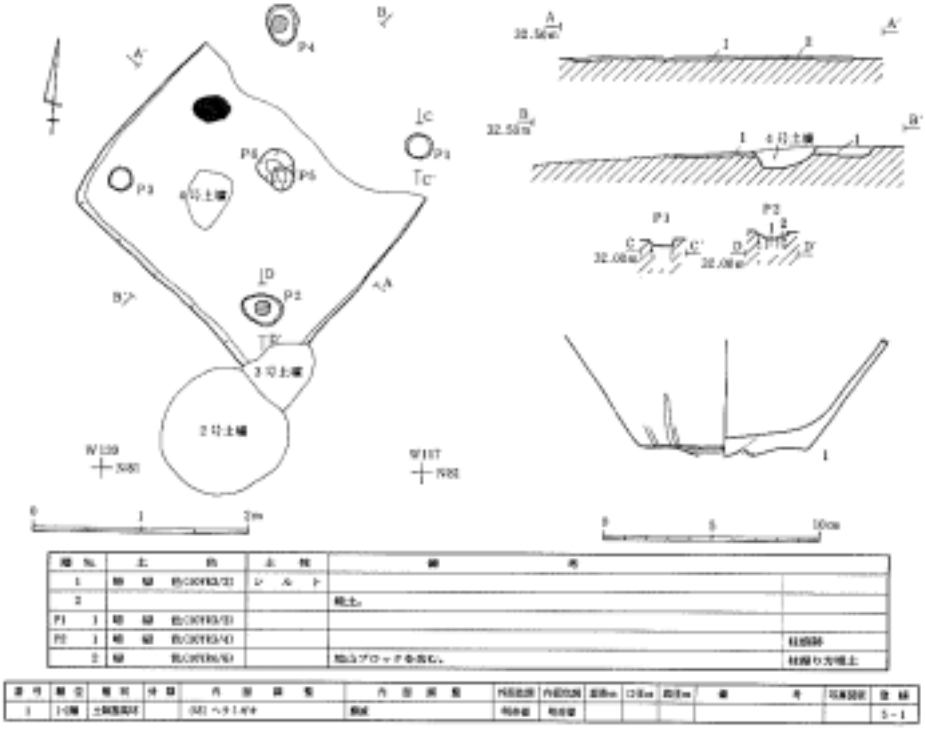
〔平面形・規模〕北東側が削平されているが、柱穴の位置関係から北東壁を復元すると、規模は長軸がおよそ3m、短軸が2.6mで、隅丸長方彩の平面形を呈していたと考えられる。

〔堆積土〕堆積土は自然堆積の暗褐色シルト層が二層確認されたのみである。

〔壁〕住居の北東側が削平されており壁は残存していないが、残存する部分では地山を壁としており、立ち上がりは緩やかである。壁高は最も残りの良いところで約10cmである。

〔床面〕地山を床面とし、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕合計六個のピットが確認された。これらの中で住居の平面形の対角線上に位置する4個（P1～4）が主柱穴と考えられる。これらのうちP2、P4からは直径約15cmの円形の柱痕跡が確認された。このほか住居跡のほぼ中央の床面で不整形なピットが確認され



第15図　5号住居跡と出土土器

たが、その性格は不明である。

〔周溝〕確認されなかった。

〔炉〕住居跡北側壁寄りの床面で焼け面が一箇所確認された。規模は長軸35㎝、短軸25㎝で、平面形は楕円形を呈する。表面は赤変し堅く締まり、断面では2㎝程下まで焼けが及んでいる。

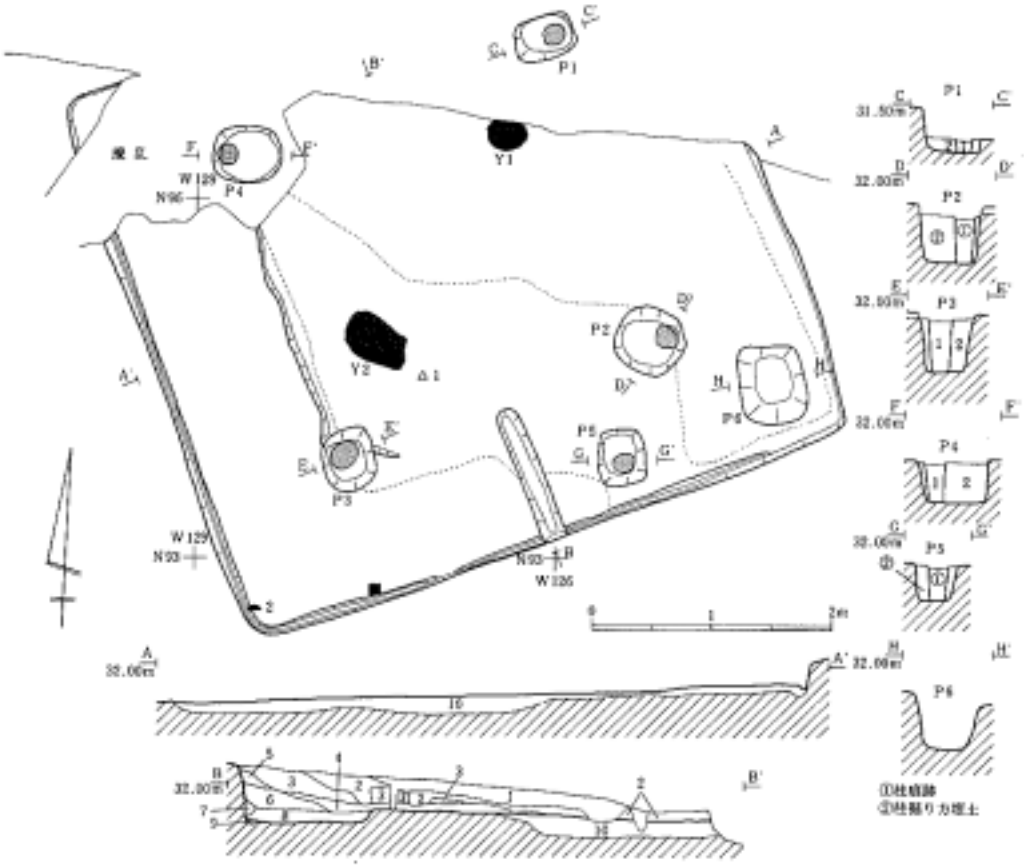
〔出土遺物〕堆積土1・2層から土師器高坏(第15図1)出土している。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。

☆6号住居跡

〔位置・確認面〕調査区北端の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕平面形は長方形を呈し、南辺は約5.2m、南辺は長さ約4.8mである。住居の北側五分の一ほどは削平によって失われている。

〔堆積土〕暗褐色もしくは黒褐色のシルト層が6層堆積し、1・2層はほぼ全面に、3〜6層

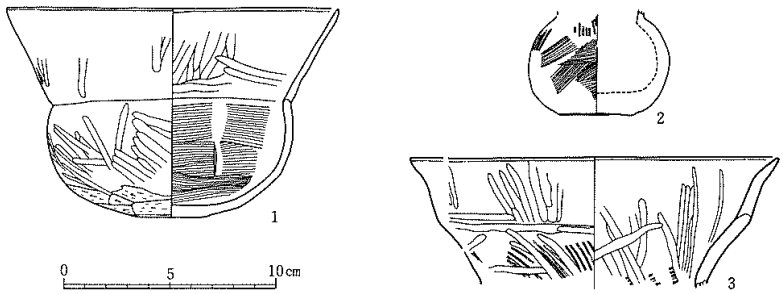


層No.	土色	土性	備考	
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	現耕土。	かたい
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	1層に比しやや明るい。粗面土と混われる。	
3	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロックを含む。かたい。	
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	ややもぬ質じる。地山粒混。	しまり少なく(6)は粘性、さらさらしている。
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	ややもぬ質じる。地山粒混。	
6	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	ややもぬ質じる。地山粒混。4層に近似。	
7	褐色(10YR4/4)	シルト	地山粒・土・ブロック多混。	埋没時堆積土
8	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。埋没時堆土。	
9	黒褐色(10YR3/2)	シルト	よごれた地山を含む。	
10	褐色(10YR4/6)	シルト	地山ブロックを多く含む。	住居跡埋り方埋土
P1 1	褐色(10YR4/4)	シルト	木炭粒を含む。	柱根跡
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒、及び若干の焼土・木炭を含む。土はしまりなくさらさらしている。	柱抜り方埋土
P3 1	褐色(10YR4/4)	シルト	炭を含む。	柱根跡
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山によごれの入ったもの。	柱抜り方埋土
P4 1	褐色(10YR4/4)	シルト	炭を含む。	柱根跡
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山によごれの入ったもの。	柱抜り方埋土

第16図　6号住居跡

は壁際に堆積している。いずれも自然堆積土である。

〔壁〕地山を壁としている壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存状態の良い南壁で高さ約40㎝である。



番号	層位	種別	分類	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版	登録
1	床	土師器坏	坏Ⅰ	(口) ヘラミガキ, (胴) ヘラミガキ, (胴下部) ヘラケズリ	(口) ヘラミガキ, (胴) ヘラケズ	暗褐	褐	9.9	(15.6)	3.2		10－7	6－1
2	床	土師器 ミニチュア		(胴) 刷毛目→ナデ, (底) 不明	不明	明黄褐	明黄褐			3.4		11－1	6－2
3	1～6	土師器壺	壺Ⅱb	(口) ヘラミガキ, (頸) 刷毛目→ヘラミガキ	(口) ヘラミガキ, (頸) 刷毛目→ヘラミガキ	明黄褐	明黄褐		(7.4)		有段口縁		6－3

第17図　6号住居跡出土土器

〔床面〕住居北西側から両壁東側にかけては地山を、それ以外の部分は住居掘り方埋土を床としている。床面はやや凹凸があり、北側に僅かに傾斜している。また主柱穴P3、P4を結ぶ線よりも外側が、壁際に沿って台床状に一段高くなっている。この台床状部分は掘り方埋土によって築かれており、その幅は約1m、高さは3～5cmである。

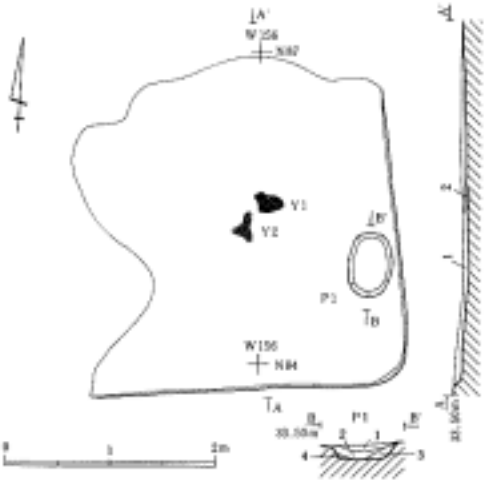
〔柱穴〕合計4個(P1～4)は、掘り方が長軸50～58㎝、短軸36～54㎝の長方形か楕円形を呈し、円形もしくは楕円形の柱痕跡が認められる。したがってこれらが主柱穴と考えられる。また後述する貯蔵穴状ピットと考えられるピットを取り囲むように、主柱穴(P2)のすぐ脇、壁際やや中央よりに掘り方が主柱穴よりもやや浅いピットが認められた(P5)。

〔周溝〕東壁から南壁の壁沿いに認められる。上幅5～12㎝、深さ3～6㎝、断面は「U」字状を呈する。

〔炉〕主柱穴P1およびP3のそれぞれの内側約50㎝の床面の東側に焼け面が認められた（Y1、Y2）。Y1は一部削平により不明であるが長径35㎝の楕円形、Y2は60㎝×38㎝の不整楕円形を呈する。いずれも表面は赤変し堅く締まり、断面では2㎝程下まで焼けが及んでいる。

〔貯蔵穴状ピット〕床面の南側隅に一個認められた。長方形を呈し、長軸65㎝、短軸54㎝深さは50㎝である。

〔出土遺物〕床面から土師器坏(第17図1)・ミニチュア(第17図2)が、堆積土から土師器壺(第17図3)が出土している。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。



層 No	土	色	土 性	備 考
1	褐	色(10YR4/6)	シ ル ト	地山の土をブロック状に全体へ含む。焼られずかに含む。
2	褐 褐	色(2.5YR3/4)	シ ル ト	焼け面
P1 3	褐	色(10YR4/6)	シ ル ト	炭がわずかに含まれる。
2	褐 褐	色(10YR3/4)	シ ル ト	10YR4/4 褐色の土をブロック状に含む。焼るわずかに含む。
3	褐	色(10YR4/6)	シ ル ト	10YR4/4 褐色の土をブロック状に含む。
4	褐 褐	色(10YR3/3)	シ ル ト	10YR3/4 褐色の土を若干ブロック状に含む。

第18図　7号住居跡

☆第７号住居跡

〔位置・確認面〕調査区北西側の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕当住居跡はかなり削平を受けており、南東コーナー付近が残存するのみである。したがって平面形は方形を基調とすると思われるものの、規模は不明であり、残存する部分でおよそ一辺3.0m程である。

〔堆積土〕褐色シルトの層が一層確認されたのみである。

〔壁〕残存する部分では地山を壁としており、床面から緩やかに立ち上がる。壁高は最も残りの良いところで５㎝程である。

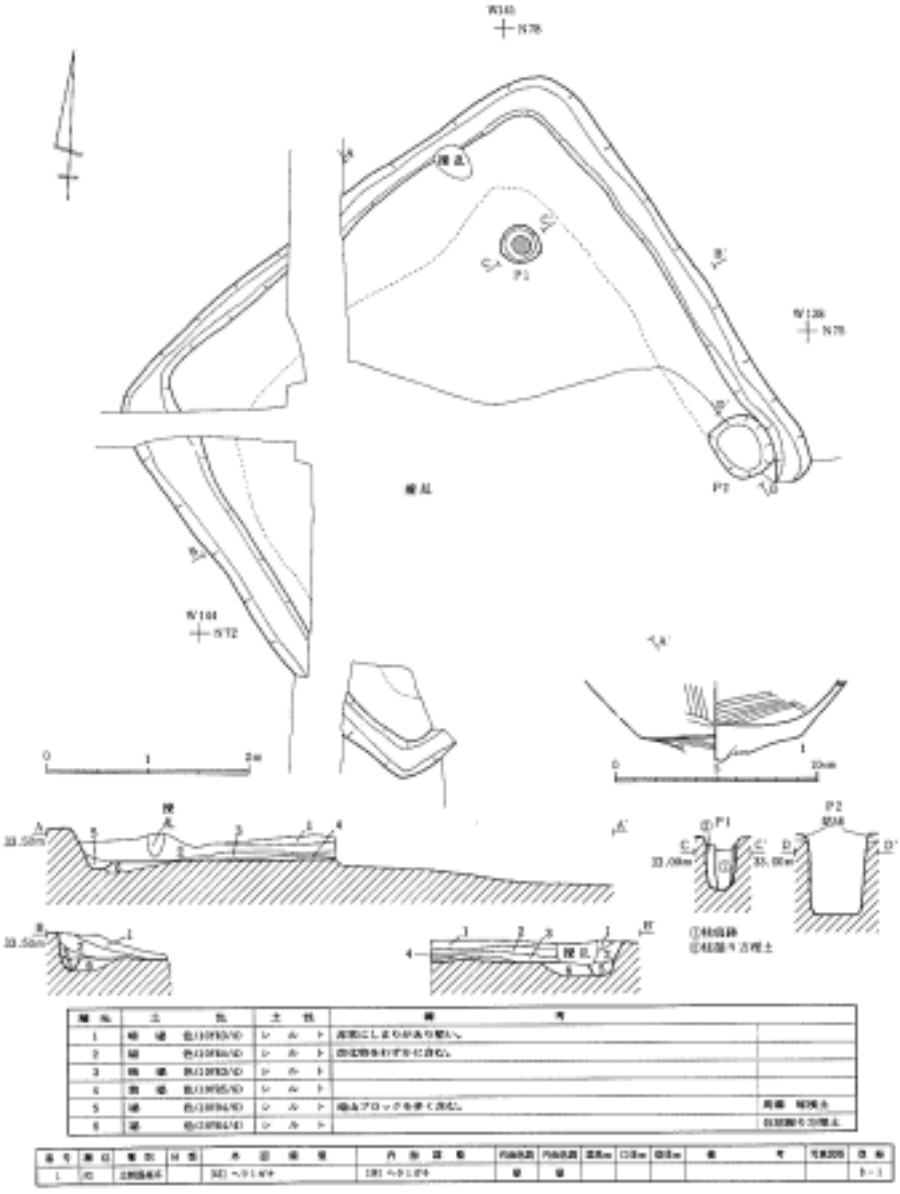
〔床面〕地山を床面とし、ほぼ平坦であるが北側に若干傾斜している。

〔柱穴〕柱穴と思われるピットは確認されなかった。

〔周溝〕確認されなかった。

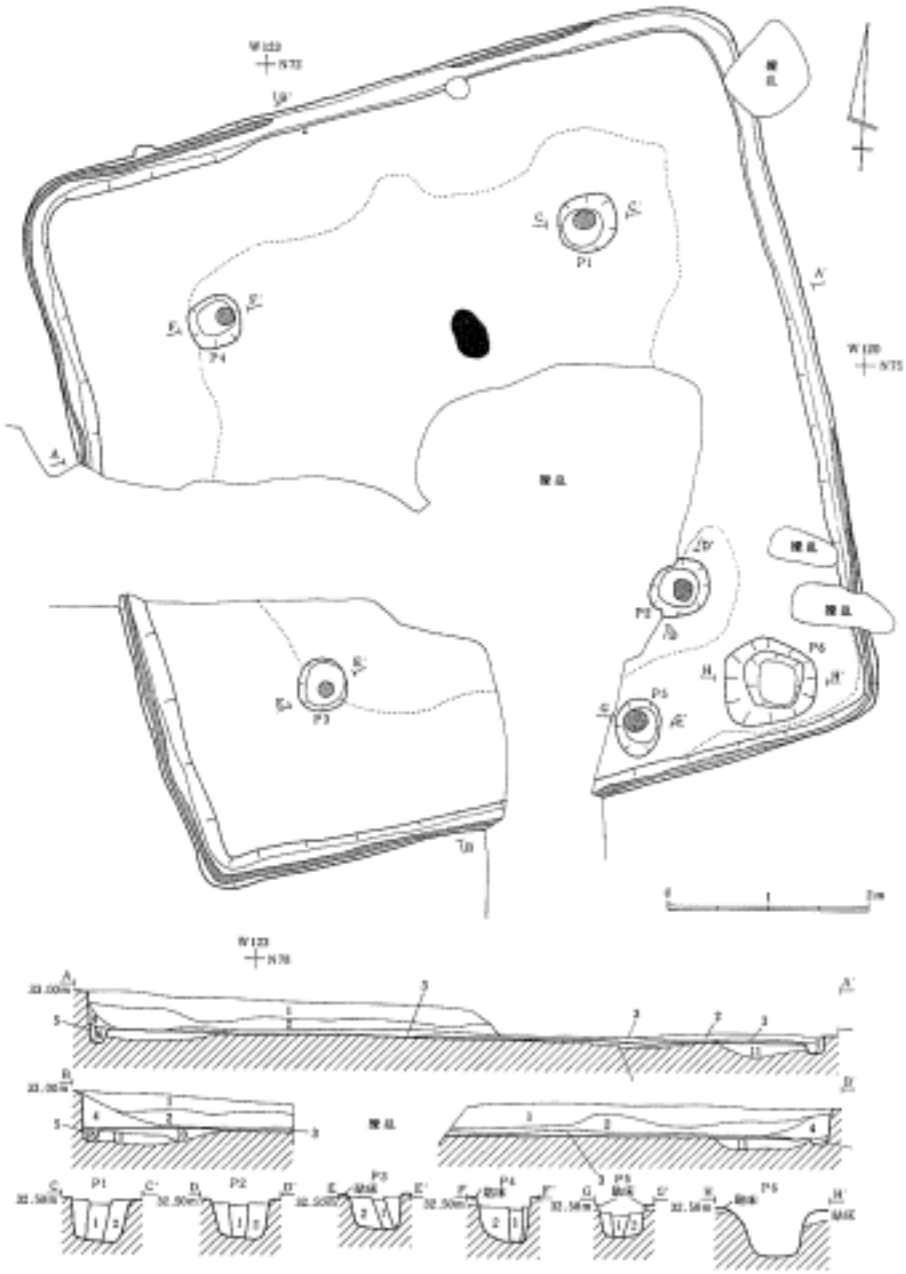
〔炉〕残存する床面のほぼ中央、おそらく当時の床面の南東側に、二箇所の焼け面が確認された(Y1、Y2)。形状はいずれも不整形で 30×20 ㎝の範囲が焼けている。いずれも表面は赤変し堅く締まり、断面では２～４㎝程下まで焼けが及んでいる。両者の間は10㎝も離れず、焼けの強弱により同一の面が、二つに別れて観察された可能性も考えられる。

〔貯蔵穴状ピット〕床面の南東隅で、長軸60㎝、短軸45㎝、深さ20㎝の楕円形を呈する貯蔵穴と考えられるピットを確認した。
〔出土遺物〕床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。
☆8号住居跡
〔位置・確認面〕調査区北側やや西よりの地山面で確認された。
〔平面形・規模〕住居の中央部や南東壁に攪乱を受けているが、他の部分の残存状況は比較的良い。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は北西壁で約5.6m、南西壁で約4.8mある。
〔堆積土〕四層に細分され、1・3層は暗褐色、2層は褐色、4層は黄褐色である。いずれもシルト質の自然堆積土である。
〔壁〕残存する部分では地山を壁としており、周溝底面からやや急激に立ち上がる。壁高は最も残りの良い北壁で約45㎝である。
〔床面〕床面の残存状態は良好ではなく、住居の壁際は掘り方埋土を、中央部は地山を床としている。残存する部分はほぼ平坦である。
〔柱穴〕床面北側のＰ1は、住居の平面形の対角線上に位置し、掘り方が直径約40㎝の円形で、深さが約50㎝、直径約20㎝の円形の柱痕跡が認められた。したがってこれが主柱穴と考えられるが、他の柱穴について攪乱のため検出できなかった。
〔周溝〕残存する壁の直下を全周する。これらの中で南西壁については、住居掘り方との境界が明確ではなく、本来的には周溝と掘り方は一体(同一)のものであった可能性もある。また、周溝の一部からは締まりのない黒色土の分布が認められた部分もあり、周溝もしくは住居掘り方全体が壁材の押さえのために掘られた可能性がある。規模は上幅20～60㎝、深さ2～12㎝、断面は逆台形状を呈する。
〔炉〕残存する床面からは検出されなかった。
〔貯蔵穴状ピット〕床面の南東隅に一個認められた(Ｐ2)。隅丸長方形を呈し、長軸60㎝、短軸50㎝、深さは70㎝である。
〔出土遺物〕Ｐ2堆積土から土師器高坏(第19図1)が出土している。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。
☆9号住居跡
〔位置・確認面〕調査区北側ほぼ中央付近の地山面で確認された。
〔平面形・規模〕住居の中央部や南壁、東壁に攪乱を受けているが、他の部分の残存状況は比較的良い。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約7.5mと当遺跡では最も大型である。
〔堆積土〕四層に細分された。1、2層は黒褐色～褐色の土で住居合面を覆い、3層は炭化物を含み床面を直接覆う薄い層である。4層は壁際に堆積する暗褐色土である。いずれも



第19図　8号住居跡と出土土器

シルト質の自然堆積土である。
〔壁〕地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は最も残りの良い南東隅付近で70㎝程ある。
〔床面〕住居の壁際は掘り方埋土を、中央部は地山を床としている。床面はほぼ平坦で、南東に向かって僅かに傾斜している。また主柱穴より内側の床面中央部と東辺の一部が堅く締まっている。
〔柱穴〕合計5個のピットが確認された。これらの中でも住居の対角線上に位置する4個(P1～4)は、掘り方が直径約50～60㎝の円形で、深さが約30㎝、直径約20㎝の円形の柱痕跡が認められた。したがってこれが主柱穴と考えられる。また後述する貯蔵穴状ピットと考えられるピットを取り囲むように、主柱穴(P2)のすぐ脇、壁際やや中央よりに掘り方が主柱穴よりもやや浅いピットが認められた(P5)。
〔周溝〕残存する壁の直下を全周する。これらの中で南壁、西壁の全面と北壁、東壁の一部から、壁材の痕跡と考えられる締まりのない黒色土の分布が認められた。周溝掘り方の断面は逆台形を呈し、規模は上幅20～30㎝、深さ3～15㎝である。
〔炉〕床面中央部北寄りの部分に、50×30㎝程の楕円形を呈する、非常に堅く焼けて締まった面が確認された。
〔貯蔵穴状ピット〕床面の南東隅に一個認められた(P6)。五角形を呈し、長軸100㎝、短軸90㎝、深さは50㎝である。
〔出土遺物〕P6堆積土から土師器坏(第21図1)が出土している。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。
☆10号住居跡
〔位置・確認面〕調査区ほぼ中央やや北側の地山面で確認された。
〔平固形・規模〕平面形はほぼ正方形を呈し、一辺約6.1m～6.2mである。
〔堆積土〕概ね褐色～暗褐色のシルト層が堆積するが、一部床面上には焼土、木炭層(5層)がみられる。褐色～暗褐色層は土色や混入物の違いから四枚の層に分かれ(1～4層)、その分布は1・2層が住居のほぼ全域、3層は住居中央、4層と黄褐色の6・7層は壁際にのみ認められた。いずれも自然堆積土である。
〔壁〕地山を壁としている。壁の高さは40㎝前後で、立ち上がりは急角度である。
〔床面〕住居中央部分は地山を、壁よりの部分は住居掘り方埋土を床としている。床面は概ね平坦で、壁よりに比べて中央からP5にかけての部分が堅く締まっている。
なお床面からは柱材とみられる炭化物や焼土および遺棄されたと思われる土器が多量に検出されていることから、当住居跡は火災に遭ったものと考えられる。



第20図　9号住居跡

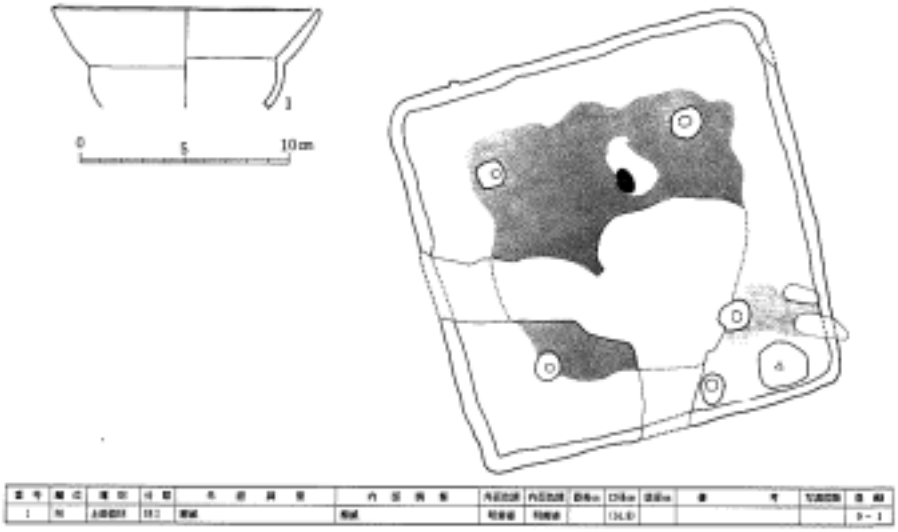
層 No.	土 色	土 性	備 考	
1	黒 褐 色(10YR3/2)	シ ル ト	パサパサしてしまりなし。	
2	褐 色(10YR4/4)	シ ル ト	1～5㎝大の地山ブロックを多く含む。	
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シ ル ト	炭化物を少し含む。やや粘性がつよい。	
4	暗 褐 色(10YR3/3)	シ ル ト	炭化物を少し含む。	
5	黒 褐 色(10YR3/2)	シ ル ト	しまりなし。	
6	黄 褐 色(10YR5/6)	シ ル ト	地山粒を多く含む。	周溝 堆積土
7	暗 褐 色(10YR3/3)	シ ル ト		
8	黄 褐 色(10YR5/6)	シ ル ト	地山粒を多く含む。	
9	褐 色(10YR4/4)	シ ル ト		
10	褐 色(10YR4/6)	シ ル ト	しまりあり。地山粒を主とし暗褐色土を少量含む。	住居掘り方埋土
11	暗 褐 色(10YR3/3)	シ ル ト	しまりあり。地山ブロックを多く含む。	
P1~5 1	暗 褐 色(10YR3/4)	粘土質シルト	しまりなし。地山粒を多く含む。焼土粒を含む。	柱痕跡
2	褐 色(10YR4/6)	粘土質シルト	しまりあり。地山ブロックを含む。	柱掘り方埋土

〔柱穴〕住居掘り方埋土の下から合計5個のピットが確認された。これらの中でも住居の平面形の対角線上に位置する4個(P1～4)は、掘り方が長軸50～80㎝、短軸44～64㎝の不整の長方形か楕円形を呈し、直径10～15㎝の円形もしくは楕円形の柱痕跡が認められる。したがってこれらが主柱穴と考えられる。また、主柱穴(P2)のすぐ脇、壁際やや中央よりに掘り方が主柱穴よりも浅いピットが認められた（P5）。

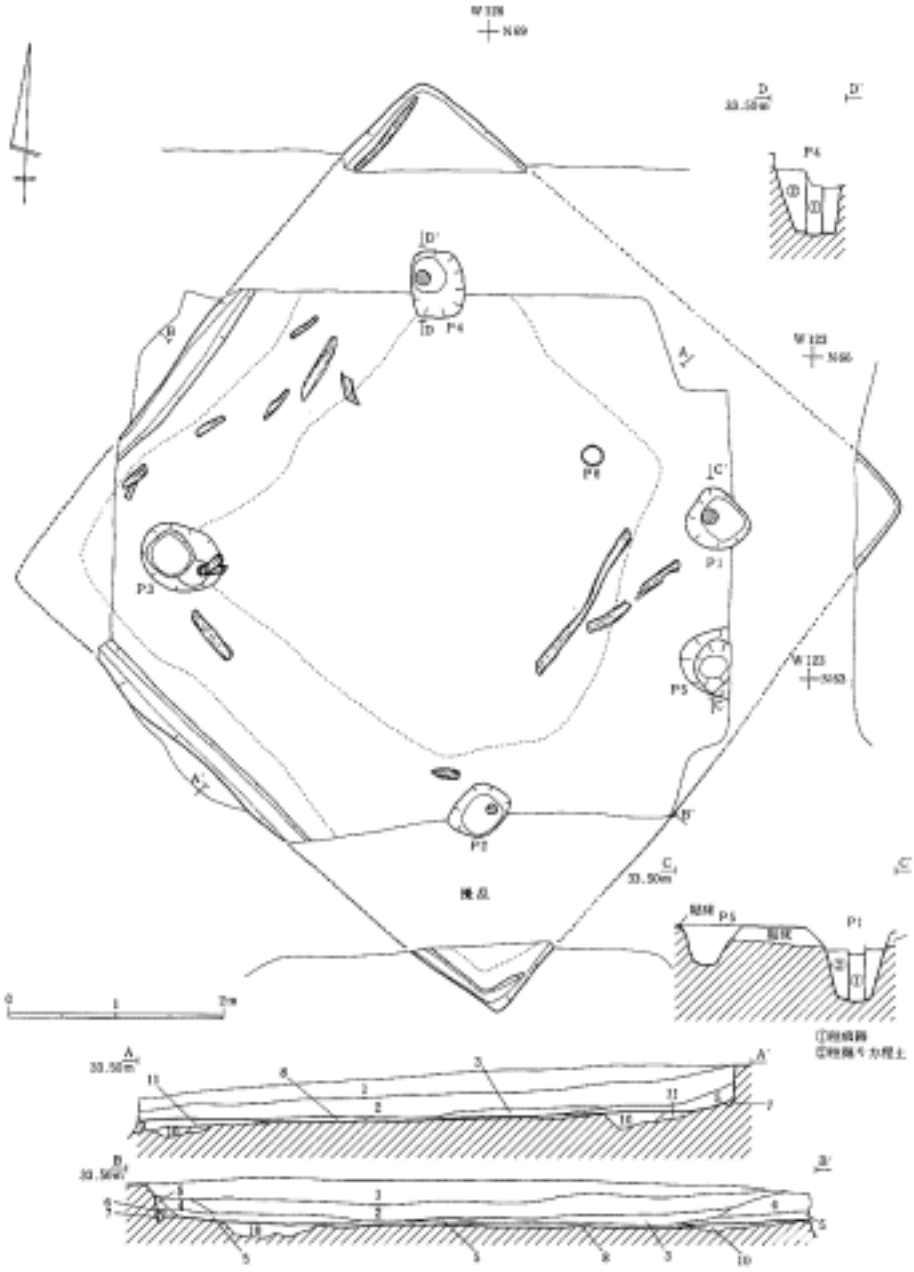
〔周溝〕残存する部分ではコーナーを除く各辺の壁際に巡る。上幅15～20㎝、深さ5㎝前、断面は「U」字状を呈する。

〔炉〕住居中央北寄りの部分で、堅く焼け締まり赤変した部分が検出された。範囲、形状は60～45㎝の楕円形である。断面では2～4㎝程下まで焼けが及んでいる。

〔出土遺物〕床面から土師器坏4点(第24図1・2・3・4)・壺2点(第24図5・6)・甕

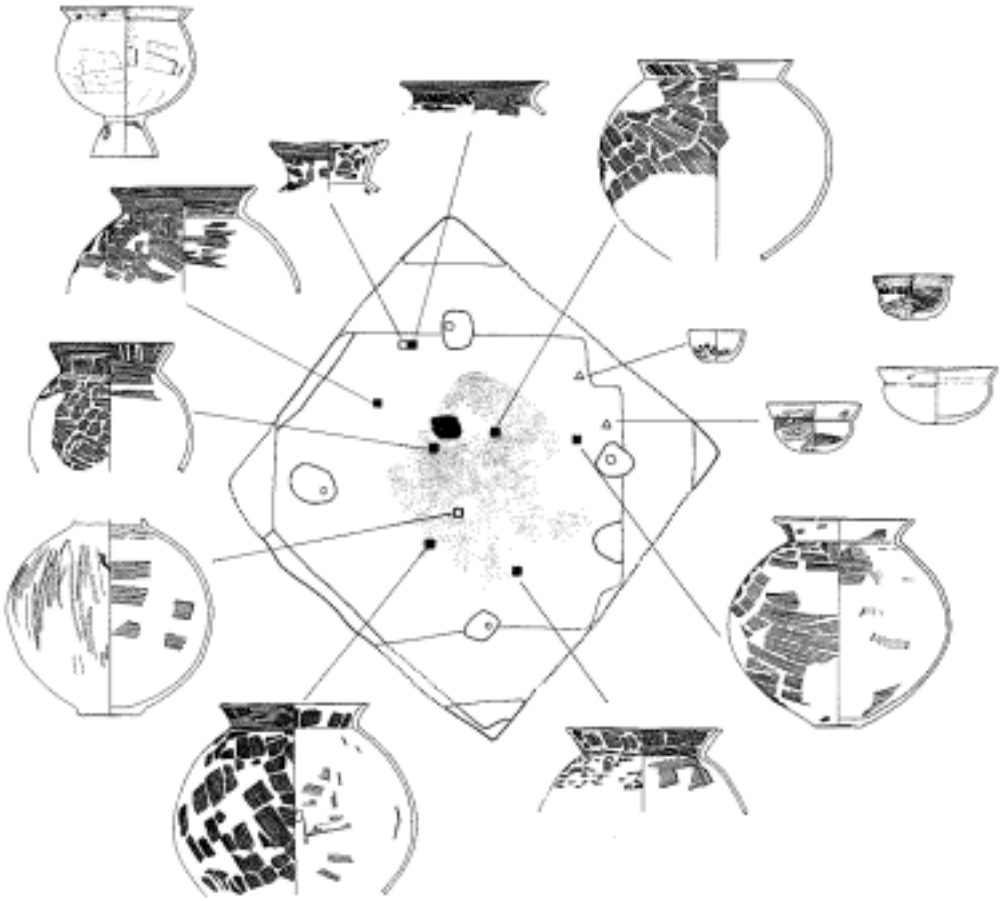


第21図　9号住居跡炉跡・床面の堅い範囲と出土土器



第22図　10号住居跡

層No.	土色	土性	備考		
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト			
2	褐色(10YR4/4)	シルト	地山を斑状に含む。		
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト			
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山を粒状に含む。		
5	暗赤褐色(5YR3/6)		焼土・木炭層。木材の上に焼土が堆積。		
6	黒褐色(10YR5/6)	シルト	植物層上。		
7	褐色(10YR4/6)	シルト			堆積　堆積土
8	黒褐色(10YR　)	シルト	かたくしまる。地山のよごれ。伝搬。		
9	(10YR　)		8層の小小斑褐色土が入り混じる。		
10	黒褐色(10YR　)	シルト	地山の土をブロック状に含む。	やわらかくしまりなし。	伝搬　張り方埋土
11	暗褐色(10YR　)	シルト			

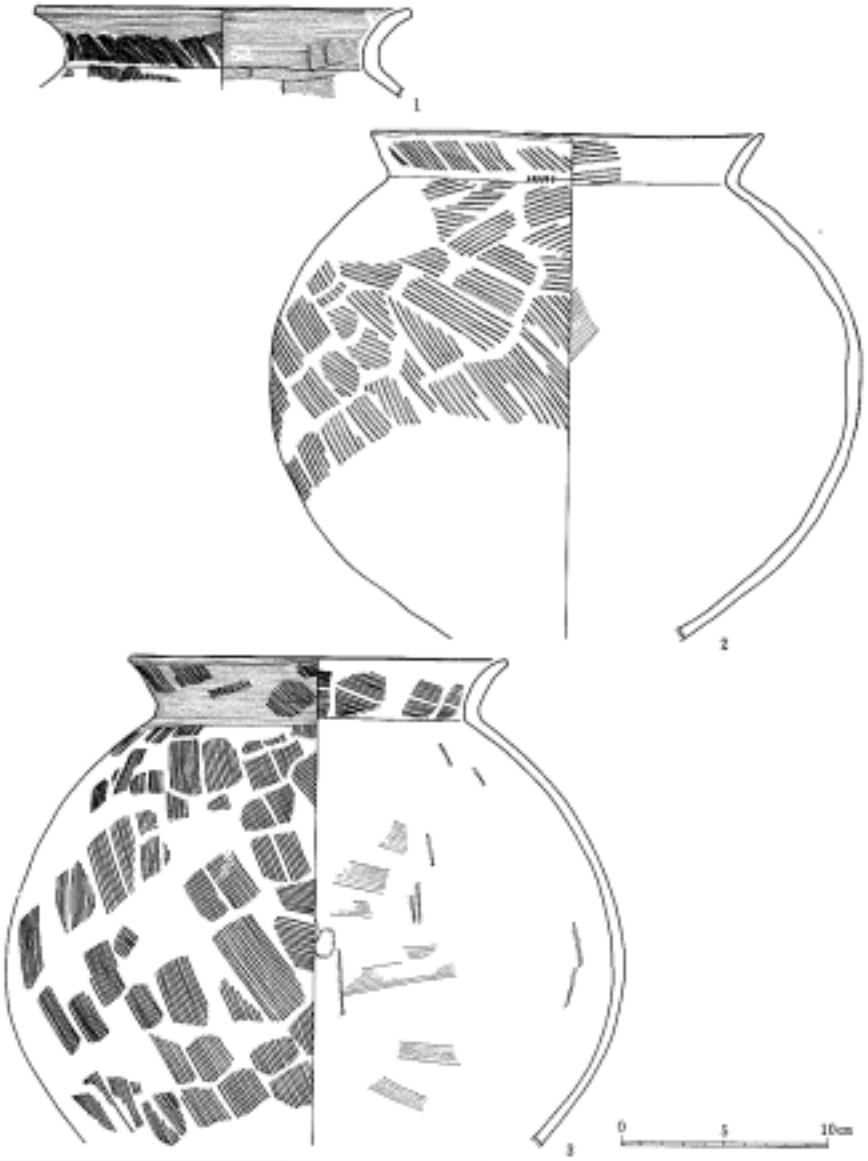


第23図　10号住居跡炉跡・床面の堅い範囲と遺物出土状況

8点(第24図7・第25図1・2・3・第26図1・2・3・4)が、堆積土2層から土師器坏(第26図5)が出土している。第26図6は、堆積土から出土した石皿状の砥石である。両面に磨面が認められ、左面は皿状にくぼみ、中央部がより滑らかである。下端が欠失しているが、扁平な自然礫を用いた石皿状の砥石では小型の部類である。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。

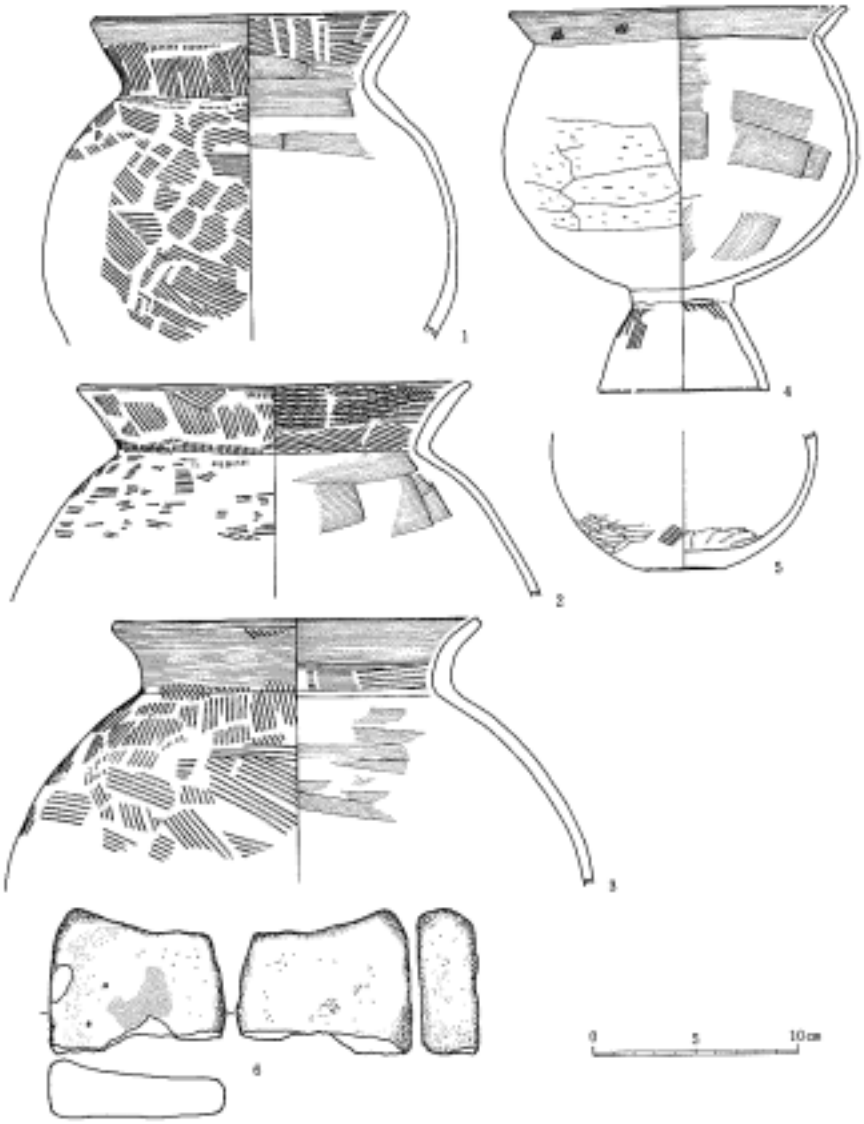
番号	種別	種類	器形	内面	内面調整	外面調整	内面色調	外面色調	胴径cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版	実測図
1	土	土師器甕	甕	(1)ヨコ→横ミガキ (2)横ナデ	横ナデ		明褐	明褐	7.2	14.8	3.7		図-2	10-12
2	土	土師器甕	甕	(1)ヨコ→ナデ、(2)ヨコ→横ミガキ→ナデ、(3)ヨコ→ナデ	(1)ヨコ→ナデ (2)ヨコ→ヘラナデ		明褐	明褐	6.1	11.6	3.2		図-3	10-6
3	土	土師器甕	甕	(1)横ミガキ→横ナデ、(2)横ミガキ→ヨコ→ナデ	(1)横ナデ、(2)横ナデ→ヨコ→ヘラナデ		明褐	黒褐	5.5	9.9	3.3		図-5	10-11
4	土	土師器甕	甕	横ミガキ	ヘラナデ		明黄褐	明黄褐	5.3	11.0	3.2		図-4	10-9
5	土	土師器鉢	鉢ヒ	(1)横ナデ、(2)横ミガキ (横ミガキ下ヨコミガキ)	(1)横ナデ (2)ヘラナデ		明黄褐	明黄褐		14.7		輪台付鉢	図-8	10-8
6	土	土師器甕		横ミガキ→ヘラミガキ	(1)ヨコ→ナデ (2)ヨコ→ナデ		赤褐	赤黄褐			6.1		図-7	10-2
7	土	土師器甕		横ミガキ	ヘラナデ		明黄褐	黒褐	25.6	27.6	6.6		図-1	10-10

第24図　10号住居跡出土土器



番号	層位	種別	分類	内面調整	内面調整	内面色調	内面色調	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版	番号
1	表	土師器		(口) 横ナデ→斜位	(口) 横ナデ (頸) ヘラナデ	明赤褐	明赤褐		15.4			図-2	10-14
2	表	土師器		斜位	(口) 横ナデ (頸) ヘラナデ	橙	明黄褐		15.5		黒斑が著しい		10-10
3	表	土師器		(口) 斜位→横ナ (頸) 斜位	(口) 横ナデ (頸) ヘラナデ	黄褐	黄褐		15.4			図-3	10-1

第25図　10号住居跡出土土器



番号	種別	器形	特徴	外面調整	内面調整	内面色調	胎土	底径cm	口径cm	最大径cm	備考	写真図版	番号
1	土	土師器		(口) 縦位→横ナデ (体) 縦位	(口) 横位→ハケ (体) ハケ	明赤褐	明赤褐	ヽ	15.8			11-1	21-2
2	土	土師器		(口) 横位 (体) 横位	(口) 横位 (体) ヘラナデ	明褐	明褐		16.4			11-2	21-11
3	土	土師器		(口) 縦位→横ナデ (体) 縦位	(口) 横位→横ナデ (体) ヘラナデ	明赤褐	明赤褐		16.6			11-3	21-1
4	土	土師器		(口) 横位→横ナデ (体) ハケ (底) 横位	(口) 横ナデ (体) ハケ (底) ハケ	橙	橙	6.3	16.4	8.4	底部外面に黒斑	11-5	21-17
5	土	土師器		(底下部) 縦位→ヘラ↓ (体)	(底) ナデ↓	明赤褐	明赤褐			3.8	内面	11-4	21-13

番号	遺土地点	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考	写真図版
6	埋	砥石	石	(7.2)	6.7	3.0	200	石英安山岩		27-2

第26図　10号住居跡出土遺物

☆11 号住居跡

〔位置・確認面〕調査区中央やや東側の地山面で確認された。

〔重複〕平面形と重複しており、これよりも新しい。

〔平面形・規模〕平面形はほぼ正方形を呈し、一辺約 6.6m～6.8mである。

〔堆積土〕住居中央部は概ね褐色～黒褐色のシルト層が堆積する(1～3 層)が、下層になるにつれて炭化物を含む割合が増すものの、多量に含むというものではない。これに対して壁際の床面上には焼土、炭化物層(5、10、11 層)や焼土、炭化物を多く含む層(4、6、8、9、12 層)がみられる。いずれも自然堆積土である。

〔壁〕地山を壁としている。壁の高さは最も残りの良いところで 25 ㎝、床面からやや急激に立上がる。

〔床面〕住居中央部分は地山を、壁よりの部分は住居掘り方埋土を床としている。床面は概ね平坦であるが、南東側がやや低くなっている。また壁寄り部分に比べて中央部分のやや南西寄りが堅く締まっている。

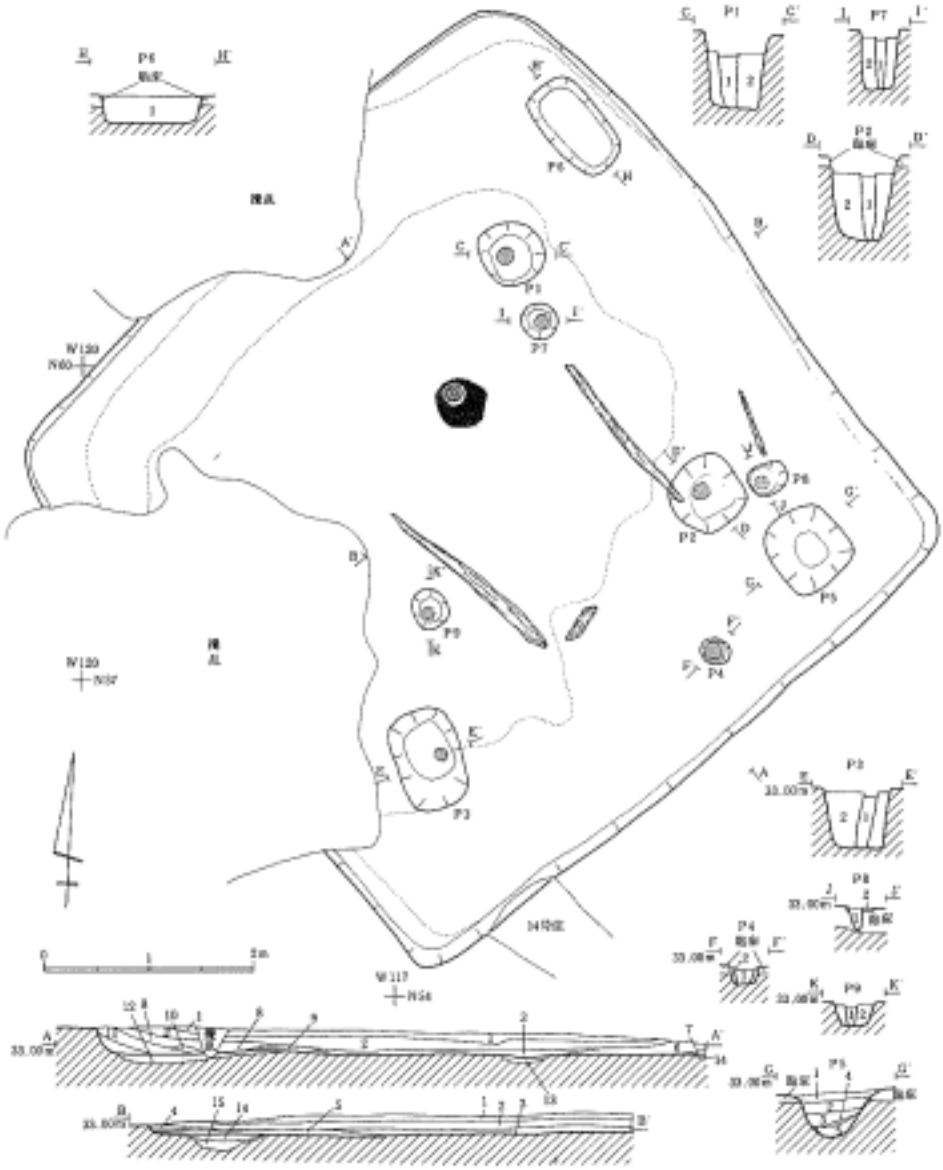
なお床面からは柱材とみられる炭化物や焼土、部分的には直径 3 ㎝程の斑点状の焼け面が確認され、さらに遺棄されたと思われる土器が多量に検出されていることから、当住居跡は火災に遭ったものと考えられる。

〔柱穴〕床面から合計 7 個のピットが確認された。いずれも柱痕跡が認められるが、これらの中でも住居の平面形の対角線上に位置する 3 個(P1～3)は、掘り方が 60～95 ㎝、深さも 60～75 ㎝と深く、長方形か不整の楕円形を呈する。したがってこれらが主柱穴と考えられる。また、後述する貯蔵穴状ピットと考えられるピットを取り囲むように、主柱穴(P2)のすぐ脇、南東壁際やや中央よりに掘り方が主柱穴よりも小型で浅いピット(P4)や各主柱穴のそばにもそれぞれ掘り方の小さいピットが認められた。

〔周溝〕検出されなかった。

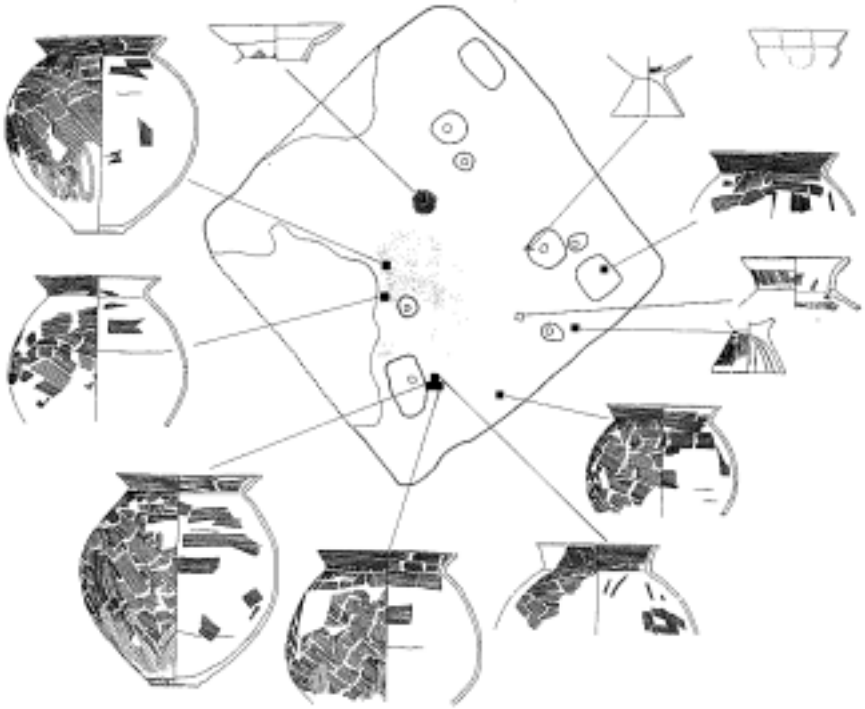
〔炉〕住居中央北寄りの部分で、堅く焼け締まり赤変した部分が検出され、その状況から炉と判断された。範囲、形状は45×45㎝の不整円形である。断面では7㎝程下まで焼けが及んでいる。焼け面の中央部には壺の口縁部が逆位に置かれていた(第29図3)。据え方は確認されなかったが、壺の口縁部は火熱を受けて赤変しており、炉の支脚として利用されたと理解できる。

〔貯蔵穴状ピット〕床面東隅と北隅にそれぞれ1個ずつ認められた(P5、 P6)。 P5は不整方形を呈し、70㎝×80㎝、深さ53㎝、底面近くの5層上面には面的に炭化物が認められ、4層にはブロック状の焼土が大量に含まれていた。また1層からは流れ込んだ状態で甕の(第31図1)が出土した。 P6は100㎝×60㎝、深さ40㎝、隅丸長方形を呈する。

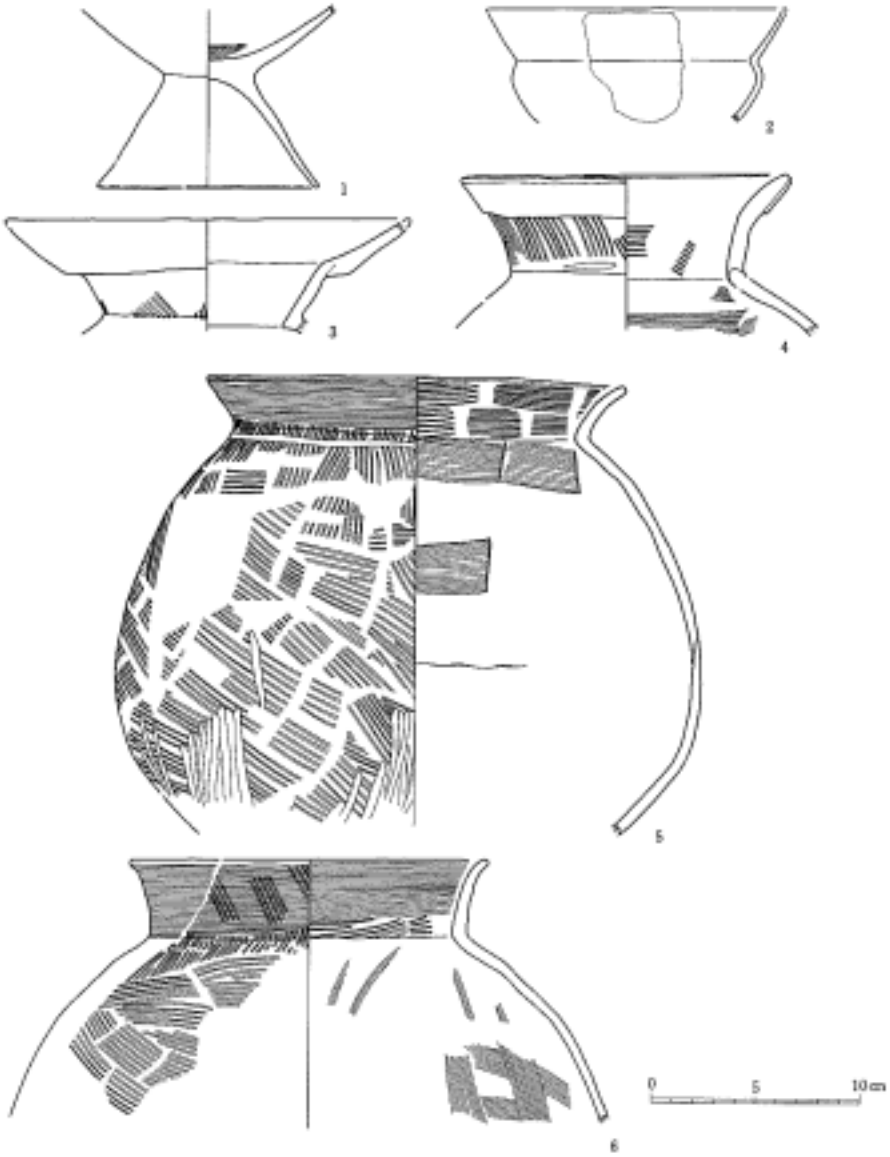


第27図　11号住居跡

層	No.	土色	土性	備考	
	1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山粒（明褐褐色10YR5/8）を全体に若干含む。	
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	ブロック状の地山土を全体に含む。炭も若干含む。	
	3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	2種の土・地山粒が全体に若干まじる。3層より炭を多く含む。	
	4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒・焼土粒・炭化粒を全体にふくむ。	
	5	褐色 (10YR4/4)	シルト	ブロック状の地山土を全体に含む。炭も多く含む。	
	6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒・焼土を微量に含む。炭も若干含む。	
	7	褐色 (10YR4/6)	シルト	炭・焼土を微量に含む。	
	8	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	炭・焼土・地山の粒を若干含む。	
	9	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	炭・焼土を全体に若干含む。	
	10	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	全体にブロック状の焼土（赤褐色5YR4/8）を大量に含む。	
	11	明褐色 (7.5YR5/4)	シルト	しまりのない炭・焼土が大量に堆積する。	
	12	明褐色 (10YR5/6)	シルト	ブロック状の地山土を全体に含む。焼土も若干含む。	
	13			焼け面。	炉
	14	褐色 (10YR4/6)	シルト	ややしまりあり。炭化粒・焼土粒・地山粒を含む。	炉床部や方形土
	15	明褐色 (10YR5/6)	シルト	ややしまりあり。地山粒を少量含む。	
P1	1	明褐色 (10YR5/4)	シルト	しまりなし。地山粒をブロック状に含む。	柱痕跡
	2	明褐色 (10YR5/4)	シルト		柱掘り方埋土
P2	1	明褐色 (10YR5/4)	シルト	しまりなし。炭を微量に含む。	柱痕跡
	2	褐色 (10YR4/4)	シルト		柱掘り方埋土
P3	1	褐色 (10YR4/4)	シルト		柱痕跡
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ややしまりなし。地山の土を全体に若干ブロック状に含む。	柱掘り方埋土
P4	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ややしまりあり。地山粒・炭化粒を含む。	柱痕跡
	2	褐色 (10YR4/4)	シルト	しまりあり。地山粒を多く含む。	柱掘り方埋土
P5	1	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	パサパサでしまりなし。地山粒を全体に含む。焼土・炭が若干混じる。	
	2	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	しまりなし。地山の土・1種の土をブロック状に含む。焼土・炭が若干混じる。	
	3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりなし。地山粒を全体に含む。焼土・炭が若干混じる。	
	4	暗赤褐色 (5YR3/2)	シルト	ブロック状の焼土（区層 5YR5/2）を大量に含む。	
	5	明褐色 (10YR5/3)	シルト	壁上部に炭を部分的に含む。	
P6	1	明褐色 (10YR5/3)	シルト		
P7	1	明褐色 (10YR5/3)	シルト	しまりなし。	柱痕跡
	2	明褐色 (10YR5/4)	シルト	ブロック状の地山の土を全体に含む。	柱掘り方埋土
P8	1	褐色 (10YR4/4)	シルト	光沢がとかる。	柱痕跡
	2	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒を全体に含む。炭も微量に含む。	柱掘り方埋土
P9	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	しまりなし。地山粒をわずかに含む。	柱痕跡
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ややしまりあり。ブロック状の地山の土を全体に含む。	柱掘り方埋土

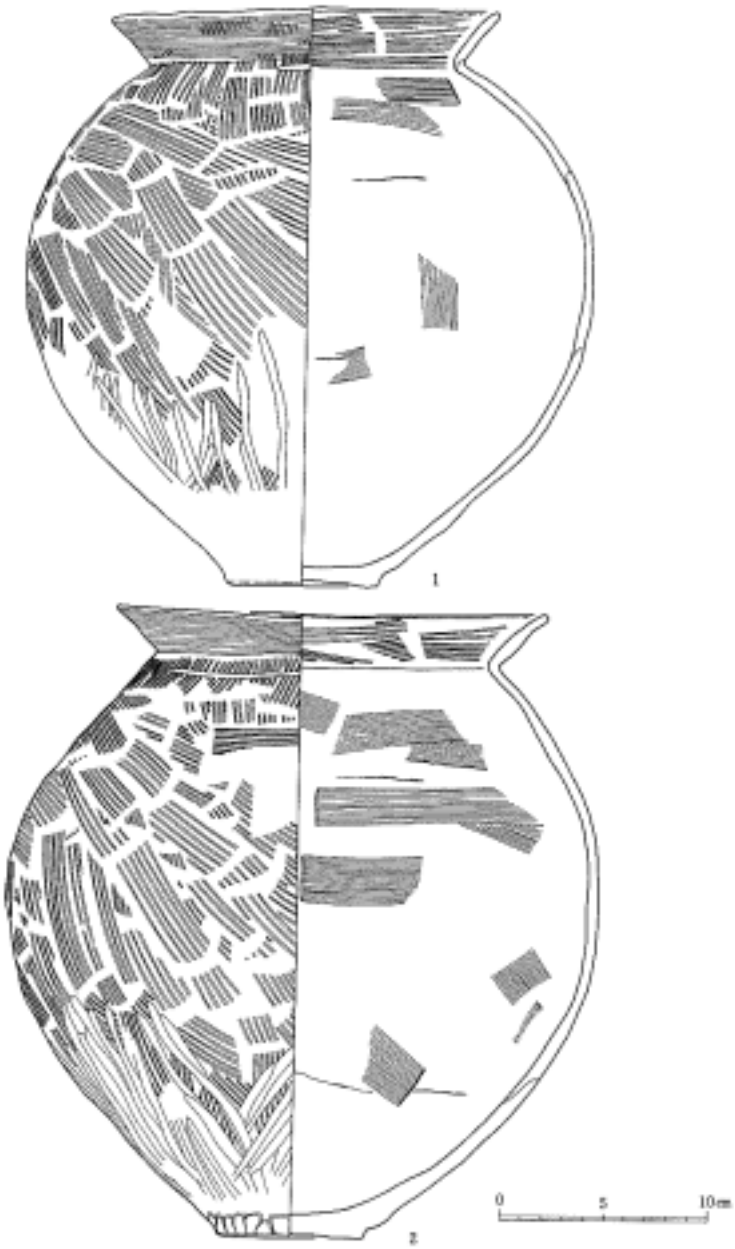


第28図　11号住居跡炉跡・床面の堅い範囲と遺物出土状況



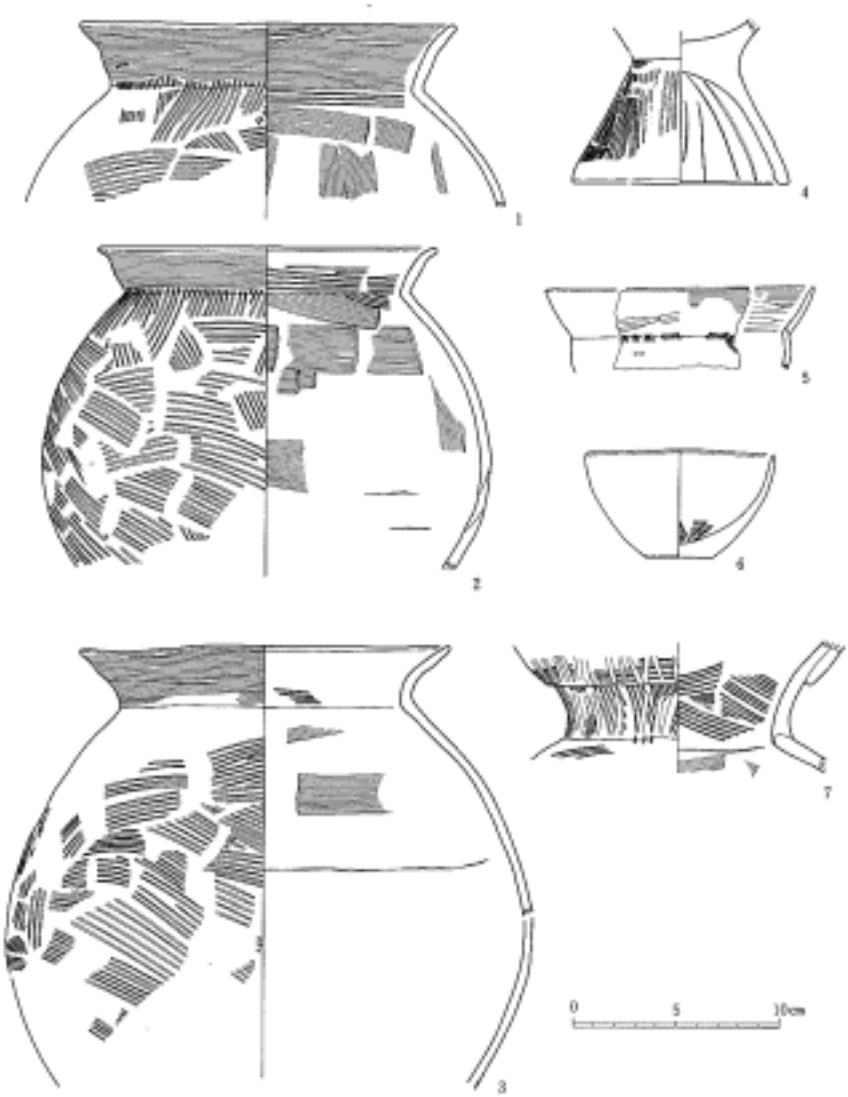
番号	種別	種類	法量	内面調整	内面調整	外面調整	外面調整	胎土	色調	色調	備考	写真図版	登録
1	壺	小型壺		横ナデ	[illegible]	[illegible]	[illegible]			11.5	内付5.5cm	11-6	E-1
2	高杯	土師器坏	19.1cm	[illegible]	横ナデ	横ナデ	横ナデ		13.5		赤彩		E-2
3	鉢	土師器皿	底2cm	(口)横ナデ (頸)横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ				平底の皿	11-7	E-3
4	高杯	土師器鉢	残1cm	(口)横ナデ (頸)横ナデ→ハケ目 (頸)横ナデ	(口・頸)横ナデ (頸)ハケ	平底鉢	平底鉢		8.3		強内反鉢	11-8	E-13
5	甕	土師器甕		(口)横ナデ (頸)横ナデ (一部横ケズリ)	(口)横ナデ (頸)ヘラナデ	平底甕	平底甕		20.4				E-4
6	甕	小型甕		(口)横ナデ→横ナデ (頸)横ナデ	(口)横ナデ→横ナデ (頸)ハケ	底	平底甕		17.3				E-5

第29図　11号住居跡出土土器



番号	種別	種類	分類	内容説明	内容説明	外面調整	内面調整	底部径cm	口径cm	器高cm	備考	写真図版	挿図
1	須	台付甕類	第1a	(口) 横位ヨコナデ (頸) 縦ヘラ (胴) 縦ヘラ、(胴下部) 横位ヨコナデ	(口) 横位ヨコナデ (頸) ヨコナデ	横位ヨコナデ	横位	16.1	15.9	5.2		34-1	11-2
2	須	台付甕類	第1a	(口) 横ナデ、(頸) 横位ヨコナデ (胴) 横位ヨコナデ (胴下部) 横位ヨコナデ、ヘラ状工具	(口) 横位ヨコナデ (頸) ヨコナデ	横位ヨコナデ	横位	16.4	16.7	7.0		34-2	11-3

第30図　11号住居跡出土土器



番号	種別	種別	分類	内面調整	内面調整	内面色調	内面色調	底径cm	口径cm	器高cm	備考	写真図版	図版
1	甕	土師器		(口) 縦ミガキ→横ナデ (胴) 縦刷毛	(口) 縦ミガキ→横ナデ (胴) 縦ミガキ→ハケ目→横ナデ	明褐色	明褐色		18.0				E-10
2	甕	土師器		(口) 横ナデ (胴) 縦刷毛	(口) 縦ミガキ (胴) ヘラナデ	赤褐	赤褐		18.0			B-1	E-7
3	甕	土師器		(口) 横ナデ (胴) 縦刷毛	(口) 縦ミガキ→不明 (胴部) 横ハケ (胴) ハケ	褐	明褐色		18.8			B-5	E-6
4	甕	土師器		(胴) 縦刷毛	(胴) ヘラCZ240度	赤褐	赤褐			11.4	赤灯(5.6cm)	B-2	E-8
5	鉢形土器	土師器?	4?	(口) 横ナデ→ハケ目 (体) 縦刷毛 (ハケ目残)	(口) 横ナデ→ヘラ1ボケ (胴) 不明	明褐色	明褐色		31.0				E-15
6	壺	土師器?	不明	横撫	ヘラナデ	明褐色	明褐色	5.1	8.1	3.3		B-3	E-14
7	壺	土師器	第11	(口) 縦ミガキ (頸) ハケ目 (胴) 縦ミガキ (頸) ハケ目 (胴) 縦刷毛	(口・頸) 横刷毛 (胴) ヘラナデ	明褐色	明褐色				強ヨコナデ	B-4	E-13

第31図　11号住居跡出土土器

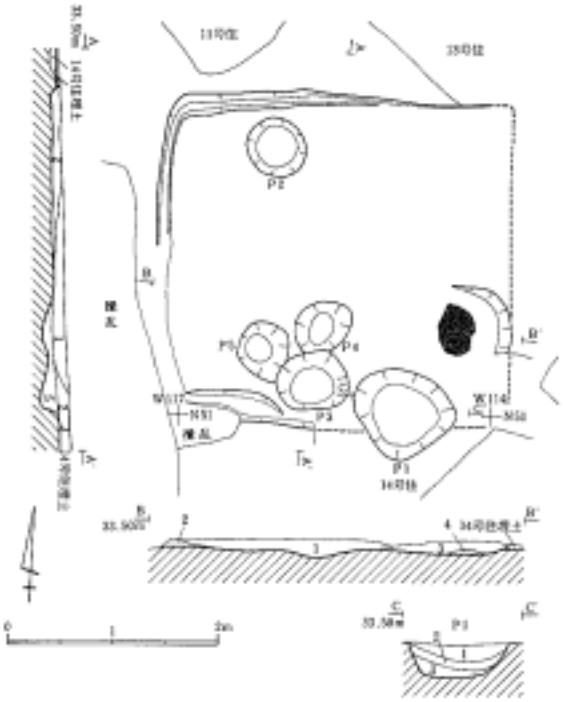
〔出土遺物〕床面から土師器壺(第29図3)・甕が8点(第29図1・5・6・第30図1・2・第31図2・3・4)が、床面直上から土師器坏(第29図2)・壺(第29図4)が、P5堆積土1層から土師器甕(第31図7)が出土している。堆積土2層からは土師器坏(第31図6)、3層からは土師器壺(第31図7)が、掘り方埋土からは土師器坏(第31図5)が出土している。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。

☆12号住居跡

〔位置・確認面〕調査区中央やや東側の地山面で確認された。

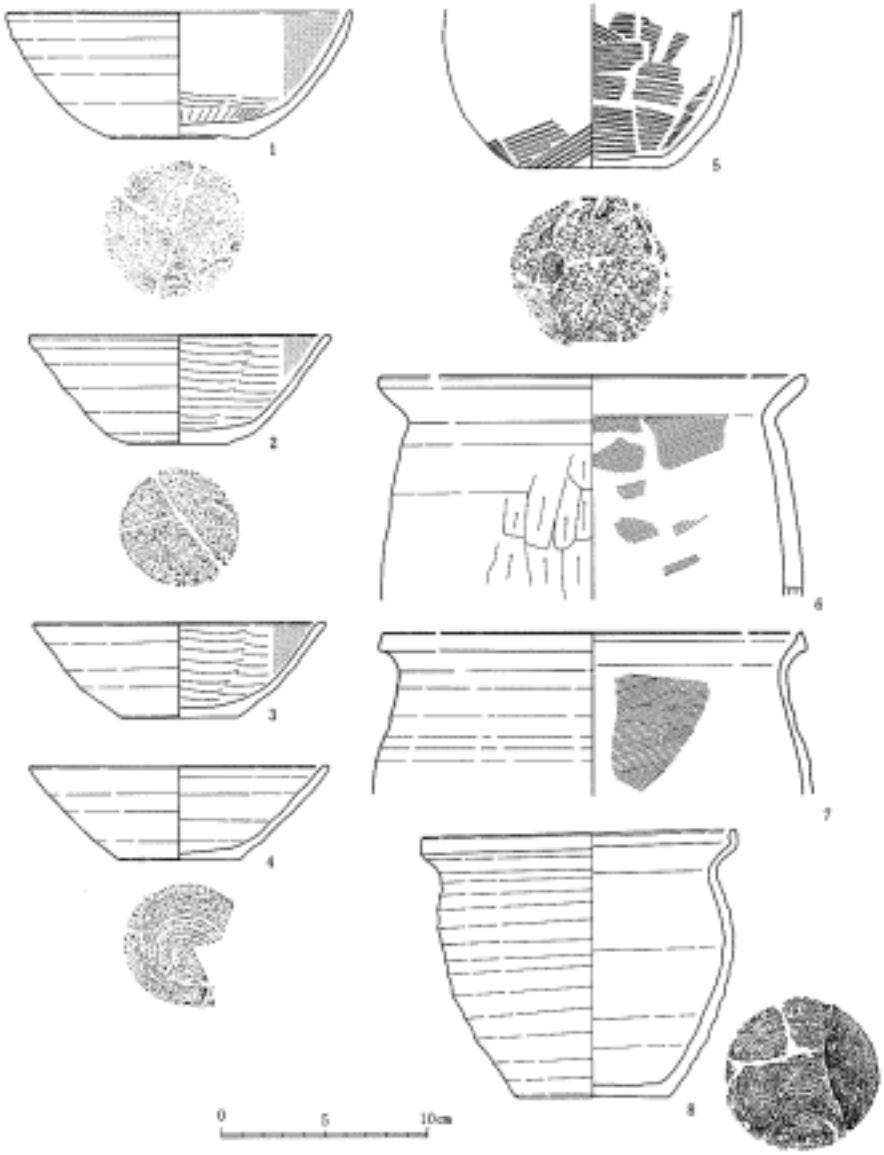
〔重複〕13・14号住居跡と重複しており、これらよりも新しい。

〔平面形・規模〕方形を基調とするもので、規模は削平によって失われている部分が多く明



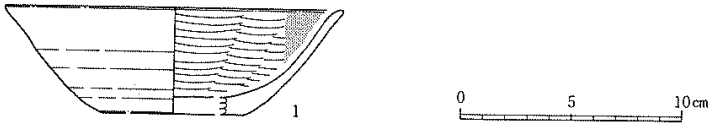
		土色	土性	備考
	1	明褐色(10YR5/3)	シルト	ブロック状の黄白色火山灰を含む。
	2	明褐色(10YR5/3)	シルト	火山灰は含まない。
	3	明赤褐色(5YR5/6)	シルト	1層の土を含む。
	4	明赤褐色(5YR5/6)	シルト	焼け面。
	5	明赤褐色(5YR5/6)	シルト	1層の土を含む。
P5	1	明褐色(10YR5/3)	シルト	
	2	明赤褐色(10YR5/6)	シルト	粘土を含む。土質は1層に同じ。
	3	明褐色(10YR5/3)	シルト	若干炭化物を含む。

第32図　12号住居跡



番号	層位	種別	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調	内面色調	口径cm	底径cm	器高cm	備考	写真図版	実測
1	ロ7ア	土師器甕	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切り	橙	黒	6.2	6.8	5.0		31-1	32-2
2	P1	土師器坏	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切り	明橙	黒	6.0	6.2	5.7		31-2	32-6
3	P1	土師器坏	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切り	黄白橙	黒	5.3	6.5	4.8		31-3	32-7
4	P1	須恵器坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	暗灰	暗灰	6.0	6.5	5.8		31-4	32-5
5	ロ7ア	土師器甕	頸部下部 櫛先圧	櫛先圧	1号1 ロ1.5/底 2号1 ロ7ヤス	明橙	明橙			7.0		31-5	32-3
6	ロ7ア	土師器甕	口1 ハケ、頸 ハケ→ロ7	口1 ロ7、頸 ハケ→ロ7		明橙	明橙		29.0				32-8
7	P1	土師器甕	ロクロナデ	ロクロナデ→ヘラケズリ		黄白	黄白		32.4				32-9
8	P1	土師器甕	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	明黄橙	明黄橙	23.0	15.40	7.4		31-6	32-3

第33図　12号住居跡出土土器



番号	層位	種別	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調	内面色調	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版	登録
1	1層	土師器坏	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切り	赤褐	黒	4.8	15.4	6.4			12－1

第34図　12号住居跡出土土器

確ではないが、残存部分から長軸3.4m、短軸3.2mと推定される。

〔堆積土〕概ね暗褐色のシルト層で混入物の違いから三枚の層に分かれる。1層は住居中央に、2層は西、北、南壁よりに、3層は東壁よりに分布する。いずれも自然堆積土である。

〔壁〕北壁と西壁の北より、南壁の一部が残存しており、いずれも14号住居跡堆積土を壁としている。残存高は約10cmで、立ち上がりは緩やかである。

〔床面〕東辺中央部分では13号住居跡堆積土を、北辺東寄りの部分では14号住居跡堆積土を、他は地山を床としている。床面はほぼ平坦で、全面が堅く締まっている。

〔柱穴〕床面から合計5個のピットが確認されたが、柱穴と考えられるものはない。

〔周溝〕北壁の西半と南壁の一部で検出された。上幅15cm前後、深さは4～5cmで、断面は「U」字状を呈する。

〔カマド〕東辺に付設されているが遺存状況は悪く、天井部や側壁は失われている。底面は50×40cmの範囲で焼けている。

〔貯蔵穴状ピット〕南辺東寄り、カマドの右脇で検出された。長軸約1mの不整円形を呈するもので、一部は南壁推定線から30cm程外側に張り出している。堆積土の下位には炭化物や焼土を含んでおり、底面からは土師器坏二個体、甕一個体、須恵器坏一個体が出土した。

〔出土遺物〕カマド崩落土から土師器坏(第33図1)・甕（33図5）が、P1堆積土から土師器坏が2点(第33図2・3)・甕が2点(第33図6・7)・須恵器坏(第33図4)が、P2堆積土からは土師器坏（33図8）が出土している。堆積土1層からは土師器坏（33図4）が出土している。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。

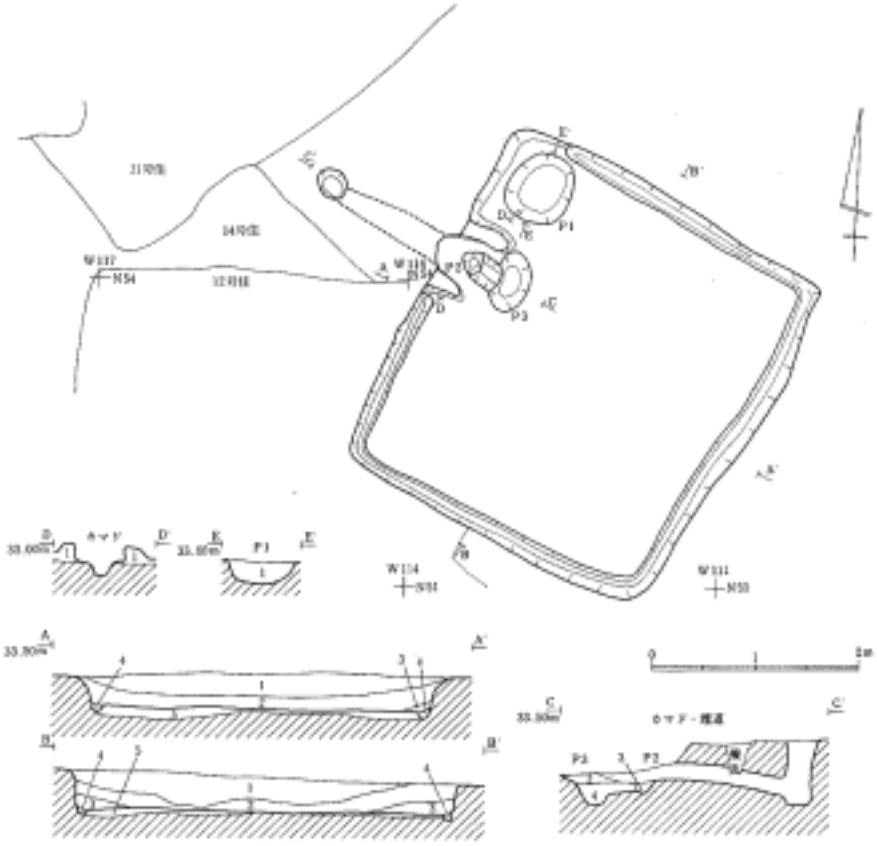
☆13号住居跡

〔位置・確認面〕調査区中央やや東側の地山面で確認された。

〔重複〕12・14号住居跡と重複しており、12号住居跡よりも古く、14号住居跡よりも新しい。

〔平面形・規模〕方形を基調としており、規模は長軸3.8m、短軸3.5mである。

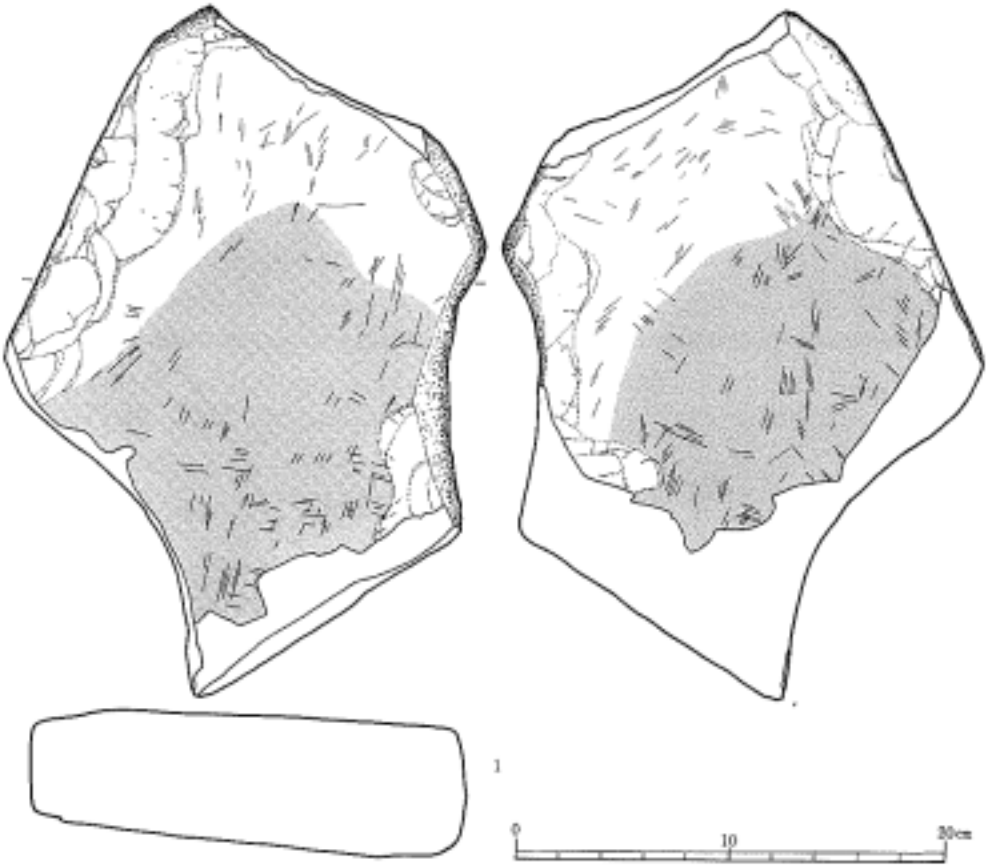
〔堆積土〕褐色～暗褐色のシルト属で、若干の土色の違いから三枚の層に分かれる。1層は



層位	土色	土性	備考	
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山起を若干含む。	
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山起を含む。	
3	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山起を多く含む。	
4	褐色 (10YR4/6)	シルト	周溝埋土。	周溝埋土
5	褐色 (10YR4/4)	シルト	10YR3/3 シルトを含む。	住居掘り方埋土
10YR 煙道1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト		
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土粒	
3	褐色 (10YR4/4)	シルト		
4			3層に近似するが中が明るい。	
カマド 1	褐色 (10YR4/4)	シルト	10YR3/3 暗褐色シルトを若干含む。	
P1 1	褐色 (7.5YR4/4)			

番号	番位	種別	内容器種	内容器量	内面色調	内面色調	器厚cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版	図版
1	P1	土師器甕	ハケ目	ハケ目カキ→横位ミガキ	明褐色	黒		(11.0)				13-1
2	煙道	土師器甕	10YR4/4 カマド 煙道	横位	淡色	橙		(14.0)				13-2

第35図　13号住居跡と出土土器



番号	出土地点	種	類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石	材	備	考	写真図版
1	縁	縦形（芯棒状）		(32.5)	(25.5)	5.8		石英安山岩				PT-4

第36図　13号住居跡出土石器

住居中央にレンズ状に堆積し、2層は住居全域で特に壁際に厚く、3層は壁際にのみ堆積している。いずれも自然堆積土である。

〔壁〕各辺とも地山を壁としている。残存高は約30～40cmで、立上がりは垂直に近い。

〔床面〕ほぼ全面で住居掘り方埋土を床としている。床面は平坦でやや締まりがない。

〔柱穴〕柱穴と確認されたものはない。

〔周溝〕カマド、貯蔵穴状ピット付近を除く各辺の壁際を巡る。上幅10～15cm、深さは10cm前後で、断面は「U」字状を呈する。

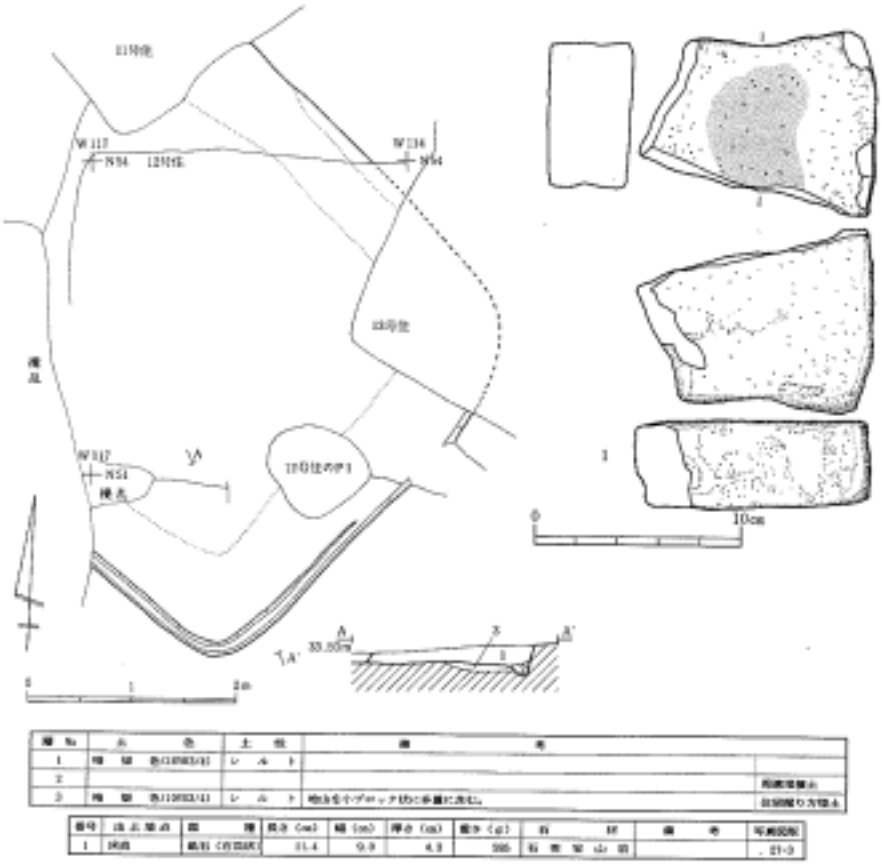
〔カマド〕北西辺中央のやや北よりの部分に付設されている。燃焼部は天井部が失われ、側壁が残存している。燃焼部内の規模は45㎝、奥行きは明確ではないが残存側壁から60㎝以上とみられる。底面中央では支脚の据え穴と思われるピットが検出された。側壁は褐色の地山土を貼り付けて構築されている。煙道は地山を横に筒状に掘り抜いたもので、燃焼部底面から段差なく外側へ1mほど延びる。先端には直径約30㎝、深さは約60㎝で煙出しピットが穿たれている。
〔貯蔵穴状ピット〕カマドの右隣において検出され、直径約70㎝の円形を呈する。深さは約20㎝で、底面近くには焼土、炭化物層が堆積している。
〔出土遺物〕 P1堆積土から土師器坏(第35図1)が、堆積土2層からは土師器甕（35図2）が出土している。第36図1は床面から出土した石皿状の砥石である。両面に擦痕や磨面が認められる。またほぼ全面に火熱を受け、赤変や割れ面が認められる。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。

☆14号住居跡

〔位置・確認面〕調査区中央やや東側の地山面で確認された。
〔重複〕11、12、13号住居跡と重複しており、そのいずれよりも古い。
〔平面形・規模〕平面形は方形を基調とする。規模は遺構の重複や近年の攪乱で削り取られた部分が多く明確ではないが、壁や床の残存部分から、長軸4.8m以上、短軸4.5mと推定される。
〔堆積土〕壁周辺に暗褐色のシルト層が分布するのが確認されたが、住居全体の層相は不明である。
〔壁〕地山を壁としている。残存高は20㎝前後で、立上がりは急角度である。
〔床面〕住居中央寄りの部分は地山を、壁寄りの部分は住居掘り方埋土を床としており、いずれも堅く締まっている。
〔柱穴〕柱穴と考えられるものはない。
〔周溝〕南東辺～南西辺の壁際で確認された。上幅15㎝前後、深さは約10㎝で、断面は「U」字状を呈する。
〔出土遺物〕第37図1は、床面直上から出土した石皿状の砥石である。両面に磨面が認められ、上図中央部がより滑らかである。これらの他、堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。

☆15号往居跡

〔位置・確認面〕調査区南東側の地山面で確認された。
〔平面形・規模〕平面形は不整の長方形もしくは台形を呈し、北辺、西辺は長さ約4.8m、



第37図　14号住居跡と出土石器

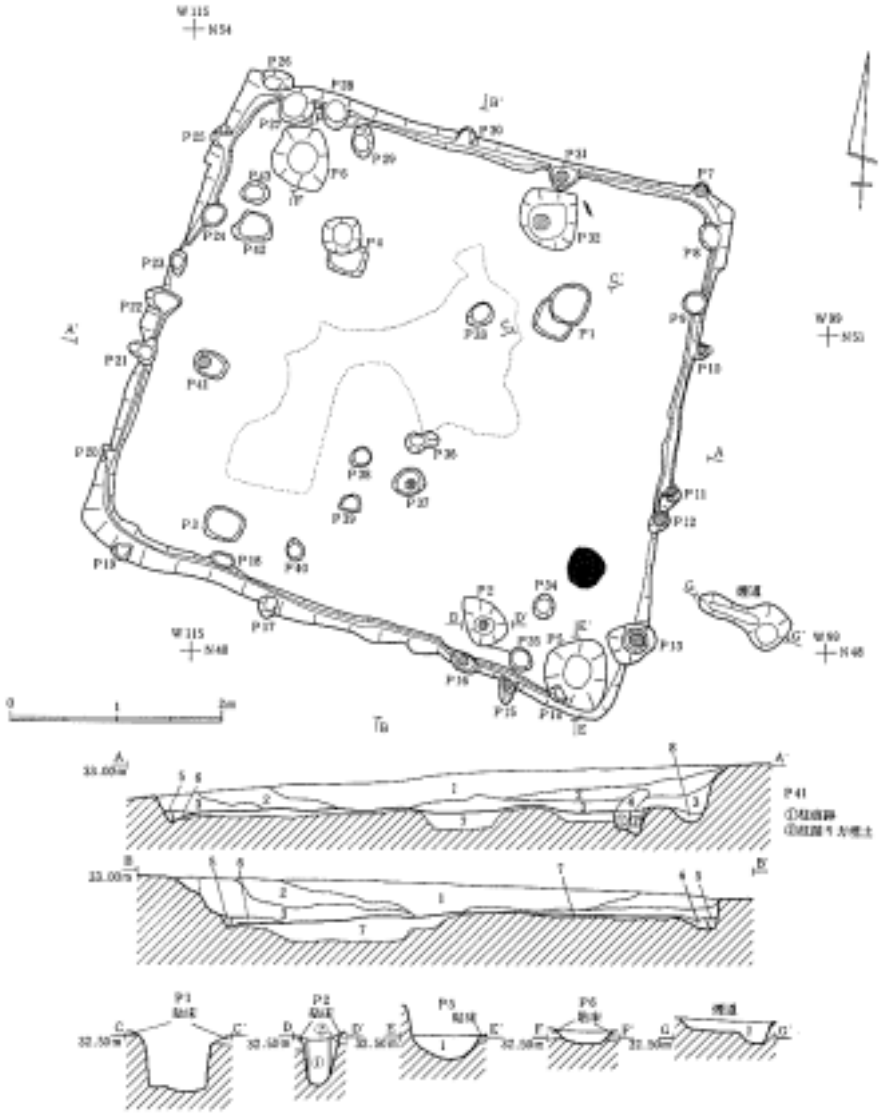
東辺は約5.1m,南辺は約5.3mである。

〔堆積土〕暗褐色もしくは黒褐色のシルト層が三層堆積し、1層はほぼ全面に、2、3層は壁際に堆積している。2層の上面では、僅かながら灰白色火山灰がブロック状に認められた。

〔壁〕地山を壁としている。傾斜をもち、上方に向かって開くように立ち上がる。壁の高さは最も深い南西隅で55cmである。

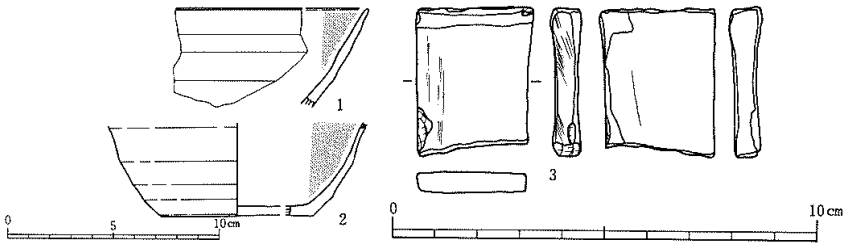
〔床面〕住居中央部分は地山を、壁寄りの部分は住居掘り方埋土を床としている。やや凹凸があり、壁寄り部分に比べて中央部分は堅くしまっている。

〔柱穴〕床面で25個、壁際で18個の合計43個のピットが確認された。これらの中でも大きく



層	土	色	土	性	備	考
1	黒 褐	色(7.5YR3/2)	シ ル ト		無土粒やや多く含む。下面に区画整大山況ならしまれた ブロック状に含む。	
2	暗 褐	色(7.5YR3/3)	シ ル ト		無土粒・炭化物多く含む。	
3	黒 褐	色(7.5YR3/2)	シ ル ト		無土粒・炭化物多く含む。地山土も下部にやや多く含む。	
4	褐	色(7.5YR4/4)	シ ル ト		暗褐色土と地山の土がブロック状に混ざりあったもの。	住の小ふれの崩下
5	暗 褐	色(7.5YR3/3)	シ ル ト			柱材痕跡
6	褐	色(7.5YR4/4)	シ ル ト		暗褐色土と地山の土がブロック状に混ざりあったもの。	周溝埋積土
7	暗 褐	色(10YR3/3)	シ ル ト		焼土・炭化物・地山粒多く含む。	住居崩り方埋土
8	暗 褐	色(10YR3/3)			炭化物・焼土粒・地山粒を含む。やや しまりあり。	柱根穴
P5 1	暗 褐	色(7.5YR3/4)	シ ル ト		焼土・炭化物・地山粒多く含む。	
煙道 1	暗 褐	色(7.5YR3/3)	シ ル ト		ややかたい。焼土・炭化物・地山粒多く含む。	

第38図　15号住居跡



番号	層位	種別	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調	内面色調	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版	登録
1	P5	土師器坏	ロクロナデ	(ヘラミガキ)→黒色処理		明黄褐	黒						15－1
2	P5	土師器坏	ロクロナデ	(ヘラミガキ)→黒色処理	摩滅	明黄褐	黒						15－2

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	写真図版
3	床	砥石	3.6	2.8	0.8	10	珪化凝灰岩		26-14

第39図　15号住居跡出土遺物

(長軸40cm前後)、深い（40～55cm）ものが主柱穴と考えられる(P1～P4)。4個の配置は住居の輪郭と対応するが、南側の2個(P2、P3)は壁に近く、全体的に南に偏っている。P2では楕円形の柱痕跡が認められた。壁際のピットは壁柱穴と考えられる。西壁と東壁では中央部にそれぞれ3本、2本、南壁でも東側に2本がいずれも近接して配置され、そのほかはほぼ等間隔で配置されている。

〔周溝〕東壁の南側を除く垂直下に認められる。上幅12～20cm、下幅2～8cm、深さ3～7cmであるが、南辺は他の部分よりも細く上幅6～8cm、下幅2～4cmである。断面は「U」状を呈する。またこの内側2～20cmの床面では住居掘り方埋土を切った状態の周溝掘り方が確認された。

〔カマド〕カマド本体は検出できなかったが、床面南東隅で40cm×36cmの楕円形の焼け面が認められ、住居東壁の外側には、焼土や炭化物を多く含む土の堆積した、長さ約50cmの煙道と直径約40cmの煙出しピットが認められる。またこの東壁の南寄りの部分では周溝も切れており、この位置にカマドがあったものと推定される。

〔貯蔵穴状ピット〕床面北西隅と南東隅の対称的な位置にそれぞれ1個ずつ認められる。いずれも不整楕円形を呈し、南東隅のピットは70cm×58cm、深さ26cmと大きく、北西隅のピットは66cm×58cm、深さ14cmと小振りである。

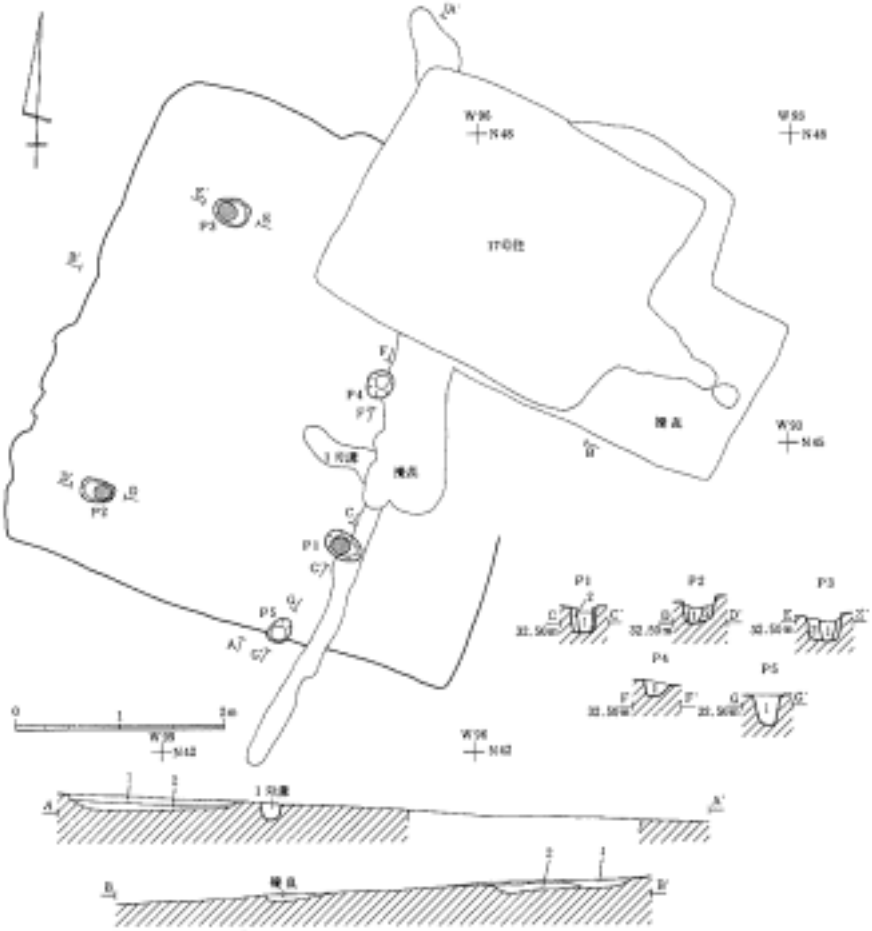
〔出土遺物〕P5堆積土から土師器坏が2点(第39図1・2)出土している。第39図3は床面から出土した砥石である。下端は折れている。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。

☆16号住居跡

〔位置・確認面〕調査区南東側の地山面で確認された。

〔重複〕17号住居跡、1号溝と重複し、そのいずれよりも古い。

〔平面形・規模〕残存状況から、平面形は隅丸方形、規模は、長軸4.9m、短軸4.6mと推



層 No		土 色	土 質	備 考	
1	暗 褐	色(10YR3/3)	軽土質シルト	しまりあり。地山粒を含む。	改変層を含む
2	暗 褐	色(10YR3/4)	軽土質シルト	しまりあり。地山粒を含む。	
1号溝 1	黒 褐	色(10YR3/2)	軽土質シルト	ややしまりあり。焼土粒・炭化粒・地山粒を少量含む。	
P1 1	黒 褐	色(10YR3/2)	軽土質シルト	しまりなし。地山粒・炭化粒・焼土粒を少量含む。	柱痕跡
2	黒 褐	色(10YR3/2)	軽土質シルト	しまりあり。地山粒を多く含む。	柱掘り方埋土
P2 1	黒 褐	色(10YR3/2)	軽土質シルト	しまりなし。地山粒・炭化粒を少量含む。	柱痕跡
2	黒 褐	色(10YR3/2)		しまりあり。地山粒を多く含む。	柱掘り方埋土
P3 1	暗 褐	色(10YR3/3)	軽土質シルト	しまりなし。地山粒を含む。	柱痕跡
2	黒 褐	色(10YR3/2)	軽土質シルト	ややしまりあり。地山粒を含む。	柱掘り方埋土
P4 1	暗 褐	色(10YR3/4)	軽土質シルト	ややしまりあり。炭化粒・焼土粒を少量含む。地山粒・地山ブロックあり。	
P5 1	黒 褐	色(10YR3/2)	軽土質シルト	しまりなし。地山粒・炭化粒をわずかに含む。	

第40図　16号住居跡

定される。

〔堆積土〕堆積土を失っており、掘り方埋土のみを確認した。

〔壁・床面〕大きく削平されており確認できなかった。

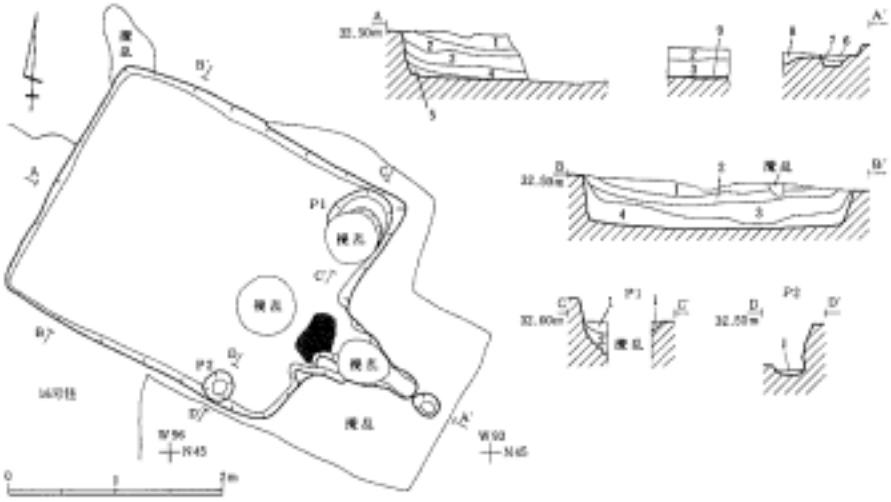
〔柱穴〕床面から合計5個のピットが確認された。これらの中でも平面形の対角線上に位置する3個(P1～3)は、掘り方が32～38cmの不整の楕円形を呈し、深さ20～30cm、直径15cm前後の円形の柱痕跡が認められる。したがってこれらが主柱穴と考えられる。

〔出土遺物〕図示できなかったが、P5堆積土からヘラケズリが施された須恵器の破片が出土している。これらの他、床面および掘り方埋土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。

☆17号住居跡

〔位置・確認面〕調査区南東側の地山面で確認された。

〔重複〕16号住居跡と重複しており、これよりも新しい。



層No.	土色	土性	備考	
1	暗褐 色10YR3/3	粘土質シルト	しまりあり。地山粒・焼土粒を含む。地山粒が比較的多い。	
2	黒褐 色10YR3/2	粘土質シルト	しまりあり。地山粒・地山ブロック（1cm大）を少量含む。	
3	暗褐 色10YR3/3	粘土質シルト	しまりあり。地山粒・地山ブロック（2cm大）を比較的多く含む。	
4	暗褐 色10YR3/3	粘土質シルト	ややしまりあり。3層よりも地山粒・地山ブロックを多く含み、粘性が強い。	
5	暗褐 色10YR3/3	粘土質シルト	しまりなし。地山粒を多く含む。焼土粒もわずかに含む。4層よりも粘性が強い。	
6	黒褐 色10YR3/3	粘土質シルト	しまりなし。炭化物・灰（?）・焼土を含む。	
7	褐 色10YR4/6	粘土質シルト	しまりあり。	カマド内堆積土
8	暗褐 色10YR3/3	粘土質シルト	しまりあり。地山粒を少量含む。焼土粒・焼土塊を多く含む。	
9			掘り方。	
P1 1	暗褐 色10YR3/3	粘土質シルト	しまりあり。地山粒・地山ブロックを多く含む。	
2	暗褐 色10YR3/3	粘土質シルト	しまりあり。地山粒を少量含む。焼土・焼土粒を多く含む。	
P2 1	暗褐 色10YR3/3	粘土質シルト	ややしまりあり。地山粒・焼土粒を多く含む。炭化粒も含む。	

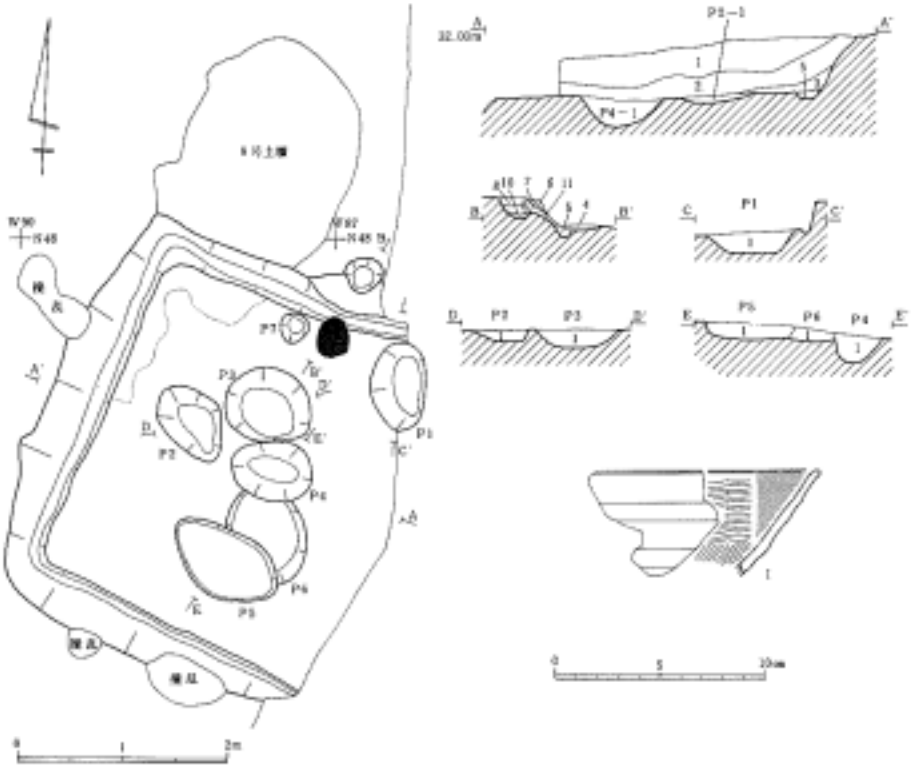
第41図　17号住居跡

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸約3.0m、短軸約2.5mである。
〔堆積土〕黒褐色～暗褐色の粘土質シルト層で、土色や混入物の違いから五枚の層に分かれる。1～4層は住居全域にレンズ状に堆積し、5層は壁際にのみ堆積している。いずれも自然堆積土である。
〔壁〕各辺とも地山を壁としている。壁は床面から緩く湾曲しながら急激に立ち上がる。残存高は残りの良いところで42㎝である。
〔床面〕地山面を床としている。床面はほぼ平坦である。
〔柱穴・周溝〕認められなかった。
〔カマド〕住居南東壁中央やや南側に設置されており、燃焼部と煙道の一部、煙出しピットを確認した。燃焼部は壁を外側に堀窪めることによって構築され、側壁は地山を利用している。燃焼部内の規模は幅50㎝、奥行き40㎝で、底面、側壁は火熱を受け赤変している。煙道は攪乱を受けているが、残存長37㎝、短軸21㎝で、燃焼部から緩やかに立ち上がる。先端には楕円形で長軸26㎝、短軸20㎝、深さ約11㎝の煙出しピットが穿たれている。
〔貯蔵穴状ピット〕カマドの左隣において検出されたが、攪乱により南側半分を壊されているものの、平面形は楕円形を呈するものと考えられ、短軸で56㎝である。
〔出土遺物〕床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。
☆18号住居跡
〔位置・確認面〕調査区南東端の地山面で確認された。
〔重複〕9号土壙と重複しており、これよりも古い。
〔平面形・規模〕住居の東側が削平を受けているが、残存状況から平面形は方形を基調とすると思われる。南北方面で約3.7m、東西方向で2.8m以上である。
〔堆積土〕にぶい黄褐色～暗褐色のシルト層で、土色の違いから三枚の層に分かれる。1、2層は住居全域に堆積し、3層は壁際にのみ堆積している。いずれも自然堆積土である。
〔壁〕残存する部分は、各辺とも地山を壁としている。残存高は50～70㎝で、周溝底面からやや急激に立ち上がる。
〔床面〕大部分は地山面を床としているが、北西コーナー及びに南辺の一部で住居掘り方埋土を床としている。床面はほぼ平坦で堅く締まり、東に向かって僅かに傾斜している。
〔柱穴・周溝〕床面でピットは七つ認められたが、柱穴と認められたものはない。
〔周溝〕残存する各辺の壁際直下で確認された。上幅10～30㎝、深さは3～9㎝で、断面は「U」字状を呈する。
〔カマド〕住居北壁に設置されているが残存状況は悪く、燃焼部の天井と側壁は失われている。燃焼部は壁を外側に堀り窪めることによって構築され、底面は40×30㎝の範囲で焼け

ており、その焼け面の一部が周溝を覆っている。煙道は明確ではなく、燃焼部すぐ脇の壁際に、直径約35㎝の円形を呈する煙出しピットが認められた。
〔貯蔵穴状ピット〕カマドの右隣において検出され、長軸84㎝、短軸52㎝の不整楕円形を呈する。堆積土は褐色シルト層一枚で、多量の炭化物、焼土を含んでいる。
〔出土遺物〕P1堆積土から土師器坏(第42図1)が出土している。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。

☆19号住居跡

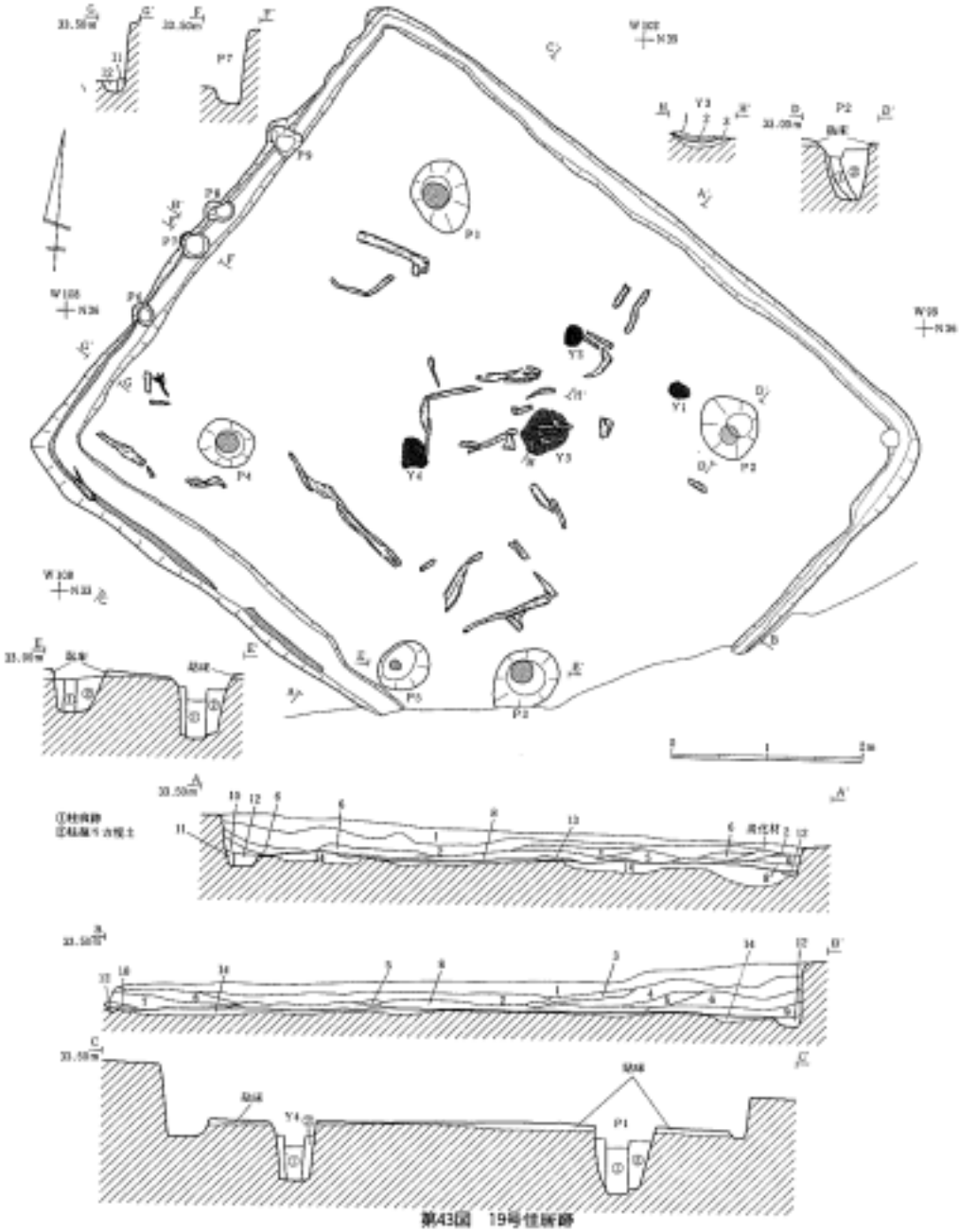
〔位置・確認面〕調査区南東側の地山面で確認された。
〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形を呈し、長軸7.4m、短軸6.0mである。
〔堆積土〕住居中央部は概ね褐色～黒褐色のシルト層が堆積する(1、2層)。その下層には焼土層(5層)、炭化物層（8層）が床面中央に、またそれらのほかに地山ブロックを多く含む層が壁際を中心に堆積する。いずれも自然堆積土である。
〔壁〕地山を壁としている。壁の高さは最も残りの良いところで65㎝、周溝底面からほぼ垂直に立上がる。
〔床面〕住居掘り方埋土を床としている。床面は概ね平坦で堅く締まり、特に床面中央部が壁際部分に比べてさらに堅く締まっている。なお、床面からは屋根材などと見られる炭化物や焼土および遺棄されたと思われる土器が大量に検出されていることから、当住居跡は火災住居と考えられる。
〔柱穴〕床面から合計9個のピットが確認された。壁際のピット(P6～9)を除いて、いずれも柱痕跡が認められるが、これらの中でも住居の平面形の対角線上に位置する4個(P1～3)は、いずれも掘り方が60～80㎝、深さ約60㎝、不整の楕円形を呈する。したがってこれらが主柱穴と考えられる。また、主柱穴(P2)のすぐ脇、南西壁際やや中央よりに掘り方が主柱穴よりも小型で浅いピット(P5)が認められた。P6～9は北西壁際で確認され、P7・P8は北西辺の中央に接近して位置し、P6・P9はP7・P8を中心としたそれぞれ対称的な位置に認められた。これらは壁柱穴と考えられる。
〔周溝〕残存する各辺の壁際直下で確認された。上幅20～50㎝、深さは5㎝前後で、断面は「U」字状を呈する。西コーナー付近から南西辺にかけて、壁材の痕跡と思われる幅8㎝前後、深さ5～10㎝の堆積土が認められ、この部分に関しては周溝の幅が広がり、幅50㎝前後、深さ10㎝前後となる。
〔炉〕住居中央北寄りの部分で、堅く焼け締まり赤変した部分が四箇所検出され、その状況から炉と判断された。特に最も大きなY3からは角形の支脚が、30×40㎝の長方形に配置された状態で、ほぼ原位置を保った位置で倒れて出土した(第48図1・2・第4図1・2)。



層No.	土色	土性	備考	
1	暗 色(10YR4/4)	シルト	しまりあり。1mm程度の暗赤粒を含む。炭化物をわずかに含む。	
2	暗 褐 色(10YR3/4)	シルト	ややしまりなし。1層より大きめの暗赤粒を含む。	
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	しまりなし。暗赤粒を多く含む。	
4			掘り方。	
5	暗 褐 色(10YR3/4)	粘土質シルト	褐山ブロックを少量含む。	周溝埋土
6	暗 褐 色(10YR3/3)	シルト	しまりなし。	
7	褐 色(10YR4/6)	シルト	焼土（橙(5YR6/8)）を多量に含む。	
8	褐 色(10YR4/4)	シルト	褐山ブロック・炭化物・焼土を含む。	
9	暗 褐 色(10YR3/4)	シルト	褐山粒・焼土を含む。	
10	にぶい黄橙色(10YR6/4)	粘土	褐山ブロックを含む。	
11	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	しまりなし。焼土を少し含む。	
P1 1	褐 色(7.5YR4/6)	シルト	炭化物・焼土を多量に含む。	
P2 1	にぶい褐色、(7.5YR5/3)	シルト質粘土	褐山ブロックを含む。炭化物も少量含む。	
P3 1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土	褐山ブロックを多く含む。炭化物も含む。	
P4 1	暗 褐 色(7.5YR3/4)	シルト	しまりなし。褐山粒を含む。炭化物もわずかに含む。	
P5 1	暗 褐 色(10YR3/3)	シルト質粘土	褐山ブロック・炭化物をわずかに含む。	
P6 1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘土	褐山ブロックを多く含む。炭化物も含む。	

番号	種別	種別	器種	胎土	色調	成形	内面調整	内面調整	底径cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版	図版
1	P3	土師器甕	ロクロ土師	ハケ1ボナー黒色処理			横	横						図-1

第42図　18号住居跡と出土土器



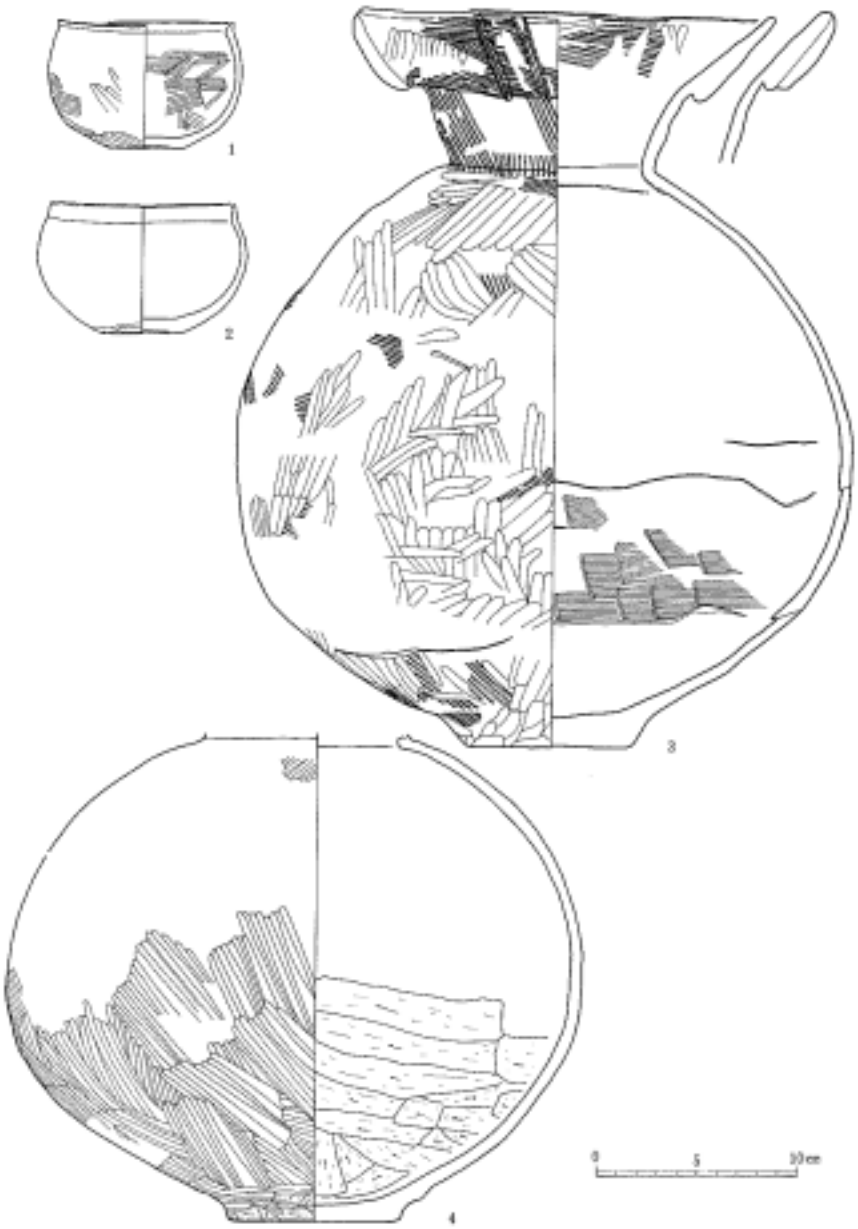
第43図　19号住居跡

層No.	土色	土性	備考	
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト		
2	褐色(10YR4/6)	シルト	地山粒を含む。	
3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物を粒状に若干含む。	
4	褐色(10YR4/6)	シルト	地山粒を含む。	
5	暗赤褐色(2.5YR3/6)	シルト	焼土。	
6	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物を若干含む。	
7	褐色(10YR4/6)	粘土質シルト	地山粒をブロック状に含む。	
8	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物を非常にまく含む。	
9	褐色(10YR4/6)	粘土質シルト	地山土をブロック状に含む。	
10	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト		
11	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト		板材痕跡
12	暗褐色(10YR3/4)	シルト		周溝埋土
13	暗赤褐色(2.5YR3/6)	シルト	焼け面。一部が赤灰色(10YR6/1)になっている。	炉の跡
14				住居張り方埋土
焼け面1	黄褐色(10YR6/6)	粘土	非常にかたくしまっている。粘性小。表面が強熱のため赤褐・白変している。	
	にぶい黄橙色(10YR7/2)		2層とは明瞭な一線を画す。土製支脚が置かれる。	炉
2	明赤褐色(2.5YR5/8)	シルト	焼土。粘性中　しまり中　灰がまじる。大熱を受けたことが明らか。	

第44図　19号住居跡炉跡・床面の硬化範囲と遺物出土状況

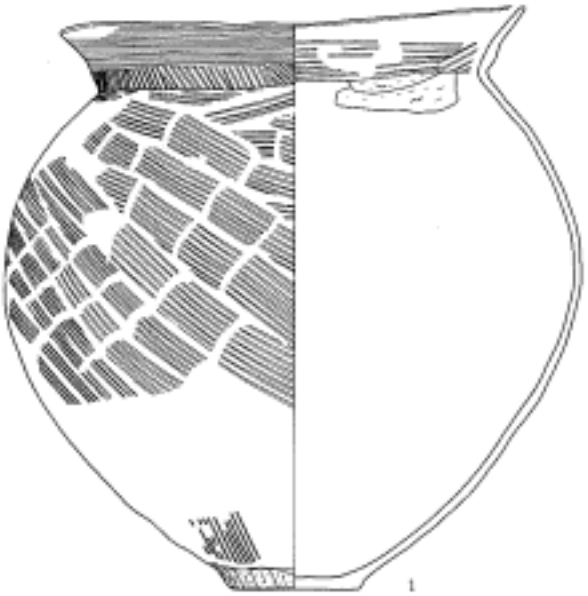
Y3の範囲、形状は45×50㎝の不整楕円形で、約8㎝掘りくぼめられており、同じ場所で二時期使用されていたことが断面観察の結果明らかになった。Y1、Y2は20×25㎝の楕円形、Y3は30×35㎝の不整形を呈し、Y1を中心に分布する。いずれも断面では5㎝程下まで焼けが及んでいる。

〔出土遺物〕床面から土師器坏2点(第45図1・2)・壺2点(第45図3・4)・甕4点(第46図1・2・第47図1・2)・土製支脚4点（48図1・2・第49図1・2）が出土した。堆積土1層からは土師器高坏(第47図3)・蓋(第在47図6)が、1・2層からは土師器ミニチュア(第47図7)が出土している。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。



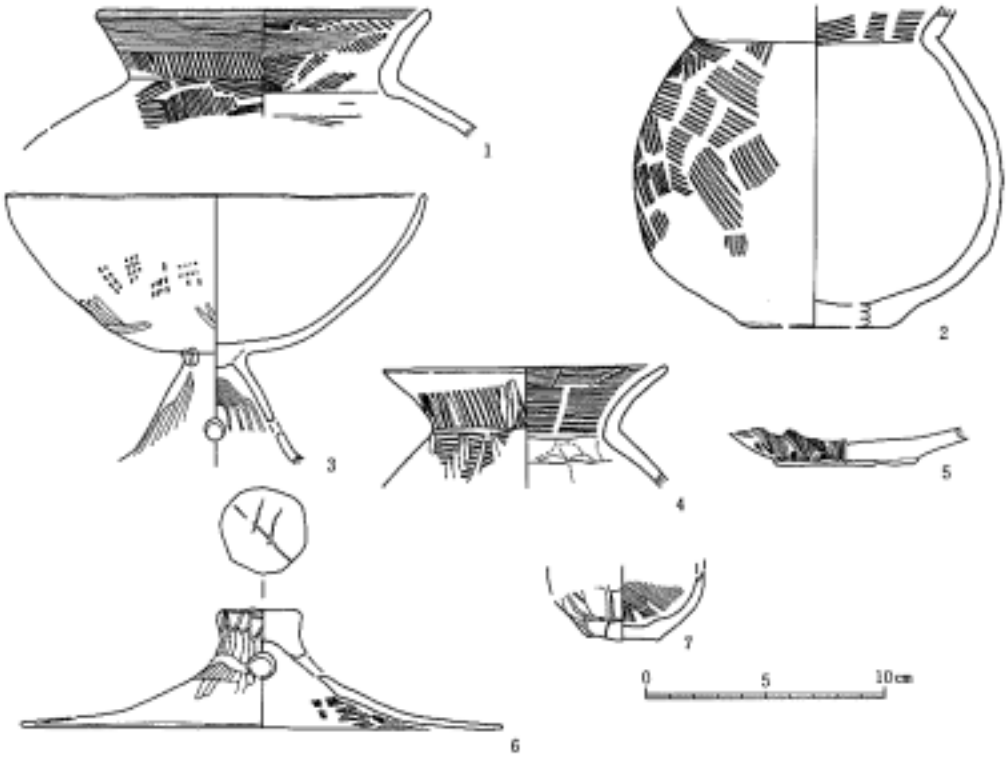
番号	器種	種別	分類	内面調整	内面調整	外面調整	外面調整	口径cm	底径cm	高さcm	備考	写真図版	図版
1	坩	土師器系	第2a	ヘラケズリ	ヘラケズリ	磨	磨	5.4	6.8	3.6	赤彩	27-1	28-1
2	坩	土師器系	第2a	ヘラケズリ→ヘラミガキ	磨	磨	磨	5.5	6.4	3.6	焼成が甘い	27-2	28-2
3	壺	土師器系	第1a	(口) 横ミガキ→ハケ目 (頸) 横ミガキ→ハケ目	(口) 横ミガキ→ハケ目、(頸) ヘラケズリ	横ミガキ	横ミガキ	26.6	25.1	7.6	強ハケ目	27-3	29-1
4	坩	土師器系		(頸) ヘラケズリ→ミガキ (底) ヘラケズリ	ヘラケズリ	刷毛目	刷毛目			6.5		28-1	29-10

第45図　19号住居跡出土土器



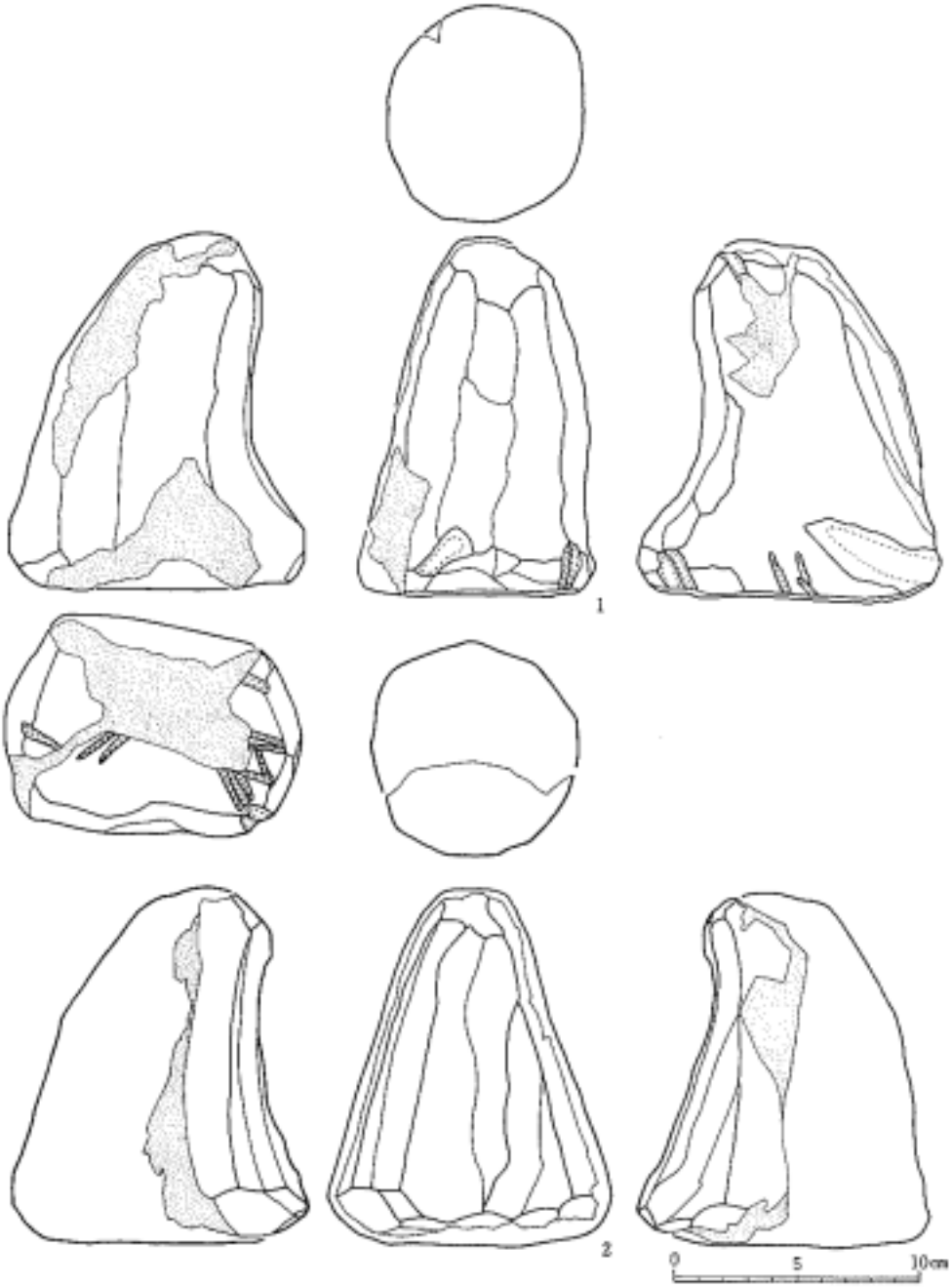
番号	種別	遺構	分類	内面調整	内面調整	外面調整	外面調整	胎土	焼成	色調	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版	実測
1	深	上層遺構	第1a	(口)横ナデ (頸)横ヘラ (胴)横ヘラ (底)ヘラナデ	(口)横ヘラ (頸)ヘラナデ	横ヘラ	横	25.3	23.1	6.3				19-2	19-2
2	深	上層遺構	第1a	(頸)横ヘラ (胴)横ヘラ (底)横ヘラ (底下端)ヘラナデ	(口)横ヘラ (頸)ヘラナデ ヘラ	横ヘラ	横ヘラ	25.5	25.0	6.0				19-1	19-4

第46図　19号住居跡出土土器



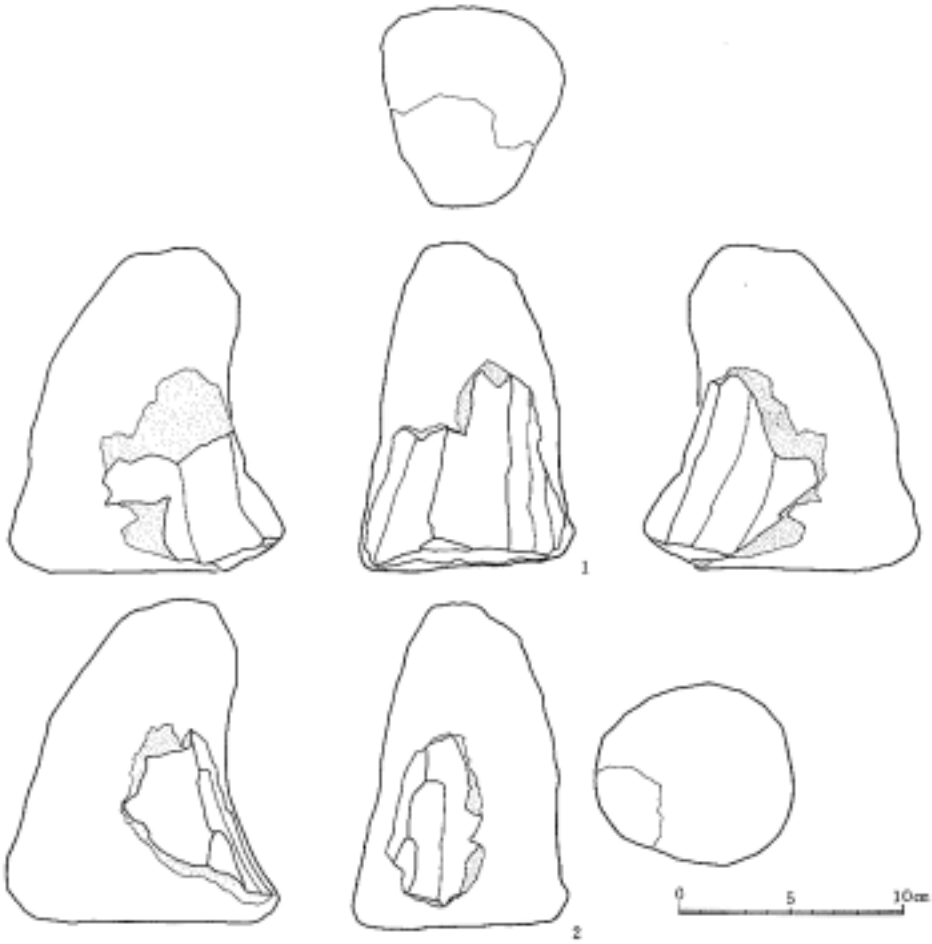
番号	層位	種別	分類	外面調整	内面調整	内面色調	内面色調	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版	登録
1	床	土師器		(口) 横ヘラミガキ→縦ナデ (頸) 横ヘラミガキ	(口) 横ヘラミガキ→縦ナデ (頸) 横ヘラミガキ	7.5YR橙	7.5YR橙		(14.0)				19-11
2	床	土師器		(頸) 横ヘラミガキ	(口) 横ヘラミガキ	橙	橙			5.0		19-2	19-3
3	1層	土師器高杯	高杯	(口) 横ヘラミガキ→ナデ後 (脚) ヘラケズリ後	(口) 横ヘラミガキ (脚) ヘラケズリ	明黄褐	明黄褐		(17.0)		円盤3箇所穿孔、(地紋4箇)	19-1	19-8
4	2層	土師器		横ヘラミガキ→ナデ	(口) ヘラナデ→横ヘラミガキ (頸) ヨコナデ	橙	明黄褐		(11.0)		内面ススキカビ		19-11
5	1層	土師器		(脚下部) 横ヘラミガキ、ナデ		明黄褐	黄褐						19-13
6	1層	土師器	甕	ナデ→ヘラ→ナデ後	横ヘラミガキ→縦ナデ	橙	橙	(4.0)	4.0	(13.0)	(脚接部) 4箇所、黒斑有	19-2	19-9
7	ピット1層	土師器ミニチュア		指ナデ→ヨコナデ	指ナデ	橙	黒			3.0			19-4

第47図　19号住居跡出土土器



番号	層位	種別	形状調整	色調	長さcm	幅cm	厚さcm	備考	写真図版	登録
1	床	土製支脚	不明～指ナデ	暗色	14.5	8.5	12.3	底部一部熱によりもろい　脚部一側いススの跡がついている	33-31	
2	床	土製支脚	不明～指ナデ	暗色	(14.0)	(12.0)	(6.0)	加熱によりもろく一部のみ残存	33-30	

第48図　19号住居跡出土土製支脚



番号	層位	種別	内面調整	色調	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	写真図版	登録
1	床	土製支脚	不明一指ナデ	褐色	(6.3)	(6.3)	(6.3)	加熱によりもろく一部残存	20-39	
2	床	土製支脚	不明一指ナデ	褐色	(7.3)	(4.3)	(6.3)	加熱によりもろく一部残存		

第49図　19号住居跡出土土製支脚

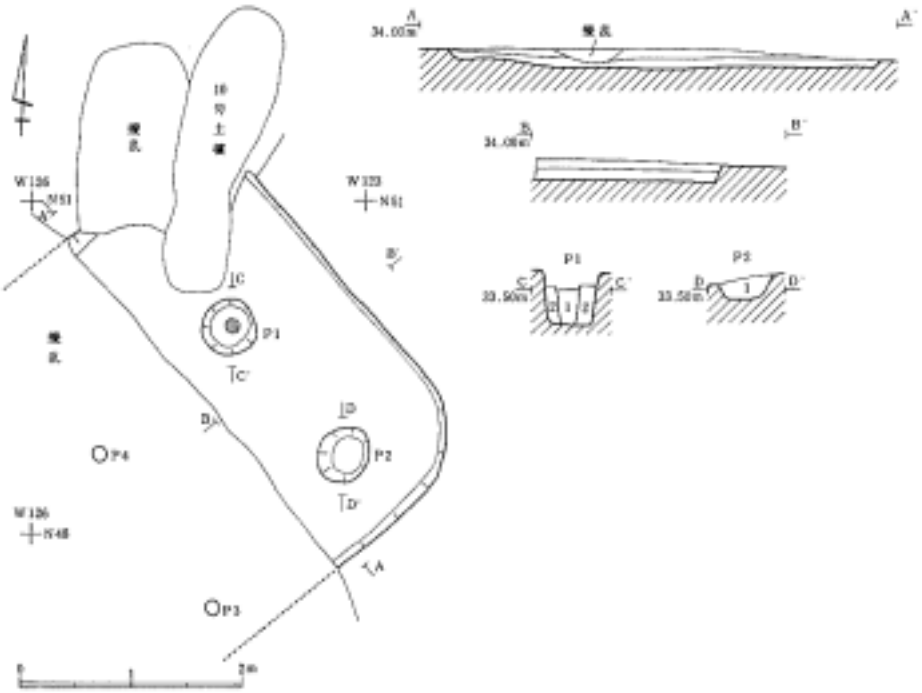
☆20号住居跡

〔位置・確認面〕調査区ほぼ中央部の地山面で確認された。

〔重複〕10号土壙と重複しており、これよりも新しい。

〔平面形・規模〕平面形、規模は攪乱で削り取られた部分が多く明確ではないが、隅丸方形を基調とし、壁や床の残存部分から、北西ー南東3.9mである。

〔堆積土〕住居ほぼ全面を覆う二枚のシルト層が堆積する(1、2層)。いずれも自然堆積土である。



層 No	土 色	土 質	備 考	
1	黒 褐 色(10YR3/2)	シ ル ト	しまりあり。地山の土・炭粒・焼土粒をブロック状に含む。ややグライ化した土。	
2	灰 黄 褐 色(10YR4/2)	粘土質シルト	しまりあり。径5mm以下程度の地山の土・炭・焼土をブロック状に含む。ややグライ化した土。	
P1 1	黒 褐 色(10YR3/2)	シ ル ト	地山粒・炭化粒を微量に含む。	柱痕跡
2	褐 色(10YR4/4)	シ ル ト	しまりあり。地山の土をブロック状に含む。	柱痕跡埋土
P2 1	褐 色(10YR4/4)	シ ル ト	しまりあり。炭・地山の土をブロック状に含む。土器片を含む。	

第50図　20号住居跡

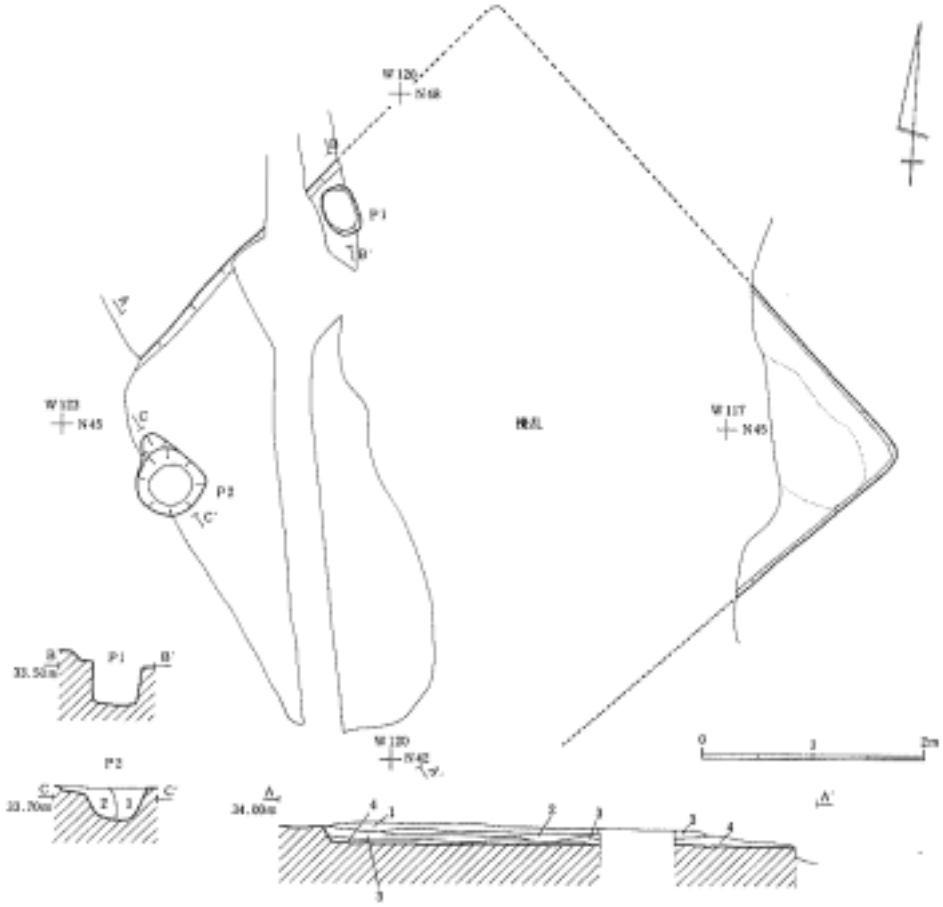
〔壁〕地山を壁としている。壁の高さは最も残りの良いところで16㎝、床面からやや急激に立ち上がる。

〔床面〕床面は概ね平坦で、地山を床としている。

〔柱穴〕床面から2個のピットが確認された(P1、2)。いずれも掘り方が長軸50㎝程の不整の楕円形を呈し、P1からは直径15㎝の柱痕跡が認められた。また、これらと対応する位置にP3、P4が認められた。P3、P4は掘り方が攪乱により削平されたものと思われ、柱痕跡の底が残存していたと考えられる。位置的には南東側に偏るものの、これらが主柱穴と考えられる。

〔周溝・炉〕確認されなかった。

〔出土遺物〕著しく遺存が悪く図示できなかったが、床面直上から土師器坏の底部の口縁部片が出土している。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。



層No.		土色	土性	備考
	1	黒褐 色(10YR2/3)	シルト	
	2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ホキブロック状に若干含む。かなくしまっている。
	3	黒褐 色(10YR2/2)	シルト	炭化物・焼土を多く含む。かたくしまっている。
	4	褐 色(10YR4/6)	粘土質シルト	地山ホキブロック状に多く含む。かなくしまっている。
P2	1	褐 色(7.5YR4/3)	粘土質シルト	
	2	赤褐 色(2.5YR4/8)	シルト	焼土。

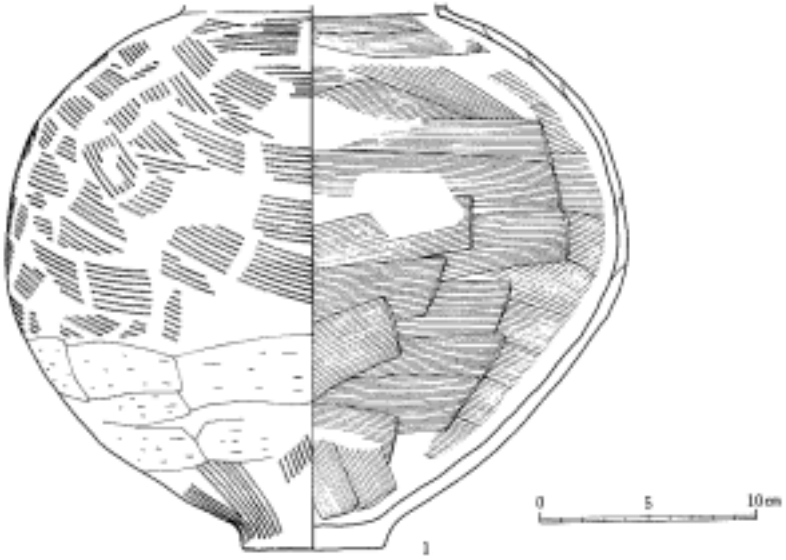
第51図　21号住居跡

☆21号住居跡

〔位置・確認面〕調査区ほぼ中央部の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕かなり攪乱を受けているため不明な部分が多いが、残存部分から推定して、一辺5.3m前後で、方形を基調とすると考えられる。

〔堆積土〕概ね褐色～黒褐色のシルト層が堆積する。土色や混入物の違いから四層に分かれ、



番号	出土位置	器種	法量	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	焼成	底径cm	備考	写真図版	実測
1	P2	土師器甕		横位ヨコ（一部ヘラケズリ）	ヘラナデ	明褐	明褐			6.4		20-3	31-1

第52図　21号住居跡出土土器

1、2層は北寄りに、3、4層はほぼ全域に分布する。いずれも自然堆積土である。

〔壁〕北西辺の一部と東コーナーが残存しており、いずれも地山を壁としている。残存高は5～10cmでやや急激に立ち上がる。

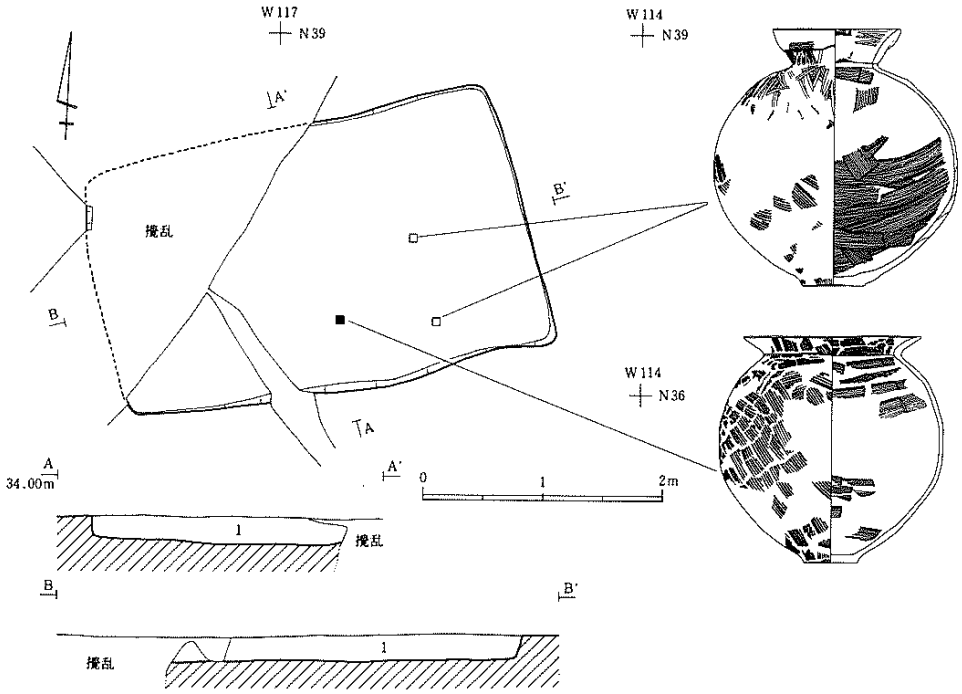
〔床面〕東コーナー付近では住居掘り方埋土を、そのほかでは地山を床としている。東コーナー付近では西側の床面よりも10cm程低く、やや締まりがない。西側の床面は平坦で堅く締まっている。

〔柱穴〕北西辺壁際でピットが一個検出されたが(P1)、明確に柱穴と認められるものは検出されなかった。

〔周溝・炉〕検出されなかった。

〔貯蔵穴状ピット〕北西壁近く、住居西コーナー付近と思われるところで、長軸90cm、短軸60cmの不整形を呈するピットが検出された。人為的に埋め戻された焼土および褐色土が堆積し、堆積土中から甕の一括土器片が出土した。

〔出土遺物〕P2堆積土から土師器甕（第52図1）が出土している。この他、床面および堆積土から、弥生土器・土師器の小破片、剥片類が出土している。



層 No.	土　　色	土　性	備　　考
1	暗　褐　色(10YR3/3)	粘土質シルト	斑状に地山を含む。

第53図　22号住居跡

☆22号住居跡

〔位置・確認面〕調査区ほぼ中央やや南よりの地山面で確認された。

〔平面形・規模〕平面形は長方形を呈し、規模は長軸3.6m、短軸が2.2mである。

〔堆積土〕暗褐色の粘質シルト層が外圧により非常に堅く締まって堆積している。

〔壁〕地山を壁としており、残存高は15～20㎝でほぼ垂直に立ち上がる。

〔床面〕地山を床としており、ほぼ平坦で堅く締まっている。

〔柱穴・周溝・炉〕検出されなかった。

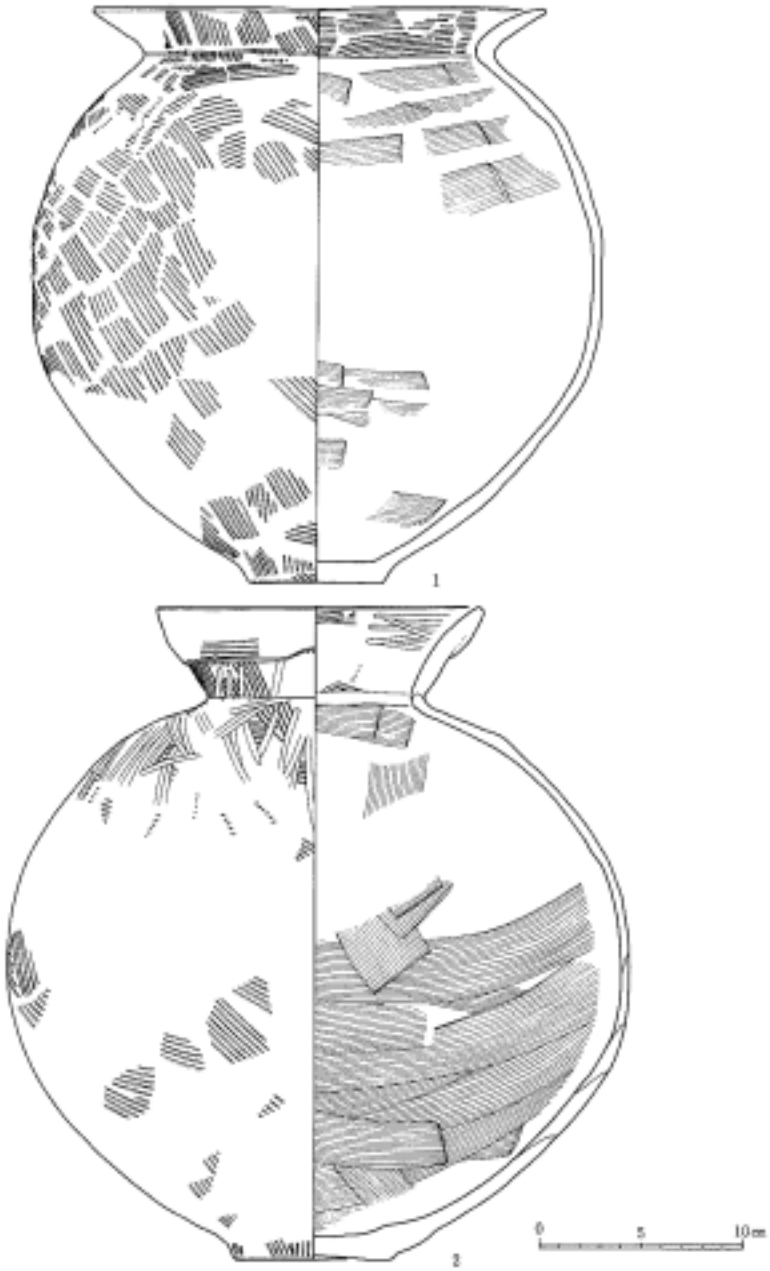
〔出土遺物〕床面から土師器壺(第54図2)・甕（54図1）が出土している。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。

☆23号住居跡

〔位置・確認面〕調査区南端近くほぼ中央部の地山面で確認された。

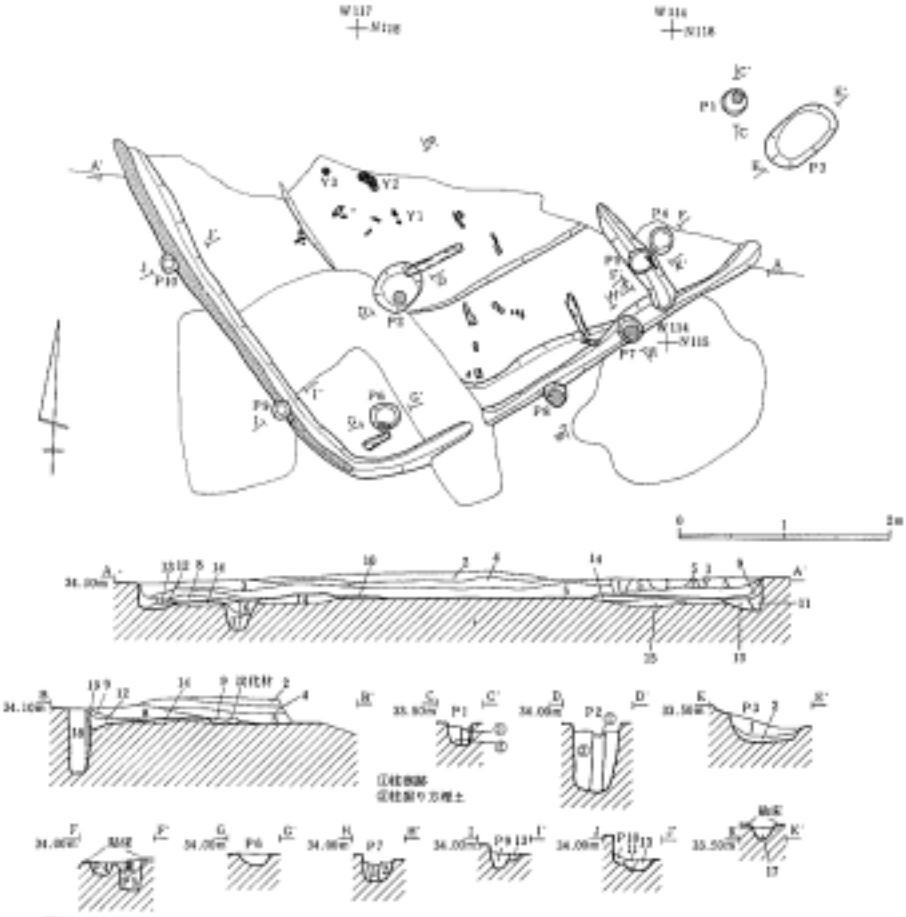
〔重複〕13号土壙と重複し、これよりも古い。

〔平面図・規模〕かなり攪乱を受けているため不明な部分が多いが、残存部分から推定して一辺5.9m以上の、隅丸方形を基調とすると考えられる。



図版番号	種 別	器 形	分 類	外 面 調 整	内 面 調 整	内面炭化	内面煤付	口径cm	底径cm	器高cm	備 考	写真図版	登 録
1	土	土師甕	第1A	横ナデ	(口)横ナデ、(胴)ヘラケズリ	無	有無	(21.3)	(7.1)	8.4		31-1	32-3
2	土	土師甕	第1A	(口)横ナデ、(胴)ヘラケズリ、(底)横ナデ	(口)横ナデ、(胴)ヘラケズリ、(底)ヘラナデ	有無	有無	21.4	6.5	7.8	第6C期		32-1

第54図　22号住居跡出土土器



層 No		土	色	土 質	備 考	
1		黒 褐	色(10YR2/3)	粘土質シルト	地山粒・地山粒を含む。しまりあり。	
2		黒 褐	色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山粒・地山粒を含む。しまりあり。	
3		黒 褐	色(10YR3/2)	粘土質シルト	地山粒・焼土粒・炭化粒を含む。しまりあり。2層より黒味が強い。	
4		暗 褐	色(10YR3/4)	粘土質シルト	地山粒が比較的多い。しまりあり。部分的に黒味が強いところがある。	
5		黒 褐	色(10YR2/3)	粘土質シルト	地山粒は少ない。炭化粒が目立られる。ややしまりなし。	
6		暗 褐	色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山粒・地山ブロックを比較的多く含む。しまりあり。	
7		暗 褐	色(10YR3/4)	粘土質シルト	地山粒・焼土粒・炭化粒を含む。ややしまりなし。	
8		黒 褐	色(10YR2/3)	粘土質シルト	地山粒・焼土粒・炭化粒を少量含む。ややしまりあり。	
9		暗 褐	色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山粒・焼土粒・炭化粒を含む。しまりなし。	
10		黒 褐	色(10YR2/3)	粘土質シルト	焼土を多量に含む。強く焼きしまってはいないが、炉に関係するもの。	
11		暗 褐	色(10YR3/4)	粘土質シルト	地山粒を少量含む。焼土・炭化物を含まない。ややしまりなし。6層より黄色味が強い。	柱材痕跡
12		暗 褐	色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山粒・焼土粒・炭化粒を含まない。しまりあり。6層より黄色味が強い。	
13		暗 褐	色(10YR3/4)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む。他に地山粒・炭化粒・焼土粒を含む。しまりあり。	掘廃物埋土
14		褐	色(10YR4/6)	粘土質シルト	地山粒を若干含むが、地山ブロックを混合する。強くしまっている。	住居
15		黒 褐	色(10YR3/2)	粘土質シルト	地山粒・炭化粒を含む。地山粒・地山粒ブロックを含む。ややしまりあり。	掘り方埋土
16		暗 褐	色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山粒・焼土粒・炭化粒を含まない。しまりあり。6層より黄色味が強い。	
17		黒 褐	色(10YR3/2)	粘土質シルト	炭化粒・焼土粒・地山粒を含む。しまりなし。	
18		黒 褐	色(10YR3/2)	粘土質シルト	地山粒・炭化粒・焼土粒を含む。しまりなし。	柱根跡
19		暗	色(10YR4/4)	粘土質シルト	多量の地山ポロ土から成る。ややしまりあり。	柱掘り方埋土
P3	1	黒 褐	色(10YR3/2)	シ ル ト	炭化物・焼土を少し含む。	
	2	暗 褐	色(10YR3/4)	粘土質シルト		
P6	1	暗 褐	色(10YR3/3)	粘土質シルト	ややしまりあり。地山粒を含む。炭化粒・焼土粒を少量含む。	
P7	1	黒 褐	色(10YR3/2)	粘土質シルト	しまりなし。地山粒・炭化粒・焼土粒を含む。	柱痕跡
	2	暗 褐	色(10YR3/4)		しまりあり。地山ブロックを大量に含む。	柱掘り方埋土

第55図　23号住居跡

〔堆積土〕基本的に暗褐色～黒褐色の粘土質シルト層が堆積する。土色や混合物の違いから十層に分かれるが、1～5層はほぼ全域に、6～10層は壁際と床面の一部に分布する。いずれも自然堆積土である。

〔壁〕南西辺と南東辺の一部が残存しており、いずれも地山を壁としている。残存高は最も残りの良いところで21cmでほぼ垂直に立ち上がる。

〔床面〕主柱穴と壁との間が壁に沿って台床状に一段高くなっており、その幅は1m程、高さは3～5cmである。台床状部分は掘り方埋土によって築かれており、その部分に囲まれた中央部は地山を床としている。いずれも平坦である。

なお床面からは屋根材とみられる炭化物や焼土が多量に検出されていることから、当住居跡は火災に遭ったものと考えられる。

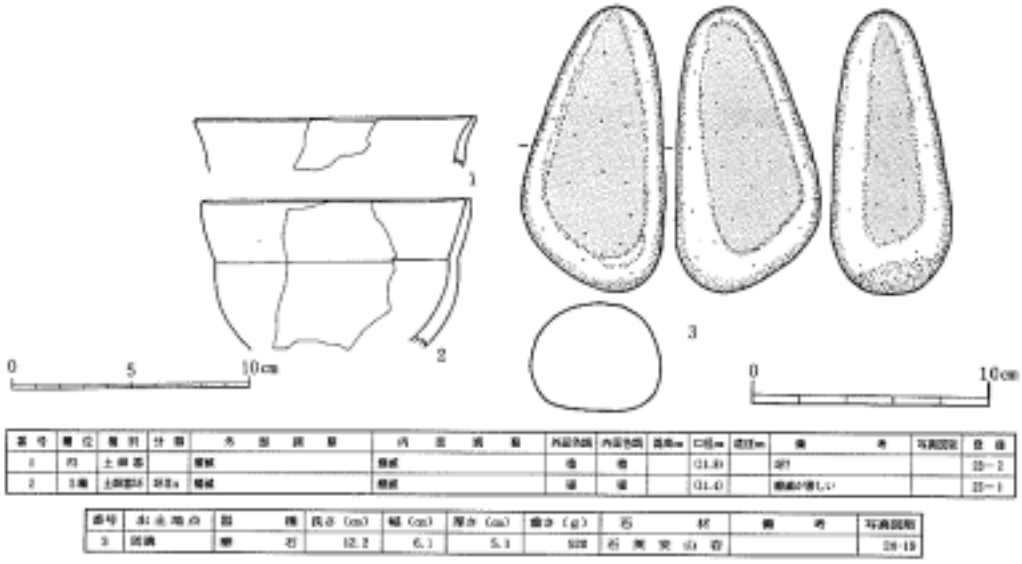
〔柱穴〕床面から8個(P2、P4～10)、攪乱部分から1個(P1)検出した。これらのうちP7～10は壁際に位置する。P1, P2からは直径11～13cmの柱痕跡が認められ、位置と形状から主柱穴と考えられる。P4～6はいずれも住居に伴うものと考えられ、P5は周溝に直角に交わる溝の中にあり、溝に切られている。P4、P6は平面形が楕円形の深さ10～13cm程のものである。P7～10は壁柱穴と考えられ、平面形はいずれも長軸18～26cm、短軸16～23cmの楕円形を呈するが、深さは6～46cmとまちまちである。なお、P7の掘り方埋土が壁の一部として使われていた(第55図セクションB)。

〔溝〕残存する壁直下を全周する周溝を検出した。周溝掘り方は、床面側の立ち上がりが緩やかな幅広の『U』字状の断面を呈し、幅は14～31cm、3～10cmとまちまちである。南西辺では幅7～14cmの壁材痕跡が認められ、この部分の掘り方の南東辺に比べて広い傾向がある。南東辺の周溝から直角に延びる溝を確認した。この溝と周溝には同じ堆積土が認められ、同時に存在していたと考えられる。長さは現状で122cmであるが、攪乱によって壊されており本来の長さは不明である。断面形は『U』字状を呈し、幅約25cm、深さ12～21cmで周溝よりも深い。

〔炉〕主柱穴P2の北側50～120cmの床面で、三箇所の焼け面が確認された。いずれも表面は赤変し堅く締まり、断面では3cm程下まで焼けが及んでいる。しかしその範囲は狭く、最大のY2で長軸26cmの不整楕円形を呈する程度である。

〔貯蔵穴状ピット〕南東コーナーと考えられる攪乱部分で確認された。長軸72cm、短軸42cm、深さは28cmの楕円形を呈する。

〔出土遺物〕P3堆積土から土師器（第56図1）が堆積土5層からは土師器坏（第56図2）が出土している。第56図3は周溝から出土した磨石状の礫である。風化のため明確な擦痕



第56図　23号住居跡出土遺物

や磨面は認められないが、形態や石材から磨石のように用いられていた可能性がある。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。

☆24号住居跡

〔位置・確認面〕調査南端やや東よりの地山面で確認された。

〔平面形・規模〕長軸6.4m、短軸5.4mの長方形を呈する。

〔堆積土〕基本的ににぶい黄褐色～黒褐色の粘土質シルト層が堆積する。土色や混入物の違から四層に分かれるが、1、2層はほぼ全域に3、4層は壁際に分布する。いずれも自然堆積土である。

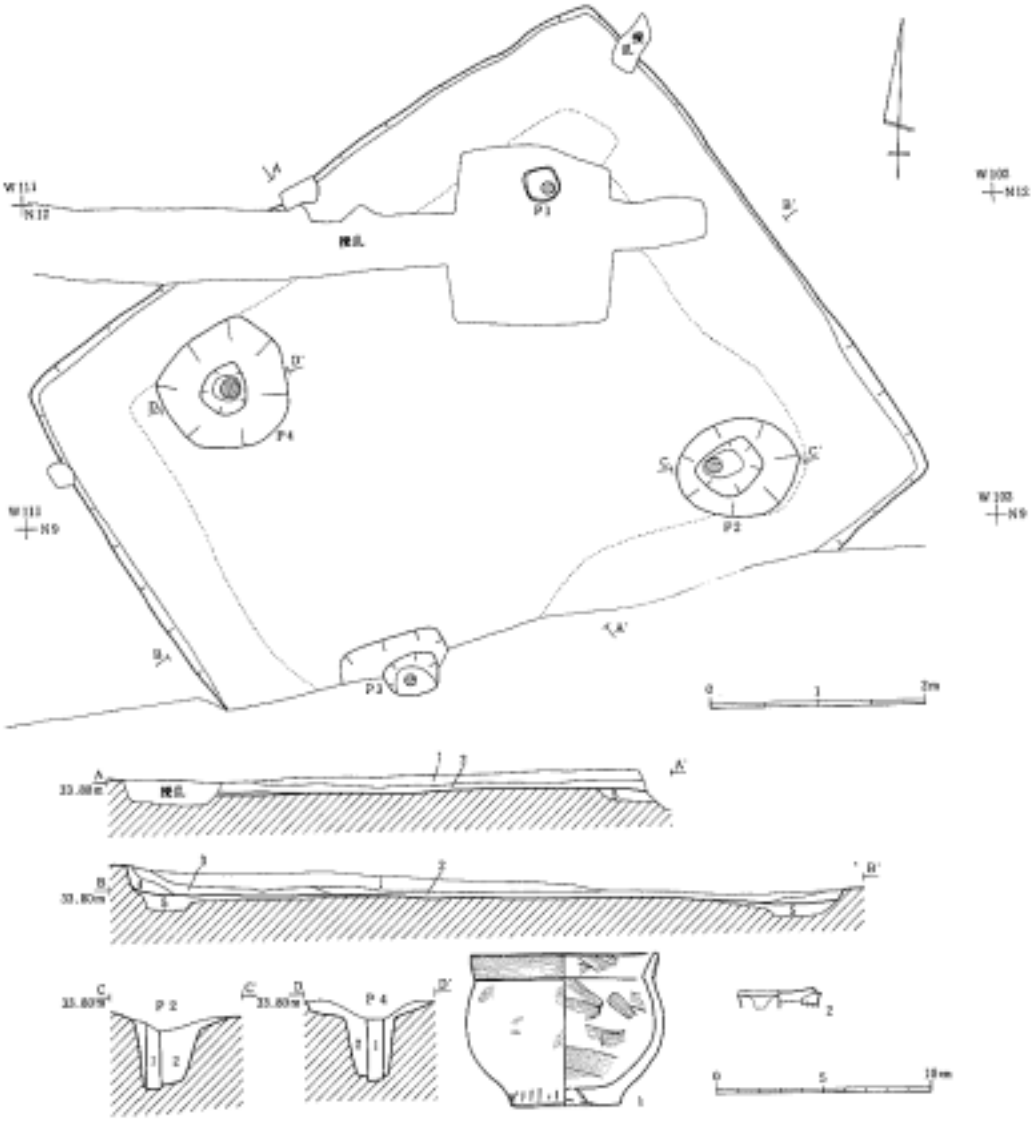
〔壁〕南西辺と南東辺の一部が削平により失われているが、残存する部分はいずれも地山を壁としている。残存高は最も残りの良いところ西コーナーで30㎝、急角度で立ち上がる。

〔床面〕中央部は地山を、壁際は住居掘り方埋土を床としている。床面は東にやや傾斜しているもののほぼ平垣であり、中央部分がやや堅く締まっていた。

〔柱穴〕床面で四個（P1～4）検出された。これらは住居の平面形の対角線上に位置し、いずれも直径10～18㎝の円形の柱痕跡が認められ、主柱穴と考えられる。また攪乱で上部の壊されたP1を除いて掘り方が大きく、長軸1.4mほどの不整形を呈する。

〔溝・炉〕検出されなかった。

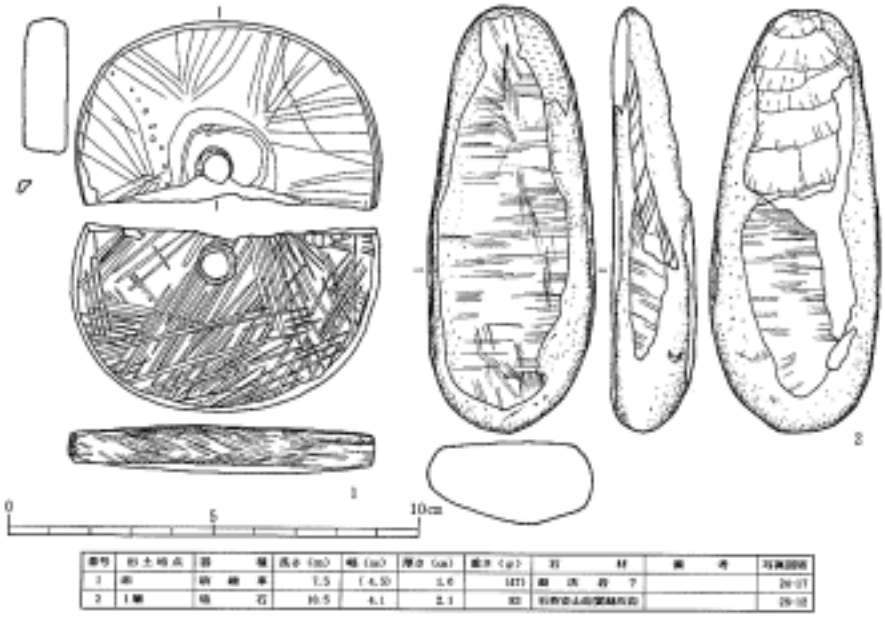
〔出土遺物〕床面から土師器坏(第57図1)が、掘り方埋土からは土師器高坏(第57図2)が出土している。第58図1は床面から出土した石製紡錘車である。a面には線刻で文様が描かれ、中央部はやや高く作り出されている。b面は刷毛目状の製作痕が残されているのみで文様は描かれていない。側面は丁寧な研磨が施されている。2は堆積土から出土した



層 No.	土色	土性	備考	
1	暗褐 色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山粒多く含む。焼土・炭化物少量含む。ややかたい。	
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	地山粒・焼土・炭化物含む。しまりなし。	
3	黒褐 色(10YR3/1)	粘土質シルト	地山粒・焼土・炭化物含む。しまりなし。	
4	褐 色(10YR4/4)	粘土質シルト	地山粒多く含む。	
5	暗褐 色(7.5YR3/4)	粘土質シルト	地山ブロックを含む。	住居周り方埋土
P1・4 1	黒褐 色(10YR3/2)	砂質シルト	やわらかくしまりなし。ボソボソしている。柱痕跡の跡の部分はグライ化。	柱痕跡
2	褐 色(10YR4/6)	粘土質シルト	地山ブロック多く含む。	柱掘り方埋土

番号	種別	器形	分類	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版	登録
1	土	土師器甕		(口) 横ナデ (頸) ナデ→ヨコ位ヨコナデ	(口) ヨコナデ (頸) ヨコ	黒褐	明褐	(7.1)	(16.0)	5.3		31-2	34-1
2	須恵	土師器高台		底部	底部	暗	暗	6.9					34-2

第57図　24号住居跡と出土土器



番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	写真図版
1	表	砥石	7.5	(4.5)	1.6	(47)	緑色岩？		26-17
2	1層	砥石	10.5	6.1	2.1	80	砂岩(凝灰質砂岩)		26-18

第58図　24号住居跡出土石器

砥石である。やや偏平で小型の円礫を用い、四面に擦痕、磨面が認められる。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。

☆25号住居跡

〔位置・確認面〕調査区ほぼ中央東側の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕攪乱によって住居跡のほとんどが失われており、全体の平面形や規模は不明である。

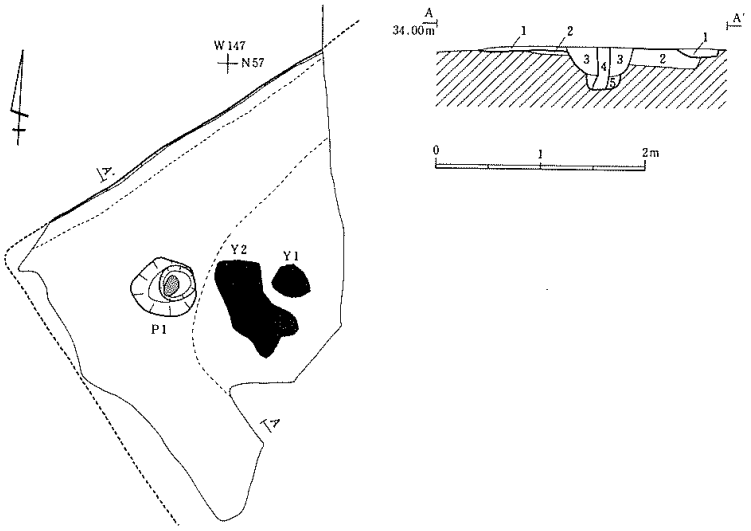
〔堆積土〕暗褐色の堆積土が一層認められただけである。

〔壁〕北西辺の壁が一部残存しているだけであり、それらは地山を壁としている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、最も高いところで7cmである。

〔床面〕西側隅の一部が残存するのみである住居中央部分は地山を、壁寄りの部分は住居掘り方埋土を床としている。やや凹凸があり、壁寄り部分に比べて中央部分は堅くしまっている。

〔柱穴〕住居跡掘り方の内側の角にピットが一個確認されている。当遺跡の住居跡掘り方の一般的特徴である、幅広の溝状の形態を呈しつつ壁の周りを巡るという特徴とこの掘り方が同様と考えると、この柱穴は住居跡の西隅に位置し、西の主柱穴の可能性が高い。根元の太い構円形の柱痕跡が確認されている。

〔周溝〕確認されなかった。



層 No.	土　色	土　性	備　考	
1	暗　褐　色(7.5YR3/3)	シ　ル　ト	かたい。炭化物・焼土粒を多く含む。地山ブロック。	
2		シ　ル　ト	7.5YR3/3暗褐色と7.5YR5/6明褐色の土がブロック状に混ざったもの。かたくしまる。	住居掘り方埋土
3	暗　褐　色(10YR3/3)	シ　ル　ト	しまりなし。粘性あり。炭化物ブロック・焼土粒・地山粒を多く含む。	柱痕跡
4		シ　ル　ト	暗褐色・明褐色土の混ざり方が2層より細かい。焼土・炭化物粒含む。	柱掘り方埋土
5	褐　色(10YR4/6)	シ　ル　ト	暗褐色・明褐色土の混ざり方が2層より細かい。焼土・炭化物粒含む。	柱掘り方埋土

第59図　25号住居跡

〔炉〕柱穴のすぐ東側に二個の焼け面が確認された。Y1は小さく、約40㎝×30㎝の楕円形を呈し、Y2は約1m×50㎝の細長い不整形を呈する。いずれも焼けて赤変し堅く締まり、表面には凹凸が認められ、断面では3㎝程下まで焼けが及んでいる。Y1とY2は非常に近い位置にあるため、同時に焼けた面であった可能性も考えられる。

〔出土遺物〕著しく遺存が悪く図示できなかったが、床面から薄手の土師器甕が出土している。これらの他、床面および堆積土中から弥生土器、土師器の小破片、剥片類が出土している。

第2節　竪穴遺構・土堀・溝とその出土遺物

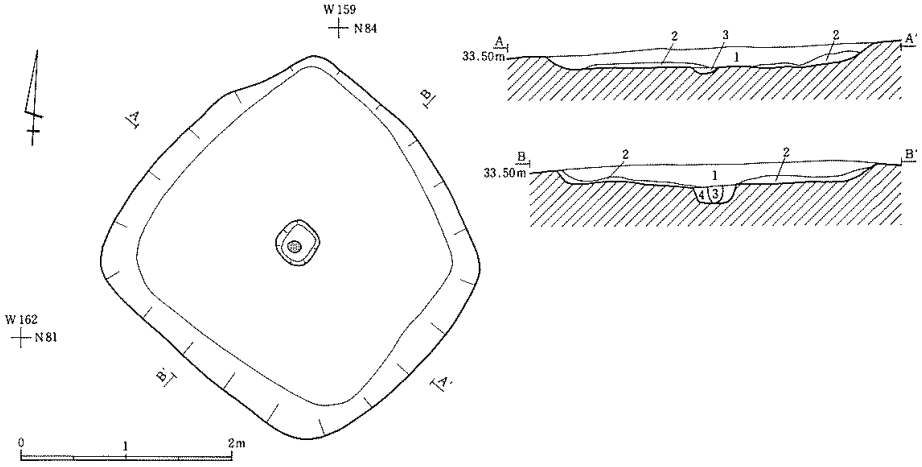
☆1号竪穴遺構

〔位置・確認面〕調査区北西隅の地山面で確認された。

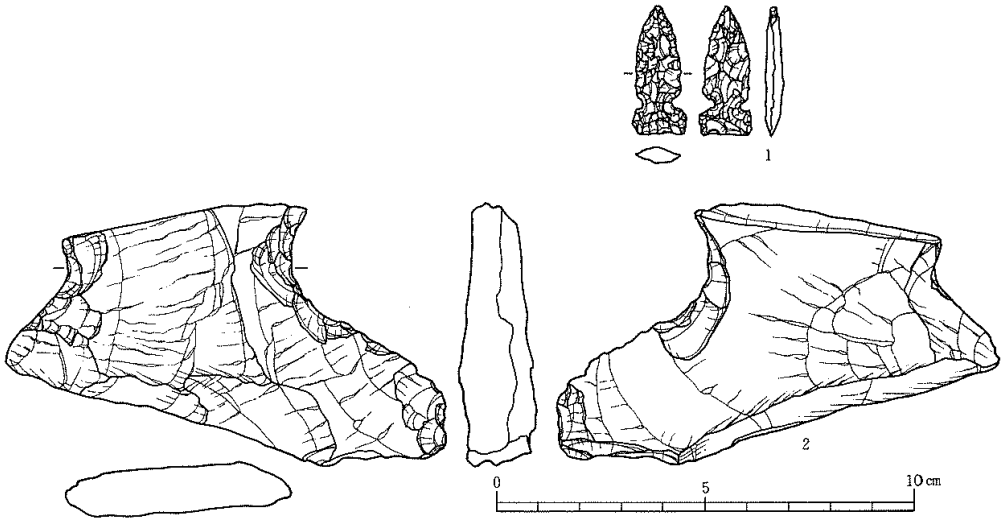
〔平面形・規模〕平面形は不整の正方形を呈し、一辺約3.1m～3.0mである。

〔堆積土〕堆積土は暗褐色を呈し、土質の違いから二枚の層に分かれた。いずれも遺構のほぼ全面に分布し、自然堆積土である。

〔壁〕地山を壁としている。壁の高さは8～20㎝で南側の残りが良く、床面から緩やかに立上がる。



層 No.	土色	土性	備考	
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	固くしまっている。遺物を多く含む。	
2	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	遺物を若干含む。	
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭をわずかに含む。	柱痕跡
4	明黄褐色(10YR5/6)	シルト	10YR4/4 褐色の土をブロック状に若干含む。	柱掘り方埋土



番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	写真図版
1	1-2層	アノリカ式石鏃	3.1	1.3	0.4	1	石英安山岩質凝灰岩		24-7
2	1層	石鏃	6.8	10.6	1.8	99	珪化凝灰岩	転	25-3

第60図　1号竪穴遺構と出土石器

〔床面〕床面は概ね平坦で、地山を床としている。

〔柱穴〕床面中央部でピットが一個確認された。掘り方は約40cmの隅丸方形を呈し、柱痕跡は直径13cmの円形を呈する。

〔その他の施設〕炉、周溝、貯蔵穴状ピットなどは検出されなかった。
〔出土遺物〕堆積土1層から弥生土器（第66図9・17・26・第67図10・15・21）、2層からも弥生土器(第66図24～26)が出土している。第60図1はいわゆるアメリカ式石鏃、2は両側にえぐりをいれた石鍬である。どちらも堆積土から出土している。2は上部が折れている可能性もあるが、ほぼ完形品と考えられる。その他に、床面および堆積土から弥生土器の小破片、剥片類が出土している。

☆1号土壙

〔位置・確認面〕調査区北西隅の地山面で確認された。
〔形態・規模〕平面形は円形で、規模は直径約0.8m、深さ0.7m、壁は急激に立ち上がる。底面の南側に直径23㎝の打ち込み杭の跡が確認された。杭は土壙の底面より15㎝程打ち込まれていたと考えられ、杭の痕跡は底面より上20㎝程まで確認された。土壙に杭を打ち込んだＴピットと考えられる。
〔堆積土〕基本的ににぶい黄褐色～黒褐色のシルト質土が堆積し、土色、混入物の違いから六枚の層に分かれる。いずれも自然堆積土である。
〔出土遺物〕底面から遺物は出土していない。堆積土1～4層から弥生土器、土師器の小破片が出土している。

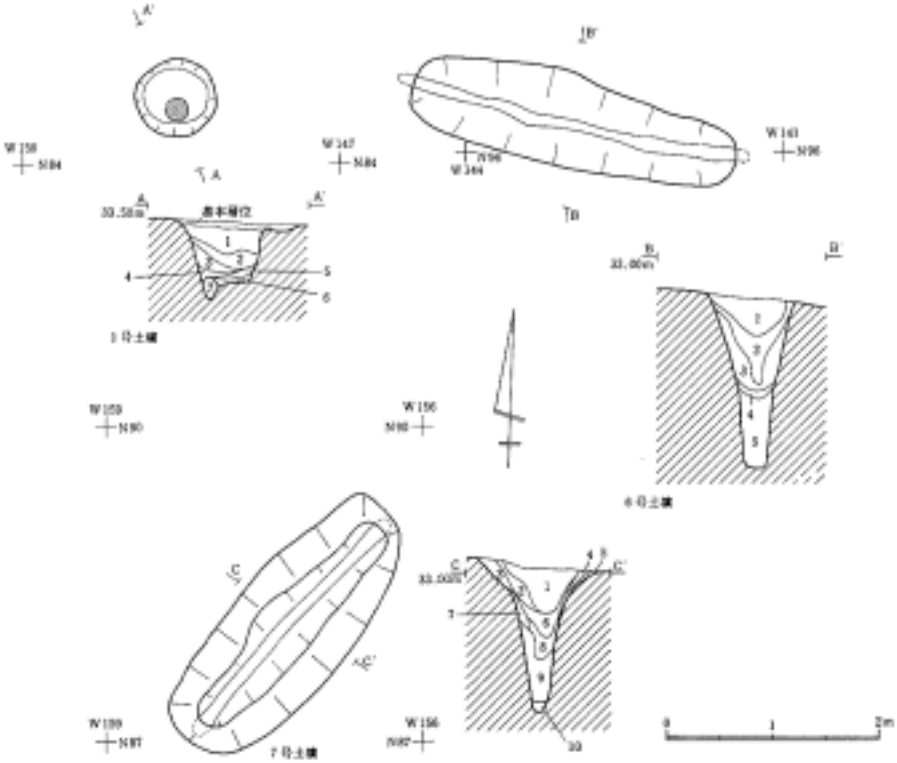
☆2号土壙

〔位置・確認面〕調査区北東隅の地山面で確認された。
〔重複〕北東側で3号土壙と重複し、これよりも新しい。
〔形態・規模〕平面形は直径約1.2mの円形で、深さは0.4m程である。壁、床面は地山からなり、共に丸みを持ち、壁はやや急激に立ち上がる。
〔堆積土〕基本的に褐色～黒褐色のシルト質土が堆積し、土色、混入物の違いから四枚の層に分かれる。いずれも自然堆積土である。
〔出土遺物〕底面、堆積土から遺物は出土していない。

☆第3号土壙

〔位置・確認面〕調査区北東隅の地山面で確認された。
〔重複〕南西側で2号土壙と、また北西側で5号住居跡と重複し、そのいずれよりも古い。
〔形態・規模〕平面形は長軸約60㎝、短軸約50㎝の楕円形を呈し、深さは20㎝程である。壁、床面は地山からなり、床面はやや平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。
〔堆積土〕暗褐色のシルト質土が一層、自然堆積している。
〔出土遺物〕底面から遺物は出土していない。堆積土から弥生土器(第 67 図 24)が、その他に弥生土器、土師器の小破片が出土している。

☆4 号土壙
〔位置・確認面〕調査区北東隅の 5 号住居跡堆積土で確認された。
〔重複〕5 号住居跡と重複し、これよりも新しい。
〔形態・規模〕平面形は長軸約 50 ㎝、短軸約 40㎝ の不整楕円形を呈し、深さは 20㎝ 程である。
壁、床面は 5 号住居跡堆積土からなり、床面はやや平坦で、壁は北側は急激に、南側は緩やかに立ち上がる。
〔堆積土〕黒褐色のシルト質土が一層、自然堆積している。
〔出土遺物〕床面、堆積土から遺物は出土していない
☆5 号土壙
〔位置・確認面〕調査区中央北隅の地山面で確認された。
〔形態・規模〕平面形は直径約 1.4mのほぼ円形を呈し、深さは 20㎝ 程である。床面中央部がややくぼみ、壁は緩やかに立ち上がる。
〔堆積土〕暗褐色のシルト質土が一層、自然堆積している。
〔出土遺物〕堆積土中から土師器壺(第 63 図 1)が出土している。その他、底面および堆積土から弥生土器、土師器の小破片が出土している。
☆6 号土壙
〔位置・確認面〕調査区北西隅の地山面で確認された。
〔形態・規模〕平面形は長軸約 3.1m、短軸 0.6～0.9mの長楕円形を呈し、深さは約 1.7 mである。底面は幅 9～14 ㎝、長さ 3.4mで両端は上場よりも長く、この部分の壁はオーバー・ハングしている。底面はほぼ平坦であり、柱穴などは認められなかった。両側辺の壁は、底面近くはほぼ垂直に立ち上がり、上部はやや開きながら直線的に立ち上がる。長軸は等高線とほぼ平行である。形態、規模からいわゆるＴピットと考えられる。
〔堆積土〕基本的に褐色～黒褐色のシルト質土が堆積し、土色、混入物の違いから五枚の層に分かれる。いずれも自然堆積土で、下層では締まりがない。
〔出土遺物〕底面から遺物は出土していない。堆積土上層から弥生土器、土師器の小破片が出土している。
☆7 号土壙
〔位置・確認面〕調査区北西隅の地山面で確認された。
〔形態・規模〕平面形は長軸約 2.9m、短軸 0.9～1.1mの長楕円形をし、深さは約 1.3m である。底面は幅 11～16 ㎝、長さ 2.7mで両端の壁は部分的にすぼまり、底面付近の壁はオーバー・ハングしている。底面はほぼ平坦であり、柱穴などは認められなかった。両側辺の壁は、底面近くは急激に立ち上がり、上部は開きながらやや緩やかに立ち上がる。長



1号土壙

層 No.	土 色	土 性	備 考
1	暗 色(10YR4/3)	シ ル ト	ブロック状の地山土を大量に全体に含む。炭も微量に含む。
2	暗 褐 色(10YR3/4)	シ ル ト	ブロック状の地山粒を全体に含む。炭も若干含む。
3	黒 褐 色(10YR3/2)	シ ル ト	ブロック状の地山土をわずかに含む。
4	暗 褐 色(10YR3/3)	シ ル ト	地山土をほんの少し含む。5層より明るい。
5	黒 褐 色(10YR3/2)	シ ル ト	5層よりやや暗い。
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シ ル ト	ブロック状の地山土を全体に大量に含む。
7	黒 褐 色(7.5YR3/2)	シ ル ト	地盤層

6号土壙

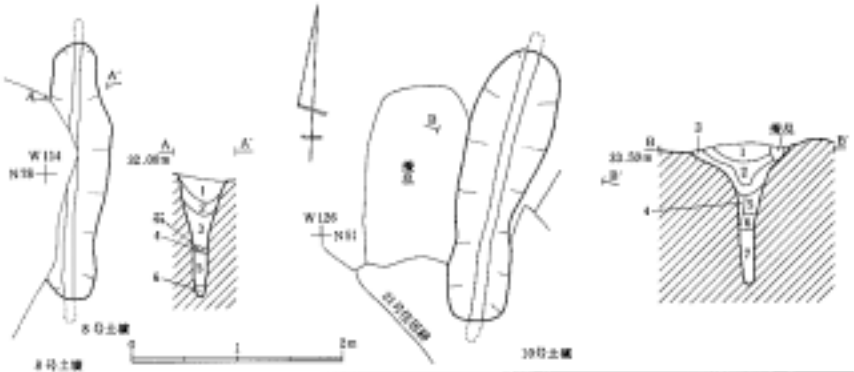
層 No.	土 色	土 性	備 考
1	黒 褐 色(10YR3/2)	シ ル ト	
2	暗 褐 色(10YR3/4)	シ ル ト	地山ブロックを含む。
3	褐 色(10YR4/4)	シ ル ト	
4	褐 色(7.5YR4/6)	シ ル ト	しまりなし。
5	褐 色(10YR4/6)	シ ル ト	しまりなし。

7号土壙

層 No.	土 色	土 性	備 考
1	暗 褐 色(7.5YR3/3)	シ ル ト	ブロック状の地山土を若干含む。
2	暗 褐 色(10YR3/4)	シ ル ト	炭をわずかに含む。
3	褐 色(10YR4/4)	シ ル ト	10YR5/4 明黄褐色シルトをわずかに含む。
4	褐 色(10YR4/4)	シ ル ト	10YR5/4 明黄褐色シルトをわずかに含む。
5	褐 色(10YR4/6)	シ ル ト	ブロック状の10YR5/4 明黄褐色シルトを全体に若干含む。
6	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シ ル ト	しまりなし。ブロック状の10YR5/4 黄褐色シルトを全体に含む。
7	褐 色(10YR4/6)	シ ル ト	炭をわずかに含む。
8	灰黄褐 色(10YR4/2)	シ ル ト	しまりなし。ブロック状の10YR5/4 黄褐色シルトを全体に含む。
9	褐 色(10YR4/6)	シ ル ト	しまりなし。ブロック状の10YR5/4 黄褐色シルトを全体に含む。
10	黒 褐 色(10YR2/3)	シ ル ト	地山粒を微量に含む。

第61図　土 壙 (1)

軸は等高線とほぼ平行である。形態、規模からいわゆるＴピットと考えられる。
〔堆積土〕基本的に灰黄褐色～黒褐色のシルト質土が堆積し、土色、混入物の違いから十枚の層に分かれる。いずれも自然堆積土で、下層では締まりがない。
〔出土遺物〕底面から遺物は出土していない。堆積土上層から弥生土器、土師器の小破片が出土している。
☆第８号土壙
〔位置・確認面〕調査区北東側の地山面で確認された。
〔形態・規模〕平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸約 2.4m、短軸は攪乱により明確ではないが0.5m程と考えられ、深さは約1.2mである。底面は幅6～12㎝、長さ約3.3mで両側は上場よりも長く、この部分の壁はオーバー・ハングしている。底面はほぼ平坦であり、柱穴などは認められなかった。両側辺の壁は、底面近くはほぼ垂直に立ち上がり、上部はやや開きながら直線的に立ち上がる。長軸は等高線とほぼ平行である。形態、規模からいわゆるＴピットと考えられる。
〔堆積土〕基本的に黄褐色～暗褐色のシルト質土もしくは粘土質シルト質土が堆積し、土色、混入物の違いから六枚の層に分かれる。いずれも自然堆積土で、下層では締まりがない。
〔出土遺物〕底面および堆積土からは遺物は出土していない。
☆9号土壙
〔位置・確認面〕調査区南東側の地山面で確認された。
〔重複〕18号住居跡と重複し、これよりも古い。
〔形態・規模〕平面形は南側が８号住居に切られ、北側も削平により壁の立ち上がりが認められなかったため不明な点も多いが、現存で長軸約2.0m、短軸約1.6mの楕円形を呈する。深さは約25㎝である。壁は緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。
〔堆穫土〕暗褐色のシルト質土が一層、自然堆積している。
〔出土遺物〕底面から遺物は出土していない。堆積土から弥生土器、土師器の小破片が出土している。
☆10号土壙
〔位置・確認面〕調査区ほぼ中央の地山面で確認された。
〔重複〕20号住居跡と重複し、これよりも古い。
〔形態・規模〕平面形は長軸約2.6m、短軸0.6～0.7mのやや曲がった長楕円形を呈し、深さは約1.3mである。底面は幅9～15㎝、長さ約3.0mで両端は上場よりも長く、この部分の壁はオーバー・ハングしている。底面はほぼ平坦であり、柱穴などは認められなかった。両側辺の壁は、底面近くはほぼ垂直に立ち上がり、上部はやや開きながら緩やかに

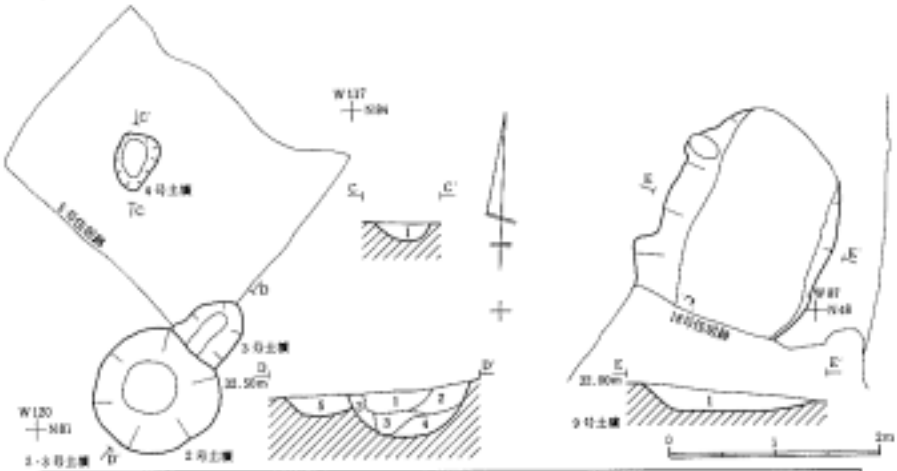


8号土壙

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土・炭・地山粒を全体へ含む。しまりあり。
2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	しまりあり。地山粒を全体へ含む。炭も微量に含む。
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	しまりあり。地山粒・炭をわずかに含む。
4	褐色(10YR4/4)	シルト	壁の崩落で壁の表層土をブロック状に含む。炭もわずかに含む。
5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	壁の崩落で壁の表層土をブロック状に含む。
6	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	しまりなし。地山粒・炭化粒をわずかに含む。
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト	しまりなし。地山粒をわずかに含む。

10号土壙

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒を少量含む。
2	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化粒を少量含む。
3	黄褐色(10YR5/6)	粘土質シルト	ローム層の崩落土。
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
5	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	ブロック状の崩落土。
6	暗褐色(10YR3/4)	シルト	しまりあり。



1・3号土壙

層No.	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む。
3	褐色(10YR4/6)	シルト	
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物を含む。

2号土壙

4号土壙

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	

3号土壙

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物を少量含む。地山粒をわずかに含む。

第62図　土壙(2)

立ち土がる。長軸は等高線とほぼ直交する。形態、規模からいわゆるＴピットと考えられる。
〔堆積土〕基本的に灰黄褐色～暗褐色のシルト質土が堆積し、土色、混入物の違いから七枚の層に分かれる。いずれも自然堆積土で、下層では締まりがない。
〔出土遺物〕堆積土 1～3 層から弥生土器、師器の小破片が出土している。第 64 図 1 は堆積土から出土した凹石である。

☆第 11 号土壙

〔位置・確認面〕調査区南端付近ほぼ中央の地山面で確認された。
〔形態・規模〕平面形は長軸約 1.1m、短軸約 1.0mの楕円形を呈し、深さは約 15 ㎝である。底面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。
〔堆積土〕暗褐色のシルト質土が一層、自然堆積している。
〔出土遺物〕底面から遺物は出土していない。堆積土から弥生土器(第 66 図 10・16、第 67 図 19)が、その他に土師器の小破片が出土している。

☆12 号土壙

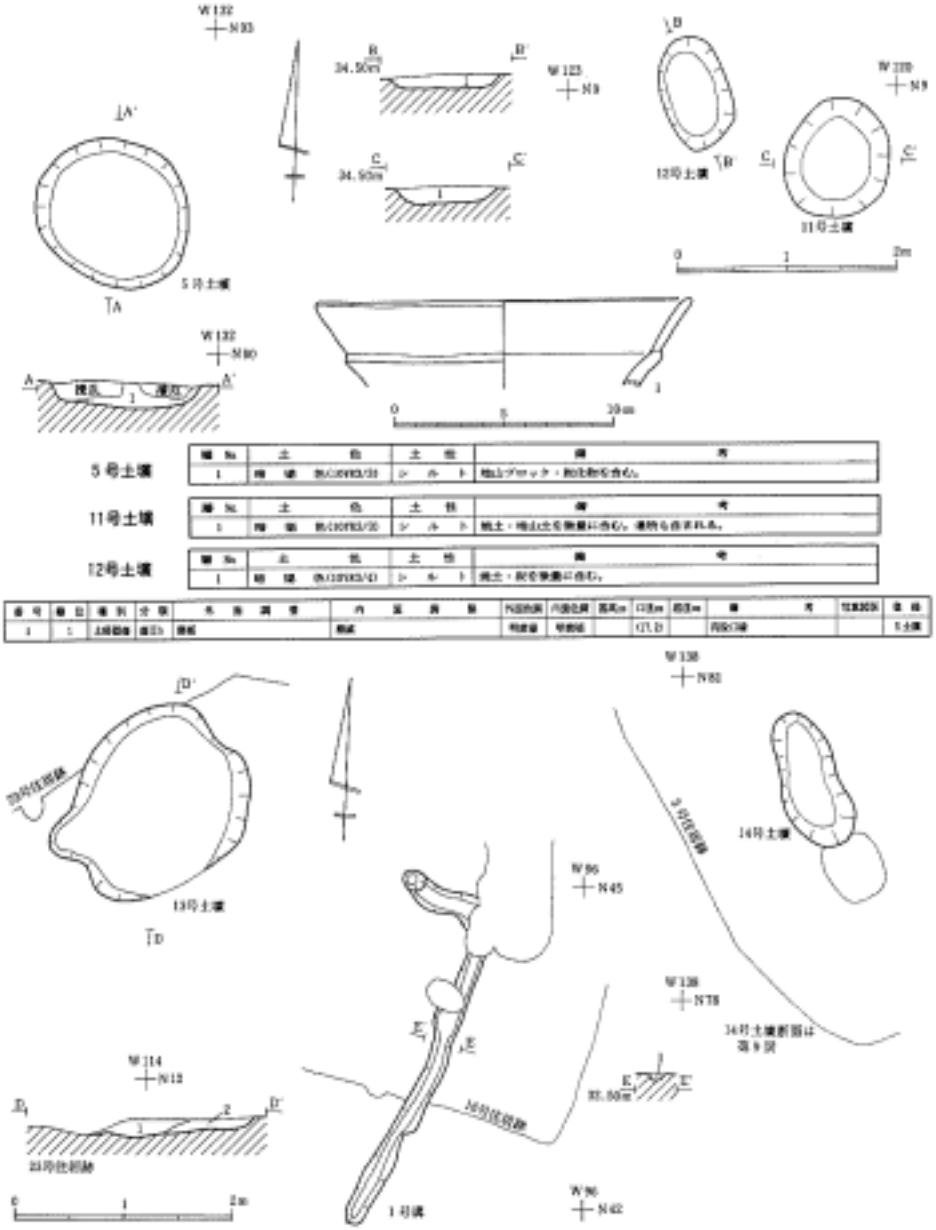
〔位置・確認面〕調査区南端付近ほぼ中央の地山面で確認された。
〔形態・規模〕平面形は長軸約 1.0m、短軸約 0.6mの楕円形を呈し、深さは約 10 ㎝である。底面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。
〔堆積土〕暗褐色のシルト質土が一層、自然堆積している。
〔出土遺物〕底面から遺物は出土していない。堆積土から弥生土器（第 66 図 19）が、その他に土師器の小破片が出土している。

☆13 号土壙

〔位置・確認面〕調査区南端付近ほぼ中央の地山面で確認された。
〔重複〕23 号住居跡と重複し、これも新しい。
〔形態・規模〕平面形は南東側が削平により壁の立ち上がりが認められなかったため不明な点も多いが、現存で長軸約 1.9m、短軸約 1.6mの不整楕円形を呈する。深さは約 15 ㎝である。壁は緩やかに立ち上がり、床面には凹凸が認められる。
〔堆積土〕暗褐色もしくは黒褐色のシルト質土が二層堆積している。いずれも地山粒、焼土粒を含み、自然堆積土である。
〔出土遺物〕底面から遺物は出土していない。堆積土から弥生土器、土師器の小破片が出土している。

☆14 号土壙

〔位置・確認面〕調査区北側ほぼ中央の 3 号住居跡堆積土中で確認された。



5号土壌

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック・炭化粒を含む。

11号土壌

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地土・地山土を微量に含む。遺物も含まれる。

12号土壌

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地土・炭を微量に含む。

番号	番号	種別	分類	名称・調査	内容・所見	内面色調	内面色調	高さm	口径m	底径m	備考	写真図版	番号
1	1	土師器	甕Ⅲ	復原	復原	明黄褐	明黄褐		(17.1)		内面ケズリ		5土壌

13号土壌

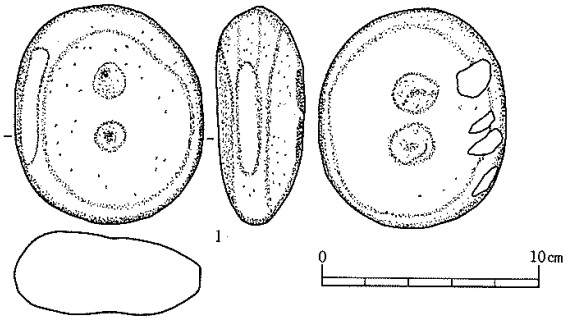
層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	しまりあり。地山粒・焼土粒を含む。
2	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	しまりあり。地山粒・焼土粒・炭化粒を含む。1層よりやや粘性が強い。

14号土壌

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	しまりあり。地山粒・焼土粒を少量含む。

（1号溝の土層注記は第40図）

第63図　土壌(3)・溝



番号	出土地点	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	備考	写真図版
1	10土壙	磨・凹石	10.2	8.7	4.1	490	石英安山岩		24-18

第64図　10号土壙出土石器

〔重複〕3号住居跡と重複し、これよりも新しい。

〔形態・規模〕平面形は長軸約1.3m、短軸約0.6mの中央部のややすぼまる不整楕円形を呈する。深さは約55㎝である。壁は、底面近くはほぼ垂直に立ち上がり、上部はやや急激に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕黒褐色の粘土質シルト質土が一層、自然堆積している。

〔出土遺物〕底面から遺物は出土していない。堆積土から弥生土器、土師器の小破片が出土している。

☆1号溝

〔位置・確認面〕調査区南東側の地山面および16住居跡堆積土中で確認された。

〔重複〕16号住居跡と重複し、これよりも新しい。

〔形態・規模〕北隅の一部を攪乱によって失っているが、現存長は北北東一南南西の軸に約3.2mあり、北端で90°西北西方向に約1.0m程曲がる。幅は14～25㎝、深さ約6㎝で断面形は『U』字状を呈する。

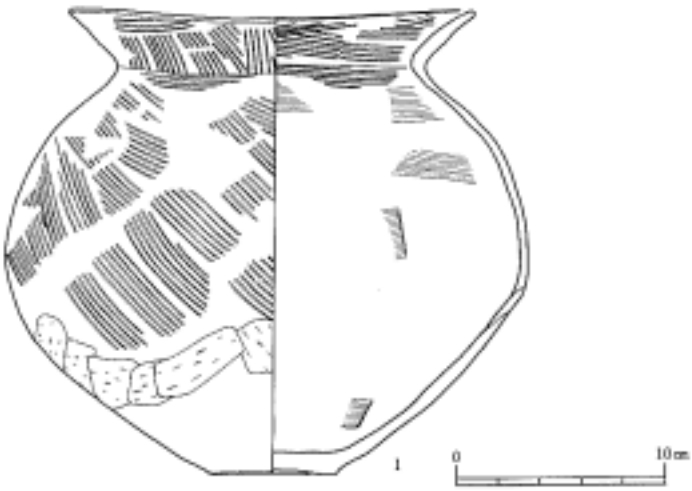
〔堆積土〕黒褐色の粘土質シルト質土が一層、自然堆積している。

〔出土遺物〕底面から遺物は出土していない。堆積土から弥生土器、土師器の小破片が出土している。

第3節　その他の出土遺物

第65図は出土位置不明の土師器甕である。

また第1表に未実測の弥生時代以前の石器属性表を記した。



番号	種別	種別	分類	外面調整	内面調整	内面調整	残存状況	内面状況	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版	登録
1		土師系	壺(V)	(頸) 単位目 (胴下部) ナデ	(頸) 横ナデ (胴) ハケ		略完形	略完形	21.9	10.0	4.9		31-1	図版-1

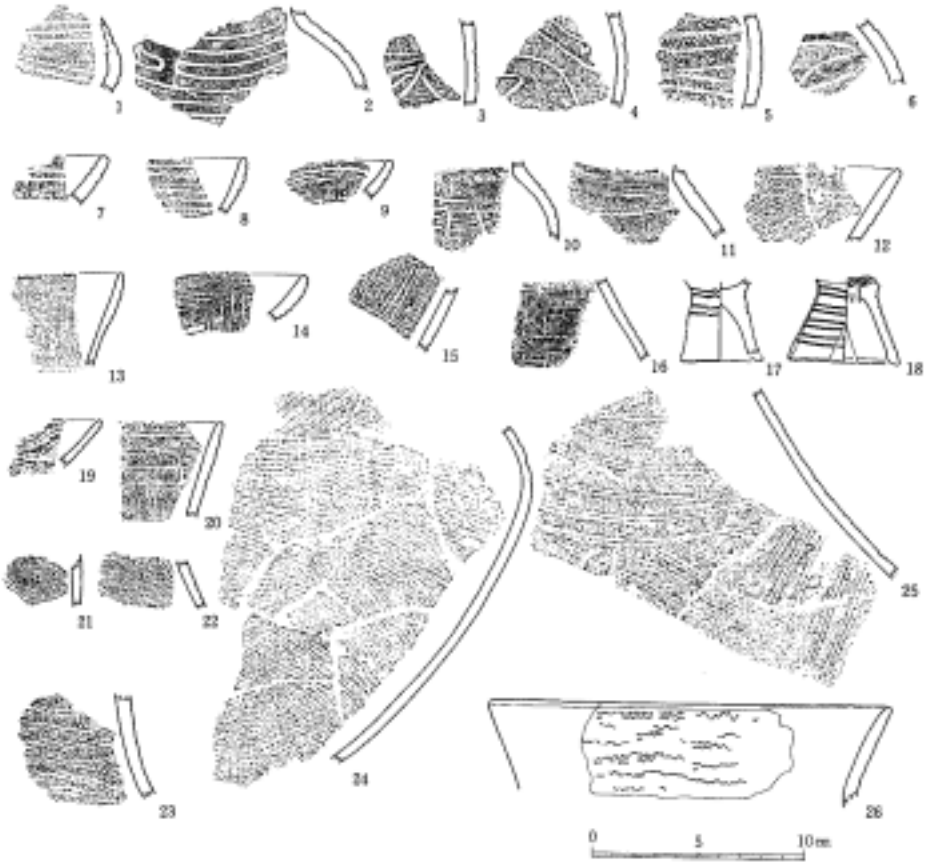
第65図　出土位置不明の土器

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	小柱穴埋土	石鏃	(1.7)	1.3	0.4	0.8	砂質頁岩	両端折損 孔2ヵ
2	2区5～11層	石鏃	(1.6)	(1.5)	0.4	0.9	砂質頁岩	両端折損
3	2区1層	石鏃	(1.9)	(1.5)	(0.7)	0.8	砂質頁岩	破片
4	9区1・2層	石鏃	(2.0)	(1.0)	(0.4)	0.3	砂質頁岩	破片
5	17区1層	石鏃	(2.4)	(1.0)	(0.4)	0.3	砂質頁岩	破片
6	4区1層	石製品	(7.3)	(5.0)	1.2	55	砂質頁岩	平板
7	表土	石製品	(3.2)	(4.0)	(0.8)	25	砂質頁岩	破片

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	2区5～11層	石斧	(7.0)	5.5	(2.0)	140	石英斑岩(砂質頁岩)	刃縁部？基部欠損
2	1区1～2層	石斧	(8.5)	6.0	3.0	170	石英斑岩(砂質頁岩)	欠損 基部欠損
3	9区1・2層	石斧	(8.2)	6.0	2.6	210	石英斑岩(砂質頁岩)	欠損 基部欠損
4	表土	石斧	(8.0)	6.7	2.3	190	石英斑岩(砂質頁岩)	欠損 基部欠損
5	2区3層	石斧	(3.6)	6.0	1.0	40	石英斑岩(砂質頁岩)	欠損 基部欠損
6	1区1層	石鋸	(10.7)	(7.0)	3.2	304	石英斑岩(砂質頁岩)	未製品
7	2住埋	石鋸	(3.1)	(0.7)	(2.4)	92	石英斑岩(砂質頁岩)	破片
8	表土	石鋸	(8.4)	(3.0)	(2.5)	200	石英斑岩(砂質頁岩)	基部？欠損

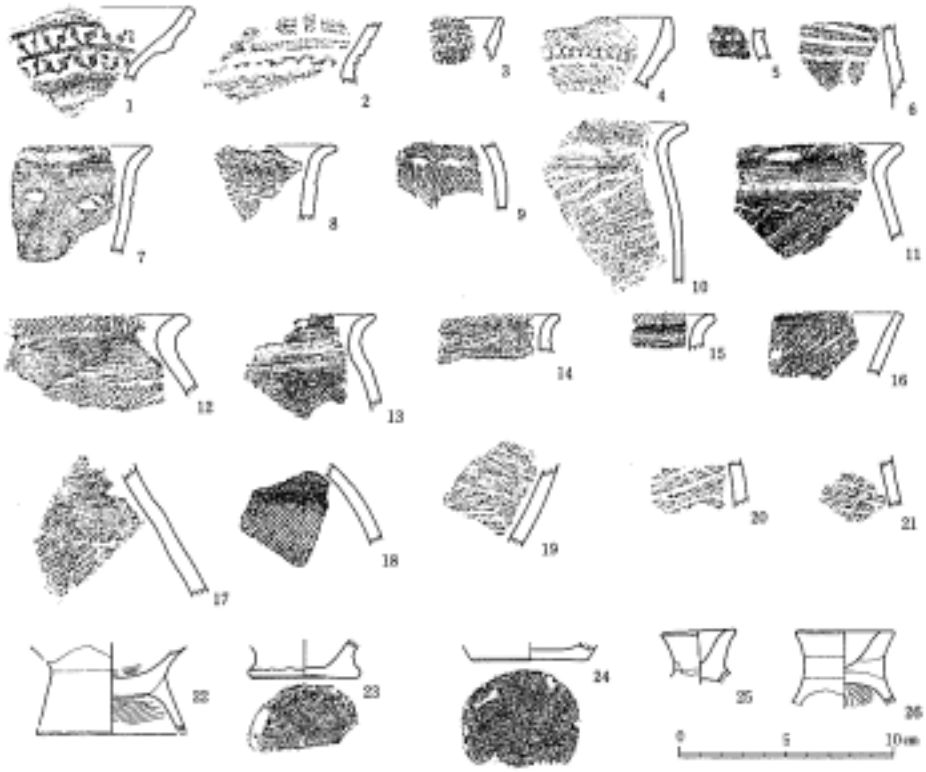
番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	3区埋甕内	敲製石斧	(7.7)	6.9	3.5	220	石英斑岩(砂質頁岩)	未成品？再加工品？

第1表　弥生時代以前の石器属性表



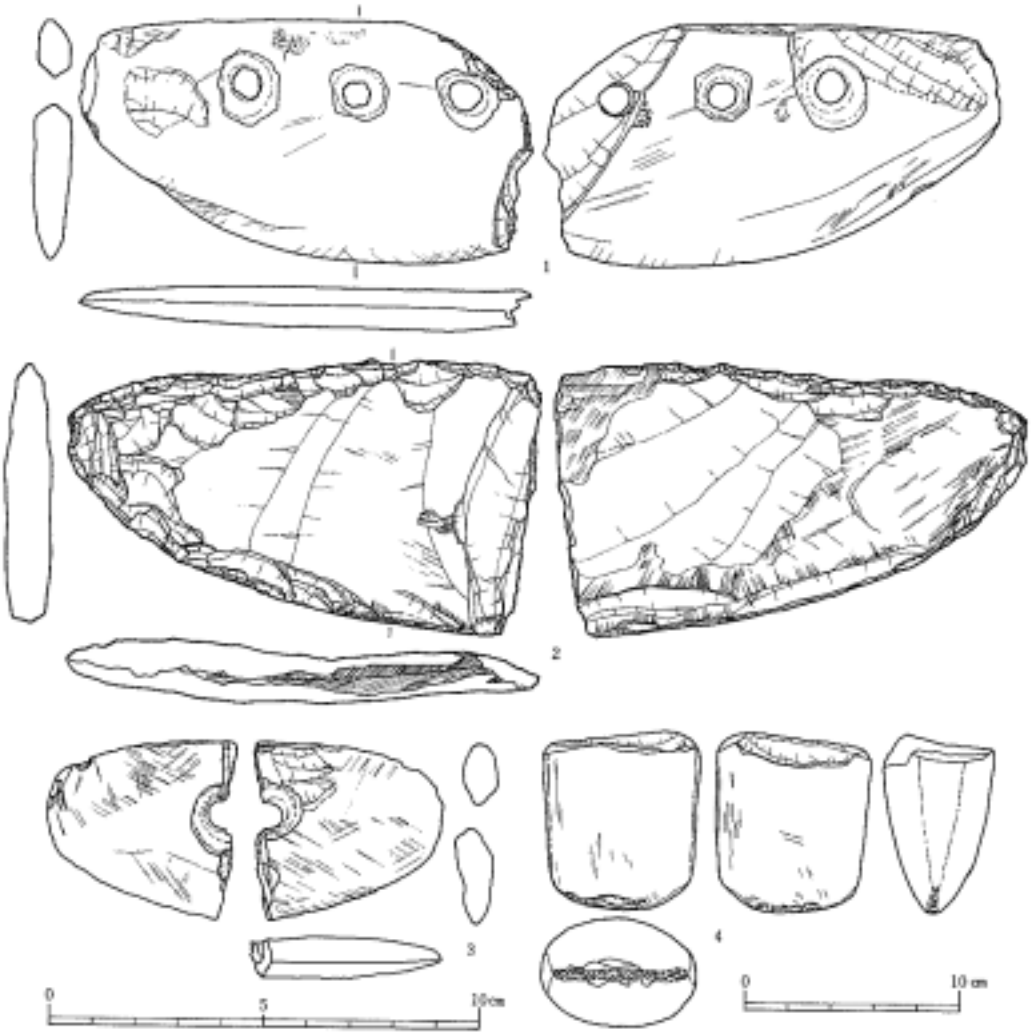
番号	出土地区	層 位	登録No.	番号	出土地区	層 位	登録No.
1	25号住居	1～3層	1	14	24号住居	埋戻土	14
2	7号住居	床面	2	15	10号住居	2層	15
3	9号住居	2層	3	16	11号土壙	埋戻土	16
4	24号住居	不明	4	17	1号貯穴	1層	17
5	23号住居	5～11層	5	18	25号住居	床面	18
6	24号住居	床面	6	19	12号土壙	埋戻土	19
7	24号住居	床面	7	20	17号住居	1層	20
8	24号住居	床面	8	21	19号住居	2層	21
9	1号貯穴	1層	9	22	9号住居	掘り方	22
10	11号土壙	埋戻土	10	23	2号住居	1層	23
11	9号住居	1・2層	11	24	1号貯穴	2層	24
12	7号住居	床面	12	25	1号貯穴	2層	25
13	2号住居	3層	13	26	1号貯穴	1・2層	26

第66図　弥生土器（1）



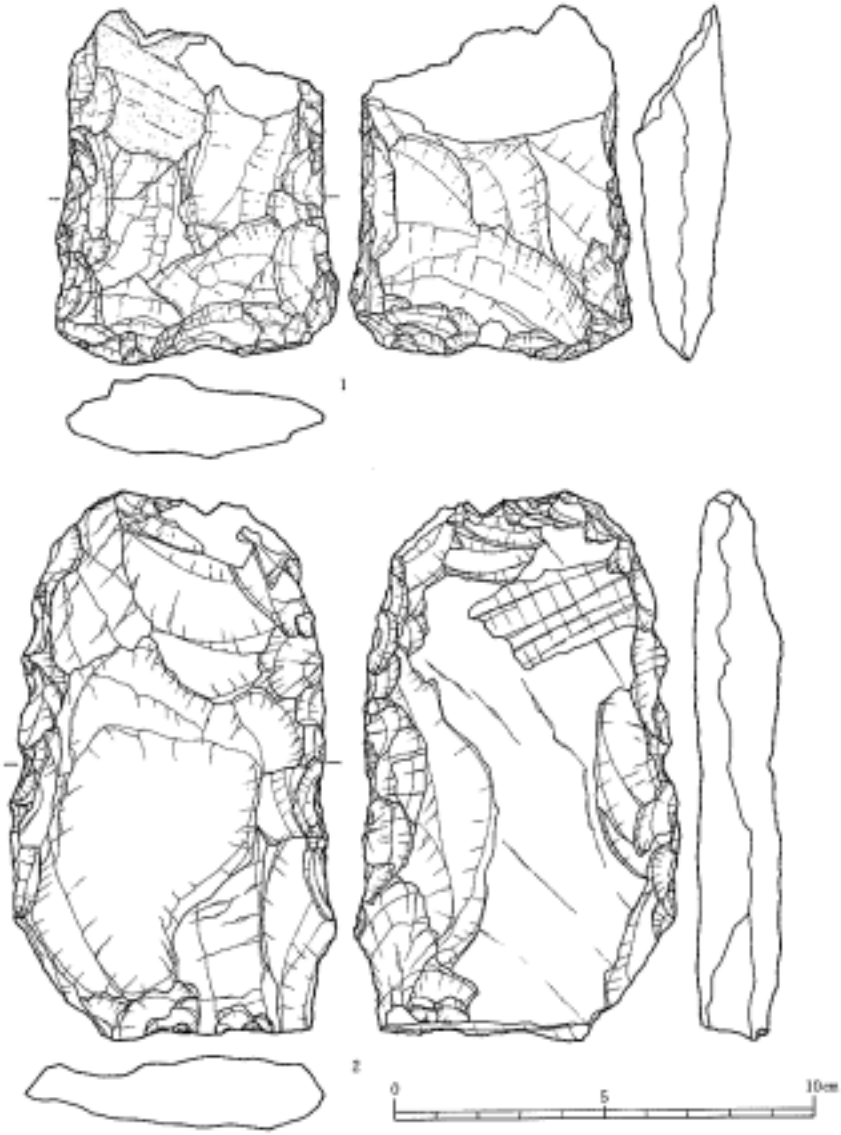
番号	出土地区	層位	残存%	番号	出土地区	層位	残存%
1	23号住居	5～11層	27	14	2号住居	1層	49
2	3号住居	12層	28	15	1号貯穴	1層	41
3	6号住居	開口方	29	16	8号住居	床面	42
4	9号住居	貯蔵穴	30	17	23号住居	1～3層	43
5	3号住居	4～6層	31	18	9号住居	1・2層	44
6	23号住居	5～11層	32	19	11号小溝	暗褐土	45
7	24号住居	1層	33	20	13号住居	1層	46
8	23号住居	貯蔵穴	34	21	1号貯穴	1層	47
9	24号住居	1層	35	22	23号住居	1・2層	48
10	1号貯穴	1層	36	23	15号住居	1～3層	49
11	15号住居	1～3層	37	24	3号土壙	暗褐土	50
12	9号住居	1・3層	38	25	1号住居	床面	51
13	9号住居	3層	39	26	14号住居	床面	52

第57図　弥生土器 (2)



番号	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考	写真図版
1	1号住	石包丁	(16.0)	8.0	0.8	(80)	砂質頁岩	一端欠損、孔3ヶ	35-1
2	9号住2層	石包丁未成品	(11.0)	(8.4)	1.4	(155)	砂質頁岩	刃部研磨痕あり	35-6
3	10号1層	石包丁	(6.4)	(4.2)	0.8	(23)	砂質頁岩		35-3
4	5号住2層	太型蛤刃石斧	(8.4)	(7.2)	(6.0)	(407)	石英粗粒砂質頁岩	刃部に敲打痕	35-1

第68図　弥生時代の石器（1）



番号	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考	写真図版
1	9柱2～2層	石鏃	(6.5)	6.7	0.3	(13)	石英(ふ)(石質凝灰岩)	薄形	20-6
2	表土	石鏃	13.2	7.8	0.4	215	石英(ふ)(石質凝灰岩)	厚形	20-7

第69図　弥生時代の石器（2）

第5章　考察

第1節　土器

Ⅰ　弥生土器

調査区内の表土および遺構堆積土から弥生土器が出土している。遺構に伴うものはなく、時期的には弥生時代各時期のものがみられる。器種としては鉢・甕・壷・蓋などがあるがいずれも破片資料であり、全体の器形や文様構成がわかるものは少ない。ここでは部位や文様が明瞭な破片を摘出し図示した。これらを主に文様の特徴・施文方法によって分類・整理すると以下のようになる。

1類：変形「工」字文が描かれているもの(第66図1・2)

2類：沈線と擦り消し縄文による文様が描かれているもの(第66図3〜7)。

3類：2本1単位の平行沈線により幾何学的な文様が描かれているもの(第66図8〜25)。

4類：多条の平行沈線により波状の文様が描かれているもの(第67図26)。

5類：刺突による文様がみられるもの(第67図1〜5)。

6類：太い沈線により文様が描かれているもの(第67図6)。

7類：地文の縄文以外に文様をもたないもの(第67図7〜21)。

8類：文様をもたないもの(第67図22〜26)。

このうち量的に主体を占めるのは2本1単位の平行沈線により文様が描かれた3類であり、これらの中には平行沈線の間隔が広いもの（第66図8〜16）と狭いもの（第66図17〜25）がある。ただし両者の相違は微妙である。また、4類は3本以上の櫛歯状工具により小波状文が描かれたもので、3類とは工具の種類・文様のモチーフが大きく異なる。

7類はいずれも甕・壺の破片で、口縁部の残るものはいずれも端部に縄文が加えられ、頸部がヨコナデにより調整されている。文様要素は乏しいが、肩部に刺突が加えられるもの(第67図7〜9)、綾絡文がみられるもの(第67図10〜12・17)などがある。地文の縄文は、第67図10・16・19がより糸、第67図20・21が網目状がより糸で、他はいずれも斜縄文(ＬＲ)である。底部破片の布目痕跡が残っている。

以上の土器には弥生時代各時期のものが含まれている。このうち1〜6類は文様・施文方法の特徴が明瞭であり、それぞれ、宮城県地域周辺における弥生土器編年(伊東：1957・須藤：1987)を参考にして、おおよその編年的位置を推定することができる。すなわち、1類は驢沼(寺下囲)式、2類は枡形囲式、3・4類は円田式・十三塚式、5・6類は天

王山式に比定される。7・8 類はこれらのいずれかに伴うものと考えられるが、文様要素が少なく明確な時期比定は困難である。

Ⅱ　古墳時代の土器

古墳時代の土器は、2・3・4・6・8・9・10・11・19・21・22・23・24 号住居跡から出土しており、高坏・器台・坏・甕・甑・蓋・ミニチュア土器の各器種がある。

この内、壷としたものには複合口縁・有段口縁のものの他に単純口縁のものがある。今回出土した単純口縁のものはいずれも口頸部の破片にすぎず器の全容は知り得ないが、類例にあたると頸部のくびれが大きく口頸部が長く延びる器形のものである。器面調整は外面にヘラミガキを主体に施される。一方甕としたものは、口縁部は短く「く」の字状に外傾し、壷としたものに比べて頸部のくびれが小さいものである。器種調整も外面はハケメを主体に施される。このような視点から今回出土した資料は器形的にも器面調整からも所謂壷と甕とは区別されると考えられる。本報告では以上の観点から壷と甕を区別したため、壷には従来甕とされていたものも含まれる。

以下、これらの古墳時代を器種ごとの特徴に基づき、その編年上の位置を考えていく。

(1) 土器の分類

分類にあたっては、器形に基づいて大別し、細部の形態・器面調整から細分した。

[高坏]

図示できたものは 3 点である。このうち、2 点は坏部のみ残存するに過ぎない。そのため坏部・脚部が残る 1 点のみを扱う。

坏部が無段丸底で、脚部が円錐台状に広がるものである。

脚部に円窓が 4 個(破損のため数は円窓の位置から推定)ある。器面調整は、坏部外面にハケメの後にヘラミガキ、内面は磨滅のため不明である。脚部外面は丁寧なヘラミガキが、内面にはナデが施される。

[器台]

図示できたものは 2 点である。いずれも同じ形態を呈する。

小型のもので、受け部が無段丸底を呈し、脚部は外反気味に広がるものである。

口縁部は軽く内湾する。受け部と脚部の間には貫通孔がある。脚部には、円窓が 3 個ある。器面調整は外面にヘラミガキが施される。内面は磨滅のため不明である。

[坏]

図示できたものは 16 点である。いずれも平底のものであるが、口縁部・胴部の形態に大

きな違いがあるものが認められる。胴部と口縁部を画すくびれの有無と位置・最大径の所在により、大きく分かれ、更に口縁部の形態から細分される。

第Ⅰ類:器のほぼ中央にくびれをもち、最大径が口縁部にあるもの

単純口縁のものである。口縁部は長く延び、わずかに内湾しながら外傾する。胴部は内湾しながら立ち上がる。所謂、坩状の坏(丹羽：1985)と呼ばれるものである。器面調整は、外面に丁寧にヘラミガキが施されるもの・ヘラミガキを主体とし胴部下端にヘラケズリが施されるもの、内面にはヘラナデ・ヘラミガキが施されるものがある。

Ⅱ類：器の上部にくびれをもち、最大径が胴部にあるもの

器の上部にくびれをもち、口縁部は短い。口縁部の形態・最大径の位置の違いから3つに細分される。器面調整の明らかなものは、外面にヘラミガキを主体とし、胴部下端にヘラケズリ、内面は口縁部にヘラミガキもしくはハケメ、胴部にヘラナデもしくはハケメが施される。

Ⅲ類：器の上部にくびれをもち、最大径が胸部にあるもの

口縁部は特に短く、胴部が内湾しながら立ち上がり、強い膨らみをもつ。小型の甕もしくは壷に似る器形の様相を示す。口縁部には、単純口縁・複合口縁の2種が見られ、これを細分する。

ａ類:単純口縁のもの

口縁部は僅かに外傾する。器面調整は、内外面に丁寧なヘラミガキが施される。

ｂ類：複合口縁のもの

口縁部は短く、やや内湾しながら外傾する。器面調整は、外面は口縁部にヨコナデ、胴部にナデ、内面にはナデが施される。

Ⅳ類：器に口縁部と胴部を画すくびれをもたず、最大径が口縁部にあるもの

胴部から口縁部にかけて直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁部に最大径がある。単純口縁である。外にハケメが施されるものと、内面にヘラナデが施されるものがある。

[壷]

図示できたものは13点である。胴部以下を欠損しているものが多く、器の全容をつかめるものが少ない。そのため、口縁部の形態から複合口縁のもの・有段口縁のもの・単純口縁のものの3つに分ける。また細部の形態の違いからいくつかに細分する。

第Ⅰ類：複合口縁のもの

ａ類：口縁部に装飾のあるもの

頸部から口縁部へゆるやかに外傾し、口縁部に断面三角形で二条五単位の棒状浮文が縦に貼り付く。胴部はほぼ球形を呈するが、最大径はやや下位に位置する。底部は平底でわ

ずかに下方へつくりだされている。器面調整は、外面は口頭部・胴部ともにハケメの後に丁寧なヘラミガキが、内面は口頸部にハケメ、胴部にヘラナデが施される。

b 類：口縁部に装飾のないもの

口頸部はやや外傾する。胴部を残すものはほぼ球形を呈し、最大径がほぼ中央にある。底部は平底でわずかに下方につくりだされている。器面調整は、口頸部外面にハケメの後にヘラミガキもしくはヨコナデ、胴部にハケメの後にヘラミガキ、口頸部内面にはヘラミガキもしくはハケメ、胴部にヘラナデが施される。外面のヘラミガキはⅠa 類に比べ丁寧さにかける。

Ⅱ類：有段口縁のもの

a 類：有段部分の外面に段を形成するもの

口頸部の破片であり、全体の器形は不明である。口縁部が頸部外面に接合され明瞭な段を形成する。器面調整は磨滅が著しいが、わずかに外面にハケメの痕が認められる。

b 類：有段部分の外面に稜を形成するもの

口頸部から胴部にかけて残存する。口縁部が頸部内面に接合され稜もしくはゆるなかな段を形成する。最大径は胴部にある。器面調整は、内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。

Ⅲ類：単純口縁のもの

いずれも口頭部のみ残存し、全体の器形は不明である。口頸部は外反するものと内湾気味に外傾するものがある。器面調整は磨滅が著しく不明な点が多いが、内外面にヘラミガキが観察できる。

[甕]

図示できたものは、32 点である。底部が小さな平底のものと台が付くものがある。いずれも頸部は「く」の字状に屈曲し短く外傾する口縁部に至る。底部が平底のものは、胴部の形態から最大径が上位にある倒卵形・最大径がほぼ中央にある球形・最大径が下位にある茄形のものに分ける。更に、球形のものは、胴部外面の器面調整にハケメを主体にするものとヘラケズリを主体にするものに細分する。また、多くが胴下部に製作段階の接合の痕跡を持ち、薄手につくられており、共通の特徴を持つのに対し、1 点のみであるがこの範疇で捉えることのできない厚手で、手捏ね風の小型のものがある。

第Ⅰ類：底部が平底のもの

a 類：胴部が倒卵型を呈するもの

口縁部の形態は、口唇部に向うにしたがい薄くなるもの・口唇部が断面を角形に面とりし厚さがあるものの 2 種類が認められる。器面調整は、外面は口縁部にハケメもしくはヨコナデ、胴部にハケメもしくはハケメを主体とし下端にヘラケズリが施されるものがある。

内面は口縁部にハケメ、胴部にヘラナデもしくはヘラケズリが施される。

b類：胴部が球形を呈するもの

口縁部の形態には、a類同様に2種類が認められる。器面調整の違いから、1・2類に分ける。

1類：胴部外面の器面調整にハケメを多用するもの

器面調整は、外面は口縁部にヨコナデもしくはハケメ、胴部にハケメを主体とし、内面は口縁部にハケメもしくはヘラナデ、胴部にヘラナデが施される。

2類：胴部外面の器面調整にヘラケズリを多用するもの

胴部のみ残存している。内面は胴部にヘラナデが施される。

c類：胴部が茄形を呈するもの

厚手で手捏ね風の小型のもので、口縁部を欠損している。器面調整は、外面は胴部にハケメが、内面は口縁部にはヘラナデが施される。

Ⅱ類：底部に台の付くもの

胴部が球形を呈し底部に円錐台状の台が付く。器面調整は、外面は口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリ、脚部にハケメが、内面は口縁部にヨコナデ、胴部・脚部にヘラナデ、が施される。

［甑］

1 点のみである。複合口縁であり、口縁・胴部は直線的に外傾し鉢状を呈する。底部は平底で単孔が穿たれている。器面調整は、胴部外面に縦方向で細かなハケメが、内面にはヘラナデが施される。

［蓋］

1 点のみである。頭頂部が中実で円筒形を呈し、胴部は外反しながら長く伸びる。頭頂部に横方向の貫通孔を持つ。器面調整は、外面にヘラミガキの後に一部ナデが、内面にはハケメが施され、頭頂部上面には木葉痕が見られる。

[ミニチュア土器]

図示できたものは、6 点ある。これらは高坏形・坏形・壷形・コップ形の各種がある。ここでは、分類せずに説明を加える。

（高坏形のもの）

脚部のみの破片であるが、高坏もしくは器台を模したものと思われる。脚部には円窓が 1 個残存している。磨滅が著しく、器面調整は不明である。

(坏形のもの)

口縁部のみの破片である。口縁部は内湾気味に立ち上がり先端で屈曲を持ちながら外反

する。磨滅が著しく、器面調整は不明である。

（壷形のもの）

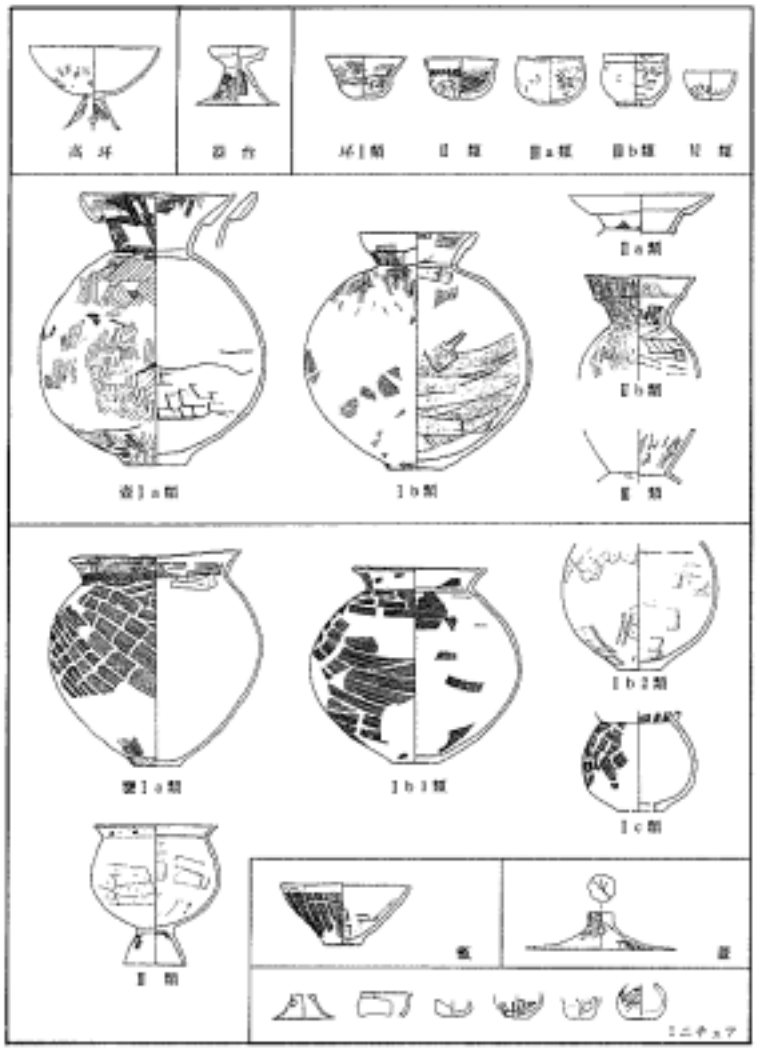
口縁部を破損しているが、壷を模したものと思われる。胴部は球形で、底部は平底である。器面調整は外面にナデが施される。内面は不明である。

（コップ形のもの）

底部のみで大部分を破損している。平底で内湾しながら立ち上がる。器面調整はナデが施される。

(2) 各住居における出土状況と土器の共伴関係

ここでは、分類を行った土器の各遺構における共伴関係を検討する。土器の同時性を検



第70図　古墳時代の土器分類図

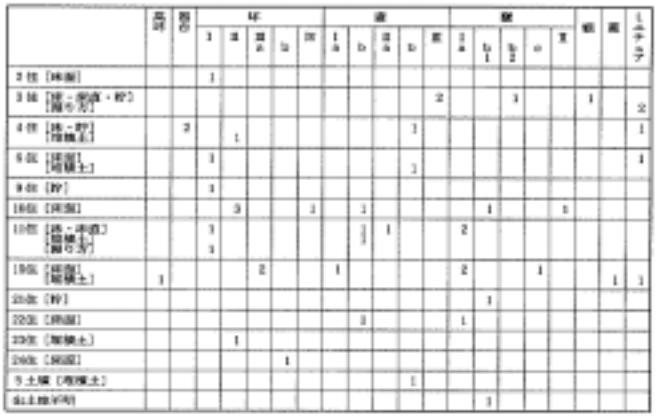
証するには床面出土の一括資料が挙げられる。また、出土状況より床面直下(以下、床直と省略する)・貯蔵穴状ピット堆積土出土の資料も床面の遺物と時間差が少ないと考えられ、床面出土の一括資料に準じて扱う。

東北地方南部の土師器編年は氏家和典氏によってその大綱が示され(氏家和典：1957)、その後研究の蓄積によって内容が深められている。この編年によれば、高坏、器台、坏、壷、甕、甑、ミニチュアの各土器は、その器形の特徴と共伴関係から塩釜式に、平底の坏部のみ残存する高坏(第15号1・第19図1)は塩釜式もしくは南小泉式に比定される。蓋は共伴する遺物がなく、時期を限定することは難しい。しかし、器面に装飾がなく、胎土・器面調整の点で他の土器との違いを指摘することはできない。ここでは、この蓋も他の器種と同様に塩釜式期の可能性が高いとみてよいであろう。

各遺構における土器の出土状況をまとめると、第2表のようになり2・3・4・6・9・10・11・19・21・22・23号住居跡出土遺物はそれぞれ、坏Ⅰ類・Ⅱ類・壷Ⅰb類・Ⅱb類・甕Ⅰa類・Ⅰb1類を媒介にまとまりが見られ、大きくはある一定の時間幅の所産と考えられる。

宮城県では、塩釜式土器は資料の蓄積とともに、時間差の存在が指摘されるようになり(藤沼邦彦：1971、丹羽・柳田・阿部：1974、手塚均：1980、太田昭夫：1980 など)、特に近年には丹羽茂氏が塩釜式細分の編集案を提示された(丹羽：1983・1985)。この編年案は基本的に妥当性をもつものと支持されている(次山淳：1989、藤沢敦：1990,1992、など)。

そこで本稿では、これらの塩釜式内の時間差について以下考えていくこととする。しかし、塩釜式の土器形成は器種が豊富であり、これらの編年上の時間差は器種のセット関係



第2表　野田山遺跡出土土器の各遺構における土器組成

で述べられなくてはならない。そのため、比較的出土量が多い10・11・19号住居跡出土遺物について中心に検討を加える。また、4・3号住居跡の遺物については、個別に類例と比較していく。

＊　10・11・19号住居跡の概要と編年的位置

【10号住居跡】

坏Ⅱ類・Ⅳ類・壷Ⅰb類・甕Ⅰb1類・Ⅱ類がある。

他に、甕では口縁部から頸部にかけてのみしか残存せず、分類することはできなかったが、口縁端部がつまみだされ「く」の字状に外反し、口唇部が面とりされ厚くなり、器面調整にヨコナデが施されるものが出土している(第25図1)。外頸部の器面調整にはハケメが施される。

	坏	壷	甕
10号住居跡床面	Ⅱ・Ⅳ	Ⅰb	Ⅰb1・Ⅱ
11号住居跡床面, 床直, P5	Ⅰ	Ⅰb・Ⅱa	Ⅰa
19号住居跡床面	Ⅲa	Ⅰa	Ⅰa・Ⅰc

第3表　10・11・19号住居の土器組成

坏Ⅱ類に類似のものは、蔵王町大橋遺跡3号住居跡床面、貯蔵穴状ピット(太田：1980)、亘理町宮前遺跡53号住居貯蔵穴(丹羽:1983)、色麻町色麻古墳群11号住居跡床面(古川一明:1982、註1)などから出土している。

甕Ⅰb1類に類似のものは亘理町宮前遺跡1号住居跡P1・38号住居跡床面(丹羽：1983)・名取市十三塚遺跡C-78 2号住居跡床面・色麻古墳群11号住居跡床面・仙台市遠見塚古墳群12トレンチ（結城・工藤：1984）から出土している。

口縁端部がつまみだされ「く」の字状に外反しヨコナデが施されるものは、口縁つまみだしの北陸系の様相(法政大学文学部考古学研究室編：1985、阿部朝衛：1989)に類似する。なお、北陸系とされる口縁つまみだしの甕は、台付のものと推定されるものが仙台市六反田遺跡 4号住居跡床面（佐藤洋：1987）から出土している。

甕Ⅱ類とした台付の甕は大橋遺跡1号住居跡床面，貯蔵穴状ピット・3号住居跡床面，貯蔵穴状ピット・今泉城第19号土壙から、台付のものと携定されるものは先述の六反田遺跡4号住居跡床面・古川市留沼遺跡竪穴遺構底面(手塚：1980)から報告されている。

【11号住居跡】

坏Ⅰ類・Ⅰb類・Ⅱa類・甕Ⅰa類がある。

他に、甕では脚部付近のみである台付甕も出土している(第29図1・第31図4)。壷Ⅱa類は逆位に据え炉の支脚に再利用されたものである。土器が転用されるケースは、弥生時代後期から古墳時代前期にかけては比較的多種多様なものがみられるとされる(桐生直彦：1988)(註2)。台の部分のみが残存する甕も、残存の形態から高坏に転用された可能性がある。

甕Ⅰa類に類似のものは志波姫町鶴ノ丸遺跡7号住居跡床面（手塚均：1981）・仙台市安久東遺跡方形周溝墓周溝内堆積土（土岐山武：1980）から出土し、大橋遺跡1号住居跡床面，貯蔵穴状ピット・遠見塚古墳12トレンチの例もこれに近い。

【19号住居跡】

坏Ⅲa類・壷Ⅰa類・甕Ⅰa類・Ⅰc類のみである。

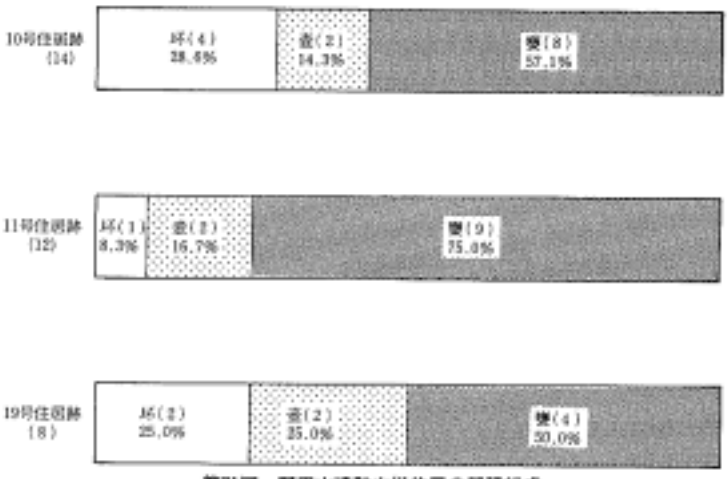
坏Ⅲ類に形態がよく似るものは、仙台市戸ノ内遺跡4号住居跡床面(渡部・主浜：1985)から出土している。しかしこの資料は器面調整に、外面はヨコナデ・ナデが、内面にはヨコナデ・ヘラナデが施される点が相違する。

壷Ⅰa類のように口縁部に棒状浮文の装飾が貼り付く例は、戸ノ内遺跡3号住居床面から刻み目のあるものが、名取市清水遺跡10号溝堆積土(丹羽・小野寺・阿部：1981)から断面円形の一条だけのものが、また遠見塚古墳12トレンチから実測図は未公表であるが、断面三角形で素面多条のものが出土している（註3)。壷Ⅰa類の口縁部装飾の特徴は、これらの資料の中では、遠見塚古墳12トレンチのものにより近いと思われる。

甕Ⅰa類に類似のものは鶴ノ丸遺跡7号住居跡床面・安久東遺跡方形周溝墓周溝内堆積土から出土し、大橋遺跡1号住居跡床面，貯蔵穴状ピット・遠見塚古墳12トレンチの例もこれに近い。

甕Ⅰc類に類似のものは戸ノ内遺跡4号住居跡床面・仙台市伊古田遺跡14号住居跡床直(高橋勝也：1985）から出土している。

10・11・19号住居跡出土の土器は、いずれも甕の占める割合が高く全体50%以上を示



第71図　野田山遺跡火災住居の器種組成

す（第71図　野田山遺跡火災住居の器種組成）。しかも10・11号住居跡では壷Ⅰb類を、11・19号住居跡では甕Ⅰa類を媒介にまとまりがある。しかし反面、各住居ごとに甕や坏に組成の違いも認められる。これらの差異のもつ意味、10・11・19号住居出土の土器がある限定された時間幅の所産でありながら、器種の欠落、もしくはより細かな時間差により相違が生じたのか、二通りの可能性が考えられる。しかし、野田山遺跡10・11・19号住居跡は検出状況より火災により焼失したと考えられ遺棄の状態であると見てよい。すなわち、それぞれの住居の土器組成の違いは、より細かな時間差を含んでいる可能性を指摘できる。だが壷や甕を比較する限り、それぞれの個体には細かな差違はあるものの類似の特徴を共有することから、大きく連続し時間のものと捉えることができる。これらのことから、まず類似する特徴をもとに編年上の位置を検討し、更により細かな差異のもつ意味を考えていく。

塩釜式土器は器種が豊富であり、その編年はこれらの器種の総本で捉えていかなくてはならない。しかし、実際の出土状況では器種の欠落が多く見られる。本遺跡では甕の出土量が多く、宮城県内の塩釜式期の住居でもほぼ同様の現象である(第4表　宮城県内の塩釜式期住居・竪穴遺構の土器組成)。また一般に甕は、大型で、煮沸用に利用されるため装飾性が薄く、外来の影響が受け難く器形の変化が乏しいとされる。このことは逆に、甕の差異がもつ意味が極めて大きいことと理解できる。

甕に着目すると野田山遺跡の例は比較的大型のもので構成されている特徴をもつ。さらに甕Ⅰa類・Ⅰb1類はいずれも小さな平底で胴下部はやや内湾気味にやや急に立ち上が

	高坏	脚台	坏	壷	甕	鉢	ミニチュア	その他	合計
＊ 大橋遺跡1住 床面・貯蔵穴(ピット)内	0.3 (2)	6.1 (3)	6.1 (3)	18.2 (9)	54.5 (18)				100.0 (30)
留谷遺跡竪穴遺構 底面	4.3 (1)		4.3 (1)	13.0 (3)	74.1 (17)	4.3 (1)			100.0 (23)
戸ノ内遺跡4住 床面・P112.4・炉地設	40.0 (6)	13.3 (2)	20.0 (3)	6.7 (1)	13.3 (2)		6.7 (1)		100.0 (15)
宮前遺跡2住 床面・P11	13.3 (2)		6.7 (1)	13.3 (2)	60.0 (9)	6.7 (1)			100.0 (15)
＊ 野田山遺跡10住 床面			28.6 (4)	14.3 (2)	57.1 (8)				100.0 (14)
大橋遺跡3住 床面・貯蔵穴(ピット)			23.1 (3)		61.5 (8)			15.4 (2)	100.0 (13)
十三堂遺跡TB－C周溝 2住床面	7.7 (1)	15.4 (2)	38.4 (5)		30.8 (4)	7.7 (1)			100.0 (13)
＊ 野田山遺跡11住 床面・炉・床面・P5			8.3 (1)	16.7 (2)	75.0 (9)				100.0 (12)
弥勒寺遺跡11住 床面	8.3 (1)		58.0 (8)	25.0 (3)	16.7 (2)				100.0 (12)
＊ 留谷遺跡1住 床面	16.7 (2)		16.7 (2)	25.0 (3)	41.6 (5)				100.0 (12)

・　現在までに報告されている塩釜式期の住居・竪穴遺構のうち、炉跡・床面・貯蔵穴(ピット)などから共存関係にあるものを抽出し、図化しているものを対象とした。
・　このうち「＊」印のものは、火災により遺棄されたと判断されるものである。
・　なお、器種については本稿の基準に上る。（　）の数値は個体数を示す。

第4表　宮城県内の塩釜式期住居・竪穴遺構の土器組成

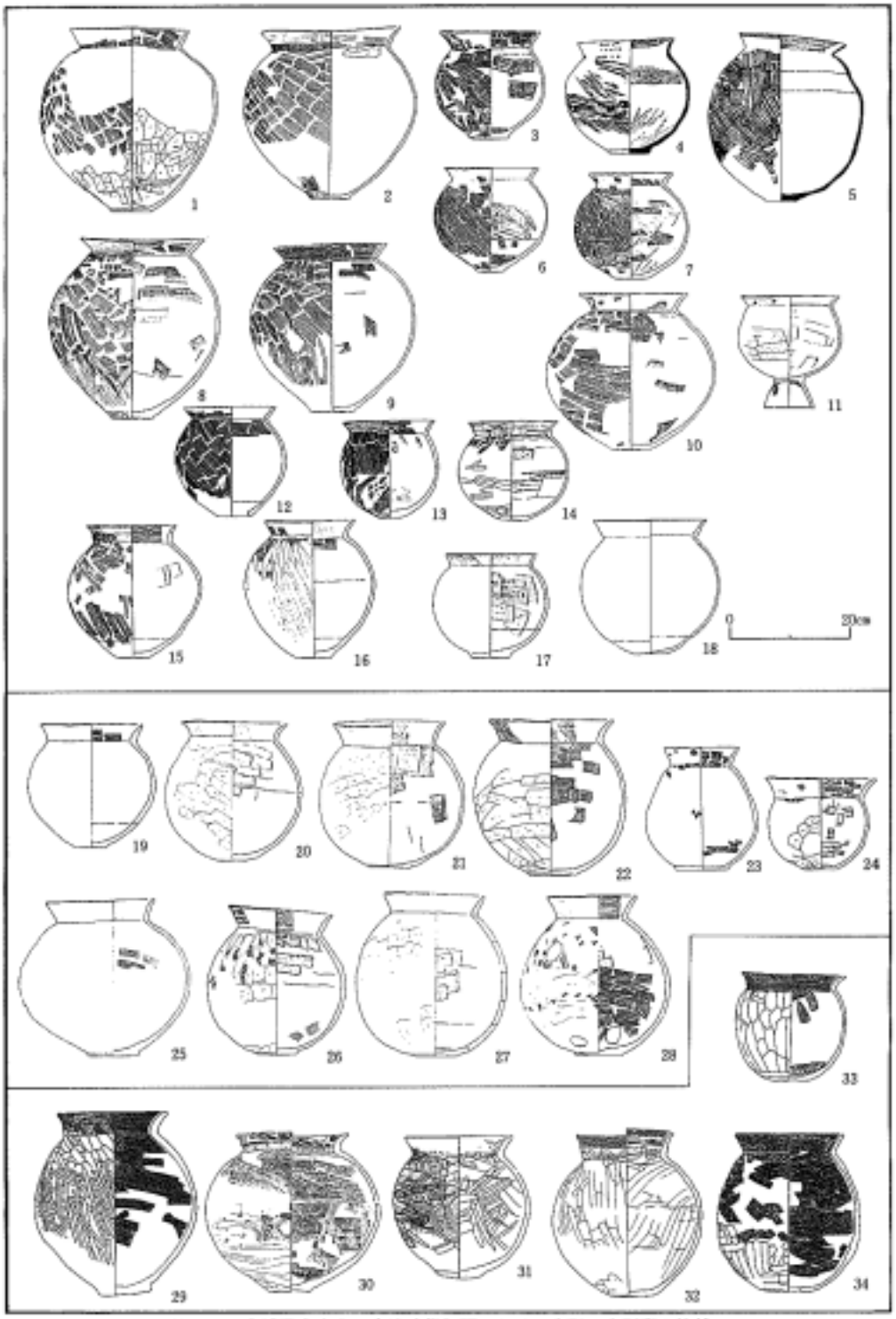
る。ところで10・11・19号住居跡では出土していないが塩釜式とされる甕には、平底もしくは丸底に近い平底で胴下部が強い丸みをもちながら立ち上がり、胴部の最大径が下位に位置する茄形のものがある。これらの特徴をもつ資料は、名取市西野田遺跡4号住居跡P1(丹羽・柳田・阿部：1974)（第72図23）・留沼遺跡竪穴遺構底面(第72図27・28)・口縁部を欠損するが宮前遺跡2号住居床面などから出土している(第72図　宮城県内出土、古墳時代初頭における大型・中型甕の比較)。

現在宮城県内では塩釜式に後続する南小泉式期の土器は、多賀城市山王遺跡西町浦地区ＳＸ058[旧第3号遺構](高倉淳：1981)(多賀城市史編纂委員会：1991)・同遺跡八幡地区ＳＸ230(佐藤・菅原：1991)出土のものが最古のものと理解されている(丹羽：1983)(岩見・佐藤：1991)。これらの遺跡からも、このような茄形の甕が出土している(第72図34)。

甕・胴下部に着目すると茄形の甕を含むまとまりの甕が底部から胴部にかけて膨らみが大きく、倒卵形・球形で構成されるまとまりの甕は胴下部はやや内湾気味に急に立ち上がる。また、前者に底部のつくり出しが顕著なものが多い傾向にある。

このような甕の差違は、大型の甕が底部から腰部にかけて最初につくられ、さらに上部を積み上げる工程を考えると、製作の初期の段階に生じたものと認められる。また甕が、主に煮沸用に利用されていることから、底部から腰部にかけての器形は煮沸形態・熱効率の差を反映し易い部位と想定できないか。このような視点で、11・19号住居跡の炉の検出状況を顧みると、壷を転用したり、土製支脚を利用し、いずれも全体の器形がわかる煮沸用の甕はやや鋭角的な胴下部をもつ甕Ⅱ類のみである。10号住居では甕Ⅱ類とした台付のものを出土している。11号住居でも台部のみの破片にすぎないが台付き甕が出土している。資料が少ない制約上、具体的な甕の形態と炉の利用され方は言及できないが、甕の胴下部の形態と炉の利用のされ方は密接な関係が予想される。甕Ⅰa・Ⅰb類のやや鋭角的な胴下部をもつものより、茄形の張りのある胴下部の方が、加熱面積が広くなり効率もよく、安定性が強く設置の仕方も限定されにくいのではなかろうか。勿論、甕の形態の変化はカマドの出現とあわせて慎重に考えていく必要がある(註4)。だが同時に、カマドの出現・普及を可能にする内在的要因、甕の形態の変化に見られる高率化を求める動きも進行

番号	出土地点	番号	出土地点
1・2	野田山遺跡15号住居床面	13・14	鹿見塚古墳12トレンチ
3	大橋遺跡1号住居跡床面&貯蔵穴状ピット	15・16	鶴ノ丸遺跡7号住居跡床面
4・5	十三塚遺跡C-78　2号住居跡床面	17・18	宮前遺跡38号住居床面
6・7	色麻古墳群11号住居跡床面	19～22・24～28	留沼遺跡竪穴遺構底面
8・9	野田山遺跡11号住居跡床面	23	西野田遺跡4号住居跡P1
10・11	野田山遺跡19号住居跡床面	29・31・33・34	山王遺跡SX058　[西町浦地区]
12	宮久原遺跡方形周溝墓周溝内埋積土	30・32	山王遺跡SX230　[八幡地区]



第72図　宮城県内出土、古墳時代初頭における大型・中型甕の比較

していたと思われる。

更に他の器種に転じて見ると、高坏では前者では脚部が円錐形のもの、後者では柱実のものが報告されている。器台では、前者では貫通孔・脚部に円窓が見られるのに対し、後者ではこれらが見られないものが知られている。類例は少ないが壷でも現在のところ有段口縁のものは前者のみに見られる。

このことから甕の変遷を、倒卵形・球形で構成されることに代表される胴下部がやや内湾しながら急に立ち上がる段階に、茄形のものが次第に加わる底部から胴部にかけて膨らみが大きいものが主体となる段階へ移行したと考えらるれのではなかろうか。

器面の最終調整では、外面に前者がハケメを主体とするのに対し、後者ではヘラケズリがよく利用され、丹羽氏が指摘するように(丹羽：1985)器面調整にハケメを残さない変化が相対的に伺える。

壷Ⅰｂ類は塩釜式期全般から南小泉式期の古い時期にみられる。

このことから10・11・19号住居跡は、甕を基準に考えると塩釜式のなかでも古い段階に位置づけられる。これを、丹羽氏の編年に対応させるとほぼⅠ～ⅡB段階に相当しよう。

次ぎに、各住居で違いの生じた器種について見てみる。

壷Ⅰａ 類は口縁部に装飾をもつ複合口縁のもので、塩釜式にも類例が少なく、南小泉式には見られない様相である。口縁部に装飾をもつ様相がどの段階まで存続するか問題であるが、現在までに知られている資料からは、古い特徴と捉えることができよう(註5)。

さらに坏では、坏Ⅱ類・Ⅳ類が塩釜式期全般に見られるのに対し、19号住居跡出土の坏Ⅲａ類は、共伴する高坏や器台に装飾性の強い様相をもつ戸ノ内遺跡4号住居床面の資料に類似する。11号住居に見られる坏Ⅰ類に関しては、これに相当すると思われる器形のものが塩釜式の中で成立してくるという見解もある(次山：1989)。

以上のことを整理すると、甕を中心に野田山遺跡10・11・19号住居跡出土の遺物は古い段階に位置付けられ、さらに細かく見ると19号住居跡出土の遺物は、10・11号住居跡出土の遺物に対して古い様相をもつといえる。

また、安易に堆積土出土の遺物を含めて考えることは危険であるが、19号住居跡から出土ている高坏は脚部に円窓が4個（破損による推定）みられ、大橋遺跡1号住居跡床面・戸ノ内遺跡4号住居跡床面・伊古田遺跡跡面から出土しているものと共通の様相をもつ。このような高坏の細部のありかたは、壷の口縁部における装飾と同様に、装飾性が強いものと理解でき、塩釜式でも特に古い様相と考えられるのではなかろうか。

＊　4・3号住居跡出土遺物の概要とその類例

【4号住居跡】

器台・壷IIb類・ミニチュアがある。

器台は小型のもので、受け部を欠損しているが鵜ノ丸遺跡6号住居跡床面の資料に脚部の広がりかた・貫通孔や円窓のありかたが類似する。

器台が基本的に塩釜式期特有の器種で、南小泉式期に姿を消すことから、丹羽氏がすでに指摘するように（丹羽:1985)、貫通孔・円窓の退化現象が辿れると思われる。このことにより角田市荒町遺跡Pit15・西野田遺跡4号住居跡床面の資料に先行する形態のものと理解できる。他の器種との関係が明らかではないが、西野田遺跡4号住居跡床面の資料では、新しい段階の甕が共伴し、貫通孔や円窓のあるものが現在のところ、いずれも甕の古い段階に属することから、後者の可能性が強いと思われる。

壷IIb類に類似の資料を求めると、安久東遺跡方形周溝墓、名取市今熊野遺跡1号方形周溝墓から出土している壷があげられる。有段部分の接合の特徴は、安久東遺跡のものが内面に明瞭な段をもつのに対し、今熊野遺跡のものは内面に明瞭な段をもたず、野田山遺跡のものに近い。しかし、野田山遺跡のものはこれらに比べて小型であり、今熊野遺跡の例は底部に焼成前穿孔がみとめられ、慎重に扱う必要がある。また出土している遺構の性格も違い比較は難しい。

【3号住居跡】

壷III類・甕Ｉｂ2類・甑がある。

甕Ｉｂ2 類に類似の資料を求めると、胴部外面にヘラケズリを主体とした甕は留沼遺跡 1号住居跡床面・竪穴遺構底面から出土している。

甑は、口縁・胴部が直線的に外傾し、底部は平底である。似た資料は、宮前遺跡2号住跡面から出土している。

資料的な制約が著しく、細かな編年的位置を与えることに問題があるが、甕の外面の器面調整に塩釜式でも新しい段階の様相が認められる。宮前遺跡2号住居跡床面では胴部の膨らみが強い甕、脚部が柱実の高坏が上部の甑と共伴している。

(3) 古墳時代の出土遺物のまとめ

これまで述べたように野田山遺跡から出土した古墳時代の土器の大半、2・3・4・6・9・10・11・19・21・22・23号住居跡出土土器は、塩釜式と理解される。この内、10・11・19号住居跡出土土器は塩釜式期の中でも、甕を基準に考えると古い段階に位置付けられる。更に細かくみると、19号住居跡の遺物は、10・11号住居跡のものに比べ古い様相をもつ。

8号住居跡のものは塩釜式から南小泉式に比定される。

東北地方の古墳時代前期の土器は、在地の土器が発展した帰結とは捉えられず、多分に外来の影響をうけて展開される。本遺跡から出土したものにも、北陸系とされる口縁つま

みだしの甕・東海地方に起源をもつとされる台付甕・山陰地方に多いという土製支脚(註6) が、また古墳時代初めの蓋は北陵地方に多くみられ、直接ではないとしても、さまざまな地域からの影響があった可能性が窺える。

これらの交流関係の分析、より細かな年代観は、今後資料の増加とともに検討が加えられていく必要がある。

(註1)　実測図が公表されている色麻古墳群11号住居跡出土遺物は、すべて床面から出土していることを古川一明氏から御説教を頂いた。

(註2)　次山淳氏から資料の御教示を頂いた。

(註3)　今熊野遺跡(丹羽：1985)で遠見塚古墳12トレンチ出土壷の口縁部装飾の説明がなされている。

(註4)　カマドの出現については、辻秀人氏はTK216式期に求め、坏の増加から古墳時代第2の画期と捉えている(辻：1989)。宮城県内でのカマドの報告例は現在のところ、丹羽氏のA群土器(丹羽：1983)、岩見氏もⅠ群土器の可能性がある(岩見・佐藤：:1991)とされる宮前遺跡42号住居跡には認められ、南小泉式期最古の段階に求められている(岩見氏の御指摘による)。また、仙台市新田藤田遺跡では脚部柱実の高坏がカマドの支脚に転用されている例が報告されている(平成3年度宮城県遺跡調査成果発表会発表報告)。宮城県内では今のところ南小泉式期に比定される脚部柱実の高坏の報告例はなくいずれも塩釜式期のものとされている。カマドの出現は、大きくは塩釜式の新しい段階から南小泉式期と思われ、甕の形態の変化と密接な関係が予想されるが、今国この問題は取り上げない。

(註5)　清水遺跡（丹羽・小野寺・阿部：1985）から棒状浮文の壷が出土しているが、出土状況から共伴の遺物を導くことができない。現在の段階では、口縁部に装飾のある壷は古い様相をもつと理解することが可能と思われる。

(註6)　藤沢敦氏から御教示を頂いた。

Ⅲ　古代の土器

古代の土器は、土師器の坏・甕と須恵器の坏12・13・15・18号住居跡から出土している。図示できたものは、14点にすぎないためここでは、細かな分類を行わず大きく土師器の製作に際しロクロを使用しないものと使用しているものを区別し、比較的量のまとまっている12号住居跡出土の土器について検討を加える。ロクロを使用しない坏と甕は、13住居跡から出土している。これらの中で坏は、胴部外面に軽い段をもちこれに対応する胴部内面に段をもたない丸底のものである。ロクロを使用しているものは12・15・18住居跡から出土している。それぞれ、その器形の特徴から東北地方の土師器編年で、国分寺下層式(氏家：1967)、表杉ノ入式(氏家：1957)に比定される。

【12 号住居跡】12 号住居跡では、カマド崩落土・貯蔵穴状ピット堆積土底面付近から土師器坏 3 点、甕 4 点、須恵器坏 1 点、赤焼き土器坏 1 点が出土している。土師器坏、胴部はやや内湾気味に外傾し、底部は回転糸切り無調整のもの 2 点と回転糸切りのあとが残るものがある。口径に対して底径は小さく、口径と底径の比は 0.33〜0.40 になる。須恵器坏は、胴部はやや内湾気味外傾し、底部は回転糸切り無調整で、口径に対して底径は小さく、口径と底径の比は 0.41 になる。赤焼き土器の底部は回転糸切り無調整である。これらは出土状況、器形の特徴から住居廃絶時の一括資料である可能性が高いと考えられる。

宮城県南部の表杉ノ入式の編年は坏の底部切り離し技法とその後の再調整技法、口径にしめる底径の割合の変化によって検討が加えられている(丹羽：1983)。これによると宮前遺跡第ⅣA群(20 号住居跡)→青木遺跡 21 号住居跡→東山遺跡土器溜→家老内遺跡 2 号住居跡・宮前遺跡B群土器（54 号住居跡）→安久東遺跡 2 号住居跡の変遷が捉えられている。また絶対年代については、東山遺跡土器溜から 9 世紀中葉とされる灰釉陶器が共伴し、安久東遺跡 2 号住居跡堆積土から 10 世紀後半頃とされる灰釉陶器［鹿島遺跡・竹之内遺跡報告書（佐々木和博：1984）で 11 世紀前半から 10 世紀後半頃に訂正］が出土していることから、それぞれ対比している。

また、中田畑中遺跡 1・2 号住居跡、家老内遺跡 1・2 号住居跡、南小式遺跡第 6 次 1 号住居跡出土土器は、東山遺跡土器溜出土土器と安久東遺跡 2 号住居跡出土土器との中間的なものでほぼ同時期のものとされ、中田畑中遺跡 1・2 号住居跡の堆積上に 10 前紀前半に降下したと考えられる灰白色火山灰(白鳥良一：1980)が含まれることから、9 世紀中葉以降から 10 世紀前半以前の年代が与えられている(佐藤・渡辺：1995)。

土師器坏 3 点という資料の制約があるが、これらの編年観に従い野田山遺跡 12 号住居跡出土遺物を位置付けると、回転糸切り無調整のものが主体を占めること、中田畑中遺跡 1・2 号住居跡、家老内遺跡 1・2 号住居跡、南小泉遺跡第 6 次 1 号住居跡出土土器群に近い法量の値を示すことから、9 世紀中葉以降から 1 世紀前半頃の年代が与えられる。

また須恵器坏は 1 点のみであるが、その器形的特徴は須江糠塚遺跡で詳細に分析されている(高橋・阿部：1987)9 世紀後葉のものの範疇で捉えられ、土師器による年代観と矛盾しない。

法量による特徴は一律に扱うのではなく、意図された器形ごとに慎重に対処しなければならないという批判も予測されるが、現段階では野田山遺跡 2 号住居跡の遺物は、大きく 9 世紀中葉以降から 10 世紀前半頃の年代と理解されるであろう。

第２節　石器

弥生時代以前の石器

野田山遺跡からは表土および遺構から、多数の石器類が出土している。それらのうち明確に遺構に伴うもの、あるいは他の出土遺物が少なく遺構の時期が不明なもの以外については、遺構と共には図示しなかった。これは石器、とくに剥片類では時期決定ができず、遺構の底面から石器が出土しても、同じ遺構の底面からいろいろな時期の土器片が出土するという状態では、石器の所属時期は決定できないという理由による。

以下では器種ごとに記述をおこなう。

石鏃）(図版 24・2～56)

表土および住居跡堆積土から合計 6 点出土している。有茎が 2 点(珪質頁岩・流紋岩)、無茎が 4 点で凹基 2 点(珪質頁岩)、わずかに凹基 1 点(珪質頁岩)、平基 1 点(黒燿石)である。

尖頭器) (図版 24・12,13)

住居跡堆積土から合計 2 点出土している(黒燿石・玉髄)。いずれも先端部のみで、破損品である。

石錐) (図版 24・8～11)

住居跡堆積土から合計 4 点出土している。いずれも錐部とつまみ部の境が不明瞭なもので，棒状で両端に錐部があるもの１点（玉質頁岩），錐部が一端のみのもの 3 点（流紋岩・玉質頁岩）である。

石匙) (図版 24・15、16)

住居跡堆積土から合計 2 点出土している。いずれも縦長の珪質頁岩製である。

石核) (図版 24・14)

打面と作業面の関係が一定しない、直方体の多打面の珪質頁岩製石核が住居跡堆積土より 1 点出土している。

その他の剥片石器)

上述の石器の他に、珪質頁岩・流紋岩・黒燿石などを用いたスクレイパーなどの二次加工石の施された剥片石器類が多数出土している。

石包丁）(第 68 図 1～3・第 1 表)

未成品を含めて、表土および住居跡堆積土から合計 10 点出土している。いずれも破損品で全体の形態、特徴などは不明である。第 68 図 2 は、表面と刃部に研磨が施され、製作途中であったことを示している。

太型蛤刃石斧)

住居跡堆積土から1点出土している。刃部は使用によるのか、敲打が施されたように平坦になっている。

磨製石斧)

住居跡堆積土から1点出土している。基部が破損している。風化が著しく詳細は不明である。

石鏃)

1号竪穴遺構・住居跡堆積土および表土から合計11点出土している。すべて石英安山岩質凝灰岩を用いている。平面形態から1…撥型(5点・第69図1)、2…紡錘型(2点・第69図2)、3…粧型(1点・第60図2)に分類できた。1が最も多い。第60図2、第69図2を除いていずれも破損している。

第3節　土製品

＜土製支脚＞

19号住居跡の炉から4個の土製支脚が出土した。いずれも横倒しになり、一部は強い火熱を受けて脆くなり破損していたものの、ほぼ原位置を保ち、4 個一組で五徳のように用いられていた状況を示していた。これらは中実で基部が太く、上に向かって湾曲しながら細くなる形態を呈し、小林のいう、い呈しいわゆる「角形土製品」である(注1)。

これと同様の支脚は、福島県以南の弥生もしくは古墳時代の住居跡などから発見される例が多い。しかし宮城県での、炉で用いられたと考えられる土製支脚の出土例は非常に少なく、亘理町宮前遺跡の古墳時代前期に属する49号住居跡出土の例と、小牛田町山前遺跡採集例があるのみである(丹羽、1983)。宮前遺跡の資料は上半部を欠いた1点のみであり、全体像は不明であるが、基部は上げ底状になり、オサエ調整が施されている点など、基部が平垣で、オサエの他にケズリなどの調整が施されている当遺跡の支脚とは異なる点が多い。

支脚の上に土器を置いて火を炊いた場合と、土器を直に床面に置いて火を炊いた場合とは土器に観察される受熱痕跡は異なる(西川、1983)。当遺跡の10・11・19・22号住居跡床面出土の甕形土器では、底部まで残存するほぼ完形品7点中6点までが底部が赤く変化し、体部下半から中央部にかけては黒く煤が付着した状態が観察できる。これは土器が支脚に乗せられて加熱されたことを示している。同じ古墳時代前期でも最終段階に位置付けられている、古川市留沼遺跡竪穴遺構出土の甕形土器では、ほぼ完形品15点中9点以上が当遺跡の資料と同様の受熱状況を示している(注 2)。留沼遺跡では支脚状のものは検出されていないが、土器はある程度炉面から浮かせた状態で加工熱されていたと考えられ、支脚状の

器具の存在を想定できる。

支脚状の器具は常に火を受けるため脆く、残存しにくいと思われるが、その存在は土器の観察によっても明らかにできる可能性を指摘しておきたい。

（注1）中村は「角状支脚」と仮称している(中村，1988)

（注2）資料の実見による。

第4節　鉄製品

＜鉄鏃＞

3号住居跡の床面から1点出土している。古墳時代前期のもので、宮城県で発見された古墳時代の資料の中でも最古に位置付けられるものの一つである。長さ1.9㎝、幅1.7㎝、厚さ0.5㎝(数値はいずれも現存値)と小型で、形態は無柄凹基を呈する。鉄鏃について最初に体系的に考察をおこなった後藤の分類に従うと(後藤、1939年)、廣鋒長三角形腸抉式に分類される。古墳出土の鉄鏃をもとに分析をおこなった後藤の年代観では、この類型は古墳時代後期に位置付けられている。しかしその後の資料の増加により位置付けも変化している。弥生時代の鉄鏃を中心に分析をおこないその変遷を示した大村によると、当遺跡の資料は無茎三角形式(凹基腸抉式a類)に属する(大村、1983)。この形式は鉄鏃の出現段階から古墳時代中期初頭まで続くとされており、当遺跡の年代とは一致している。さらに大村は、資料的制約はあるが東国地方では無茎三角形式が主体的な形式である可能性を指摘しており、当遺跡の資料もその一端を示すものかもしれない。

第5節　遺構の考察

野田山遺跡からは、竪穴住居跡25軒、竪穴遺構1基、土壙14基(うちTピット5基)、溝状遺構一条検出された。以下ではこれらについて検討を加える。

Ⅰ　竪穴住居跡

＜住居跡の時期＞

野田山遺跡から検出された住居跡は25軒である。それらのうち出土遺物により時期の明らかになったものは、古墳時代前期（塩釜式期）が11軒(2.3.4.6.9.10.11.19.21.22.24号住居跡)、奈良時代(国分寺下層式期)が1軒(13号住居跡)、平安時代(表杉ノ入式期)が3軒(12.15.18号住居跡)である。またこれらのほかに住居の構造や堆積土出土の遺物から時期の限定できるものとして23号住居跡(塩釜式期)、住居の重複によって時期の限定できるものとして14号住居跡（塩釜式期…塩釜式期の11号住居よりも古く、弥生時代よりも新しい。）がある。その他は一つの時期で捉えることはできなかった。

以上をまとめると以下のようになる。

塩釜式期…13 軒（2.3.4.6.9.10.11.14.19.21.22.23.24 号住居跡）

古墳時代(時期限定不能)…6 軒(1.5.7.8.20.25 号住居跡)　(塩釜式期？8.20.25)

国分寺下層式期…1 軒（13 号住居跡）

国分寺下層式期以降(時期限定不能)…2 軒(16.17 号住居跡)

表杉ノ入式期…3 軒（12.15.18 号住居跡）

＜住居跡の重複＞

住居跡で重複の認められるものは 11.12.13.14 号住居跡と、16.17 号住居跡である。その時期的関係は以下のとおりである。

14 号住居跡 → 11 号住居跡
(塩釜式期)　(塩釜式期)

14 号住居跡 → 13 号住居跡 → 12 号住居跡
(塩釜式期)（国分寺下層式期）　(表杉ノ入式期)

16 号住居跡 → 17 号住居跡
(国分寺下層式期以降)　(国分寺下層式期以降)

これらの他、同一時期の住居跡の中で、直接的な重複はないものの住居の構造などから考えて、同時に存在し得ないものとして以下の住居跡が考えられる。

9 号住居跡 ←→ 10 号住居跡
(塩釜式期)　(塩釜式期)

9 号住居跡の南コーナーと 10 号住居跡の北コーナーが 1m程しか離れておらず、両方の住居は構造的に同時には存在し得ないと思われる。また 10 号住居跡は火災住居であるが、9 号住居跡は燃えていない点も、両者が同時に存在していなかった傍証となるであろう。

したがって同じ塩釜式期とした住居の中でも 2 時期以上の住居跡の変遷があったと思われる。

●塩釜式期の住居跡

塩釜式期の住居跡は合計 13 軒(2.3.4.6.9.10.11.14.19.21.22.23.24 号住居跡)である。以下ではまずその属性ごとに特徴を抽出してゆく。

＜立地＞第 78 図

4 号住居跡、6 号住居跡をのぞいて、およそ 33.00m～33.50mの等高線に沿って分布している。丘陵頂部平担面の北東の縁に沿って分布しているといえよう。これらの西側については削平が著しく不明である。

住居跡は等高線に沿ってほぼまんべんなく分布しており、粗密は認められない。ただし

19 号住居跡、22 号住居跡と 23 号住居跡の間については削平のため不明である。

＜主軸方向＞第 78 図、第 5 表

住居平面模式図のａ・ｂ区とｃ・ｄ区の境を主軸とした場合、一様に主軸が 14°～55°ほど西に振れている。主軸が等高線にほぼ平行する傾向が認められ、地形を考慮した設定であった可能性がある。

＜平面形態＞第 5 表

平面形態はすべて方形を基調とし、長方形、正方形とそれぞれの隅丸のものが認められる。長方形と隅丸長方形、隅丸正方形を呈するものが多いが、特に際立っているわけではない。傾向としては、平面形態では長方形が多く、角は隅丸になるものが多い。

＜規模＞第 73 図、第 74 図

住居の大きさを一辺の長さで表したものが第73図、面積で表したものが第74図である。当然ながら、一辺の長さと面積は比例し、以下のように分類できる。一辺の長さでは、大…6m以上のもの、中…4～6mのもの、小…4m以下のものに分けられる。そして面積から、大①…55m^{2}以上のもの、大②…44m^{2}前後のもの、中①…30～38m^{2}のもの、中②…20～25^{2}mのもの、小…8m^{2}以下のものに分けられる。

	平面形	規模(m) 長辺×短辺	床	柱穴	建替の有	周溝	炉	貯蔵穴	方向	その他
2住	隅丸方形	5.6 × 5.6	一部焼土面検出	4本	○	16本全周	2	隅丸・隅丸長方形	35°	貯蔵穴、全体的に高まり、石囲炉?
3住	隅丸長方形	5.6 × 5.5	貼床	4本	○	16本全周、壁付近部分	3	隅丸長方形・方形、北東隅・西南隅	32°	
4住	長方形	4.7 × 4.2	一部焼土面検出	無	×	南東辺～南西辺	1	隅丸・不整隅円形	27°	
8住	長方形	5.2 × 4.8	壁付貼床	4本	○	東辺～南辺	(1)	隅丸長方・長方形	25°	貯蔵穴
9住	隅丸方形	5.5 × 5.5	壁付貼床	4本	○	全周、壁付部分有	(1)	隅丸長方・長方形	15°	
10住	長方形	4.2 × 4.1	壁付貼床	4本	○	北東辺～南西辺	(1)	?	50°	火災住居
13住	隅丸方形	4.8 × 4.6	壁付貼床	3本 (1)	○	無	(1)	隅丸・隅丸方形、北東・南丸長方形	40°	火災住居、炉の位置あり
14住	隅丸長方形	4.8 ×(4.8)	壁付貼床	無	×	南東辺～南西辺	?	?	50°	
21住	隅丸長方形	6.8 × 7.4	貼床	4本	○	全周、壁付部分有	4	?	35°	火災住居、埋甕穴あり、炉の支脚あり
22住	方形 ?	(5.8) × 5.2	一部焼土面検出	?	?	不明	?	隅丸・不整形	47°	
23住	長方形	3.8 × 2.8	地山	無	×	無	(無)	(無)	14°	
24住	隅丸方形 ?	(5.8)×(4.5)	壁付貼床	(2)	×	(全周)、壁付部分有	(2)	隅丸長・楕円形	30°	火災住居、埋甕穴、石囲炉、自然状の高まり
26住	長方形	5.6 × 5.4	壁付貼床	(1)	×	無	?	?	28°	

第５表　竪穴式期の住居跡一覧表

	平面形	規模(m) 長辺×短辺	床	柱穴	周溝	炉	貯蔵穴	方向	その他	時期
1住	隅丸方形	2.9 × 2.8	壁付貼床	無	無	(2)	(無)	2°		古墳時代
5住	隅丸長方形 ?	(2.3)× 3.4	地山	4本	無	(1)	無	50°		古墳時代
7住	?	(2.6)×(1.0)	地山	(無)	無	(2)	長楕円・楕円形	30°		古墳時代
8住	隅丸長方形	5.8 × 5.0	壁付貼床	(1)	全周、壁付部分有	?	長楕円・隅丸長方形	30°		古墳時代
10住	長方形 ?	3.4 × 3.1	凹・凸面検出・地山	(無)	北辺、西辺、東辺	カマド	長楕円・不整円形	20°		奈良ノ入
12住	長方形	3.8 × 3.0	貼床	無	北辺全周	カマド	北西隅・楕円形	0°		国分寺下層
15住	台形	4.8 × 5.1	壁付貼床	4本	北辺全周、壁付部分有	カマド	北西隅・不整楕円形、南東隅・不整楕円形	75°	埋甕穴あり	奈良ノ入
16住	隅丸長方形	4.8 × 4.4	貼床	(2)	無	?	?	70°		国分寺下層以降
17住	隅丸長方形	2.5 × 2.1	地山	無	無	カマド	楕円形	44°		国分寺下層以降
18住	方形 ?	3.7 ×(2.6)	一部貼床	無	(全周)	カマド	北西隅 ? ・楕円形	77°		奈良ノ入
20住	隅丸方形 ?	(1.7) × 3.1	地山	4本	無	?	?	42°		古墳時代
22住	?	?	壁付貼床	(2)	無	(2)	?	30°		古墳時代
1竪穴	隅丸方形	3.0 × 3.1	地山	1本	無	無	—	44°		中品屋

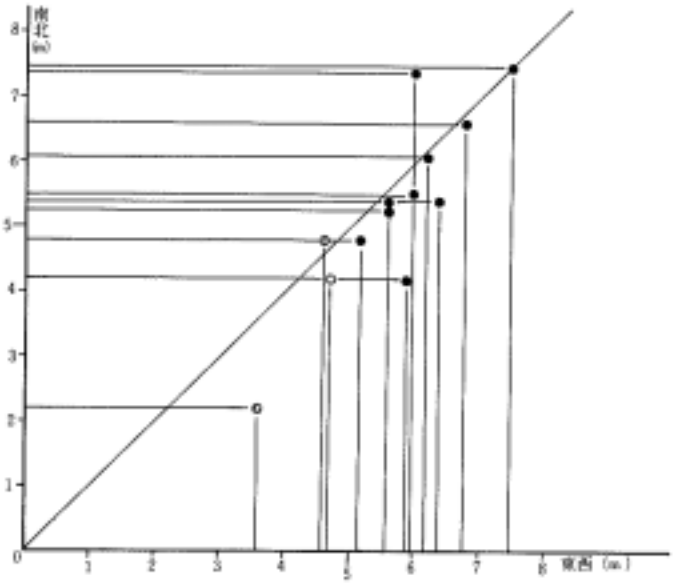
第６表　古墳時代以前の住居跡一覧表

大、小は少なく、中のものに集中する傾向が認められる。ただし、面積での規模を住居跡間で比較すると、最大の 19 号住居跡は最小の 22 号住居跡の 7 倍近く大きい。また中規模のものと比較しても、19 号住居跡は 2 倍近く大きく、22 号住居跡は 3 分の 1〜5 分の 1 ほどしかない。このように住居跡の規模には、ある一定の規模にまとまる傾向はあるものの、大小の差も大きいことが認められる。

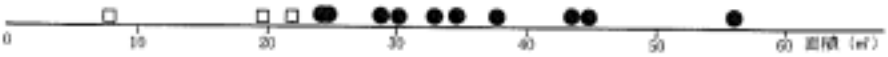
＜床面＞

床は、一部分が地山で残りの部分が貼床を床面とするものが多く、他には全面地山を床面とするものが 1 軒(22 号住居跡)、全面が貼床のものが 2 軒(3.19 号住居跡)認められるのみである。一部が地山のものはすべて中央に地山部が残存し、壁に沿って溝状に貼床の部分が認められる。溝状の貼床は、部分的なものもあるが、ほとんどが壁に沿って全周する。この他にも全面貼床の 3 号住居跡、19 号住居跡も壁近くの部分の貼床が特に厚い傾向が伺われる。

床面の壁近くには、高さ 5 ㎝程の台床状の部分が認められるものが 3 軒ある(2.6.23 号



第73図　住居跡の平面規模



第74図　住居跡の平面積

住居跡)。いずれも土を盛って構築されており、堅く締まったものではない。住居の床面を仮に、主柱穴に囲まれた内側を内区、外側を外区と呼ぶと(模式図)、台床状の高まりは壁に沿った外区の部分に認められる。そしてそれが認められる部分は、床面を四分割した場合 c 区(2 号住居跡)もしくは c 区〜d 区の部分(6.23 号住居跡)であり、南コーナーを中心に認められる。2 号住居跡と 23 号住居跡では、台床状の高まりの東北端が区画状の溝(後述)で途切れている。

床面には、柔らかい部分と比較的堅く締まった部分(以下硬化部分と呼ぶ)が認められるものがある(模式図)。硬化部分の範囲は、

Ⅰ…主柱穴 4 本囲まれた部分(内区)のほぼ全面(9.10.19 号住居跡)

Ⅱ…内区のおよそ半分ほど（2.11 号住居跡）

Ⅲ…主柱穴の間を巡るように「コ」の字状を呈するもの(3 号住居跡)

の三種類に分けられる。Ⅰ類とⅢ類には内区からはみ出している部分もあるが、Ⅰ類の 10 号住居跡とⅢ類の 3 号住居跡は後述する壁寄りのピットに続いており、Ⅰ類の 9 号住居跡は主柱穴の 1 個から壁際に続いている。

＜柱穴＞

主柱穴は、攪乱などにより不明なものを除いて、まったく認められないものと、住居平面の対角線上に 4 個認められるものに分けられる。まったく認められないものは 3 軒のみで(4.14.22 号住居跡)、不明なものも 23 号住居跡は残存部から判断して 4 個と考えられ、柱穴のあるものはすべて 4 本柱である。

19 号住居跡、23 号住居跡には壁柱穴が認められるが、それぞれその配置は異なっている。19 号住居跡では北東辺の中央部に接近して 2 個、それらを中心に左右対象の位置 1 個ずつ配置されている。23 号住居跡は全体像は不明であるが、二辺にほぼ等間隔に配置されている。

これらの他に床面で柱痕跡の認められるピットがあるものとして、3 号住居跡、11 号住居跡、23 号住居跡がある。これらのピットの性格については不明である。

＜「壁際ピット」＞

主柱穴のほかに特徴的なものとして、壁際の貯蔵穴状ピット寄りに認められるピット(以下「壁際ピット」と仮称する)がある(2.3.6.9.10.11.19 号住居跡)。これらは 19 号住居跡を除いて、床面を四分割した場合の b 区の部分(床面の東コーナー付近)にあり(模式図)、19 号住居跡では c 区の部分に認められる。このピットは主柱穴よりも掘り方は小さく浅い傾向があるが、材の痕跡も認められ、その痕跡も 2 号住居跡、3 号住居跡では住居の壁面に沿った細長い形態を呈している。

＜溝＞

溝には、壁際の直下をめぐる周溝と、壁辺の中央から直角に、床面中央に向かって延びる溝(区画状の溝)がある。

周溝は、完全に全周するもの(9.19 号住居跡)、部分的に途切れるがほぼ全周するもの、(2.3 号住居跡)、壁際の等分ほどめぐるもの(4.6.10.14 住居跡)、周溝のないもの（11.22.24 号住居跡)、不明のもの（21.23.号住居跡）がある。周溝の全く認められないものは、不明のもので残存部分では周溝のみられない 21 号住居跡を含めても 4 軒のみである。周溝の保有率は高くおよそ 70%である。壁際の半分ほどめぐるものは、南西側の壁を中心に認められ、北東側の壁には認められない。

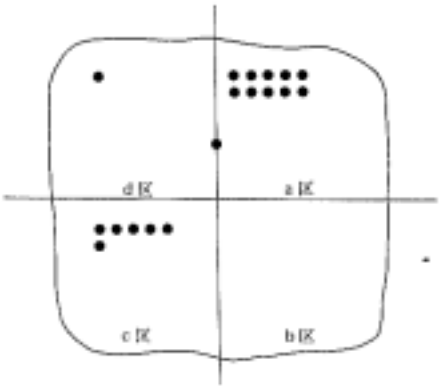
区画状の溝は 2 号住居跡、6 号住居跡、23 号住居跡に認められる。いずれも南東壁のほぼ中央部から外区と内区の境付近まで、1.1～1.4m程の長さで延びている。これらは床面を四分割した場合のｂ区とｃ区の境界の部分に位置する(模式図)。

＜炉＞

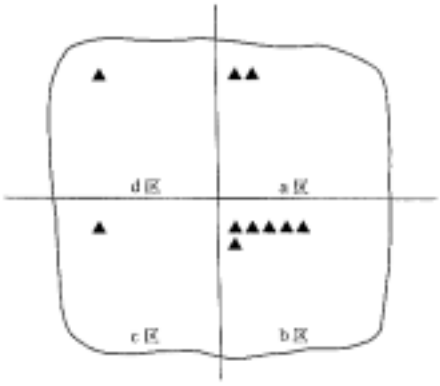
炉と考えられる焼け面は削平のため床面の保存が良好でない 14 号住居跡、21 号住居跡をのぞいてほとんどのものに認められる。焼け面の平面形態は、不整形もしくは楕円形を呈するが、特徴を摘出できるほどの傾向性はない。焼け面の範囲は長軸の最大で 60 ㎝、最小は 10 ㎝程度である。30～60 ㎝の範囲が最も多い。焼け面の範囲は狭くとも、強い火熱をその場所で用いたことは事実であり、範囲の広さに関係なく現象的なまとまりを一つと数えた。(注 1)

炉は床面上に認められ、19 号住居跡をのぞいて床面を掘り込んでいる例はない。19 号住居跡は床面を浅く掘りくぼめているが、それも 8 ㎝程のものである。

炉が残存するのはすべて内区の部分であり、その数は 1～4 個である。内区の部分が完



第75図　床面における炉の位置



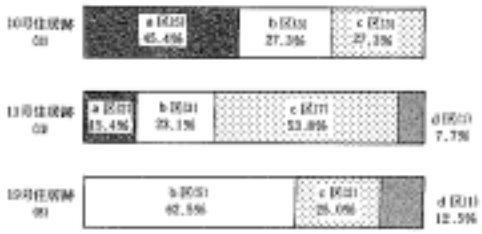
第76図　床面における貯蔵穴状ピットの位置

全に残っている住居跡(2.3.10.19 号住居跡)でもその数は 1〜4 個と一定していない。炉は、は床面を四分割した場合のａ区の部分に位置することが多い。（第 75 図）そしてａ区には 1 個のみのものと複数認められるものがある。

＜貯蔵穴状ピット＞

貯蔵穴状ピットは住居跡床面コーナー(外区)にあり、1 個の場合が多いが、2 個認められる例もある。その位置は、床面を四分割した場合のｂ区の部分に認められることが多い(第 76 図)。

平面形態は、長方形もしくは楕円形を呈するものが多いが、特徴を抽出できるほどのまとまりはない。



第77図　住居床面出土土器の地区ごとの割合

＜遺物の出土位置＞（第 77 図）

遺物は床面からまんべんなく出土するわけではなく、分布に偏りがある。そしてその分布の偏りにも傾向性が認められる。

① ｂ区に分布が集中するもの　　3 号住居跡
② ｃ区に分布が集中するもの　　4、6 号住居跡
③ ｄ区に分布が集中するもの　　2 号住居跡
④ ａ・ｂ・ｃ区に分布が集中するもの　　10、11 号住居跡
⑤ ｂ・ｃ・ｄ区に分布が集中するもの　　19 号住居跡

10、11、19 号住居跡は火災住居であり遺物量も多いが、貯蔵穴状ピットや「壁際ピット」のある区を中心に両側の区に遺物はほとんど分布している。これらに対して火災を受けていない住居跡は遺物量も少なく、その分布の傾向性も認められないが、遺物は外区に分布する傾向は認められる。火災住居では攪乱などによる床面の保存状態の悪さも考慮にいれなければならないが、外区に多く分布するもの（11、19 号住居跡)、外区は不明であるが内区にも多く分布するもの(10 号住居跡)がある。

[塩釜式期の住居跡の特徴]

これまで、塩釜式期の住居跡の属性ごとの特徴について述べてきたが、以下ではこの属性ごとの特徴をまとめて当該期の住居跡の特質について考察を加えたい。

まず、住居跡の規模と柱穴との間に相関が認められ、面積規模の小の 22 号住居跡と、中 2 でも一辺の長さ 5m以下の 4 号住居跡には柱穴は認められない。面積では 22m^2 を境として柱穴が 4 本のものと無いものとに分かれる(第 74 図)。これは当該期の全国的な傾向と一致している(宮本、1989)。

床面は小形の22号住居跡を除いて、すべて、部分的であっても貼床されている。

周溝はおよそ70%のものに認められ、床面の周りを全周するものと壁際の半分ほどめぐるものは同数である。後者は斜面の高い部分である南西側の壁を中心に認められ、壁からの水の染み出しや周りからの水の流れ込みなどのに伴う排水施設の可能性がある。これと同様に、斜面の高い側にのみ周溝が巡る古墳時代前期の住居跡の例として亘理町宮前遺跡(丹羽、1983)、河南町糠塚館跡(高橋他、1987)などの住居跡があげられる。周溝のあるものとないものには、そのほかの構造状の違いは認められない。

次に床面上における生活に関する施設について、その位置する場所を中心に考察してみたい。

炉はほとんどが床面を四分割した場合のａ区の部分の内区、やや中央よりに認められる。その他、ｃ区、ｄ区に炉がある例も認められるが、その場合もａ区には存在する。

貯蔵穴状ピットと「壁際ピット」は必ず近くに位置し、それらは特にｂ区の外区に多く認められる。

19号住居跡では対角線上に位置するｂ区とｄ区に炉があり、貯蔵穴状ピットと「壁際ピット」はｃ区にある。これは他の住居跡とまったく同様の配置であるが、位置が90°時計回りにずれている。

床面の台床状の部分と区画状の溝もセットとなり、区画状の溝はｂ区とｃ区の境の外区の部分に、台床状の部分はその区画状の溝の西側、ｃ区からｄ区にかけての外区に認められる。

遺物は、火災住居では貯蔵穴状ピットや「壁際ピット」のある区を中心に両側の区にほとんど分布している。

以上から、床面はまず大きく3つのブロックに分かれる。炉のあるａ区、貯蔵穴状ピットと「壁際ピット」のあるｂ区、ｂ区と区画状溝を挟んで台床状の部分のある。ｃ・ｄ区である。ｃ・ｄ区には炉が、ａ区には貯蔵穴状ピットが認められる例もあるが、いずれもその主体となる位置はそれぞれａ区、ｂ区である。遺物はａ・ｂ・ｃ区に分布する。

また、内区と外区に分けることもできる。内区には炉が、外区には貯蔵穴状ピットや「壁際ピット」、区画状溝、台床状の部分が認められる。この他に床面の施設ではないが、床面の硬化部分も内区に認められることが多い。

以上の事実を基に、床面の施設、場の機能について解釈を加えたい。

まず、解釈を行うにあたって重要なのは床面の硬化部分である。この部分は内区に認められることが多いが、内区はやはり主要生活部分であり、硬化部分がより踏み締められた範囲と考えられる。住居床面については、中央部分は地山を、壁際は掘り方埋

土を床面とする例が多いことはすでに述べた。この床面の違いにより堅さが異なる可能性も考えられる。しかし床面が掘り埋土の範囲でも硬化部分は認められ(3、10 号住居跡など)、また同じ地山部分でも硬化しているところとそうでないところが認められる(3、11 号住居跡など)。したがって床面の硬化部分は、より頻繁に踏み締められた範囲と解釈するのが妥当であろう。

この硬化部分が、3 号住居跡、10 号住居跡では「壁際ピット」から延びている。19 号住居跡では硬化部分が「壁際ピット」に接しており、2 号住居跡、9 号住居跡では「壁際ピット」の近くに硬化部分が認められる。したがって、この踏み締められた部分の延びる「壁際ピット」は、住居に入るための施設に関するものと考えられる。これに類似する例として、関東地方で「梯子穴」「入口支柱」（注 2）などと呼ばれる、主柱穴以外の壁際のピットがある。これは関東地方の弥生時代から古墳時代の竪穴住居に多く認められるピットで、住居中心点を挟んで炉と反対側の壁際中央にそのほとんどが位置する。これらは梯子、入口屋根の支柱、棟持柱の据え方などと説明されている。当遺跡の住居跡でも関東地方と同様に、炉はａ区、「壁際ピット」はｂ区、と反対側に位置するが、壁際の中央部ではなく、貯蔵穴状ピットに近く片寄った位置に認められる。したがって当遺跡の「壁際ピット」は棟持柱ではなく、やはり入口に伴う施設という上述の推定が正しいものと考えられる。しかし、もしこのピットが出入りのための梯子の据え方で、壁に立て掛けるように設置されていたならば、神奈川県大塚遺跡(武井則道他、1976)などで検出されているように、材の痕跡が外側に傾斜して認められるほずである。2 号住居跡、3 号住居跡も含めて、すべての「壁際ピット」の材の痕跡ほぼ直立しており、関東地方の例とは様相を異にしている。したがって当遺跡の「壁際ピット」が「入口支柱」である可能性も考えられるが、その一部構造などの実態は不明である。2 号住居跡の「壁際ピット」の材痕跡は、長軸が壁に沿った長方形もしくは楕円形を呈する。これは材が板状あるいは半割りの丸木状を呈していたことを示すものであり、古川市留沼遺跡 1 号住居跡から出土した梯子状木製品を想起させる(手塚、1980)。ただしその他の住居跡の「壁際ピット」の材痕跡は円形もしくは楕円形を呈している。現段階では、2 号住居跡、3 号住居跡で板状あるいは半割りの丸木状の材痕跡が認められた点、床面の硬化範囲がこの「壁際ピット」を起点にしている点を重視して、「壁際ピット」はいわゆる「梯子穴」であった可能性を指摘しておく。

住居への入口が想定されると、住居内床面の場の機能がほぼ推定される。まず炉や床面の強化部分が認められる内区は主要居住空間と考えられる。外区には貯蔵穴状ピット、台床状の高まり（注 3）が認められ、貯蔵、寝所、物置などの空間と考えられる。また外区

はａ区、ｂ区とｃ区、ｄ区の境を中軸線として二分割でき、ａ・ｂ区側に入口、貯蔵空間が認めらる。台床状の高まりはｃ・ｄ区側に認められ、区画状の溝はこの中軸線上に位置する。この中軸線は内区では炉のある空間と無い空間の境界でもある。つまり、本遺跡の住居跡は北西－南南の軸を中軸線として、入口のある南東辺から見ると右側外区に入口、貯蔵穴、内区の北西壁近くに炉があり、左側外区には台床状の高まり、外区中央に区画状の溝が配置されている。左側の内区には炉が認められることもある。19 号住居跡は中軸線が 90°時計周りに東にずれているが配置は同様である。先に 9 号住居と 10 号住居跡は同時に存在し得ないと述べたが、住居内施設の配置は同様であり、時間差を示すような特徴の相違点は、焼けているか否かだけである。出土土器の分布を、中軸線をもとに見てみると、10・19 号住居跡は右側（a 区、b 区）に多く、11 号住居跡は左側(c 区、d 区)に多いが、圧倒的なものではない。土器が炉や貯蔵穴状ピットのある右側に多く分布する傾向は関東地方の遺跡でも指摘されている(長岡、1986)。

以上のように、本遺跡の住居跡内施設は同じ規則に則って配置されていることが明らかであり、炉の位置や土器の分布の傾向性など、当時の家族構成や社会組織などを考える上でも重要な事実が認められる。

[宮城県内での類例]

宮城県内では塩釜式期の住居跡は 90 棟余り検出されているが（宮本、1989)、当遺跡と床面上の諸施設、特に「壁際ピット」や区画状溝、台床状の高まりの配置が類似する例は極めて少ない。

まず最も類似する例として、宮前遺跡第 46 号住居跡があげられる。当遺跡と同じ区で述べると、この住居跡には ｂ 区とｃ区の境に区画状溝、報告書では触れられていないが、c 区壁際に掘り方が壁側に傾いたピット、ｄ 区に炉が認められる。貯蔵穴状ピット、台床状の高まりは認められないものの、当遺跡の住居とは中軸線を基準として線対称に諸施設が配置されていることがわかる。また宮前遺跡第 10 号住居跡も、c 区のコーナー近くに貯蔵穴状ピットが認められ「壁際ピット」が認めらない点以外は第 46 号住居跡と同様の配置である。これらの住居跡の諸施設は当遺跡の住居跡と同じ配置原則に則っている。つまり区画状溝の延長線上にある中軸線により床面が二等分割され、そのどちらかに入口、貯蔵穴状ピット、炉が配置されている。以上のように、当遺跡の住居と宮前遺跡第 46 住居跡、第 10 号住居跡は諸施設の配置が原則でなされているが、中軸線をもとに線対称をなすという相違点がなにに起因するのか非常に興味深い問題である。また今回は行えなかったが、宮前遺跡のほかの住居との比較、あるいは同時期のほかの遺跡との比較も重要である。

Ⅱ　竪穴遺構

この遺構は一辺3m程の方形を呈するが、壁が床面から明確な屈曲も持たずに、緩やかに立ち上がるため住居跡とは呼ばずに竪穴遺構とした。床面出土の遺物は弥生土器と考えられるが摩滅が激しく、時期を限定することはできない。ただし、堆積土中には弥生土器しか認められないため、弥生時代の遺構と考えておきたい。

Ⅲ　土壙

＜Ｔピット＞

5基確認されている。平面形から、Ⅰ類・円形のもの(1号土壙)とⅡ類・長楕円のもの(6・7・8・10号土壙)の2種類に分けられる。Ⅰ類には底面に杭の痕跡が認められ、Ⅱ類とは構造状の違いが認められ。Ⅱ類は平面形以外にも、横断面が『Ｙ』字状を呈し、縦断面が台形を呈する点、大きさが2.4～3.1m×0.6～1.1m、深さ1.2～1.7mで規模が同じである点、丘陵頂部に近い範囲を楕円形状に囲うように配置されている点など、同時期に作られた可能性が高い。

これらが作られた時代については、時期を明確に示す資料がないため不明であるが、他の遺跡の例から、縄文時代のものと考えられる。

(注1)ただし焼け面どうしの距離が近い場合は、同時に機能した面が肉眼的には分かれて見えている可能性もある。

（注2）都出比呂志「竪穴住居の平面形」『日本農耕社会の成立過程』1989、その他「梯子ピット」(渡辺修一「古墳時代竪穴住居の構造的変遷と居居空間」『研究連絡紙』11,1985)、「ブリッヂ・ピット」(谷島一起「竪穴住居址における踏み跡と位置について」『千草山遺跡発掘調査報告書』1979)、「5番目のピット」（高橋一夫「集落分析の一視点－入口と集落の道－」『埼玉考古』21,1983）などとも呼ばれている。

（注3）これは「ベッド状遺構」と呼ばれるものと、高さを除いて同様の特徴を有する。(「ベッド状遺構」は高さが10～20㎝ほどなのにして、当遺跡は5㎝程である。)その機能として、寝台、棚、祭壇などが想定されている（富本長二郎「ベッド状遺構と屋内施設」『季刊考古学』32、1990)。ここではある程度機能を類推させる用語をさけて、この名称を用いる。

第６章　遺跡の変遷

＜縄文時代＞

Ｔピットが５基認められるだけである。Ｔピットは丘陵北端部を囲むように弧状に配置されている。

＜弥生時代＞

丘陵北端部に竪穴遺構が１基認められる。

＜古墳時代前期＞

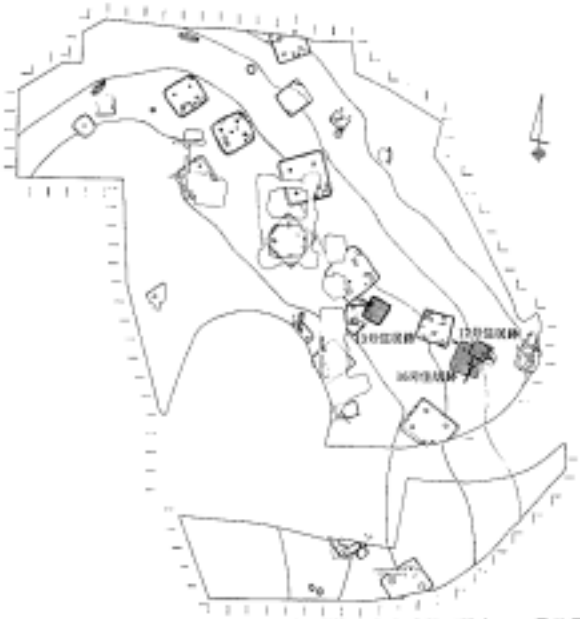
丘陵北東部の等高線に沿って住居跡が認められる。住居跡の重複から２時期以上の住居配置の変遷が考えられるが、その点については明らかにすることはできなかった。住居跡の平面の方向はほぼ一致しており、入口の認められるものはすべて南側に位置する。住居跡の配置もほぼ等間隔になされ、なんらかの配置原理が働いているものと思われる。また古墳時代と考えられるが正確な時期の不明な住居跡の中で、5・8・20・25 号住居跡も、構造、平面の方向などから前期に属すると考えられる。

＜奈良時代以降＞

奈良時代から平安時代にかけても断続的に住居が構築されている。奈良時代以降の住居は調査区南東側に固まっており、古墳時代とはまったく異なった住居の配置である。

第78図　古墳時代前期（塩釜式）の住居跡

第79図　古墳時代（正確な時期不明）の住居跡



第80図　奈良時代（国分寺下層式…13号住居跡）と奈良時代以降（16・17号住居跡）の住居跡

第81図　平安時代（表杉ノ入式）の住居跡

第７章　まとめ

1・野田山遺跡は名取市愛島塩手字野田山に所在し、野田山丘陵の先端部近くの北東斜面に立地している。遺跡の標高はおよそ34mである。

2・遺跡からは竪穴住居跡25軒、竪穴遺構１基、土壙14基、溝１条が発見され、縄文時代から平安時代までの長期間にわたりこの場所が利用されていたことが分かった。

3・縄文時代のものとしてＴピットが５基検出された。

4・弥生時代のものとして後期・十三塚式期の竪穴遺構が １ 基検出され、また遺跡の広い範囲から後期の土期や石包丁、石鏃、剥片石器類などが出土した。

5・古墳時代前期・塩釜式期の竪穴住居跡が13軒検出され、それらのうち４軒は火災住居であった。住居跡の床面からは、「壁際ピット」や台床状の高まり、区画溝などの特徴的な遺構が検出され、当該期の集落構造や住居構造を考える上での新知見をもたらした。

6・また、火災住居を中心に、土器を中心とした多くの一括遺物群が出土し、土器形式や当時の生活様式を知る上でも重要な資料が得られた。

7・古墳時代前期の特筆すべき遺物として、土師器の蓋、宮城県で発見された古墳時代の資料の中でも最古に位置付けられる無柄凹基の鉄鏃、住居跡床面の炉からほぼ原位置を保って出土した土製支脚がある。

8・奈良時以降の竪穴住居跡も６軒検出された。その内訳は奈良時代・国分寺下層式期以降１軒、平安時代・表杉ノ入式期３軒、奈良時代・国分寺下層式期以降２軒である。これらは古墳時代前期の住居とは配置も構造もまったく異なっている。

引用・参考文献

阿部　朝衛（1989）：「土師器からみた東北地方古墳成立期の様相」『帝国史学』第四号

青沼一民・長島栄一（1983）：「中田畑中遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第 53 集

伊東　信雄（1957）：「古代史」『宮城県史』　1

岩淵康治・田中則和（1976）：「安久東遺跡発掘調査概報」『仙台市文化財調査報告書』第 10 集

岩淵康治・田中則和・結城慎一（1977）：「史跡遠見塚古墳環境整備第二次調査観報」
『仙台市文化財調査報告書』第 12 集

岩見和泰・佐藤憲幸（1991）：「合戦原遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 140 集

民家　和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第 14 輯　東北史学会

氏家　和典（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって一奈良・平安期土師器の諸問題」
『山形県の考古と歴史』

氏家　和典（1972）：「南奥羽地域における古式土師器をめぐって」
『北奥古代文化』第 4 号　北奥古代文化研究会

恵美　昌之（1979）：「十三塚遺跡発掘調報告書」『名取市文化財調査報告書』第 6 集

太田　昭夫（1980）：「大橋遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 71 集

太田　昭夫（1981）：「青塚古墳」『宮城県古川市文化財調査報告書』第 5 集

大村　直　（1983）：「弥生時代における鉄鏃の変遷とその評価」『考古学研究』30－3

小山田正男（1985）：「二本松遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 112 集

加藤　道男（1989）：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論集Ⅱ』
芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

桐生　直彦（1988）：「転用土器雑考」『東国史論』第 3 号　群馬考古学研究会

後藤　守一（1939）：「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』54－4

後藤秀一・岩見和泰・金子勇一（1991）：「藤田新田遺跡」
『平成 3 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』

小林　行雄（1975）：「土製支脚」『古墳文化論考』

斎藤　吉弘（1979）：「宇南遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 59 集

佐々木和博（1984）：「鹿島遺跡・竹之内遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 101 集

佐藤則之・菅原弘樹（1991）：「山王遺跡」仙塩道路建設関係遺跡一平成 2 年度発掘調査概報
『宮城県文化調査報告書』第 141 集

佐藤　洋　（1987）：「六反田遺跡Ⅲ」『仙台市文化財調査報告書』第 102 集

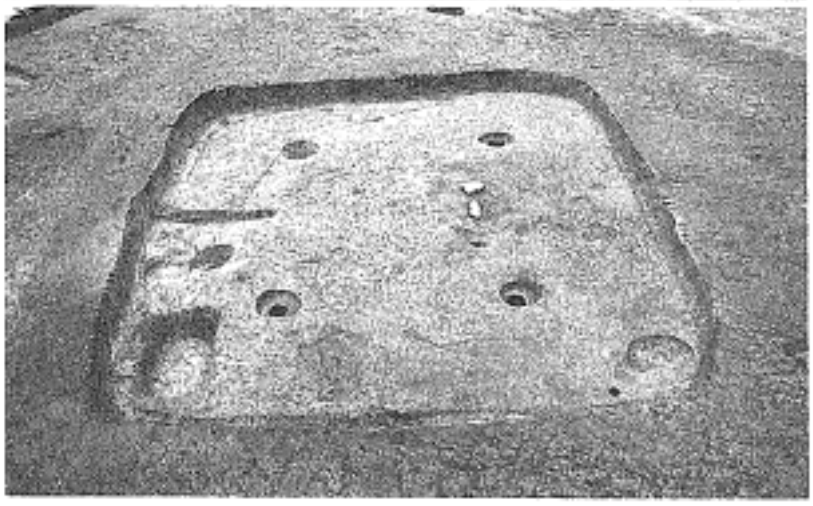
佐藤甲二・渡辺誠（1985）「中田畑中遺跡ー第二次発掘調査報告書ー」
『仙台市文化財調査報告審』第78集
篠原信彦・工藤哲司他：（1980）「今泉城跡」『仙台市文化財調査報告書』第35集
白鳥　良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要7』多賀城跡調査研究所
須藤　隆　（1979）：「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究』1
高倉　敏明（1980）：「山王・高崎遺跡発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告』2集
高橋　一夫（1983）：「集落分析の一視点ー入口と集落の道」『埼玉考古』1
高橋　勝也（1985）：「伊古田遺跡」仙台市高速鉄道関係遺跡調査概要Ⅳ
『仙台市文化財調査報告書』第82集
高橋守克・阿部恵（1987）：「須江糠塚遺跡」『河南町文化財調査報告書』第1集
多賀城市史編纂委員会（1991）：『多賀城史』第4巻考古資料
武井　則道(1976)：「大塚遺跡発掘調査概報」『調査研究集録』1
田中　敏　(1987)：「福島県における古墳時代前期土器群の様相について」
『福島県立博物館紀要』第1号
次山　淳　(1989)：「東北地方に古墳時代前半期の土師器研究と古墳」
『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第25回埋蔵文化財研究集会
辻　秀人　(1986)：「Ⅵ古墳時代」『発掘が語る日本史』Ⅰ東北・北海道編
辻　秀人　(1989)：「東北古墳時代の画期について(その1)ー中期後半の画期とその意義」
『福島県立博物館紀要』第3号
都出比呂志（1989）：「竪穴住居の平面形」『日本農耕社会の成立過程』
手塚　均　(1980)：「留沼遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第65集
手塚　均　(1981)：「鶴ノ丸遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集
土岐山　武（1980）：「安久東遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第72集
中村　倉司（1988）：「弥生時代における甕形土器の煮沸方法と熱効率」
『考古学雑誌』73ー2
中村方彦・斎藤彰裕（1991）：荒町遺跡「住社遺跡・荒町遺跡・寺前遺跡・田町裏遺跡」
『角田市文化財調査報告書第7集
長岡　史起（1986）：「遺物の出土位置から見た竪穴住層の居住空間について」
『神奈川考古同人会10周年記念論集』
西川　卓志（1983）：「弥生時代の煮沸形態とその変遷」
『関西大学考古学研究室三十周年記念考古学論叢』
丹羽茂・柳田俊雄・阿部恵(1974)：「西野田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第35集

丹羽茂・小野寺祥一郎・阿部博志（1975）：「清水遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 77 集
丹羽　茂　（1983）：「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 96 集
舟羽　茂　（1985）：「今熊野遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 104 集
藤沢　敦　（1990）：「宮城・岩手」『古墳時代の研究』11 地域の古墳Ⅱ　東日本　6 東北
藤沢　敦　（1992）：「円筒埴輪　東北」『古墳時代の研究』9 古墳Ⅲ　埴輪 2 種類と編年
藤沼　邦彦（1971）：「大橋遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 24 集
古川　一明（1983）：「色麻古墳群」『宮城県文化財調査報告書』第 95 集
古川一明・白鳥良一（1991）：「8　東北」『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器　土師器の編年
法政大学文学部考古学研究室編（1985）：「本屋敷古墳群の研究」法政大学
宮城県文化財保護課編（1976）：「山前遺跡」小牛田町教育委員会
宮本長二郎（1989）：「古墳時代竪穴住居論」『研究論集Ⅷ』奈良国立文化財研究所学報第 47 冊
宮本長二郎（1990）：「ベット状遺構と屋内施設」『季刊考古学』32
谷島　一起（1979）：「竪穴住居跡における踏み跡と入口の位置について」『千草山遺跡発掘調査報告書』
渡部弘美・主浜光朗（1984）：「戸ノ内遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第 70 集
渡辺　修一（1985）：「古墳時代竪穴住居の構造的変遷と居住空間」『研究連絡紙』11

写　真　図　版

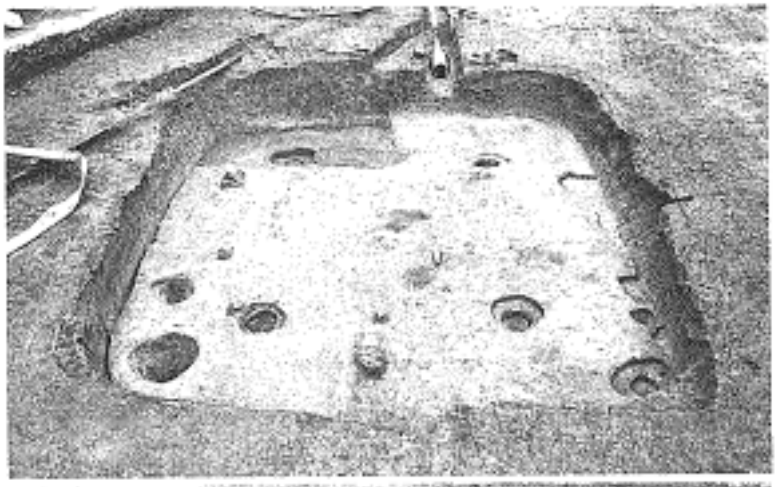
1．遺跡遠景
（北東→）

2．調査区全景
（西→）

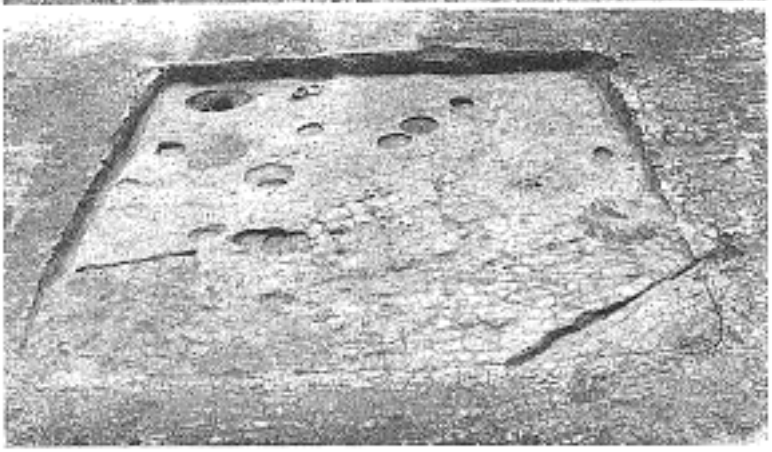


3．2号住居跡

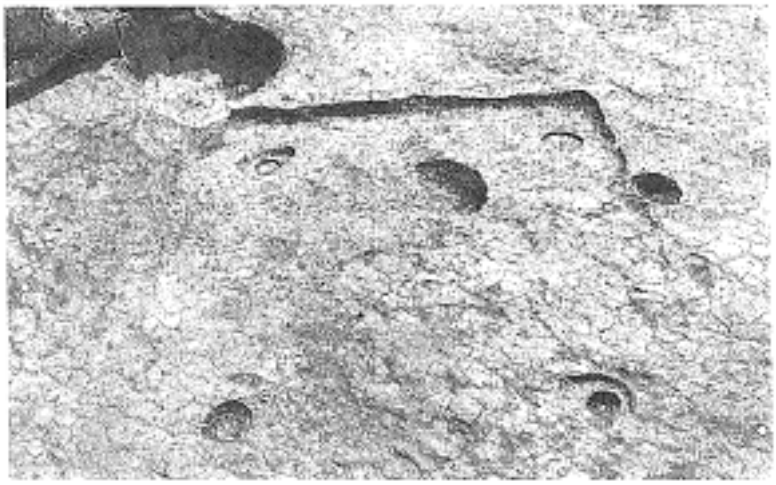
図版1



1．3号住居跡



2．4号住居跡



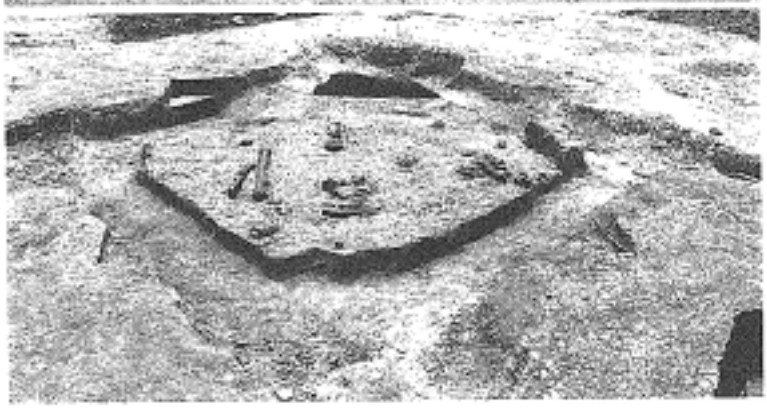
3．5号住居跡

図版2

1．6号住居跡

2．8号住居跡

3．9号住居跡



4．10号住居跡
遺物出土状況

図版3

1．10号住居跡

2．11号住居跡
遺物出土状況

3．11号住居跡

4.12.13.14号住
居跡

図版4

1．15号住居跡

2．16.17住居跡

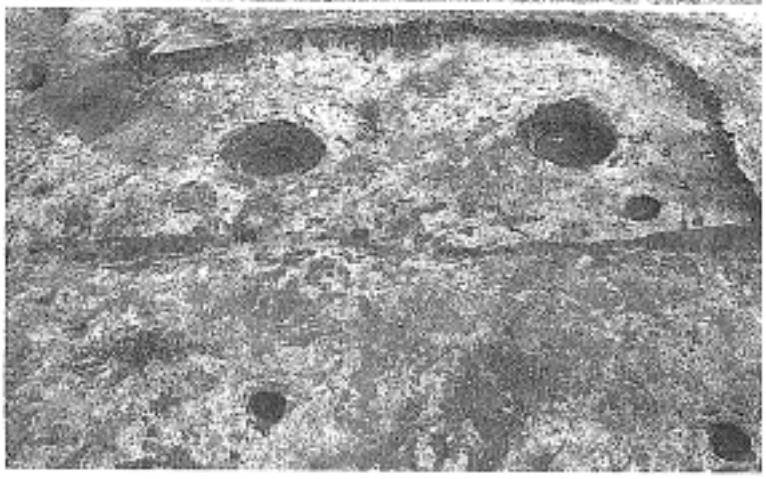
3．18号住居跡

4．19号住居跡
遺物出土状況

図版 5

1．19号住居跡

2．19号住居跡
土製支脚出土
状況



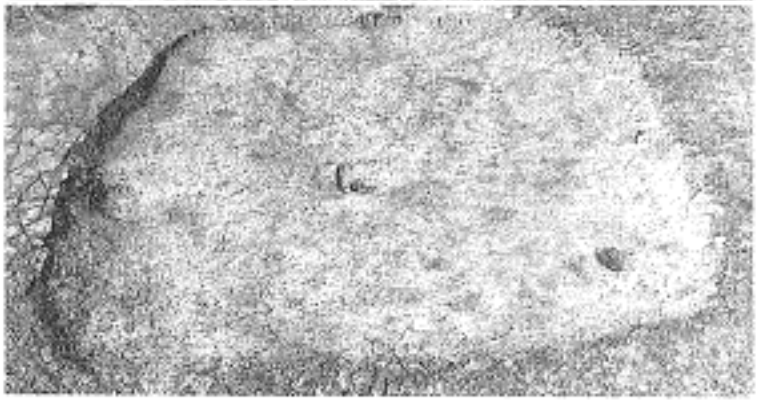
3．20号住居跡

図版 6

1．22号住居跡

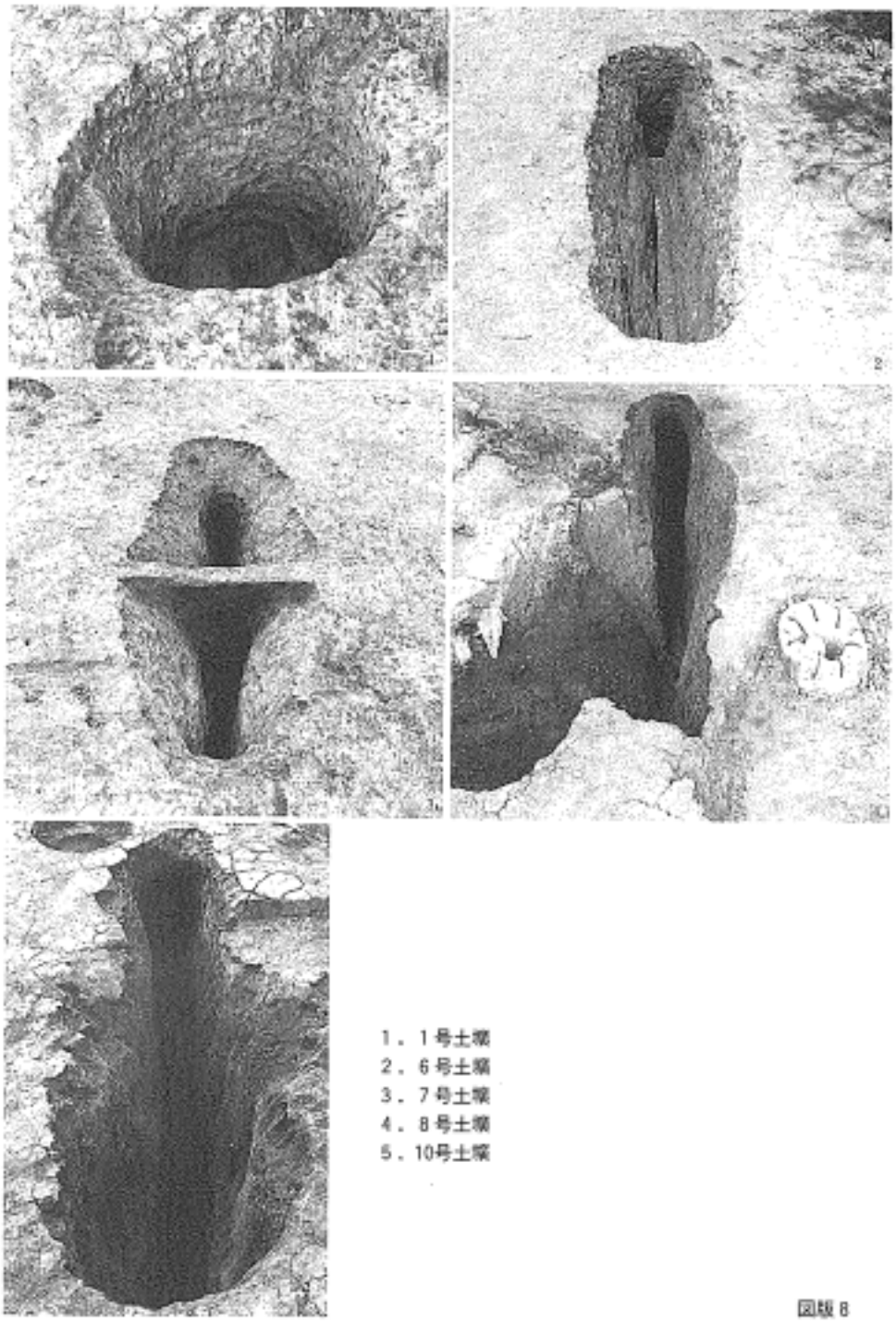
2．23号住居跡

3．24号住居跡



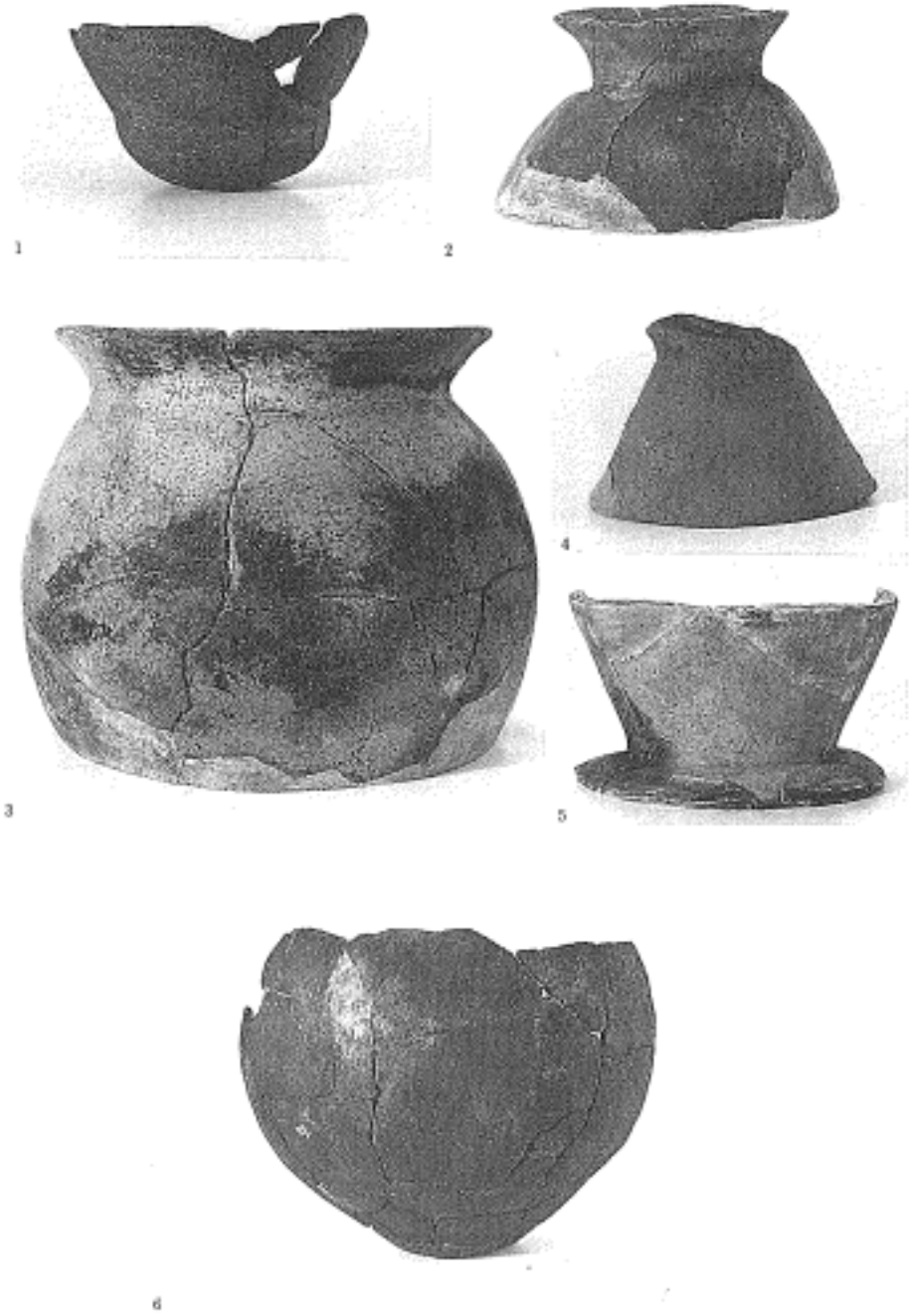
4．1号竪穴遺構

図版7

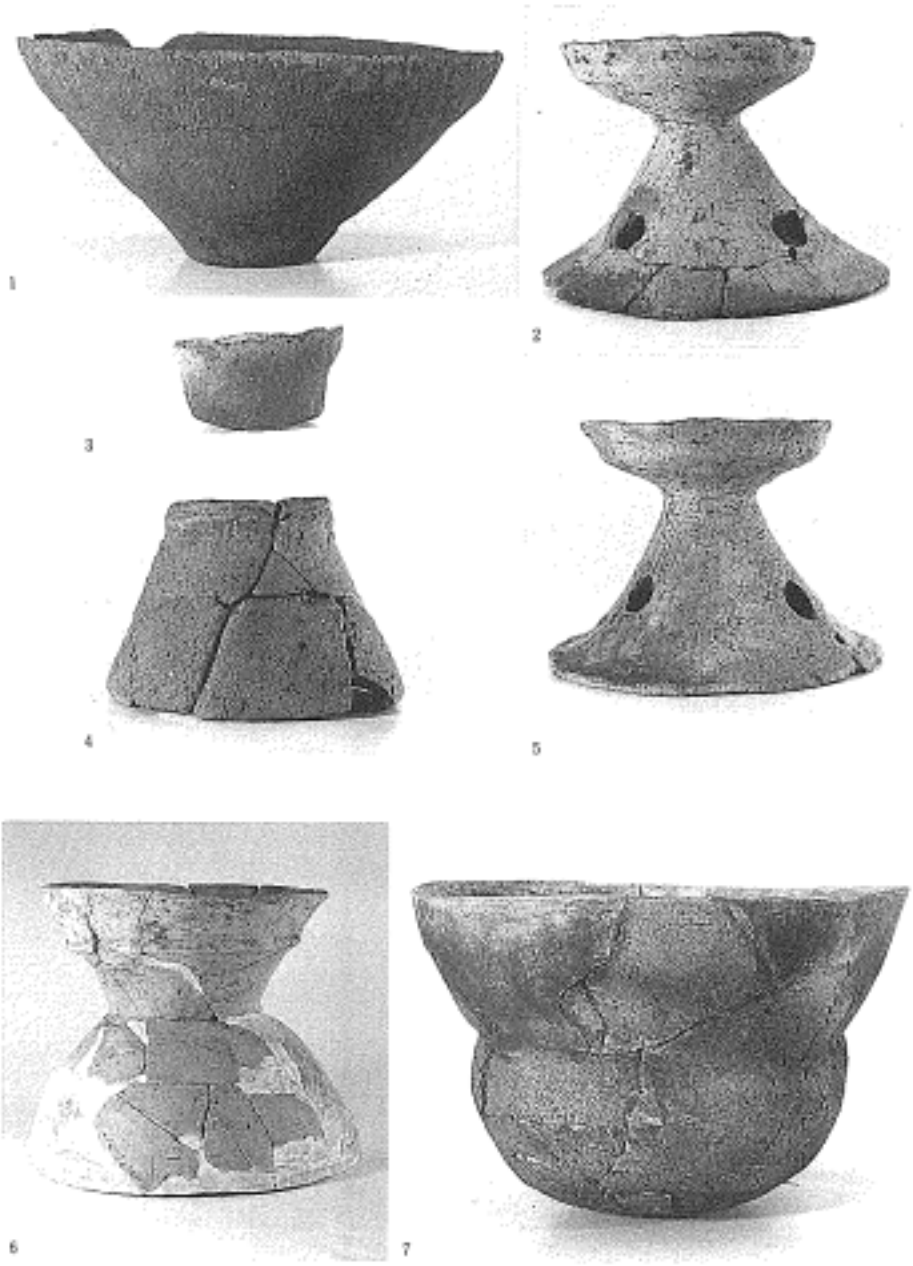


1．1号土壙
2．6号土壙
3．7号土壙
4．8号土壙
5．10号土壙

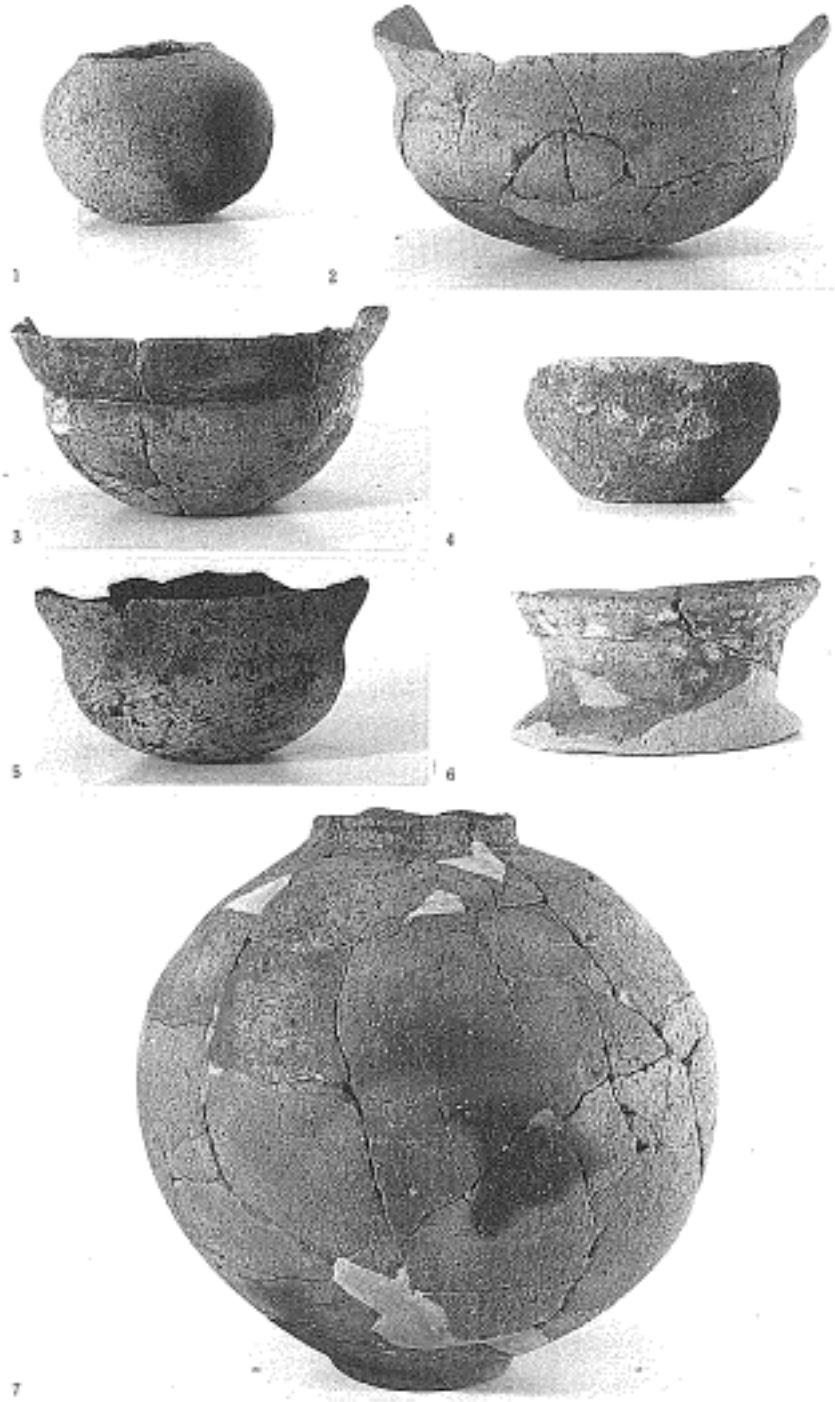
図版 8



図版９　住居跡出土土器



図版10　住居跡出土土器



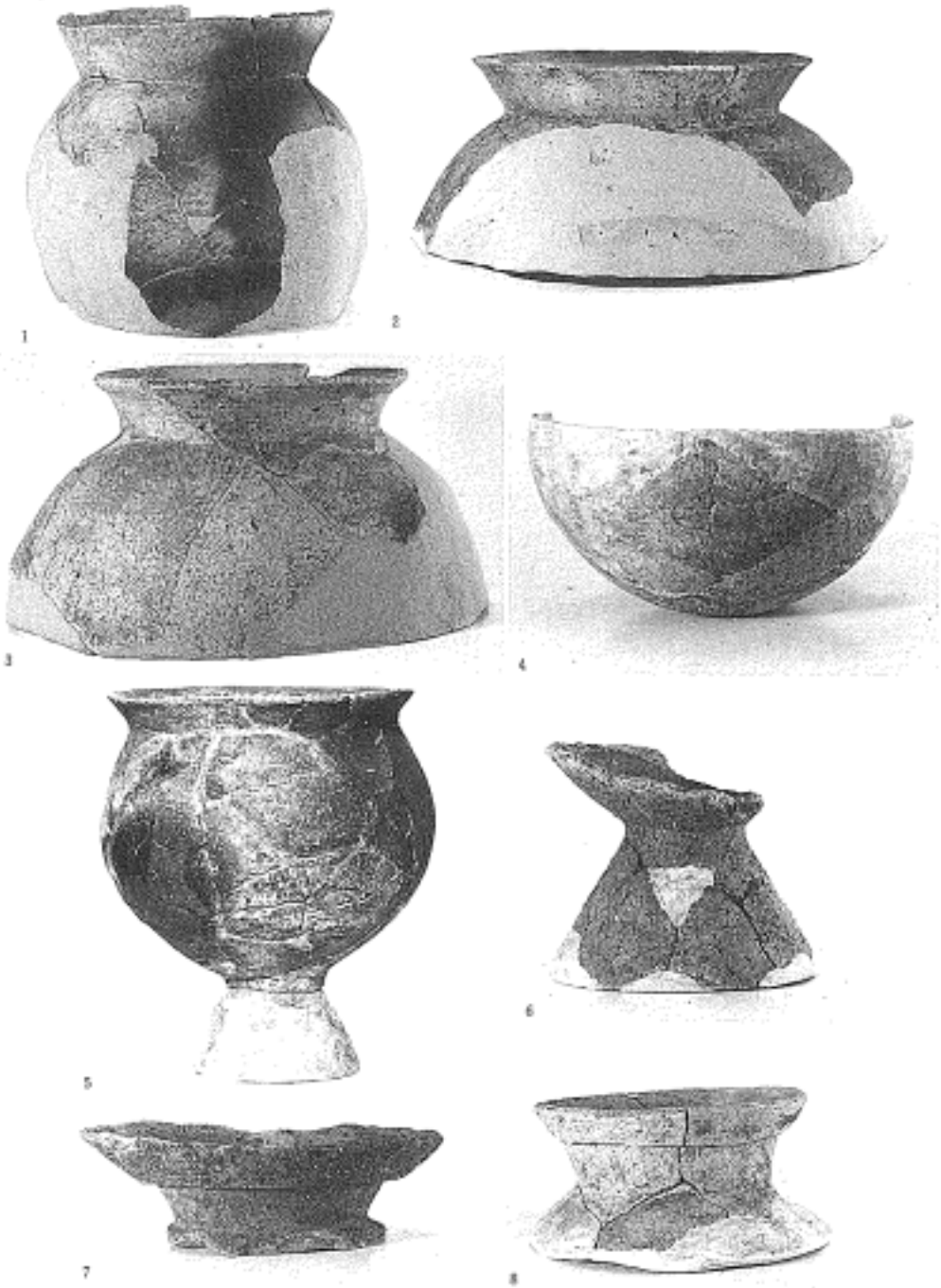
図版11　住居跡出土土器

1

2

3

図版12　住居跡出土土器

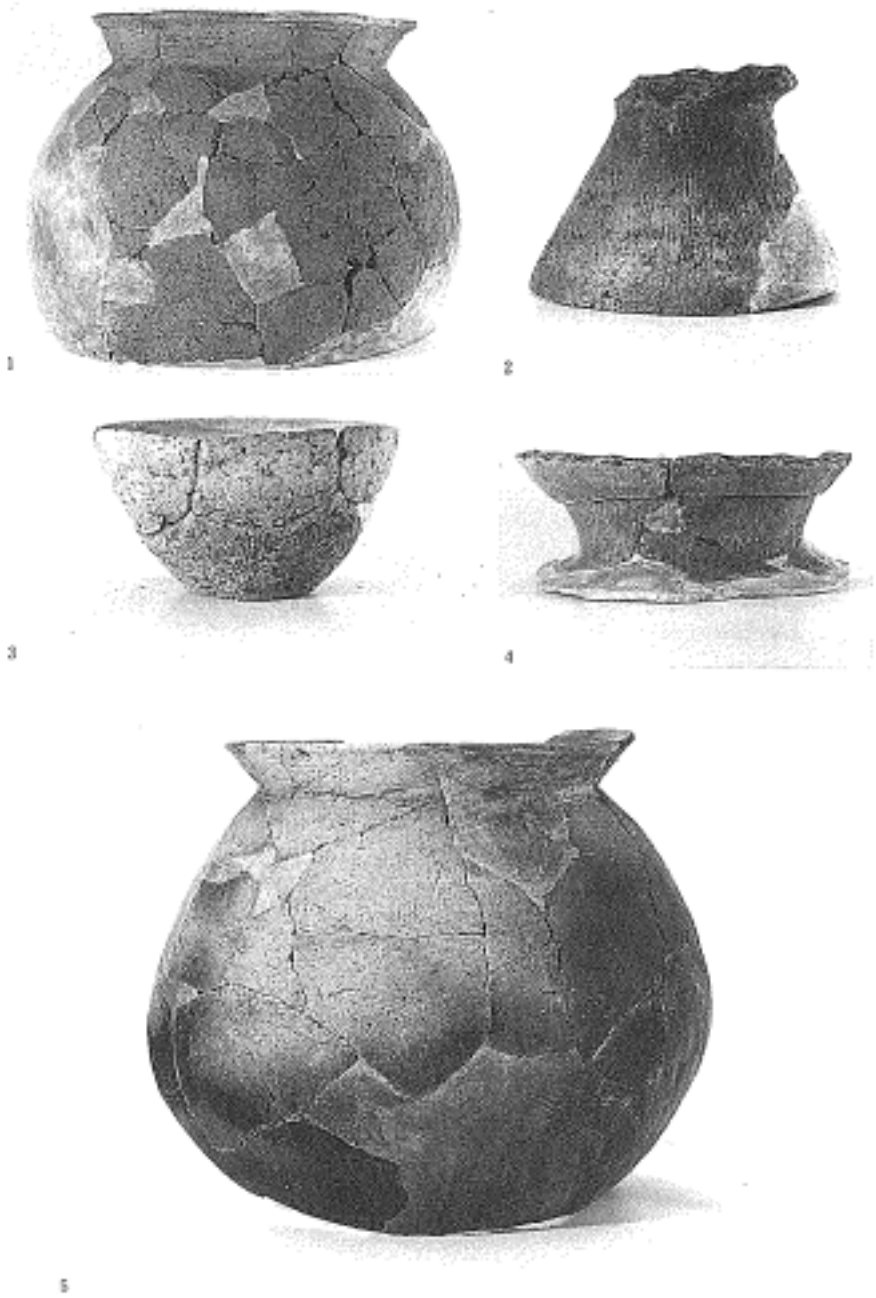


図版13　住居跡出土土器

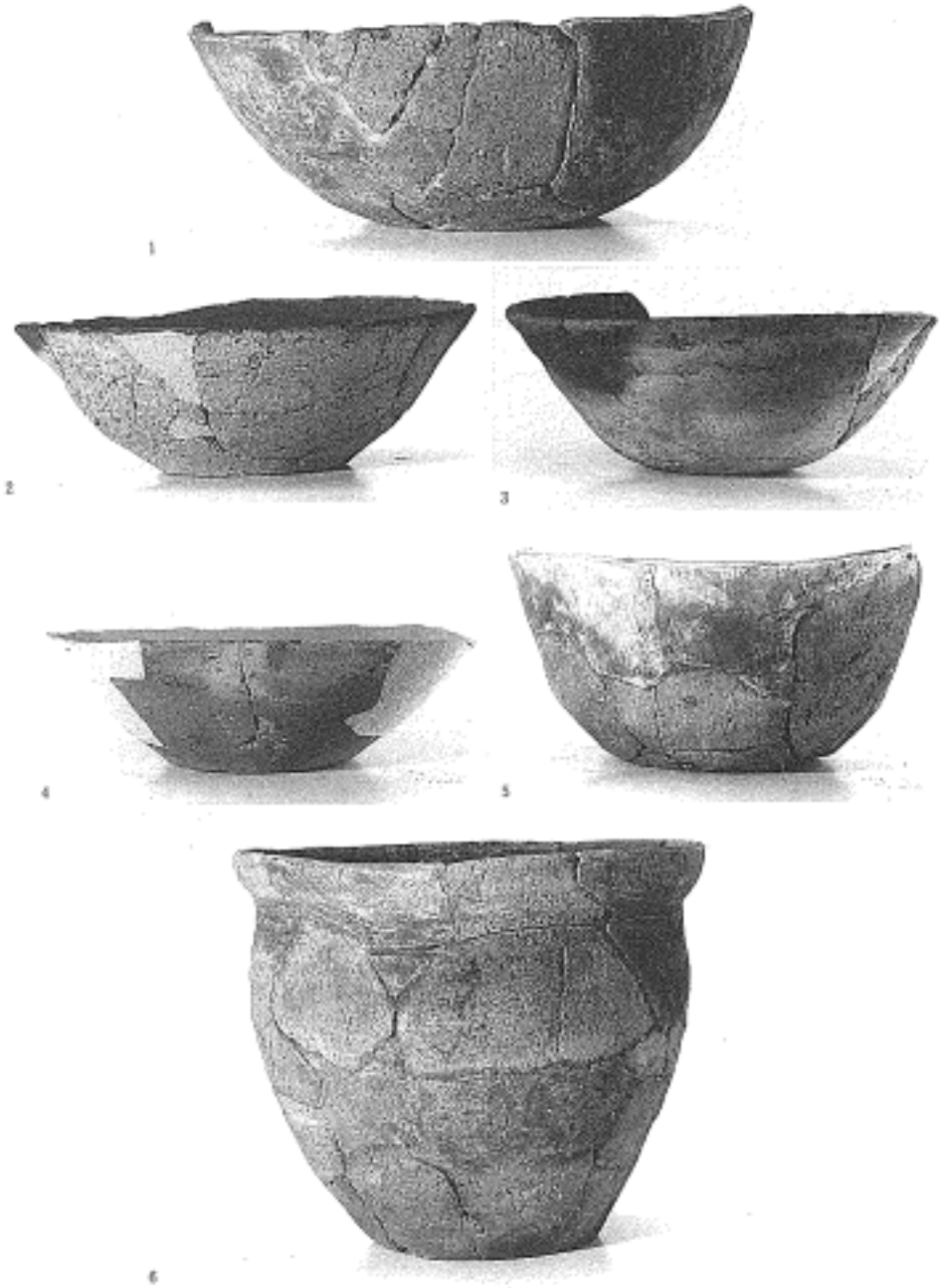
1

2

図版14　住居跡出土土器



図版15　住居跡出土土器



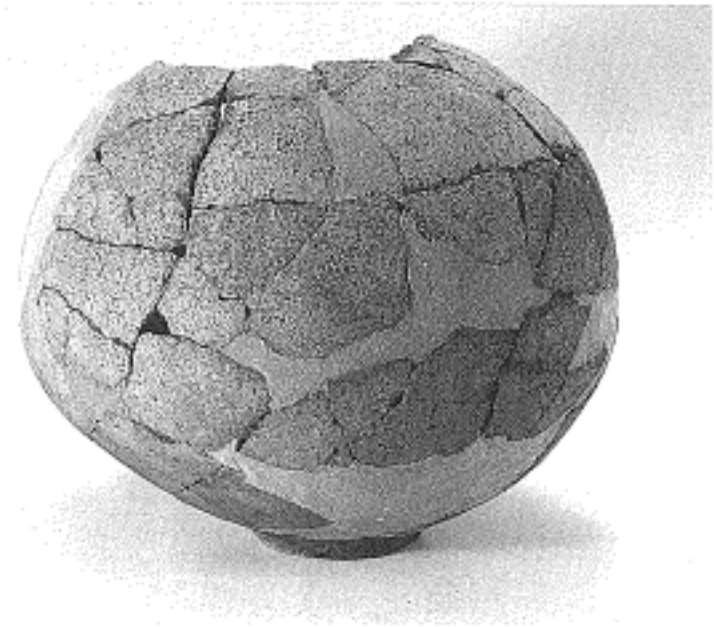
図版16　住居跡出土土器

1

2

3

図版17　住居跡出土土器



1

2

図版18　住居跡出土土器

1

2

図版19　住居跡出土土器

1

2

3

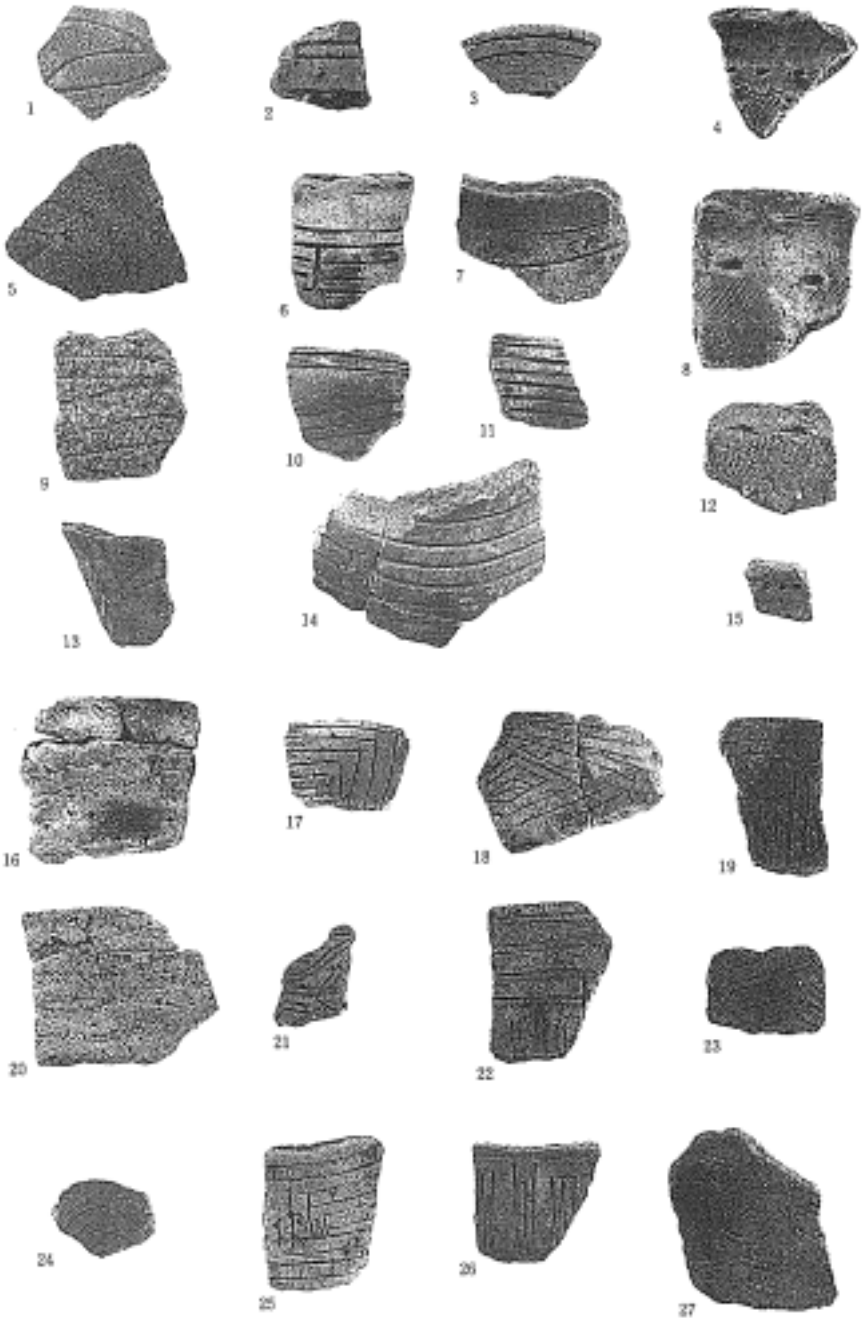
図版20　住居跡出土土器

1

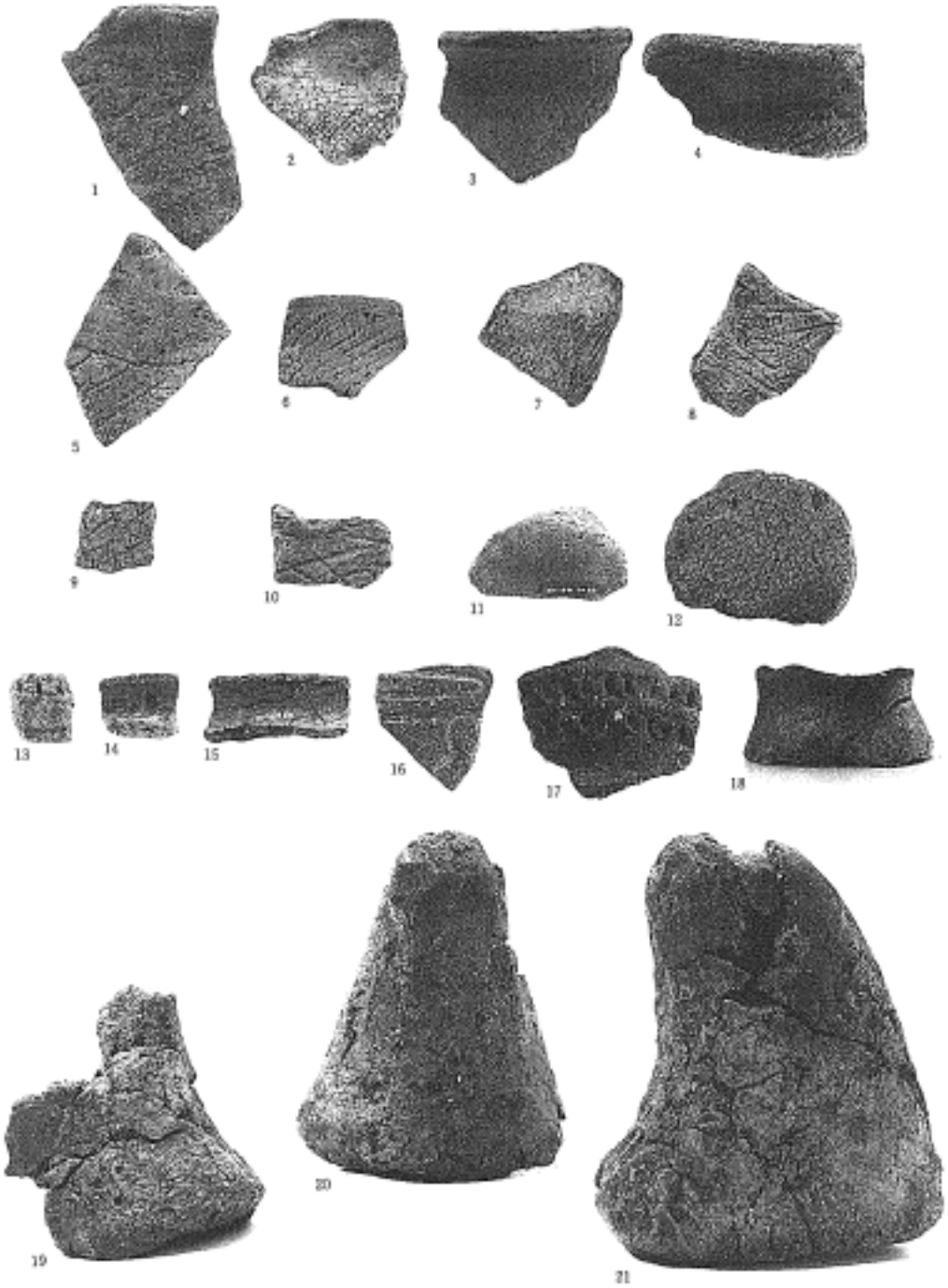
2

3

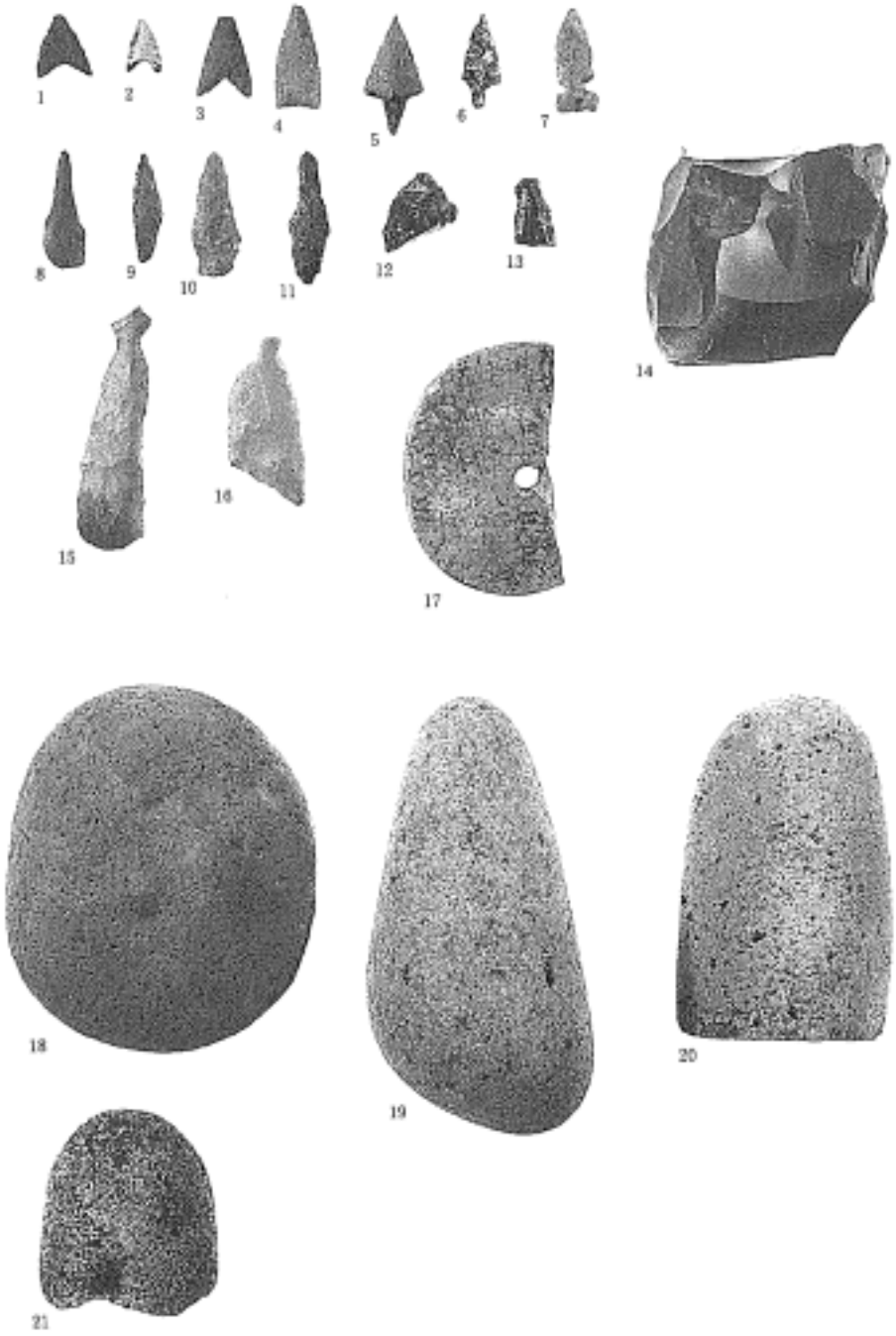
図版21　住居跡および出土地不明の土器



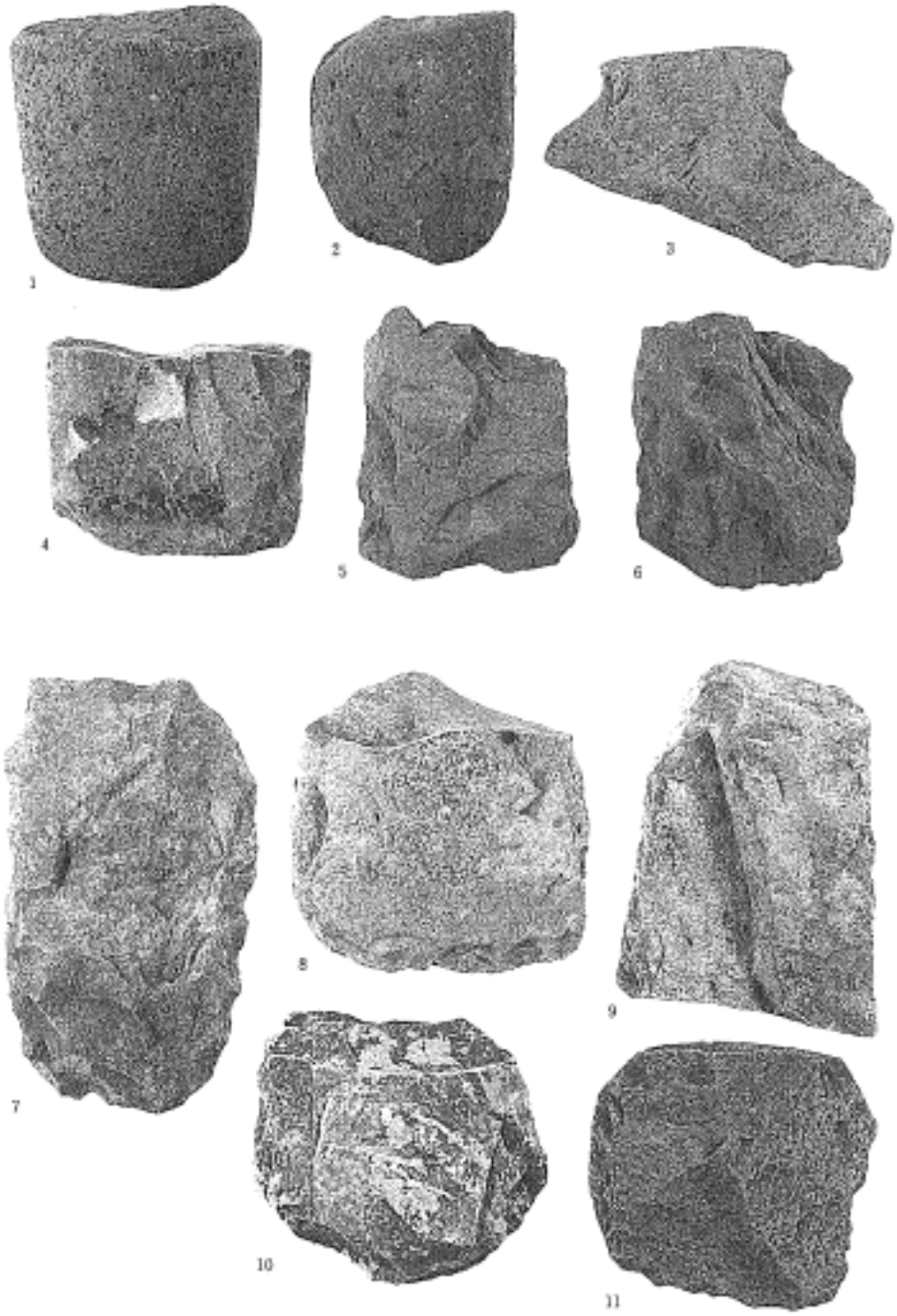
図版22　弥生土器



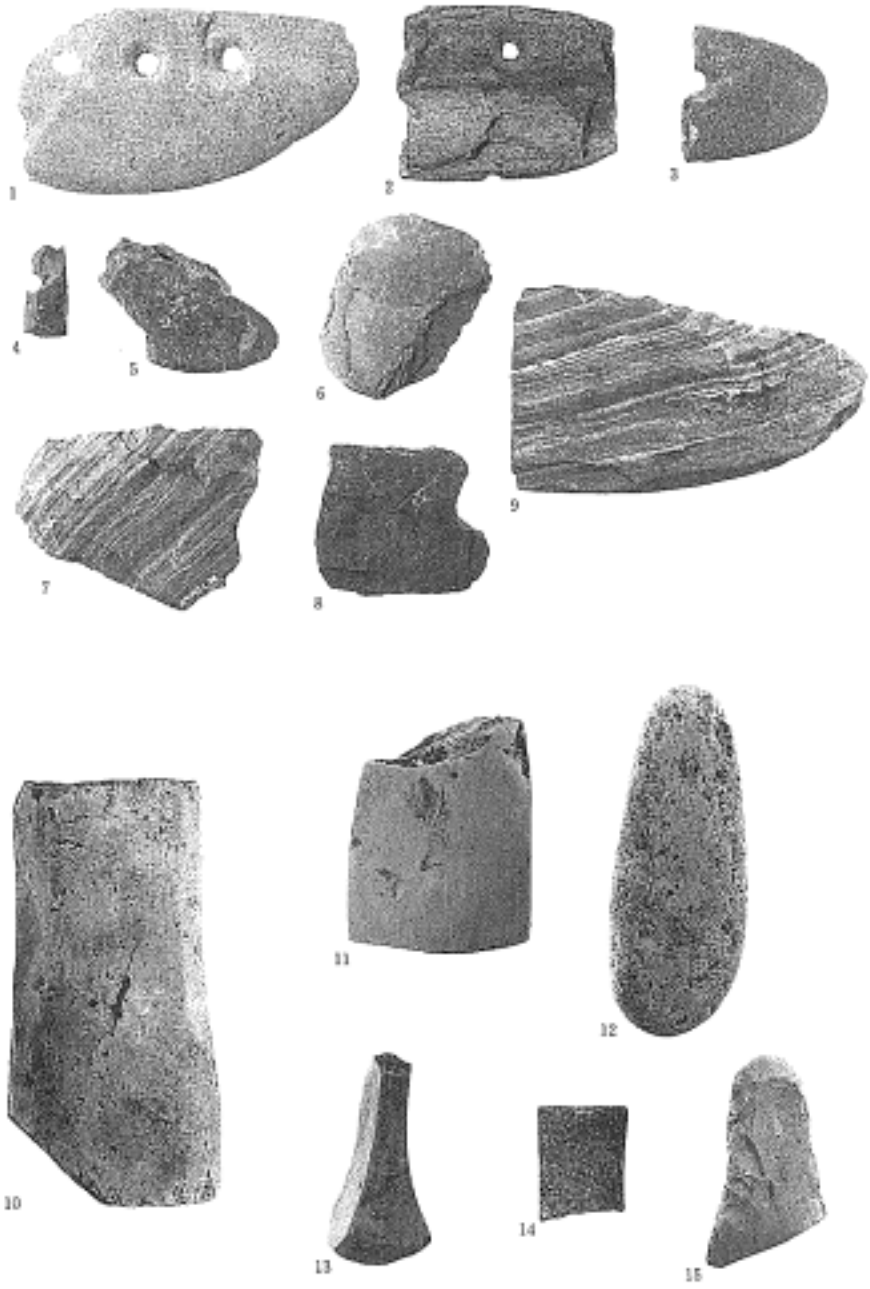
図版23　弥生土器および土製支脚



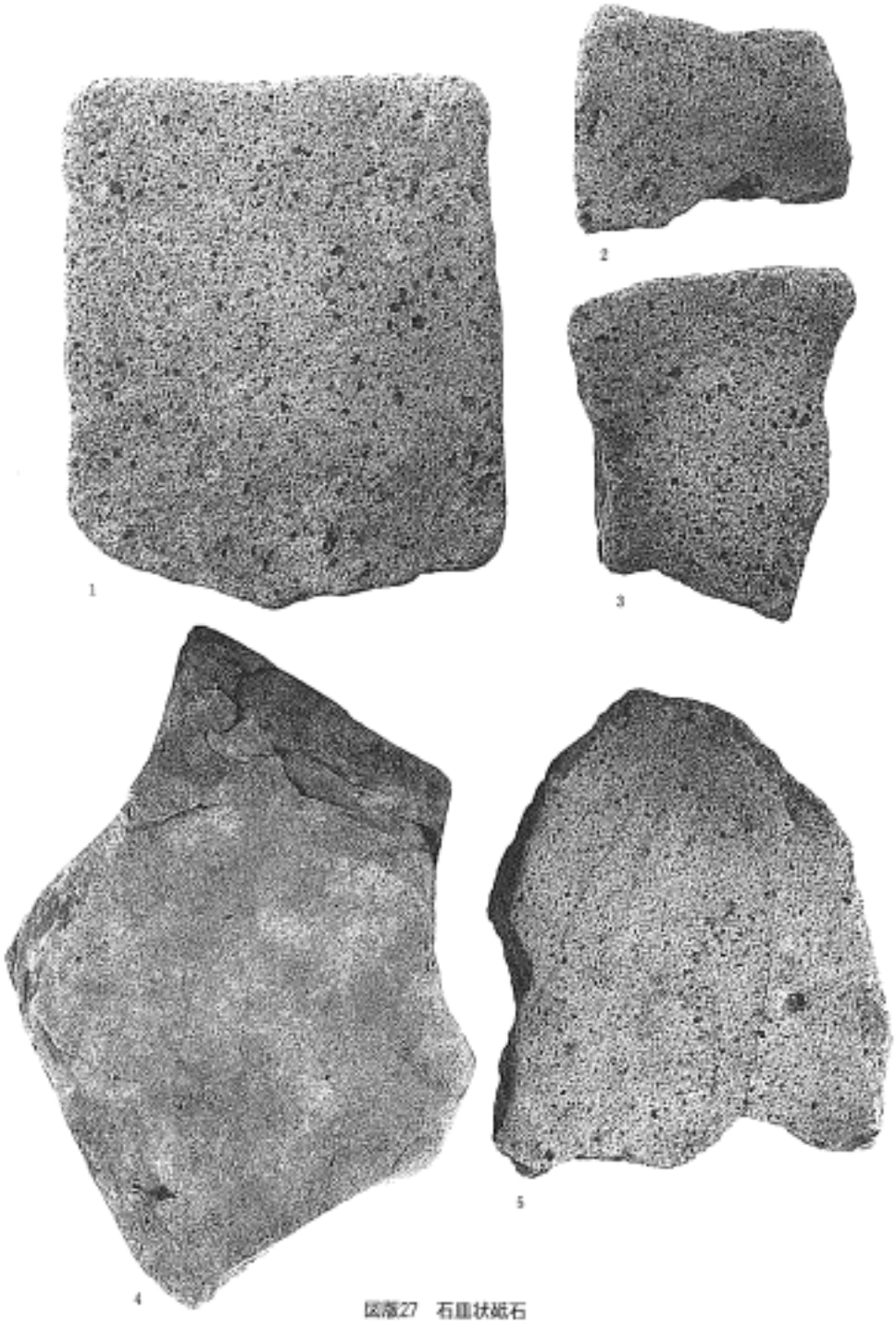
図版24　鉄鏃・石斧と石製紡錘車



図版25　太型蛤刃石斧と石鋸



図版26　石包丁・石包丁未成品と砥石



図版27　石皿状砥石